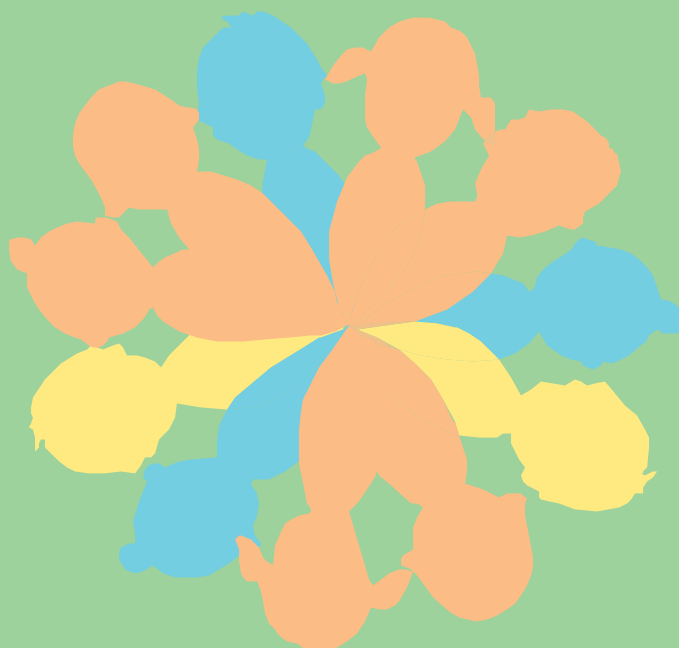


平成 22 年度文部科学省 大学教育推進プログラム  
大学教育・学生支援推進事業

# 隣接学校園との連携を核とした 教育モデル

—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

平成 22 年度  
報告書



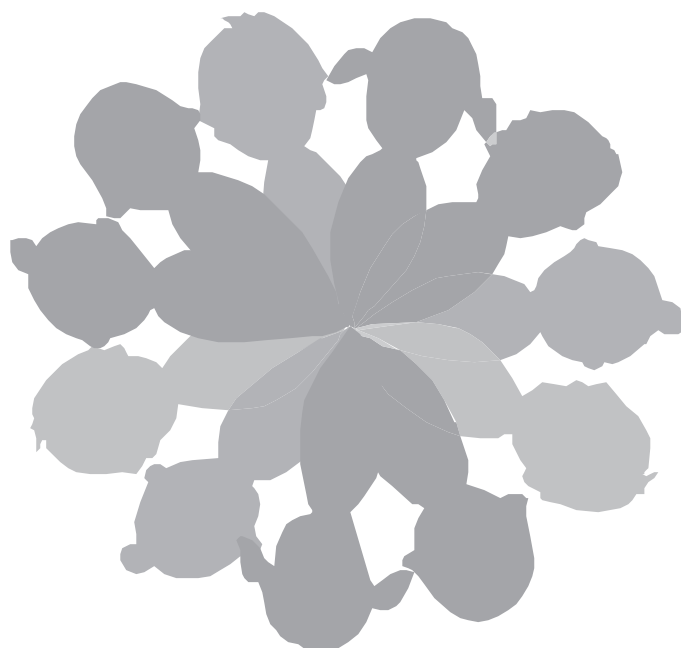
三重大学 教育学部

平成 22 年度文部科学省 大学教育推進プログラム  
大学教育・学生支援推進事業

# 隣接学校園との連携を核とした 教育モデル

—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

平成 22 年度  
報告書



三重大学 教育学部



## はじめに

文部科学省による平成21年度大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラム「隣接校区との連携を核とした教育モデル」も2年目の取組を終了しました。本報告書は、22年度の取組をまとめたものです。

この取組は、大学に隣接する一身田中学校区と橋北中学校区の2つの学校区との連携協力のもとに、1年次より学校現場や児童・生徒との関わりをもつ機会（教育実地研究基礎）を設け、2年次以降も学校現場と関わる機会（教科教育法等）を取り入れることで、実践的指導力を涵養しようとするものです。そしてなによりも、教員養成にとって重要な教育実習を、連携の一環として円滑に実施することを目指しています。

さて、本年度も100を超える連携活動が実施され、多数の学生と教員が参加しました。その結果、以前よりも早い段階から教員になるための意識と課題を身につける学生が多く、学生自身による体験活動記録の作成や、それを基にした討論など、省察的な活動の質も向上してきました。特に、2年目の今年度の成果として学修サポート室の設置があげられます。2名の学修サポーターが学びの履歴を介して学修サポートする体制を構築したことで、25年度から実施される教職実践演習のための整備が整いました。

教育実習については、4週間教育実習（3年次）で、連携校に13名の学生がお世話になりました。特に一身田中学校においては、10名もの学生を引き受けていただきました。連携校の先生方をはじめ、津市教育委員会の方々の温かいご理解とご支援には深く感謝する次第です。また、大学教員は、実習生を実習校に任せるだけでなく、事前指導をはじめ実習中も何度も実習校に赴き、学生の様子を見守ってきました。このような理想的な教育実習が実施できたことは、この事業の始まる前の過去3年間の現代GPにおける地域連携活動が基盤となっており、多くの方のこれまでのご努力に感謝する次第です。

昨年12月に開催した22年度の活動報告会には、学生や連携校からの報告の他に、学生が教育現場に関わるための地域連携活動を早くから推進している愛媛大学と宇都宮大学の教育学部教員と学生代表を招聘し、取組をご紹介していただきました。400名もの参加者があり、学生の体験や実践には様々な形態があることを相互理解し、今後の実践的な活動への取り組む上での刺激になったようです。昨年にも増して質の高い報告会が開催されたことを嬉しく思っております。

教員を目指して入学した学生が、教育に深い関心を持ち続け、教職に対して高い意識をもった学生を育てる基盤作りはさらに一歩進んできたと思います。この報告書により本事業に対しまして一層のご理解をいただければ幸いです。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、連携活動に関わっていただきました隣接校学校園、津市教育委員会、および教育学部の諸氏に深く御礼申し上げます。

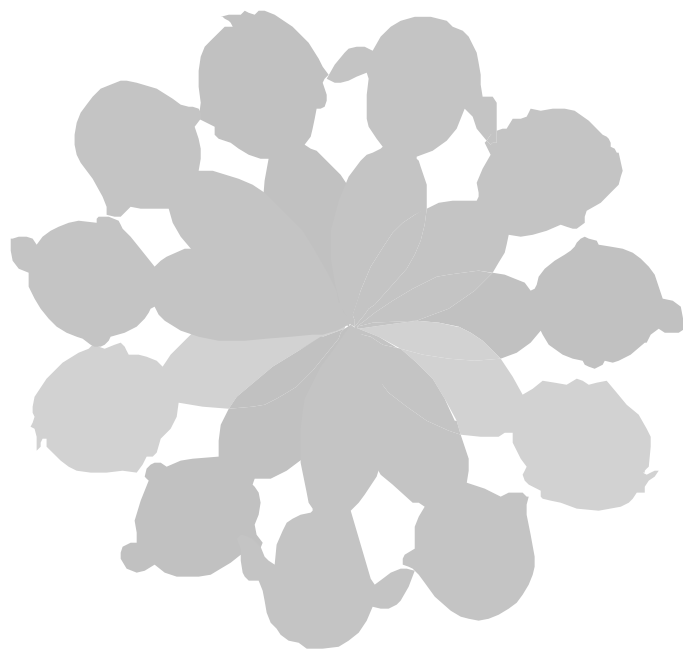
# 目次

はじめに

I	平成22年度事業計画	1
II	平成22年度の取組	
	活動一覧	5
	1. 国語教育	12
	2. 社会教育	18
	3. 数学教育	27
	4. 理科教育	35
	5. 音楽教育	42
	6. 美術教育	47
	7. 保健体育教育	51
	8. 技術教育	62
	9. 家政科教育	64
	10. 英語教育	68
	11. 幼児教育	70
	12. 学校教育	76
	13. 教育実践総合センター	77
III	隣接学校園からみた連携活動	
	1. 白塚幼稚園	79
	2. 北立誠幼稚園	87
	3. 南立誠幼稚園	95
	4. 栗真小学校	100
	5. 白塚小学校	106
	6. 一身田小学校	108
	7. 北立誠小学校	112
	8. 南立誠小学校	116
	9. 西が丘小学校	118
	10. 一身田中学校	123
	11. 橋北中学校	129
IV	学修サポートと地域連携業務	
	学修サポート室	133
	地域連携室	141
V	成果報告会	
	隣接学校園との連携を核とした教育モデル	145
	平成22年度教育フォーラム	
VI	資料	
	1. 平成22年度大学改革推進等補助金調書	235
	2. 取組紹介 1	238
	3. 取組紹介 2	243

あとがき

# I 平成 22 年度の事業計画





## ○ 取組全体の概要

教育学部では、実践的指導力を涵養する場として三重大学と隣接する一身田中学校区の学校園との連携を進めてきた。本取組は、この実績を基盤として、隣接するもう一つの学校区である橋北中学校区の学校園を含め連携を拡大し、2つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力体制を深化させ、実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築しようとするものである。このプログラムでは、教員としての資質形成に結びつく体系的で幅広い学びを保証することによって、質の高い教員を養成することを目的としている。具体的には、学生が隣接学校現場の多様な活動に参加し、その体験と大学での省察との往還を通して、教育現場の課題を発見・解決する力量を形成し、実践的指導力を育成させるものである。

## ○ 事業の目的

### （1）全体の目的

本補助事業の全体の目的は、教員養成における総合的な実践的指導力を育成するための教育実地研究の改善を図るものである。特に、本学部の教育目的である「教育に関する学識と専門的素養を身につけるための幅広いカリキュラムを通じ、深い専門性と豊かな人間性を備えた教員養成」に資するため、全学齢期の発達理解と教科の専門性を視野に入れた教員養成の質的充実を展望している。

本学部では、初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた実地研究基礎に参加し、徐々に授業や様々な学年・学校行事の補助、そして授業実践へと実践への参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な教育課程となっているが、教育実践力としての「教職実践演習」の授業内容および方法の整備、大学と協力の綿密な指導体制に基づいた「教育実習」の実施、および多様な教育問題に対応できる力量を育成することが急務となっている。本学部が教育現場と一層強固な連携を築き、協働することにより、これらの現実的・現代的な課題を解決することが可能である。

### （2）平成22年度の目的

本補助事業の本年度の目的は、上記の目的を達成するために隣接校区の学校園との各種連携活動の量的拡大・質的深化を図り、それを基盤として連携校での教育実習実施のシステムを構築することである。このために、まず、初年度に引き続き、学生が連携学校園で活動する時間を増加させる体制を整備し、大学での省察を充実させるために地域連携室の支援体制を整え、サポーター2名を配置する。

また、大学教員による新しい教具・教材を導入した授業づくりの提案・指導をさらに推進し、多領域の教員・学生による協働を図る。これらによって、学生に質の高い授業や実践を提供できるだけでなく、学生だけではなく、連携学校園の教員が協働することで、連携学校園にとって現代的な特色のある授業を内外に発信し、授業開発の意識を高める。これらの実践的な活動と連続性を保つことは、連携校での教育実習を行うための受け入れ側の態勢・整備に貢献できる。

特に23年度から教育実習を附属学校と連携学校を中心として実施するために、特に連携校のニーズを理解した上での連携活動に関わる学生支援を強化する。そのために、本事業のコーディネーター・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務の他に、連携校での活動支援に関わるサポーターを配置する。



このことによって、連携先に依存していた教育実地研究の省察を大学が責任を持つことができることになる。連携校教員による連携活動を具体的に事例として取り上げる実地研究入門科目を開講し、学生が教育現場に関わるための指導の質的な向上を図る。また、活動のポートフォリオ作成の整備とともに定期的に省察のための活動報告会を開催し、実践の省察と実践的指導力に関する自己課題の意識化を教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。

## ○ 平成 22 年度の実施計画と内容、および期待される成果

### (1) 連携活動

#### ① 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験の実施

連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験について、中学校における全ての教科、小学校における総合学習や生活科、および幼稚園における指導に学生が関わる。多様な教育活動と複数の校種の学校現場での活動を経験し、子どもの発達段階を教育現場で知ること、学生に幅広く高い教育意識をもつことのできる教員養成を行うことを目指す。

#### ② 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施

連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わる。これにより、PTA 活動の進め方と保護者理解の力を育成することを目指す。

#### ③ 教員を対象とした教科力アップ研究会の開催

教員を対象とした教科力アップ研究会の設置し、現場教員が不得手とする内容について研修を進める。ここに学生が関わることで、学校現場で必要な教科力や課題解決の方法を知る機会とすることができる。

#### ④ 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援

教員を対象とした教科力アップ研究会を開催し、学生もこれに関わる。また、学校園の公開授業・公開研究会への支援を大学教員が行い、そのプロセスに学生が参観する。大学教員が現職教員の授業づくりに支援を行うとともに、4年次の教育実地研究の受講生も参加することで、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とすることができる。

#### ⑤ 大学を活用した連携学校園の活動の実施

大学を活用した学校園の活動の実施として、連携中学校の合唱コンクール等の指導を学生が行い、大学の講堂で発表会を行う。また、大学を活用して連携学校園の児童生徒を対象に授業や各種活動を行う。これに学生が関わることで、学校園における課外活動における教員の指導のあり方を学生が学ぶことができる。

### (2) 連携校における教育実習の実施

連携校における教育実習の受け入れに関する連携校との共同研究・協働を通して、連携活動を基盤とした教育実習の実施を図る。連携校における教育実習の受け入れにより、円滑な教育実習の実施が可能となり、連携校のニーズにもあった実習を行うことができる。

### (3) 地域連携室および学修サポート室の整備

地域連携室において学生の連携活動に関する資料作成や相談に適切に対応できるように設

備・体制を整備するとともに、学修サポート室を設置し、学生の学修支援を進める。本事業のコーディネーター・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務員、および、大学での省察を充実させるための学生サポーターとなる事務補佐員（サポーター）を配置することで、学生の活動履歴の保管と閲覧および学生支援の充実を図り、学生の本活動に対する学習環境を保証することができる。このことは、教職に関するアイデンティティ形成の質的保証となる。

#### （４） 報告会等による地域連携活動の理解と発信

##### ① 他大学の教員養成の学生との関する意見交流会の開催

内外の大学における教育実地活動の事例報告を含めた教育実地フォーラムを開催し、学生同士の対話を通して、自己省察を図れるような場を創出する。

他大学の教員養成の学生による教育実地活動の事例報告を含めた教育実地フォーラムを開催し、実践の省察と実践的指導力に関する自己課題の意識化を教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。

##### ② 22年度の取組を総括する教育フォーラムの開催

22年度の取組を総括する教育フォーラムを開催し、本取組を公表して参加者および学内外からの意見を求める。これにより、本取組を公表して参加者からの意見を求めることで、本取組の改善および質的向上につなげることができる。

##### ③ 22年度大学教育改革プログラムにおける事業報告

大学教育改革プログラム合同フォーラムにおいて、本事業に関するブース出展を行い、取組について情報発信する。

##### ④ 学会等における学生の活動成果発表

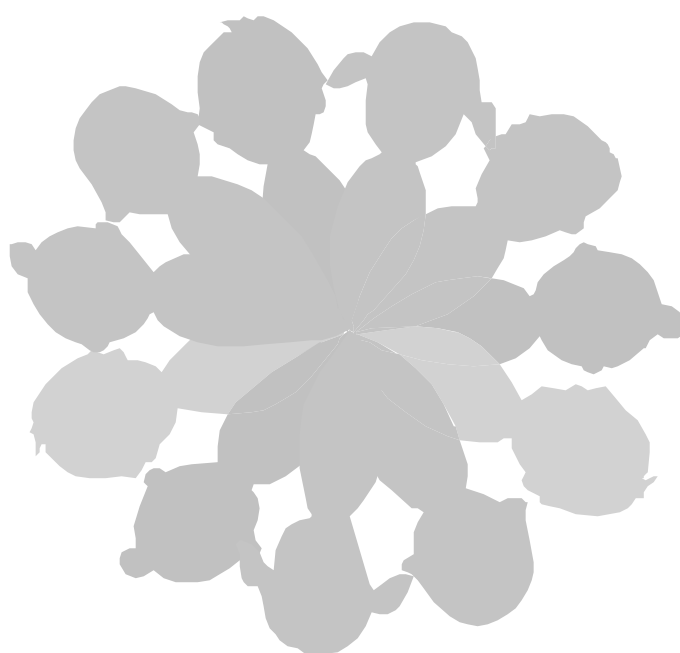
連携活動による学生の学びについて、学部におけるポスターセッションをはじめとし、日本教育大学協会、各教科の研究会などにおいて学生が発表を行う。教育実地活動からの学びを学生自身から発信することにより、他の学生の体験や成長から学ぶことができる。

##### ⑤ 地域連携を主とした他大学の教員養成における活動の調査

地域連携を軸としたカリキュラム編成をしている他大学の教員養成に関する取組を調査し（2大学）、学生の教育現場体験活動を把握し、本取組の改善に反映させる。



## Ⅱ 平成22年度の取組





## 活動一覧

平成 22 年度に行われた活動を連携校ごとに分けて一覧にしたものを次ページにあげた。各連携校との間での活動計画をたて、それをまとめたものである。

活動は約 100 であり、連携校に関わった日数はおよそ 300 日で、関わった学生は延べで約 900 名であった。

各コースの活動内容は、活動一覧の後に続いて掲載されている通りである。

2010年度・連携教育活動

担当教員	連携校	学年・クラス	連携校担当教員	教科/活動名	活動内容	関連授業	学生数	実施日
永田 成文	一身田中学校	2年生	後藤 昭	社会	大学院生を招きIT授業の実施	社会科学教育特論演習Ⅱ	4	6月14日
永田 成文	一身田中学校	1年生	梅元 章光	社会	夏休みの地域研究課題の支援	社会科学教育法	38	7月1日
山根 栄次	一身田中学校	主に1年生	中川 克巳 酒徳 宏 林 敬一郎	キャリア教育	中学1年生の起業活動への指導・助言 教育実地研究(事前打ち合わせ・指導・検討会を含む) 数学科内研修	総合演習・社会	1~15	10月18・20日
中西 正治	一身田中学校	2年生	北岡 明直	数学	授業参加・補助	数学科教育法	18	5月27日 7月7・8・12日 10月25日
中西 正治	一身田中学校	1年生	林 敬一郎	理科	授業参加・補助と学生による授業実践	理科教育法Ⅰ	18	5月上旬~7月上旬
荻原 彰 平賀 伸夫	一身田中学校	1年生	林 敬一郎	理科	科学の祭典への参加	理科教育法Ⅱ	18	1月
後藤 太一郎	一身田中学校	1・2年生	中川 克巳 米村 清香 米村 清香 中村 博子	理科	解剖実習&食育授業		25	11月27・28日
磯部 由香 後藤 太一郎	一身田中学校	2年生	中村 博子	家庭科・理科	ウォールポケット制作		3	6月7日
根津 知佳子	一身田中学校	3年生	西本 和史	家庭科	合唱コンクールに向けた指導・支援		5	9月中旬~10月中旬
弓場 徹 根津 知佳子	一身田中学校	全学年	西本 和史	音楽	合唱コンクール審査員とコーラス音楽祭		35	10月15日
岡野 昇 後藤 洋子	一身田中学校	全学年	清長 隆司	保健体育	教育実習事前検討会	教育実習 保健体育学・ス ポーツ健康科学ゼ ミナール	3~5	6月4日 8月18日
後藤 洋子	一身田中学校	全学年	清長 隆司	保健体育	ラート実技研修会	保健体育学・ス ポーツ健康科学ゼ ミナール	3~5	8月18日 1月25日
岡野 昇 後藤 洋子	一身田中学校	全学年	清長 隆司	保健体育	教育実習(特練指導含む)	教育実習	3	9月1日~28日 (特練指導は17・22日)
岡野 昇 後藤 洋子	一身田中学校	全学年	清長 隆司	保健体育	教育実習報告	教育実習	3	12月1日
後藤 洋子	一身田中学校	1年生	杉崎 隆典	体育	Gボールを使った体づくり運動の授業づくり検討会	卒業研究	1	8月25日
後藤 洋子	一身田中学校	1年生	杉崎 隆典	体育	Gボールを使った体づくり運動の授業実践	卒業研究	1	9月3日~10月29日
中西 正治	一身田中学校 橋北中学校		北岡 明直 高城 あつ子	数学科教員研修	授業研究			12月22日

2010年度・連携教育活動

20	中西 正治	橋北中学校	1～3年生		高城 あつ子	数学	教育実地研究(事前打ち合わせ・指導・検討会を含む)	1～12	4月26日 6月3・28～30日 7月1・12日
21	後藤 太一郎	橋北中学校	1～3年生			SSS (Saturday Step-up School)	英語・数学の学習支援	1回に 2～5 計16	5月29日 6月5・12・19・26日
22	根津 知佳子	橋北中学校		墨 香里		音楽	合唱コンクールに向けた指導・支援	3	10月中旬
23	弓場 徹 根津 知佳子	橋北中学校	全学年	墨 香里		音楽	合唱コンクール審査員とコラボ音楽祭	36	10月19日
24	富樫 健二	橋北中学校	2・3年生	西村 奈津子		保健体育	体組成・骨密度測定、生活習慣アンケート	8	9月3日
25	富樫 健二	橋北中学校	2・3年生	西村 奈津子		保健体育	体組成・骨密度測定、生活習慣アンケート	8	9月7日
26	富樫 健二	橋北中学校	2・3年生	西村 奈津子		保健体育	測定結果を元にした保健授業実践	2	11月29日
27	富樫 健二	橋北中学校	2・3年生	西村 奈津子		保健体育	測定結果を元にした保健授業実践	2	11月30日
28	富樫 健二	橋北中学校	2・3年生	西村 奈津子		保健体育	測定結果を元にした保健授業実践	2	12月2日
29	富樫 健二	橋北中学校	2・3年生	西村 奈津子		保健体育	測定結果を元にした保健授業実践	2	12月3日
30	後藤 洋子 岡野 昇	橋北中学校	3年生	西村 奈津子		保健体育	ラート運動の授業検討会		11月19日
31	後藤 洋子 岡野 昇	橋北中学校	3年生	西村 奈津子		保健体育	授業支援(ラート運動)		11月29日～ 12月10日
32	林 朝子	一身田小学校	4・5年生	富田 幸代 藤ノ原 デボラ		多文化共生活動	「世界を結ぼう」クラブ活動支援	22	6月7・21日 7月12日 10月18日 11月15日 12月6日 1月24日 2月14日 4月19日
33	中西 正治	一身田小学校	3～6年生	永合 本幸		算数	教育実地研究(事前打ち合わせ・指導・検討会を含む)	4～5	5月7・18日 6月18日
34	平山 大輔	一身田小学校	4年生	中川 淳子		理科:おもしろ科学実験のよなもの	4年4組のPTAの親子による学級活動	2	2学期
35	荻原 彰 平賀 伸夫	一身田小学校	5年生	川口 恵子		理科	実験教室	18	12月8日
36	上山 浩	一身田小学校	2年生	村田 真理		図工	フィンガーペインティングを楽しむ 「ヌルヌル ペタペタ 大きな絵」の授業	2～3	6月30日 7月2日
37	後藤 洋子	一身田小学校	2年生	角谷 雅美		体育	2年1,2,4組のPTAによる親子活動 「体ほぐしの運動」(事前打ち合わせを含む)	1	6月8・16日



2010年度・連携教育活動

38	岡野昇	一身小学校	4年生	村田 真理 永合 本幸	体育	校内研修(授業研究)			6月30日
39	岡野昇	一身小学校	2年生	村田 真理 2年担任	体育	校内研修(授業研究・事前検討会 含む)	スポーツ健康科学 ゼミナール	1	8月30日 10月1・5日
40	磯部由香	一身小学校	5年生	川口 恵子 紀平 みどり	算数・給食・掃除			1	6月17・24日
41	林朝子	栗真小学校	1・2年生	岡山 均 鎌田 浩彰	国語(書写書道)	毛筆体験活動支援	小学校専門国語 (書写)	27	10月12日
42	永田成文	栗真小学校	5・6年生	渡邊 知子 井ノ口八重子	社会	大学院生による授業実践	社会科教育特論演 習Ⅱ	4	6月4日
43	中西正治	栗真小学校		川辺 健治	算数	校内(事前打ち合わせ・指導・検討 会を含む)		1	5月6・26日 6月10・16日 7月28日 8月24日 9月29日 10月6・15・29日 11月12・17日 12月3・7日
44	中西正治	栗真小学校	3年2年	川辺 健治	算数	教育実地研究(事前打ち合わせ・ 指導・検討会を含む)	教育実地研究	3	4月19日 5月7・14日 6月18日
45	後藤 太一郎	栗真小学校	5年生	川辺 健治	授業研究への指導	理科「生物とかんきょう」			6月29日
46	平山 大輔 滝口 圭子	栗真小学校	1・2年生	川辺 健治 岡山 均 紀平 みどり	理科	三重大学への遠足における秋見 つけへの支援		7	10月26日
47	根津 知佳子	栗真小学校	1年生	鎌田 浩彰	特別支援学級・校 内研修会の助言	1年生児童への支援に対する助言 言語表現と非言語表現(音楽)		3	6月2日
48	根津 知佳子	栗真小学校	1～6年生	鎌田 浩彰	教員研修会の開催	特別支援学級の子も達を対象と した「音楽療法を取り入れた体験 的活動」の企画・実践	音楽療法概説	30	11月24日
49	根津 知佳子	栗真小学校	2年生	岡山 均	音楽	授業支援	音楽教育ゼミナ ール	2	5月25・26日 6月1・2・8・9・15・16日 後期毎週
50	根津 知佳子	栗真小学校	1～6年生			6年生を送る会	音楽教育ゼミナール	5	2月25日
51	岡野昇	栗真小学校	1・2年生	紀平 みどり 岡山 均	体育	出前授業(体ほぐしの運動)	体育教材研究演習	7	10月19日
52	磯部由香	栗真小学校	3・4年生	吉田 隆子	国語・総合	ダイズの栽培から食教育を学ぶ	教育実地研究	2	11月～12月
53	磯部由香	栗真小学校	6年生	井ノ口八重子	家庭科	調理実習への支援(お弁当作り)	教育実地研究	2	11月～12月
54	磯部由香	栗真小学校	5年生	渡邊 知子	家庭科	お弁当の副菜作り	教育実地研究	6	1月～2月
55	下村 勉	栗真小学校	2年生	岡山 均	生活科	低学年へのパソコン指導・パソ コンによる名刺作り一	教育工学	16	1月20日
56	中西正治	北立誠小学校		中野 久美	算数	教育実地研究(事前打ち合わせ・ 指導・検討会を含む)	教育実地研究	2	4月27日 5月21日

2010年度・連携教育活動

57	永田 成文	北立誠小学校	6年生	中野 久美	社会	環境保全についてのオーストラリアの児童との遠隔会議	社会教材研究(火)	16~19	6月8・22・29日
58	永田 成文	北立誠小学校	1年生	増井 ひろみ 西村 学	生活	オーストラリアとの遠隔会議で学校を紹介し合う		2	9月8・21日
59	富樫 健二	北立誠小学校	6年生	奥沢 由起	体育	体組成・骨密度測定補助	健康管理学 卒業研究	4	4月13日
60	富樫 健二	北立誠小学校	6年生	上島 桂	身体計測	測定結果を元にした保健授業実践	健康管理学 卒業研究	2	10月13日
61	磯部 由香 中西 康雅	北立誠小学校	2年生	駒田 秀樹	生活	「ものを使ったあそび」の活動実践	生活教材研究	60	1月13日
62	荒尾 浩子	北立誠小学校	6年生	中野 久美	英語活動	英語によるコミュニケーション	英語科教育特講 I	16	12月2日 4月20日
63	中西 正治	白塚小学校	1・3年生 なかよし学級	青木 幸枝	算数	教育実地研究(事前打ち合わせ・指導・検討会を含む)	教育実地研究	1~4	5月7・20日 6月18・21日
64	守田 庸一	南立誠小学校	2年生	山本 朝香	国語	「スミミ」教材研究と授業参観		1	6月17日 7月6日
65	中西 正治	南立誠小学校		山本 朝香	算数	教育実地研究(事前打ち合わせ・指導・検討会を含む)	教育実地研究	4	5月7日
66	後藤 太一郎 牧原 義一 新居 淳二 伊藤 信成	南立誠小学校	4年生	福島 千ヨ子 田中 秀幸	理科	物理、化学、生物、地学の実験と観察		12	4月23日
67	栗原 行人	南立誠小学校	6年生	東出 賢一	理科	川の堆積物の観察	小専理科 理科実験(地学)	73	10月24日
68	平山 大輔	南立誠小学校	6年生	田中 秀幸	クラブ活動	科学クラブ	生物学実験	3	5月31日
69	國仲 寛人	南立誠小学校	4・5・6年生	田中 秀幸	クラブ活動	科学クラブ	物理学講義 I	11	12月6日
70	根津 知佳子	南立誠小学校	2年生	萩田 美幸	音楽	いろいろな楽器の音色を味わおう	音楽教育ゼミナール	5	7月7日
71	根津 知佳子	南立誠小学校	4年生	萩田 美幸	音楽	リコーダー・アサンブルを聴く	音楽教育ゼミナール	5	7月13日
72	根津 知佳子	南立誠小学校	1年生		音楽	リトミック	音楽療法概説	2	2月4日
73	富樫 健二	南立誠小学校	6年生	廣田 尚美	体育	体組成・骨密度測定補助	健康管理学 卒業研究	4	4月26日
74	富樫 健二	南立誠小学校	6年生	廣田 尚美	身体計測	測定結果を元にした保健授業実践	健康管理学 卒業研究	3	10月14日
75	岡野 昇 山本 俊彦	南立誠小学校	3年生	田中 徹 天田 章子	PTA活動	出前授業(体ほぐしの運動)	体育教材研究演習	7	11月30日
76	永田 成文	西が丘小学校	3年生	中川 弘子	社会	大門商店街のお客さんを呼ぶための工夫についての授業実践(学生が実施)1時間×4クラス		2	9月27・28日
77	中西 正治	西が丘小学校		中川 弘子	算数	校内研修会			8月6日
78	後藤 太一郎	西が丘小学校	6年生	小山 史己	理科	血液の流れ		1	6月4日

2010年度・連携教育活動

79	山田 康彦	西が丘小学校	6年生	中川 弘子	図工	絵画 学校のまわりの風景		7	9月28日 10月1・12・14日
80	富樫 健二	西が丘小学校	5年生	朝柄 知子	体育	体組成・骨密度測定補助	健康管理学 卒業研究	4	4月20日
81	平島 円	西が丘小学校	5年生	山本 ちひろ	家庭科	授業参観・調理実習補助	教育実地研究	2	9月末～10月上旬
82	平島 円	西が丘小学校	6年生	藤田 しおり	家庭科	りんご蒸しケーキ作り支援	教育実地研究基礎	12	2月15・18日
83	磯部 由香	西が丘小学校	3年生	脇 規	総合	豆腐作り	教育実地研究	10	11月16・17・18日
84	荒尾 浩子	西が丘小学校	6年生	藤田 しおり	英語活動	英語によるコミュニケーション	総合演習	14	12月3日
85	中西 良文 松浦 均 廣岡 雅子 (本学部非常勤講師)	一身田小学校 北立誠小学校 栗真小学校 白塚小学校 南立誠小学校	3～5年生		コミュニケーション スキルトレーニング	わくわくコミュニケーションクラブに よるコミュニケーション力育成のた めの活動		約10	5月15日 6月5・19日 7月3・17日 10月9・16日 11月20日 12月4・18日 2月19日 3月5日
86	林 未和子	白塚小学校 白塚幼稚園	4・5歳児 1・2・4・5・6年 生	足立 深幸 田中 ゆかり	幼・小連携活動	幼・小連携活動としての行事・授業 の参観・担当教員へのインタビュ―	家政教育コース 卒業研究	1	7月8日 9月18日 10月12・29日 11月8・16日 12月2日
87	河崎 道夫	白塚幼稚園	4・5歳児	岡田 恵子 足立 深幸 新友宏	生き物環境づくり	蚕の飼育、命の誕生と子ども	教育実地研究	5	4月～10月
88	河崎 道夫	白塚幼稚園	4・5歳児	岡田 恵子 足立 深幸 新友宏	夏祭りへの参加	暗闇部屋の実践	教育実地研究基礎	11	7月3日
89	滝口 圭子	白塚幼稚園	未就園児	岡田 恵子	子育て支援	びよんちゃんクラブの企画実践	教育実地研究	1～4	5月14・25日 6月1・15・22日 7月6日 9月28日 10月5・12・26日 11月2・16・30日 12月7・14日 1月18・25日 2月1日 3月1日
90	滝口 圭子	白塚幼稚園	年少・年長	岡田 恵子 足立 深幸 新友宏	親子活動	親子で楽しむ触れ合い・運動遊び		10	5月10日 6月12・29日
91	中西 正治	白塚幼稚園		足立 深幸	子育て研修会	大学構内での木の実の学習と遠 足			1月28日
92	平山 大輔	白塚幼稚園 北立誠幼稚園	年長・年少	岡田 恵子 小菅 なぎさ 小菅 なぎさ	木の実を探そう			18	10月28日
93	林 朝子	北立誠幼稚園	4・5歳児	大森 麻子 岡山 まゆみ	国語(書写書道)	毛筆体験活動支援	書道Ⅱ	45	11月18日 12月2日

2010年度・連携教育活動

94	後藤 太一郎	北立誠幼稚園		小菅 なぎさ 大森 麻子	生き物とのかかわ りを通して	ようこそ うさぎちゃん！		5月14日
95	魚住 明生	北立誠幼稚園	主に年長	岡山 まゆみ	ものづくり活動	チヨコちゃんのサークルを作ろう	10	6月9・16日
96	河崎 道夫	北立誠幼稚園	4・5歳児	大森 麻子 岡山 まゆみ	親子活動	どろだんごを作ってみよう	3	10月18日
97	滝口 圭子	北立誠幼稚園	未就園児	小菅 なぎさ	子育て支援	たんぼぼ会の企画実践	2～3	5月11・17・25・31日 6月21・29日 7月5・13日 10月18・25日 11月8・15・26日 12月6・15日 1月12・14・31日 2月7・22日
98	後藤 太一郎	南立誠幼稚園	5歳児	森 朋子	生き物とのかかわ りを通して	川遊び		6月10日
99	岡野 昇 山本 俊彦	南立誠幼稚園	4・5歳児	森 朋子	運動遊び	親子活動(事前指導・報告会を含 む)	4～11	5月18・20日 6月20日 7月29日
100	岡野 昇 山本 俊彦	南立誠幼稚園	5歳児	森 朋子	運動遊び	出前授業(キヤスター遊び)	4～6	9月2・7日
101	滝口 圭子	南立誠幼稚園	未就園児	丹羽 立子	子育て支援	うさぎ組・うさぎクラブの企画実践	2～3	5月11・19日 6月2・30日 7月7・14日 9月1・8・15日 10月6・13・20日 11月10・17日 12月15日 1月12・19日 2月2日 3月2・9日

# 1. 国語教育

本年度、国語教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 日本語教育コースの取り組み「学校現場における多文化共生を考える」
2. 書道Ⅱ（国語教育講座）の取り組み「筆！墨！紙！で遊ぼう！」
3. 小学校専門国語・書写分野（国語教育講座）の取り組み「たのしく筆体験！」

## 1. 日本語教育コースの取り組み「学校現場における多文化共生を考える」

報告者：教育学部 林朝子

### 【目的】

小学校のクラブ活動の観察や参加を通して、学校現場における多文化共生について学び、考える機会とする。

### 【概要】

活動場所：津市立一身田小学校「世界を結ぼうクラブ」※平成20年度からスタート。月1回で年間8回実施。

担当教員：富田幸代・藤ノ原デボラ（一身田小学校）

林朝子・別府直苗・蓑川恵理子（三重大学教育学部）

参加児童：5年生3名、4年生17名、計20名

参加学生：第1～3回 日本語教育コース3年3名、4年2名

第4～8回 日本語教育コース1年11名、天津師範大学留学生7名

事前打ち合わせ：4月13日、10月6日、毎クラブ終了後

クラブ目標：他国の文化や習慣を知り、尊重する。自国の文化や習慣に誇りを持つ。多文化共生意識を育てる他国の文化や自国の文化を外に発信する。

活動内容：

①6/7：

#### 【ブラジルってどんな所？】

- ・ポルトガル語で挨拶をする
- ・写真を使って、ブラジルの地理や風土、学校文化について知る

#### 【DVD作成準備（1）】

- ・5グループに分かれ、日本の学校を伝える映像を作り、ブラジルのめぐみ学園に送ることが決定
- ・グループメンバー、グループ名、取り上げるテーマについて話し合う  
テーマ：学校紹介（下駄箱など）/掃除/給食/プールと保健室/音楽室と家庭科室
- ・各グループで写真撮影を行う（～7月12日まで）

②6/21：

#### 【DVD作成準備（2）】

- ・シナリオ作成、ナレーションの練習を行う

③7/12：

#### 【DVD作成準備（3）】

- ・写真データのPC取り込み

- ・音声を録音

8月中：

#### 【DVD作成】

movie makerのソフトを使って、編集（学生）。

④10/18：

#### 【ブラジル国旗の秘密発見】

- ・DVD上映会
- ・ブラジル国旗が表す秘密をデボラ先生のヒントを聞いて、皆で考えながら学習

⑤11/15：

#### 【ブラジルの遊びを体験しよう】

- ・Rouba Bandeira（ホウバ・バンデイラ/旗取り）というブラジルの遊びを運動場で皆で行う

⑥12/6

#### 【ブラジルのクリスマス体験】

- ・ブラジルのクリスマスデザートを作って食べる
- ・デザートを通して、北半球と南半球の違いを体験する

⑦1/24：

#### 【中国の文化紹介】

中国からの留学生が中心になって、中国語や中国文化を紹介

⑧2/14

#### 【世界の文化紹介】

日本の学生が中心になって、世界の様々な文化を紹介

### 【成果】

クラブ活動を通し、以下の2点について子どもたちの様子に変化が見られた。このような子どもたち自身が気付く場に学生が参加できたことで、学生自身も多くのことを学んでいる。まず、活動を通しての子どもたちの様子である。

- 1) 日本文化（自分化）の気付きから積極的な発信へ

ブラジルめぐみ学園に送る映像作りに際して、日本とブラジルの学校文化の違いを知ることから始めた。その上で、子どもたちがブラジルの友だちに知らせたい自分たちの学校文化について話し合い、伝える内容を決めた。毎日下駄箱

で下履きと上履きを履き替えていることや、学校で給食を食べたり、掃除をしたりという当たり前の学校生活が実は日本の学校文化特有のことであつたりという気づきが大きかった。そして、それを何とかブラジルの友だちに伝えたいという気持ちが生まれ、活動全体に積極的に参加する姿勢が見られた。

## 2) “違い”の発見から受入れへ

担当のデボラ先生にブラジルを中心とした言葉や文化を楽しく知る活動を行っていただき、子どもたちが身体を動かしてブラジルの遊びを体験したり、ブラジルの写真を見ながらブラジル国旗の意味について考えたりと自然にブラジルのことを知る機会となっている。子どもたちから活動の中で「日本と違う」というコメントが聞こえることも多いが、“違い”をマイナス評価するのではなく、そのまま受入れることができるように感じる。

学生にとっては、子どもたちがクラブ内で様々な気づきや発見をしている場面に共に参加し、子どもたちの反応や感じ方を直に体験できるという大変貴重な機会となった。大人の視点からではなく、子どもたちの視点を通して多文化共生について考えていける時間である。クラブ参加の翌週には振り返りの時間を設け、レポート提出も行っており、各学生が多文化共生についてそれぞれの視点から少しずつ意識が向けられたようである。

## ●学生のレポートから●

- ・小さいころから国際交流や異文化理解の学習をしていくことで子どもたちの興味や関心が深まり、異文化を身近に感じるようになると思う。
- ・外国の子どもだけではなく、同じ日本人でも、例えば他県や他の地域からの転校生と同じ教室で過ごすことは、一種の多文化共生になるのではないだろうか。
- ・三重県内にはブラジル国籍の方が多いと授業で学んだけれど、実際ブラジルについて自分から調べようとしませんでした。国旗には、その国の目標や理想などの意味が込められているので、国旗について知ることはその国を知る一歩につながると思った。
- ・ブラジルのことを先生自身がよく理解して知識を集めていないと母国について自信を持って紹介できないと思いました。わたし自身、日本人なのに日本について知らないことがまだまだあ

ると思います。外国に視野を広げつつ、日本を意識しながら勉強に取り組みたいと思いました。

- ・国や地域によってさまざまな文化があり、どれかが絶対的なものであつたり強い弱いがあつたりするものではないと思うので、それぞれの違いについて認め合うことが大切だと思いました。小学生のうちから世界のいろいろな文化に触れておくことは成長していく中で役に立つ経験だと思うので、内容の浅い深い関係なく少しでも他の国やその文化、同時に日本について相互的に考えることが出来ると良いと思いました。

クラブ参加後の振り返りでは、各学生の意見交流の場としたが、大変有意義であつたと思う。ここでは各自が感じたこと・考えたことを全員で共有することで、疑問が解決できたり、更に新たな疑問について議論を行うことができた。

多文化共生が進む日本において、身近な学校現場の中にも多文化が広がっていることを知ることは、学校教員を目指す学生にとってはもちろん、地域における多文化共生を考えて行く上でも非常に重要な視点であろう。

## 【課題】

今年度の活動を通し、以下の2点についてが大きな課題として考えられる。

- 1) 多文化共生についての深い考察
- 2) 学生と子どもたちとの関係作り

一つ目の「多文化共生」については、全員が何らかの疑問点や問題点を見つげられたようである。しかし、多文化共生意識の必要性について、また、それらをどのように子どもたちに伝えられるのか等、より深い考察が行えると感じる。振り返りの時間やクラブ参加前の授業内容や課題についても再度見直す必要があるであろう。

二つ目の子どもたちとの関係作りについては、毎年の課題でもある。今回は、子どもたちと学生双方に積極的に関わろうという気持ちを強く持つ者がおり、共に活動する雰囲気は早い段階からできていたように思う。しかし、全ての子どもと学生が十分な関係作りができていたわけではない。日本人学生は1年生がほとんどであつたため、子どもとの関わり方がわからない者もあり、より具体的な指導の必要性を感じた。

次年度にはこれらの課題解決を踏まえた授業展開を考えたい。

## 2. 書道Ⅱ（国語教育講座）の取り組み「筆！墨！紙！で遊ぼう！」

報告者：教育学部 林朝子

### 【目的】

子どもたちの「筆で書く」という初めての体験の場への参加を通して

- 1) 子どもたちの発見する力・感じる力・表現する力を感じ、
- 2) 子どもたちにとって「筆で書く」ことの意義を考え、

子どもを対象とした有効的な毛筆活動を考えるきっかけとする

### 【概要】

実施日時：平成22年11月18日（木）・12月2日（木）12：30～14：30

実施場所：北立誠幼稚園

参加園児：34名（年少15名・年長19名）

※小菅園長先生、大森先生（年少）、岡山先生（年長）

参加学生：書道Ⅱ（平成22年度後期）履修生45名

活動目的：園児）筆と墨を使う初めての体験を通して、筆のおもしろさを発見し、筆で表現することへの関心を高める

活動の流れ：

#### 【1回目：11月18日】

テーマ：筆に慣れよう（※年少は初めて）

12：30～12：40 幼稚園集合

12：40～13：00 準備

13：00～13：55 活動

15分 全体活動：用具などについて説明（林）

30分 個別活動：ペア（園児1名：学生1～2名）で自己紹介

紙（条幅1/3、条幅70cm×135cm）に線・図形・絵をかいて、筆に慣れる

10分 グループ活動：グループ（園児2名）で条幅に絵をかく

13：55～14：05 発表会

14：05～14：20 後片付け（園児・学生）

#### 【2回目：12月1日】

テーマ：年少）筆で楽しむ、

年長）来年の干支「う」を書く

12：30～12：40 幼稚園集合

12：40～13：00 準備

13：00～14：20 活動と後片付け

10分 全体活動：用具などについて復習（林）

#### 年少

30分 個人活動：紙（条幅1/3）に図形や絵をかく ※一人4枚

20分 グループ活動：2～3人で条幅に絵をかく

※指示があったら、学生が前に取りにくる

10～15分 後片付け

#### 年長

15分 色紙サイズの紙に「う」を練習

5～10分 色紙に清書

10分 葉書サイズの紙に「う」を練習

5～10分 葉書に清書

10～15分 紙（条幅1/3、条幅）に好きな絵や文字をかく

10～15分 後片付け

振り返り：各活動後には活動目的を中心に各自が感じたこと、考えたことをまとめ、レポート提出。その後さらに授業内でも学生の考え等を全員で共有できる場を設けた。

活動の様子：





### 【成果】

今回の活動には昨年に引き続き 2 回目の参加となる学生が 1/3 程度おり、1 年間の子どもの成長を見る機会にもなった。参加が初めての学生には「幼稚園の子どもに筆や墨を使って大丈夫？」という心配もあったようであるが、子どもたちの好奇心の強さや集中力に驚いていたようである。

活動の最初に、教員から筆や墨などについて少し話をしたが、子どもたちは筆と墨で書いた「あ」について「太いところと細いところがある！」「色が濃かったり、薄かったりする」「かすれとる」など筆と墨ならではの表現のポイントを的確に感じ取っていた。実際に筆で線や絵をかき始めると、子ども一人一人の自由な表現に圧倒されていたようである。子どもたちが筆を使って表現した線や絵には子どもたちの様々な気持ちが込められており、子どもたちの表現力の深さや大きさに気付いていた。また、何かを筆で表現している時の子どもたちの発言も大切に、子どもたちのことばに表れる気持ちにも注意を向けていた。

子どもたちとのコミュニケーションの面では、幼稚園の子どもたちとの触れ合いに慣れていない学生も多く、不安があった者もいたが、それぞれに声かけなど工夫をし、子どもたちとの関係作りにしっかり取り組んでいた。

また、今年度は幼稚園の作品展の見学もさせていただき、子どもたちの書いた作品が展示されている様子を拝見できた。作品自体が素晴らしいだけでなく、作品の魅力を引き出すための展示や空間作りの工夫についても学ぶ機会となった。

### ●学生レポートから（抜粋）●

・子どもたちの表現しようとする力を間近に感じることができた。子どもたちにとって、自分の意



志を言葉で伝えるというのはまだ難しいことだと思うが、筆で紙に書くことで、それ以上のものを静かに表現しているように思えた。

・筆で文字を書くという感覚や、紙のサイズを考慮して、それにふさわしい文字を書くという感覚が子どもたちに養われたように思える。筆を使っている時の子どもたちはとても楽しそうで、筆で書くことに集中しているように見えた。それは、やはり、筆の持つ特質に関係しているようにも思った。筆は力の加え方や墨のつけ方、筆の使う部分を変えることで、無限に表現をすることが可能であり、子どもたちは無限の表現力を持っている。

・今回の活動テーマは「筆で楽しむ」であるが、子どもたちの中には、筆の毛を頬にすりすりしている子が何人か見られ、筆を道具としてだけでなく、筆そのものを楽しむことができているように感じた。道具を使いこなすようになるにあたって、こういった「そのものを楽しむ」ことはとても意味あることで、今後のそのものへの接し方に影響してくると考える。私たちは忘れがちであるが、そういういった、そのものと向き合う時間は大切にしていかなければいけないと思う。

### 【課題】

活動前の準備段階にもう少し時間をかけて行う必要性を感じた。幼稚園の子どもたちが毛筆体験をする意義についての話し合いや実際の活動内容についての打ち合わせの時間をもう少し多く設けていくことで、活動時の混乱減少と学びの増加に結び付くであろう。

また、活動後には各学生が書写道について様々な問題意識が持てたようである。授業内で全てを取り上げることは不可能であるが、学生自身が今後その問題点に向かい合っていけるよう指導を行っていく必要性も感じている。



### 3. 小学校専門国語・書写分野（国語教育講座）の取り組み

#### 「たのしく筆体験！」

報告者：教育学部 林朝子

#### 【目的】

- 1) 子どもが筆と出会う場面に参加することで、子どもの発見力や表現力を感じとる
- 2) 筆や墨の楽しさを伝える方法を考えるきっかけとする

#### 【概要】

実施日時：平成22年10月12日（火）3・4

限目（10：20～12：25）

実施場所：栗真小学校体育館

参加児童：34名（1年生14名・2年生20名）

※1年生担任 紀平先生、2年生担任 岡山先生、特別支援の先生 釜田先生

参加学生：小学校専門国語（平成22年度後期前半・書写分野）履修学生27名

活動目的：児童）3年書写で毛筆を習う前の段階で、筆と墨で描く/書くことの楽しさ通し、筆と墨への関心を高める

活動内容：

- 10：00～10：20 準備（学生）
- 10：20～10：25 子どもたち移動
- 10：25～10：40 挨拶（全員）・用具などについて説明（林）
- 10：40～10：45 個別活動のためのペア作り・自己紹介
- 10：45～11：10 紙（条幅1/3、条幅70cm×135cm）に線・図・絵等をかいて、筆に慣れる
- 11：10～11：50 書き初め紙に自分の名前をひらがなでかく  
※漢字使用も可
- 11：50～12：00 発表会
- 12：00～12：20 後片付け（学生）

活動後：授業での振り返りを行うとともに、各自が活動を通じて感じたことや考えたことについてレポート提出を行った



#### 【成果】

本活動には小学校教員を目指す小学校専門国語（書写）履修生が参加しているが、子どもたちの集中する力や発見力を間近で経験できる非常に有意義な機会となった。子どもたちが筆という初めてのものに出会う場面を一緒に体験することで、子どもの発見力・表現力が十分に感じ取れ、子どもの力に改めて驚いたようである。また、書写において、筆で書くことが硬筆の練習の活動の一つと位置付けられることの意義も学生自身が子どもの書く様子や文字を通して学べたようである。

当初、子どもたちとのコミュニケーションができるかどうか心配している学生もいたが、活動が始まれば、それぞれが子どもたちと向き合い、子どもたちとのコミュニケーションをとるために一人一人が工夫をし、子どもたちとよい関係を作っていたように思う。

#### ●学生レポートから（抜粋）●

- ・子どもたちはまだ授業時間になっていないのに体育館の様子を見に来たり、自分の場所を確かめたりと、待ちきれない様子だった。授業が始まってもその好奇に満ちた目は変わらず、とてもワクワクしていることがこちらに伝わってきた。
- ・子どもたちが普段使用している鉛筆とは違い、筆と墨を用いて文字や線を書くということでいつもとは違ったことができるのでとても興味を示していた。
- ・一生懸命練習をしてあっという間に真っ直ぐな線が書けるようになっていた。上手くなったねと褒めると、少し照れたように笑いながら熱心に練習していた。
- ・まだ2年生で実習にも行っていないので、子どもたちにどういう風に関わっていけばいいのか分からず不安があった。しかし、実際に小学校に行ってみて、様子を見てみると、子どもたちはみんな真剣に説明を聞き、線もしっかり書いていて、とてもびっくりした。小学生は私が思っているほど子どもじゃないんだということに気付き、最初に不安を抱いていたことに申し訳ない気持ちになった。
- ・（昨年度、幼稚園での毛筆体験活動に参加していたので）小学1、2年生の子を幼稚園と「1～3歳しか変わらない」と思って見てしまっていたが、この年代の子どもたちにとって「1～3歳」の開きがとても大きいものである

ことを感じさせられた。

- 子どもたちが初めて筆を持つということで、子どもたちは筆で書くということについてのどのような反応をするのだろうかという疑問に思っていた。そして、私は、子どもたちは筆で書くということに興味を持ってくれるのだろうかと思っていた。しかし、子どもたちの毛筆体験に対する意欲はとても高く、普段使っている鉛筆との感覚の違いに戸惑いを感じている子どももいたが、皆楽しそうに書いていた。
- 活動を通して、子どもたちは「筆は字を書くもの」という認識をしっかりと持っているということがわかった。
- 鉛筆で書く文字や線というのはほとんど同じような色の濃さや太さをしているのに対して、筆で文字や線を書くと墨が少なくなり、文字や線がかすれることや、筆への力の加え方を変えると文字が太くなったり、細くなったりすることに気付いていた。このような文字や線の形を変化させることでいろいろな表現ができるということを感じ、それが筆を使って文字を書くことの楽しさにつながっていると思うので、その点を子どもたちに伝えることができたのではないと思う。
- 最後に1年生と2年生で作品を見せ合った後、先生に提出することになった。しかし、先生に提出したら、自分で一番いい作品を持って帰ることができないと思ったようで、先生に提出する前にこっそり違う作品と取り換えている子が何人かいた。子の様子をずっと見ていて、子どもたちが「一番うまくいった作品を自分で持って帰りたい」と思えたということは、とても意味のあることではないかと感じた。これは、子どもたちにとって今回の活動が有意義な活動であった証拠なのではないかと感じ、とてもうれしく思った。
- 似顔絵を描いてプレゼントしてくれて、とっても嬉しかったです。
- 今回の楽しい体験を3年からの書写の授業にどうつなげられるかを考えていきたい。



#### 【課題】

今回の活動は、大学の後期が始まって2回目の授業時に行ったため、子どもの支援に対する事前指導が不十分なまま、しかも、学生自身が授業で毛筆に触れていない段階での支援ということで、「毛筆の指導ができるのか」という学生自身も不安な気持ちのまま当日の支援に参加していたと思う。また、活動に参加した学生は「小学校専門国語」という様々なコースの学生が履修している科目であるため、活動前に活動自体の意義をより徹底して伝えておく必要性を感じた。今後は授業内容と活動実施時期についてより配慮を行っていきたい。

学生と子どもの関係作りには問題はなかったが、教育実習の経験のない2年生も多くおり、活動前には子どもたちへの声かけをどうすればいいのかという悩みもあったようである。子どもとのコミュニケーションの方法についても活動前に触れておく必要性を感じた。

今回の活動は小学3年生書写で毛筆が導入される前段階で「筆で楽しむ」ことを目的としたものであるが、学生自身のコメントにもあるように、「書写の時間でどう毛筆を扱い、硬筆へ結びつけるか」を考えていくことが教員となった場合の大きな課題である。今後は、活動後に学生同士の意見交流の時間をより多く設け、書写の指導方法にまで結びつけられるように活動を生かしていきたいと思う。



## 2. 社会科教育

本年度、社会科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校1年生における夏休み課題「地域研究」の支援
2. 栗真小学校5・6年生における大学院生による研究授業の実施
3. 一身田中学校2年生における大学院生による研究授業の実施
4. 北立誠小学校6年生におけるオーストラリアとのTV会議の実施
5. 北立誠小学校1年生におけるオーストラリアとのTV会議の実施
6. 西が丘小学校3年生における社会科の出前授業の実施
7. 一身田中学校1年生におけるキャリア教育への支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校1年生における夏休み課題「地域研究」の支援

(永田成文)

#### 【目的】

中学校1年社会科の夏休み課題である「地域研究」の指導の時間において、担任の先生の指導をサポートし、生徒に対して課題研究のすすめ方を支援することができる。

#### 【概要】

平成19年度より、社会科教育法Iを受講している40名前後の学生が、一身田中学校社会科の夏休み課題「地域研究」をTT形式でサポートすることを行っている。「地域研究」では、一身田校区や津市を主な対象とした地域について、主体的に調査し、地域の特色や地域のよさをまとめるようになっている。この取り組みは、教育実施研究IIとして社会科教育コースの学生が教育現場や生徒と交流することを意図している。

本年度は一身田中学校社会科担当の梅元教諭を窓口とし、7月1日(木)3限に実施した。社会科教育コースを中心とした38名の学生が1年生の1組～6組に入った。各クラスは、6班に生徒が分けられており、それぞれの班に学生が1～2名が入るようになっている。

各クラスの担任の先生から、夏休みの課題について一通りの説明があり、各班で「地域研究」のテーマを話し合う。学生は、生徒の質問に答えたり、生徒のアイデアができるようにアドバイスを

行うことになっている。

授業の最後に、学生は各クラスの前列に立ち、クラス全員の生徒に、自分たちが中学生の時にやってきた夏休みの課題研究のことや、クラス全体への課題研究のアドバイスを一言ずつ述べる。

写真 担当する班を支援する学生



学生は、担当する班でのアドバイス、クラス全体へのアドバイスを行うことによって、現場の実態を体感し、生徒と交流することができる。一身田中学校の生徒は、学生からアドバイスをもらい、夏休みの課題「地域研究」への見通しを立てることができた。

次は、「地域研究」の支援に参加した社会科教育コースの学生の感想である。

中学校1年生は班活動などを行うとバラバラに行動してしまい、お互いの考えを聞くことができなくなってしまう。そんな中で自分は進行役に徹して、子ども達に活発な話し合いをさせることができた。調査の仕方が本やインターネットで調べるといふ考えが多かったので、実際に経験や体験させることの重要性を指導しきれくくらいの説得力が必要にな

ってくると感じました。

このように、大半の学生は、実際に中学生と接することで、指導場面を経験できよかったという感想で述べている。しかし、担当するクラスや班によって生徒との交流の深まりはまちまちであったようである。

今後、事前指導において、積極的に生徒と交流していけるような手だてを考えていきたい。

## 2. 栗真小学校5・6年生における大学院生による研究授業の実施

(永田成文)

### 【目的】

目標・内容・方法を明確にした小学校社会科授業を開発し、小学校において実験授業を行い、その有効性を実証的に検証する。

### 【概要】

平成17年度より、大学院教育の一環として、大学院生が構想し開発した単元を栗真小学校で実施している。「社会科教育特論Ⅱ」と「社会科教育特論演習Ⅱ」を受講している大学院生が、「社会科教育特論Ⅱ」で複数の社会科単元を構想し、その中から栗真小学校に選定してもらったものを、「社会科教育特論演習Ⅱ」で実験授業として実施し、その効果を分析している。

本年度は栗真小学校の井ノ口・渡辺教諭を窓口とし、6月4日(金)1・2限に小単元「モンゴル民族の生活文化」を実施した。4名の大学院生中、2名の学生が担当した(他の2名の学生は一身田中学校担当)。担当した1名は中国の内モンゴル出身の留学生であった。

小単元「モンゴル民族の生活文化」の概要は次の通りである。

#### 小単元の目標

- ・モンゴル民族の文化への興味・関心を持ち、さらに学習を深めようとする(関心・意欲・態度)
- ・モンゴル民族の住居、衣服、食物の特徴をつかみ、その背景を考える。(思考・判断)
- ・モンゴル民族の文化の様子を写真や資料から読み取ることができる。(技能・表現)

- ・モンゴル民族の生活文化は主に遊牧や家畜と関わっていることを理解する。(知識・理解)

#### 小単元の構成

モンゴル民族の分布、祭り、遊び …… 1時間

モンゴル民族の住居、衣服、食物 …… 1時間

研究テーマを「モンゴル民族への興味・関心を高める異文化理解学習」に設定し、まず、馬頭琴、モンゴル衣服、シャガイなど現物や写真を活用して、自分の目で見て確認することや手で触ることで、楽器、衣服、遊びへの興味・関心を高めていく。その上で、日本とモンゴルの生活文化の違いはどのような背景があるのかを考察させ、モンゴル民族の独得の生活文化への興味関心を高めていく。さらに、日本や津市、鈴鹿市における日蒙交流の現状を伝え、モンゴル民族との交流への興味関心を高めていく。

授業では、児童に、次のような発問をし、ワークシートに書かせた。

- モンゴルとはどのようなところですか
- モンゴル民族の伝統的な祭りの特徴は何ですか
- なぜモンゴル民族の多くはゲルに住んでいたのか
- なぜモンゴル民族はデールを着ているのか
- なぜモンゴル民族はチーズと羊肉を食べるのか
- モンゴル民族の文化について興味・関心を持ったことは何ですか

○モンゴル民族についてさらにどんなことを調べたいですか

ワークシートの分析から、児童はゲルや衣装に興味を持ち、モンゴル民族文化への興味関心が高まった。写真や資料を活用したため、児童は具体的にイメージできた。特に、ゲル、服、食べ物には興味関心を持ち、その背景を考えていこうとした。モンゴル民族の生活は遊牧や家畜と関わっていること大半の児童は理解できた。

今後も継続して、留学生の視点を活用して、小学校の異文化理解に関わるテーマの単元を開発していく予定である。

資料 伊勢新聞 平成 22 年 6 月 8 日



### 3. 一身田中学校2年生における大学院生による研究授業の実施

(永田成文)

#### 【目的】

目標・内容・方法を明確にした中学校社会科授業を開発し、中学校において実験授業を行い、その有効性を実証的に検証する。

#### 【概要】

平成 21 年度より、三重大と一身田校区との連携の一環として、大学院生が構想し開発した授業を一身田中学校で実施している。「社会科教育特論Ⅱ」と「社会科教育特論演習Ⅱ」を受講している大学院生が、「社会科教育特論Ⅱ」で複数の社会科単元を構想し、その中から一身田中学校に選定してもらったものを、「社会科教育特論演習Ⅱ」で実験授業を行い、その効果を分析している。

本年度は社会科歴史的分野担当の後藤教諭を窓口とし、6月14日(月)3・4限に小単元「大連と日本のつながり」を実施した。4名の大学院生中2名の学生が担当した(他の2名の学生は栗真小学校担当)。担当した1名は中国の大連出身の留学生である。

小単元「大連と日本のつながり」の概要は次の通りである。

小単元の目標

・大連が日本にとってどのような位置づけである

のかを考え、つながりについて意欲的に追究することができる。(関心・意欲・態度)

・大連と日本の昔と今を関連付けるつながりから、現在の発展の背景について考える。(思考・判断)

・満州の鉄道路線図から大連の地理的位置、大連の観光客や輸出入のグラフから、観光と経済の側面での日本とのつながりを読み取ることができる。(技能・表現)

・大連の発展は日本に占領されていたという歴史的なつながりの上に成り立っており、今日でも日本の影響を強く受けていることを理解できる。(知識・理解)

小単元の構成

○日本占領下の大連・満州 (歴史的なつながり)  
.... 1 時間

○現在の大連の観光と経済 (現在のつながり)  
.... 1 時間

大連や遼東半島という地名は中学校の歴史の教科書に登場する。しかし、実際はどういう地域なのか、それらの地域と日本の関係は占領・被占領という過去の事実だけなのかを詳しく学習する機会は中学校ではほとんどない。

研究テーマを「近代以降の日中交流の理解を深

める地理歴史融合学習—大連と日本のつながりに着目して—」に設定し、つながりというキーワードから、日本の満州国への進出により昔のつながりの上に観光・企業進出という今のつながりがあるということを認識させようとした。大連と日本のつながりを取り上げることで、日中の歴史的な関係とともに、現在の関係をつかませ、日中交流の理解により深みを持たせることができる。

授業では、生徒に、次のような発問をし、ワークシートに書かせた。

- 満州国の国旗から読み取れることを書きましよう
- 日本から満州国への入口になっていたのはどこだと思いますか
- 日本と大連のつながりについてわかったことを書きましよう
- 大連に日本料理屋が多いのはなぜだと思いますか
- 大連に日本企業が多いのはなぜだと思いますか
- 日本と大連のつながりについてわかったことを書きましよう

ワークシートの分析から、1時間目は、日本と大連や、満州国との関係についてほとんどの生徒が理解できていた。大連は役所を置くような重要な場所であること、日清戦争・日露戦争後、日本にとって大連が満州国支配の拠点であったこ

と、当時の大連の人々の生活の様子を生徒につかませることができた。

2時間目は、現在の大連と日本のつながりについて、大連には日本人が多く、日本の文化が見られることに気づき、日本は大連と深くつながりがあること、日本は大連と仲良くなっているなどの意見がみられた。現在の大連の発展は日本との歴史的なつながりの上に成り立っており、観光や経済において日本の影響を強く受けていることを生徒につかませることができた。

今後も継続して、留学生の視点を活用して、社会科の内容に関わるテーマの単元を開発していく予定である。

資料 伊勢新聞 平成 22 年 6 月 15 日



#### 4. 北立誠小学校6年生におけるオーストラリアとのTV会議の実施

(永田成文)

##### 【目的】

日本での環境を守る取り組みを児童に考えさせ、それをオーストラリアの児童と情報交換することで、地球市民としての行動を促す。

##### 【概要】

平成 20 年度より、挑戦的萌芽研究「大学教育における遠隔会議を活用した連携型の国際理解学習の教材開発」(代表：永田成文)で、日本とオ

ーストラリアの小学校でTV会議を行っている。

本年度は、三重大学と一身田・橋北地区連携推進事業の一環として、2010年6月29日に、教育学部遠隔授業室にて、津市立北立誠小学校6年生とオーストラリアの Coogee Public School 4年生がTV会議を行った。「地域の環境を守るための活動」をテーマとし、お互いに学校や地域での活動を紹介した(言語は英語)。

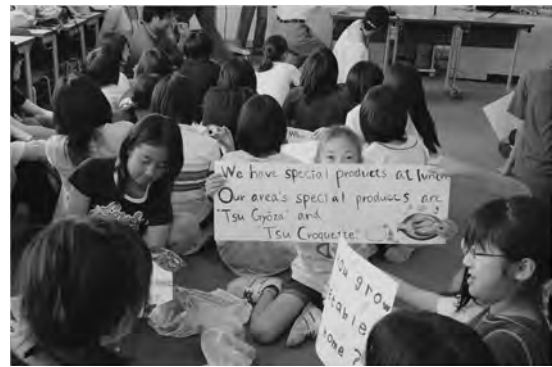
6月8日に、オーストラリアとのTV会議の概要を説明し、社会教材研究を受講している学生20名が、Reduce・Reuse・Recycle・Energy・School・Clubのそれぞれのチームに分かれて、それぞれ5分ずつ北立誠小学校6年生39名の児童に授業を行った。この後、児童は、班ごとにTV会議のプレゼンテーションの構想を話し合った。学生は各班のサポートに入った。

- ③「地域での事実に関するオーストラリアへの質問 読み+応答
- ④テーマに対する地域での活動(対策)を伝える(活動の状況など) 読みのみ
- ⑤テーマに対する地域での活動(対策)を伝える(活動の問題点など) 読みのみ
- ⑥地域での活動(対策)に関するオーストラリアへの質問 読み+応答
- ⑦テーマに対する呼びかけ(将来的に何が必要かなど) ※7名班のみ

資料1 伊勢新聞 平成22年6月9日



写真 児童が作ったボード



6月29日のTV会議では、Coogee Public School からパワーポイントにより、ゴミで堆肥をつくる取り組みや、ゴミ捨ての劇が紹介された。北立誠小学校は、ボードを活用して学校での牛乳パックのリサイクルや地域の地産地消の取り組みを紹介した。

6月22日に、6月8日の授業をもとに、児童はオーストラリアの児童に伝えたいことや質問したいことを考え、6月22日に学生の協力のもとでボード(英語と絵や写真)を作成した。各班でそれぞれ Reduce・Reuse・Recycle・Energy・School・Club について担当し、各班で役割を決め、次の内容のボードを作成した。

資料2 伊勢新聞 平成22年6月30日



- ①「テーマに関する地域での事実を伝える環境の状態など) 読みのみ
- ②「テーマに関する地域での事実を伝える(環境の問題点など) 読みのみ

次は、TV会議に参加した児童の感想である。

写真や図を使い伝える工夫をした。ちゃんとわかってもらえるようにしっかり説明した。英語がいつもよりわかると思う。向こうの環境のことがわかり、生活に取り入れることができそう。

大半の児童は、TV会議で相手にわかりやすく伝えようと工夫し、オーストラリアの環境を守る活動に興味を持っている。

次は、TV会議を支援した学生の感想である。

環境について知ることとはとても大切なことであるので、調べたり考えられたりする機会になってよかった。子ども達と環境について

考えることも貴重な体験で、どのように考えているのかを知ることができた。TV会議では向こうの言葉が聞きづらかった。話し合おうと思うならお互いにもっと自覚が必要だと思った。

大半の学生は、児童とTV会議に向けてともに作業を行ったことを貴重な体験であると思っている。

TV会議では、日本側に通訳をつけた。しかし、オーストラリア側の音声が聞こえにくく(マイクが遠い、小さな声)、プレゼンテーションを通訳する時間の確保が十分にできなかった。この点はTV会議の活用についての今後の課題である。

## 5. 北立誠小学校1年生におけるオーストラリアとのTV会議の実施

(永田成文)

### 【目的】

日本の学校生活をオーストラリアの友達に紹介し、オーストラリアの紹介を聞き、外国の友達とコミュニケーションができるようになる。

### 【概要】

シドニー大学のSonia先生から次のようなメールが届いた。

We would like to hold a video conference between Coogee and Kita-rissei students on Tuesday 21 September. As you know, Lynda's class will be participating in the video conference.

Would it please be possible to hold the conference at 1.00 or 2.00 Australian time on that day?

Coogee public school の年長と北立誠小学校1年生で、TV会議ができないかとの打診であった。Lynda先生(低学年の副校長先生)が是非低学年でもTV会議を行いたいとのことであった。これは、3年間行ってきたTV会議がオーストラリア側にとっても有益であるためである。

低学年同士のTV会議という初めての試みなので、難しいテーマではなく、お互いの児童がお互いの言語を用いて、お互いに通訳をたて、通訳を通して伝え合うという形式をとった。

2010年7月30日に北立誠小学校1年生の担任の増井先生と西村先生と打ち合わせを行った。こちらからお願いしたことは次の通りである。

流れ：北立誠小学校1年生とクージー小学校(幼稚園最終学年)とのやりとり 40分

○クージー小学校(幼稚園最終学年) 20分

○北立誠小学校1年生 20分

：クージー小学校日本語クラスの発表と北立誠小学校応答 20分

言語：すべて日本語。通訳をつけて相手に伝える。ただし、プレゼンテーションでは英語の単語を入れたい。

準備：日本の旗と日本の旗の説明(色と由来など)  
日本の学校の服について

日本の学校で食べるものについて

日本の学校での遊びやゲームについて

その他学校の紹介

歌などがあるなら歌を披露しても良い

一緒に簡単なゲーム(じゃんけん等)も可

発表：ボードプレゼンテーション

ボードに写真や絵や言葉(英語の単語)を書き、日本語で発表



9月21日までに、グループで学校紹介のテーマを決めること、発表の順番を決めること、生活科や図工の時間等を利用してボードを完成させることをお願いした。

北立誠小学校から、一度TV会議でどんなことを行うのか授業をしてほしいという依頼があった。そこで、9月8日の2限で、一年生にTV会議はどのようなものか、クージー小学校はどのような学校なのかをパワーポイントで紹介した。

9月21日に教育学部遠隔授業室にて、TV会議を行った。当日は、英語科の卒業生に通訳を、学部の有志学生2名に運営のサポートを担当した。オーストラリア側も日本人の通訳がついた。

クージー小学校は学校の紹介を大きな声で行った。これを適宜日本側で通訳し、児童に伝えた。北立誠小学校は、給食・遊び・行事・勉強・学校の様子について大きな声で発表した。

写真1 TV会議の様子(日本側のスクリーン)

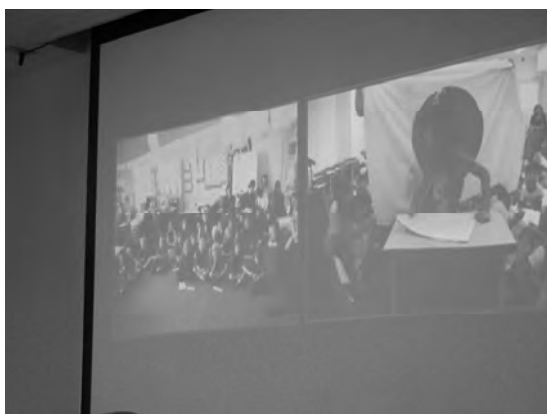


写真1はTV会議で映し出されるスクリーンで、右側が日本側の発表、左側がその発表を聞いているオーストラリア側の様子である。

写真2 児童の発表の様子(行事班)



写真2は行事班の児童がボードを使って発表している様子である。これは学校行事として「誘拐防止教室」があり、警察の人に誘拐されないように話をしてもらっていることを紹介している。これを先方の通訳が英訳する。また、ボードの「Anti-kidnaping class」という英単語がオーストラリア側に写っているので、オーストラリアの児童は日本の児童がおおよそなにを伝えたいのか見当がつく。

次は、TV会議に参加した児童の感想である。

オーストラリアの子ども達とTV会議ができてとても楽しかったし、踊りもとてもたのしかったです。オーストラリアの子が日本語をしゃべったのがすごかったです。

大半の児童は、オーストラリアの友達の発表を聞いたり、一緒に踊ったりしたことを楽しい体験であったと思っている。

今後低学年から高学年までのTV会議のカリキュラムを考えていく必要がある。

## 6. 南西が丘小学校3年生における社会科の出前授業の実施

(永田成文)

### 【目的】

大門商店街を事例として、お店の仕組みや物を売ることについて、街で働く人の工夫や努力をとらえることができる。

### 【概要】

西が丘小学校から小学校3年生に“店で物を売る人の工夫”を教えてほしいという依頼があった。社会科教育コースの学生が教育実習で大門商店

街を扱っていた。そこで、3年生の今後のスーパーマーケットの学習の参考となるように指導案を改善した。具体的には、大門商店街に見学に行けないので、写真をもとに大門商店街の人たちの物売る工夫に気づかせ考えさせるようにした。

9月27日2・3限と9月28日3・4限に4クラスで実施した。基本的に同じ指導案であったが、各クラスで少しずつより教育効果が上がる方法を取り入れていった。

次は、その改善した指導案の基本形である。

本時「大門商店街のお客さんを呼ぶための工夫について」

1. 目標 大門商店街では多くのお客さんを呼ぶために、雨除けのためのアーケードやイベントをしたりするなどの工夫をしているが、それでもお客さんが少ないことを知り、他にどのような工夫ができるのかを考えることによって大門商店街の人たちの苦勞や工夫に気付くようになる。

2. 学習過程（45分）

学習活動	指導者の働きかけと予想される子どもの反応等	資料等
<p><b>1. 大門商店街の現状をつかむ。</b></p> <p>1-1 大門商店街を意識する</p> <p>1-2 大門商店街の様子</p> <p>1-3 お客さんが来る時</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大門商店街の写真を黒板に貼り、「ここはどこか分かりますか。」と問う。</li> <li>何人かの意見を聞いた後写真に写っているのが大門商店街だと伝え、「大門商店街に行ったことがある人はいますか。」と聞く。この時、行ったことがあると答えた子に「どんなところだったか。いつ行ったか。」ということ問い返すようにする。その後、「皆はこれからお店についてスーパーマーケットを勉強するけれど、その前に今日はお店が集まっている商店街というところを私と一緒に勉強します。」と言う。</li> <li>・もう一度最初に提示した大門商店街の写真を指しながら「この写真の大門商店街はどんな様子かな。」と問う。</li> <li>・次に、「この写真は何時頃の大門商店街だと思いますか。」と問う。子どもたちの意見を聞いた後に、大門商店街のお店は午前9時から午後6時くらいまで開いていることを説明し、この写真の大門商店街は12時30分に撮影したものだけであることを伝える。「お店がたくさん開いている時間なのにお客さんが少ないですね。」と言う。</li> <li>・7枚の写真を貼る。</li> </ul>	<p>写真①を黒板に貼る。</p> <p>写真①を見る。</p> <p>写真①を見る。</p>
<p><b>2. 大門商店街の人たちがしている工夫を知り、その他にはどのような工夫ができるかを考え、話し合う。</b></p> <p>2-1 大門商店街の工夫</p> <p>2-2 なぜ人が少ないのかを考える</p> <p>2-3 大門商店街の人は</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「大門商店街の人たちはお客さんを呼ぶために様々な工夫をしています。いくつかの工夫を写真に撮ってきたのだけれど、この写真の中からどのような工夫が分かりますか。」と問う。</li> <li>この時、何のために屋根を付けているのかというように理由も確認していく。</li> <li>・「大門商店街ではこれだけ多くの工夫をしているのに人が集まっていないのはどうしてだと思いますか。」と問う。</li> <li>だいたい意見が出たら、子どもたちの意見に付け加えて大門商店街に来るお客さんが少ないのには、大門商店街の周りに大型のショッ</li> </ul>	<p>写真②～⑧を黒板に貼る</p> <p>大門商店街</p>

<p>どんな工夫ができるか考える</p> <p>2-4 まとめ</p>	<p>ピングセンターができたことや、交通の便が悪いなどの理由もあることを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「では、さっき出てきていた工夫の他にお客さんを呼ぶために大門商店街の人たちはどのような工夫ができると思いますか。」と問う。</li> </ul> <p>大門商店街の地図と意見を書く用紙を配布し、まず個人で考える、その後、隣同士で意見を交換した後に、「自分の意見を発表してみましょう。」と問う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・だいたい意見が出たら、大門商店街の人たちはどうしたらお客さんが来るようになるのかを考えながら努力を続けていること、また、人と人との関わりを大切にするという気持ちで商売をしているということを伝えて授業を終える。</li> </ul>	<p>の地図と意見を書く用紙を配布する。</p>
-------------------------------------	---	--------------------------

写真 学生の授業の様子



今回、学生に相談した上で依頼を受けた。改善指導案を学生と一緒に考え、授業は学生が行った。学生は3年生・4年生と附属学校で教育実習を経験してきており、その成果を公立小学校でためず絶好の機会となったと感想を述べている。

この実践は、今後の隣接校との交流のあり方として、今後、4年後期に導入される教職実践演習のあり方として参考になる貴重な実践である。

## 7. 一身田中学校1年生におけるキャリア教育への支援

(山根栄次)

【連携校】 津市立一身田中学校

10月20日(水)午前・午後

【連携事項】

キャリア教育への支援。特に、山根の開発した起業家教育プログラム「会社をつくろう」を1年生が実施するに際して、助言・協力をした。

津市立一身田中学校主催の「金融教育公開授業」において、「会社をつくろう」プログラムの学級代表企業による企画・商品についてのプレゼンテーションに対して、コメントをした。18日のプレゼンの内容と比べてよく改善されていることを特に強調した。また、午後に三重県総合文化センター生涯学習センター視聴覚室において行われた「実践発表会・講演会」において、「生徒による実践発表」のコーディネーターをし、第1学年から第3学年にわたる一身田中学校のキャリア教育に対して、非常に優れた実践であるとコメントをした。

【具体的な連携・支援】

10月18日(月)午前中

1年生の全学級(4クラス)において、各グループ(会社)が試作した商品についての生徒によるプレゼンテーションに対して、商品のよいところ、改善するとよい点についてコメント・アドバイスをした。

### 3. 数学教育

#### 数学教育講座の取り組み

中西 正治

##### 1) 一身田小学校・白塚小学校・栗真小学校・北立誠小学校・南立誠小学校における「教育実地研究基礎」の取り組み

2010 年度は一身田校区だけでなく橋北校区にも広げた。学生の通える範囲を考慮して、北立誠小学校・南立誠小学校の 2 校にお願いし、一身田校区の 3 小学校（一身田・白塚・栗真）を含め、計 5 校で「教育実地研究基礎」をおこなった。数学教育コースの「教育実地研究基礎」は、履修した数学教育コース 17 人（1 年生）と、無履修の美術教育コース 1 人（4 年生）でおこなわれた。

「教育実地研究基礎」の趣旨は「学生が教育現場に入って、子どもの学習支援や教員のアシスタント活動をすることによって、子ども理解、学校理解を深めつつ、教職への意欲を高める」というものである。児童・生徒に直接接する機会を与え、教育について考えさせる最初の機会である。この「教育実地研究基礎」（中西担当）では、学生のカリキュラムの合間を利用して、週に 1 回（45 分）現場に行っている。子どもの様子はもちろんのこと、現場の教師の仕事についてもできる限り学ぶためである。授業中（各教科）の子どもへのサポートだけでなく、日常のテストの丸付け、問題作り（特別支援学級）、休憩

時間での子どもとの遊び、授業の準備の手伝い、授業の補欠など教師が実際に出会うであろう様々な仕事を体験してほしいのである。その活動を通して、一見して普通に行われているように見える学校の教育活動には、目には見えない教師の子どもに対する日常的働きかけがあることを悟って欲しい。一見教育とは関係ないようなどんな些細な仕事でもすべて教師の重要な仕事であり、それができているからこそ正常な学校運営ができるのである。

学生たちは毎週 1 回行くことにより素晴らしい経験をしてくれている。前期・後期を通して、のべ約 310 回実施でき、一人平均約 18.3 回通ったことになる。授業が終了した後もアシスタント活動を続ける学生も何人かいる。この「教育実地研究基礎」の活動の中で学生にとって最も良かった点は、何といても子どもたちだけでなく担任の先生とも人間関係ができてくることである。そして、その場だけで終わるのではなく、続けることによって子どもたちの人間関係が見えてきたり、自分自身が子どもに対する働きかけについての問いや悩みが様々な生まれたりするのである。またそれに対して先生方からも直接アドバイスをいただいたりできる。下記の表は、取り組みの外郭である。

小学校	世話係りの先生	初回打ち合わせ	学生オリエンテーション	合同打ち合わせ	学生数	期 間
一身田	永合本幸先生	4 月 19 日	5 月 18 日	5 月 7 日	5 名	(前期)5 月 24 日～7 月 16 日 (後期)10 月 8 日～1 月 25 日
白塚	青木幸枝先生	4 月 20 日	5 月 20 日		4 名	(前期)5 月 24 日～7 月 16 日 (後期)10 月 4 日～1 月 25 日
栗真	川辺健治先生	4 月 19 日	5 月 14 日		3 名	(前期)5 月 24 日～7 月 16 日 (後期)10 月 1 日～1 月 25 日
北立誠	中野久美先生	4 月 27 日	5 月 21 日	なし	2 名	(前期)1 月 11 日～1 月 25 日 (後期)10 月 8 日～1 月 25 日
南立誠	山本朝香先生	5 月 7 日	5 月 25 日	なし	4 名	(前期)5 月 28 日～7 月 9 日 (後期)10 月 1 日～1 月 25 日

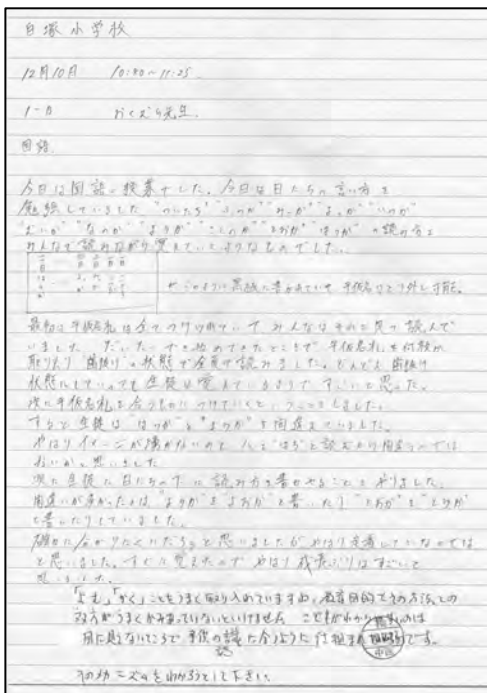
「教育実地研究基礎」の現地にあたって、下記のような記録ノートを作成するように指示した。ノートは月に一度の提出を義務づけ、学生の得たこと、反省、感想などに対してコメントを書き入れ、それを大学側の指導とした。

「記録ノート」について

1. A4版のノートを使用
2. 表紙(右枠) 下記の表は、取り組みの外部である。

「記録ノート」に記録する事項

1. 実地研究を行った小学校名
2. 実地研究を行った月日、時間帯
3. 実地研究を行った学年・組・児童人数・担任教師の氏名
4. 実施した活動内容
5. 上記の4. について、自分の得たこと、反省、感想など
6. その他



このノートは「学びのあしあと」として学修サポ一ト室に保管される。

「教育実地研究基礎」に対する意識をさらに深め、より効果的な実地研究ができるように、6月30日(水34)と7月7日(水34)の2回にわたって、その時点における学生の悩みや課題を上げさせた。以下がその内容である。

- ・授業の進度から遅れてしまう子にどれくらい世話をやい

てよいか。(上浦)

- ・一人一人理解度が違うのに同じ課題・目標を与えても大丈夫なのか。(井坂)

- ・算数が分からないって、ふいって横を向いてしまって何を話しかけても聞いてくれなくて、自分で好きな事をしたとき、どうしたらよいか(特別支援学級)。(宮本)

- ・工作の時間に「先生〇〇できないから、やっつて」と何回も言われたのですが、どの程度まで補助を行うべきであるのか。(大野)

- ・授業中に、隣の子にちょっかいを出していた子を叱ってもなかなか聞いてくれませんか。どうしたらよいか。(中川)

- ・勉強しなくていいからと言って文具を投げ出します。他の生徒は無視です。どうしたらいいか。(中森)

- ・よそ事への対処がどうすればよいか。(工藤彩)

- ・生徒の名前をどう覚えるか。(森口)

- ・微妙な解答のときは丸にすべきかどうか。(竹内)

- ・言うことを聞いてくれない時は、どのくらいまで注意すべきか。(松野)

- ・授業が分からない生徒にどこまで教えればよいか。(浦野)

- ・子どもへのヒントの出し方はどうしたらよいか。(岸川)

- ・やる気のない子どもはどうするか。(工藤大知)

- ・どうしたら仲良くなれますか。(尾関)

- ・運動できない子に教えたいのですが、一人ではないので不平等が生じてしまいます。どうしよう。(堀内)

- ・子どもが危うい状態にあるときどの程度の注意をしたらよいか。(河合)

1年生なりに個々悩みや課題を抱えていることがわかる。これらは現職の教員の悩みや課題でもある。課題を共有することによってさらに課題を認識し、その後の実地研究に取り組んだ。

また本年度は後期の終り頃に各校でお世話になっている担任の先生方に、記録ノートをご覧いただき学生の実地研究に対する感想を書いていただいた。その文面には、各担任の先生方が学生に丁寧なご指導や励ましをしていただいている姿が窺われた。紙面をお借りしましてここに感謝申し上げます。

以下、各小学校における学生の感想の一例を紹介する。下記のポスターは、2月19日に行われた「隣

接学校園との連携に基づく教育フォーラム「平成21年度大学教育・学生支援推進事業の報告会」で使用されたものである。

### (一身田小学校)

ある晴れた日に、七夕祭りの準備をしました。これはPTAの方が行っている企画のようで、子どもたちはとても楽しみにしていました。先生になったら、PTAの方との連携も大切なのだなと思いました。そして、子どもたちを積極的に行事・企画に参加させるのも、先生のすべき仕事であることがわかりました。

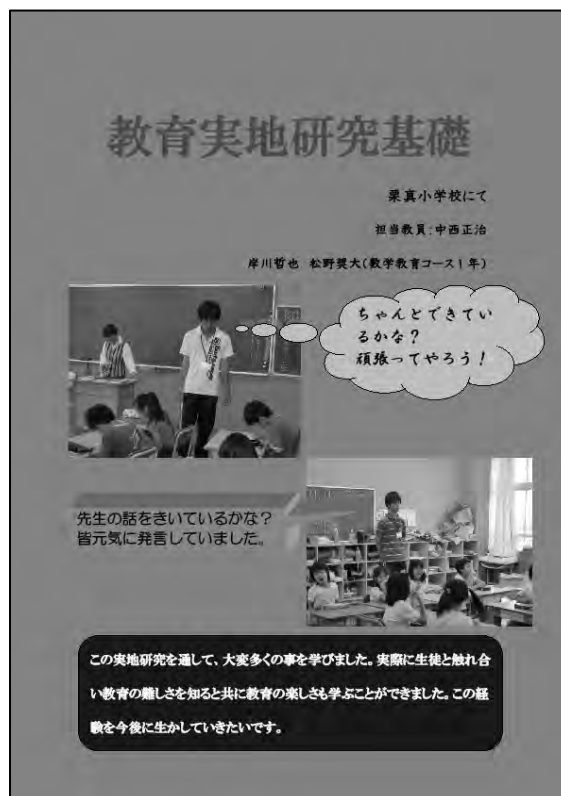
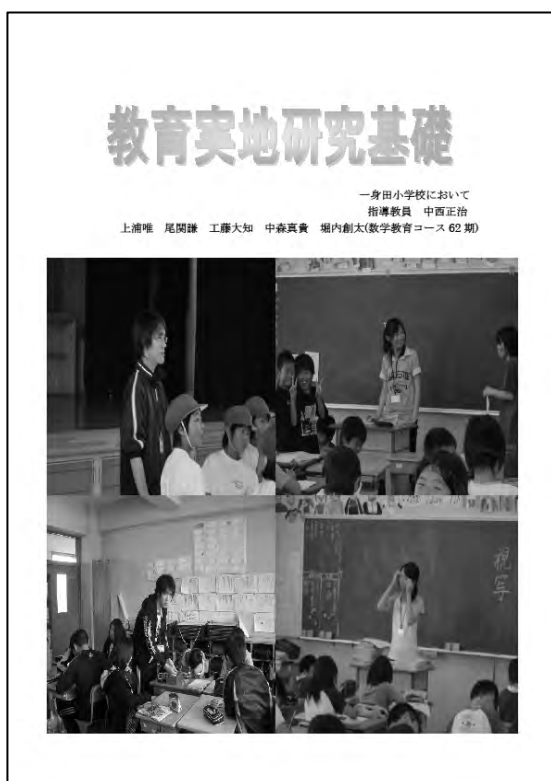
また、違う日には「たんぼぼ」という詩の視写をしました。早く書き終えた子は、詩を読んで思い浮かんだものを絵で描くように先生が指示をしました。私たち大学生がこの課題を出されたら「どうしよう!」となってしまうそうですが、子どもたちはみんな想像力豊かで、すぐに描き始めました。たんぼぼそのものを描いている子もいれば、自分で思い浮かんだ情景を描いている子もいて、ひとりひとりの豊かな個性が感じられました。小学校では、日々の生活の中でも、子どもたちがもついろいろな才能や、大人にはない素敵な感性と接することができるのだ

な、と思いました。(尾関・工藤・堀内・中森・上浦)

### (栗真小学校)

生徒一人ひとり違った個性があり、その子によって最も相応しい触れ合い方を理解するにはとても時間がかかりました。積極的な子や引っ込み思案な子などの色々な性格を持った生徒とたくさんコミュニケーションを取る事によって様々な事を学び、貴重な経験ができました。また、授業中のアドバイスも最初の頃は上手にはできなかったけれども、毎回の授業を通じて少しずつ上達できたと思いました。そして、生徒達ともだんだんと仲良くなっていき、とても充実した教育実地研究基礎になったと思います。

この教育実地研究基礎は、1年生の私たちにとって初めて生徒たちと間近で触れ合い、また初めて生徒としてではなく授業に参加するという事だったので、とても不安で毎回緊張しました。でも、それ以上に楽しかった事がいっぱいあったので、このようなことを経験することができたことはとても大きかったです。この経験をこれからの人生に生かせるようにこれからも努力していこうと思います。(岸川哲也 松野奨大)



## (白塚小学校)

先生の話の聴くように言葉がけをした時もなかなか聞いてくれなかったり、その時の言葉遣いも考えさせられたりと、子ども達に話を聞いてもらうということだけでも難しいことだと思いました。

また、授業中にアドバイスするとき何と云えばいいのか迷ったこともしばしばあり、ヒントの出し方一つにしても工夫が大切なのだと思います。

朝の会などでの先生のお話を聞いていると、細かな点まで注意しておられることなどを見かける。子ども達の日常に目を向けると授業を受ける以前の部分があり、授業をどのように行ったらよいのかというよりも、授業に臨む姿勢の指導の方がより大切なのかもしれないと思いました。

この教育実地研究は、1年生の私たちにとって学校現場がどういったものなのか分からなかったり、不安や心配があったりと毎回緊張したこともあり、気づかされたことも多かったように思います。そのような活動の中で、教える側の立場で見た学校現場は、今までとは全く違ったものに見えました。(河合優輝)

## (南立誠小学校)


私は、教育実地研究基礎において毎週1時間、南立誠小学校の授業の補助に行き、その中で大学の授業では体験できないような現場ならではの問題に触れることができました。

新聞紙の棒を使ったある体育の授業では子供たちは棒に興味をもって振り回したりしていたところ、私は並ばせることばかり考えていましたが担任の先生はすぐに「棒を振り回すと危ない！」と叱っていました。その時、先生として子供の安全を第一にするという大切さを学びました。また算数の授業で子供たちは九九の暗記に苦戦しながらも、ひたむきに覚えようとする姿がとても素敵で私はこれから先生になるにあたり、子供たちに今やっている勉強などはやらなければいけないからやるというだけでなく、将来自分がなりたい姿になるための one step なのだというのを伝えながら、たくさんのことを教えたいと思いました。

最後に教育実地研究基礎として授業の補助をさせていただいた先生方ありがとうございました。(大野知紘)


### 教育実地研究基礎

白塚小学校にて  
担当教員：中西正治  
浦野 航・河合 優輝・中川 実咲・宮本 宣美 (数学教育コース1年)



今日は、この問題  
をしてみよう。  
できるかな？

児童にふれあっていると、今までに気づかなかった新しい発見があります。




どうやったらできるか、一緒に考えてみようか？

ちょっとしたヒントを出すことで、児童は問題に取り組む意欲が変わってきます。

**実地研究として、実際の教育の現場に行けたことは大変有意義な時間になりました。**  
**また大変多くの経験をすることができました。**


### 教育実地研究基礎

南立誠小学校において  
指導教員：中西正治  
井阪仁美・石岡勇司・大野知紘・工藤彰 (数学教育コース 62期)



ここはこうやってやるんだよ？

児童の無邪気な笑顔を見ていると、教える意欲がわいてきます。



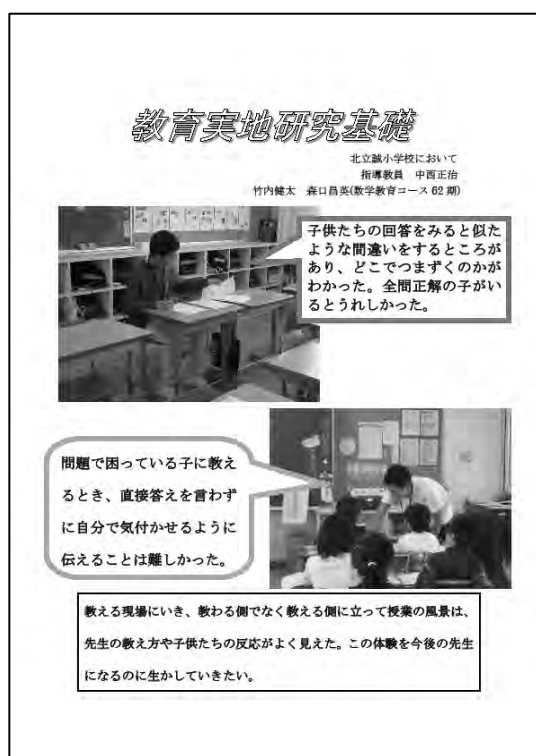
なるほど！もっと話を聞かせてよ！

授業の時間だけでなく、休み時間でのコミュニケーションやふれあいも大切です。

・実際に教育現場へ行き、この1年間で多くの経験をしました。この素晴らしい経験をもとに、今後も教師を目指していきたいです。  
・今回の活動を通して、授業の創意工夫の仕方や生徒との接し方の難しさなども考えることができ、とても貴重な経験となりました。

## (北立誠小学校)

今回私は、北立誠小学校に実地研究に行くことで、初めて教える立場で授業に参加しました。後ろから見てみると先生が生徒に授業に対して関心を持たせる方法がよくわかりました。私は人見知りするタイプなので最初は生徒に言葉をかけるのが難しかったです。だから、問題を教えるときにしどろもどろになって生徒にちゃんと伝わっているのかが不安でした。自分が教えたいことが理解してもらえた時はとてもうれしかったです。生徒が成長していくことは、先生にとって喜びであり、やりがいだと思います。丸つけをしていると、子どもたちはだいたい似たような間違いをしていることに気がきました。例えば、0 の数が足りないことや、単位の書き間違いなどがありました。このようなちょっとしたミスは後に癖として残ってしまうと思うので、見直しする癖をつければいいのかと思います。宿題やテストを定期的に行うことによって、子どもたちがどこでつまづいているのか、子どもたちにはどこが理解しづらいのかといったようなことがよくわかり、そしてそれに素早く対処することによって、その後の授業につなげているのだなあ実感しました。(森口昌英)



## 2) 一身田中学校・橋北中学校における学習支援・教育アシスタント活動

2010 年度は一身田中学校だけでなく橋北中学校にもお願いし活動範囲を広げた。授業科目「数学科教育法」の受講生(数学教育コース学生:18名、情報教育課程学生:9名、技術教育コース学生:1名、計28名)が、一身田中学校・橋北中学校において、生徒の学習支援・教師のアシスタント活動を行った。前期・後期を通して、学生の空き時間を利用し、週に1度(50分)一身田中学校・橋北中学校の数学の授業のアシスタントとして実地研究に取り組んだ。

### (一身田中学校)

一身田中学校の係りの先生(北岡先生)と本年度の取組みの打ち合わせを3月24日に行った。

学生の中学校でのオリエンテーションは5月27日に行われ、数学科の教員が紹介され、学生が支援に入る学級が決定された。

実地研究期間は、前期は5月31日~7月16日、後期は10月12日~1月25日で行われた。期間中には、教育実習や期末テスト三者懇談などもあり、実質的回数は、前期は平均5回くらい、後期は平均8回くらいであった。

本年度も記録ノートの代わりに、「数学科指導アシスタント フィードバックシート」を利用した。シートへの記入は授業中またはその後とし、必ず授業を行った担当の先生に渡し、授業者の先生からコメントをいただき、次回学生に返却することとした。返却されたシートは、大学教員に提出し、大学教員も一言コメントを書き入れ学生に返却し それを大学側の指導とした。学生はアシスタント活動を通して、授業者の授業の進め方(内容論・方法論)だけではなく、学習意欲をなくしている生徒への配慮や対応や私語をしている生徒への注意の仕方など、学習内容とは直接関わらないが、授業づくりに関わってくる大切な指導についても勉強している。教授法をはじめ、教室の状況について学生なりに考え、さまざまな思いや考えをシートにかいている。

ただ、授業が終わるとすぐに大学に戻らなければならないことや授業者も次の仕事があり学生と授業



数学科 指導アシスタント フィードバックシート

※この記録は、本校数学科の授業改善（指導力の向上）と指導アシスタントのより発展的な活用、生徒の学力向上のために使用しますので、授業後、率直な感想、意見を書いてください。

氏名 <b>種橋 将</b>	指導日時 7月12日・第5時間	指導内容 2年3組
-------------------	--------------------	--------------

今日の授業内容、生徒に支援したことについて記入してください。

<授業内容>  
一次関数

<支援したこと>  
机間巡視をして、質問に答える。

今日の授業内容についての感想、生徒を支援したことについての感想を記入してください。

式の増加と式の増加量のところがとてもわかりやすく説明されていて、発問になりました。生徒が重宝です。授業を聞いていないと、どのように対応すればよいか戸惑いました。よくければアドバイスをいたしたら嬉しいです。

積極的に進めかけておけるのは、先生方の準備がしっかりしているからだと思います。時には生徒のペースに合わせて進めたいところもあると思います。授業について参加できなかったところや、支援を必要とする生徒がどのようなところでつまずいているのか、そして自分ならどう指導してみたいと思ったことを記入してください。

図を書かせてあげたことで、生徒の理解が深まると思った。生徒と一緒に空欄を埋めていくのがよいと思った。

「 $x$ 」がついているものを前に持ってくるのが「 $x$ 」と教えているところ。『 $x$ は守りなもん』という意識が生徒にもある。その教え方にならなくていいかな。生徒が自分で進んで進んでいくようにしたい。

※この記録は授業後に記入し職員室のボックスに提出してください。記入した内容は授業から取り除かれます。

について話し合う時間がないこと（現場のあわただしさ）が重なり、シートがうまく返却されず、その役割が円滑になされにくい状況もあった。シートのべ返却枚数は318枚であった。

また、大学教員も学生の様子を一度しか見に行くことができなく、現場の先生方に任せ過ぎていた点は反省しなければならぬ。この活動に参加している学生の感想を2つ紹介する。

私が授業支援を行って特に感じたのは次の二点である。第一に、柔軟な対応力の必要性があるということ。第二に、授業レベルの適合の困難さがあるということである。生徒が40人いるという状況で、例えば演習問題を一つ生徒に教えるにしても、この生徒には基礎的なことを確認しながら教える、この生徒には実例を用いて教えるというように多種多様な理解力の生徒に合わせる柔軟な対応力が要求されることを学んだ。また授業のレベルについてであるが、数学の得意な生徒に合わせると苦手な生徒がついていけず、苦手な生徒に合わせると得意な生徒が退屈するという背反的な困難さが常に授業には存在するように感じた。どの生徒にとっても分かりやすい授業を創ることは容易な事ではない。だからこそ、全

ての生徒に支援をすることが必要なのであり、支援により生徒が理解しやすくなるのであると私は考える。（加山哲也）

実際の現場を見学することで、現場の先生の授業の進め方、生徒とのやり取りや間の取り方など大学の授業では学ぶことができない現場のことを学ぶことができました。授業の進め方は先生方それぞれで、いろんな先生方の授業を見させていただくことで、学ぶこともたくさんありました。

授業に入ってTTとしてサポートに入ると、今の中学生がどういった所で疑問を抱いているのか、わからなくなっているかなど実際に知ることができました。中学生のサポートをする際は、どのように言葉をかければいいのかを考え、どこまで簡単かつ具体的に言えばいいのかを身をもって知ることができました。少し簡単にいえばすぐにわかる子もいれば、どんどん具体的に話していかないと気付きにくい子もいるので、授業を行う先生だけでは、対応しにくいだろうなと思いました。

授業が終わってから、話しかけてくれる生徒もいたので、最近の中学生がどんな様子なのかを知ることができました。（山口知也）

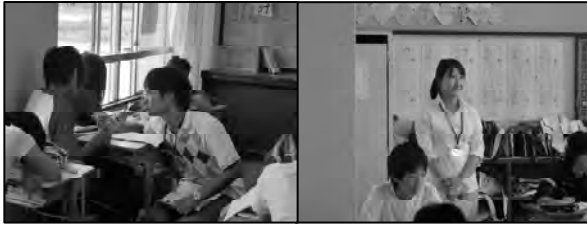
**教育実地研究**

一身田中学校  
指導教員：中西正治  
ポスター作製：今村優希 宮野友裕 種橋将（情報教育課程3年）

生徒の様子を見ていると、二次方程式は苦手意識が持ち始める分野だと感じた。どのように指導すれば理解しやすい授業になるかを参考することができた。

比例の導入として、浴槽に水を入れていくという身近な例を扱うことによって、比例が身近な生活と関わっているということを生徒が感じることができた授業であった。

この教育実地研究を通して、生徒たちに教えるということの難しさを知ることができ、また、生徒たちがどのようなところでつまずいているのかを知ることができました。そして、1人でも多くの生徒に数学の問題を解く楽しさを伝えることができました。



一身田中学校でアシスタント活動中の学生

### (橋北中学校)

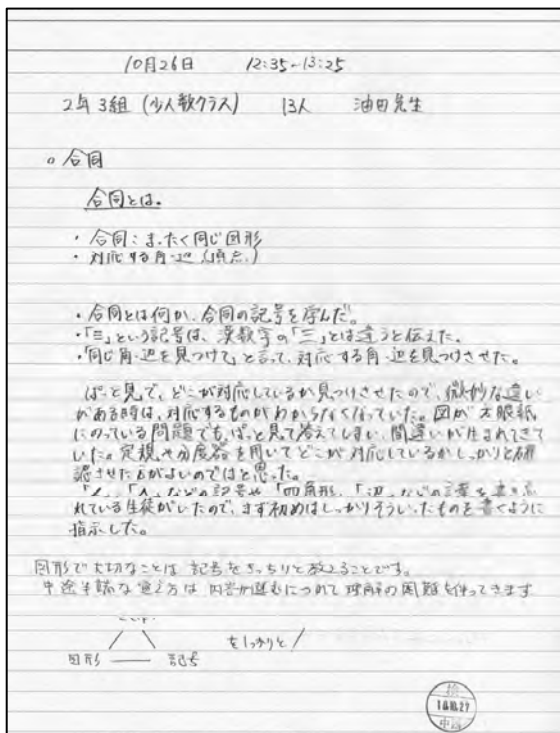
橋北中学校の係りの先生(高城あつ子先生)と本年度の取組みの打ち合わせを4月26日に行った。

学生の中学校でのオリエンテーションは6月3日に行われ、数学科の教員が紹介された。学生が支援に入る学級は学校の状況にあわせ適宜決めていくこととなった。

実地研究期間は、前期は7月31日～7月13日、後期は10月12日～1月21日で行われた。実質的回数は、前期は平均4回くらい、後期は平均8回くらいであった。

実地にあたって、「教育実地研究基礎」で使用した記録ノートと同じ内容のノートを作成した。

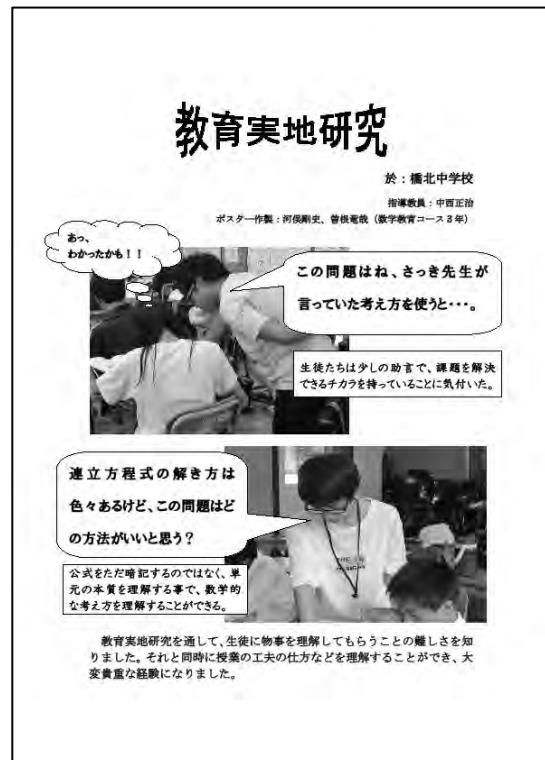
ノートの記入は帰宅後とし、その後大学教員に提出し、大学教員は一言コメントを書き入れ学生に返却し指導した。様々な感想や悩みや自分の課題を書



いてきている。

以下に学生の感想を紹介する。

私は6月半ばから橋北中学校に教育実地研究に行っています。私は、9月に教育実習に行ったのですが、それを境に教育実地研究に対する気持ちが変わりました。実習が終わってからは、器具を使って実験をする時は、使い終わったらすぐに回収し観察に集中して取り組むといった、授業のメリハリをつける工夫や一人の生徒の発言を全体にフィードバックし、そのクラス全員が理解を深めることができる工夫がされていることに気付くことができました。教育実地研究を通して学んだことを、私が、教壇に立ったら授業に取り入れたいと思います。また、生徒が授業に熱心に取り組む姿を見て、教員になって自分が教える生徒にもこんな風に熱心に取り組ませることができるような授業作りをしていきたいと思いました。残りの教育実地研究で、教育実習の授業で自分が苦手としていた部分を現場の先生がどのように行っているかを見て、自分の授業力を上げたいと思います。(西村美穂)





橋北中学校でアシスタント活動中の学生

### 3) 一身田中学校における授業研究

9月2日(木)に指導案検討会がもたれ、大学教員(数学教育講座中西正治教授)が支援を行った。1年生は「比例と反比例:一番大きい箱をつくろう」、2年生は「平行と合同」、3年生は「ピタゴラスの定理」を題材とし、それぞれについてその指導法が話し合われた。10月25日には飯田祐也先生の研究授業「平行線と角」(2年)が持たれ、10月26日にその事後検討会を大学でもった。12月10日には細江加代先生の研究授業「比例と反比例と複比例」(1年生)が持たれ、同日事後検討を行った。

### 4) 一身田中学校・橋北中学校の数学科の合同学習会

2月21日(水)に一身田中学校・橋北中学校の数学科の合同学習会が、三重大学において持たれた。来年度の4月教材で最も重要とされる中学1年生の正負の数の加減法の指導法についてである。その研修内容は、教科書分析、正負の数の加減法に対する子どもの理解、代数としての正負の数の加減法とは、数学教育としての正負の数の加減法とはなど、具体的指導に対する教師の基本的理解である。

## 4. 理科教育

本年度、理科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校および一身田小学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖&調理実習）の実施
2. 理科教育法受講生による隣接校区との授業連携
3. 一身田中学校2年生希望者による「青少年のための科学の祭典」への出展
4. 一身田小学校4年生を対象とした理科の出前授業 一身近な樹木の観察
5. 栗真小学校・白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園を対象とした大学キャンパスにおける自然観察 —2年目の取り組み—
6. 南立誠小学校におけるICTを活用した植物の光合成実験
7. 南立誠小学校での出前授業
8. 南立誠小学校における粉の性質に関する実験
9. 橋北中学校における土曜日学習支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖実習と調理実習）の実施

（後藤太一郎）

【目的】 中学2年理科で学習する「動物の体のつくりと働き」の単元の中で、食材となる生きた魚の解剖実習を行うことで脊椎動物の基本構造を学ぶとともに、解剖後に調理して食べることで「命をいただいている」という食育の基本を学ぶ。

【概要】 生きたニジマスを使った「解剖&調理」実習を平成18年度より一身田中学校で実施している。企画と学生指導には、理科教育の後藤と家政科教育の磯部准教授があたっている。本年度、中学校で授業者だったのは理科担当の米村教諭

と向井教諭、家庭科担当の中村教諭であり、11月に実施された。すでに基本的な授業プランは確立しており、調理室で解剖と調理を1時間ずつ行うものであり、中村教諭は昨年度から担当している。理科の米村教諭はニジマスの解剖経験がなかったため、初回の解剖は後藤が指導した。理科教育コース、技術教育コース、および家政科教育コースの3・4年生4～5名が授業補助にあたった。具体的には以下の表の通りである。

実施日	時限	授業者	学生
11月1日(月)	1,2限	後藤、中村	消費3年3名、理科4年2名
	3,4限	向井、中村	家政4年5名
11月4日(木)	1,2限	米村、中村	家政3年2名、理科4年2名
	3,4限	米村、中村	家政4年1名、消費4年2名、理科4年2名
11月5日(金)	2,3限	米村、中村	家政3年2名、理科3年1名、技術3年1名

解剖の補助にあたった学生はすでにニジマスの解剖の経験をしており、1名が2つ班を担当する形で説明を行い、生徒の理解を確認しながら進めていた。家政教育コースおよび消費生活コースの学生は、磯部准教授がこの活動についての事前・事後指導を行ったことから、解剖についても

積極的に関わり、振り返りシートには以下のような記述があった。

学生の学び

- 生徒が解剖に積極的に取り組んでいることをみて、実物に触れることの重要性を改めて実感。

- 教科を横断した学びがあることを再認識。
- 新たな体験により、新しい自分に出会う機会を作ってあげることの重要性。
- 子どもたちのために教材することの重要性。
- 他分野の授業であっても最低限の知識と技術の必要性。

また、日本生物教育学会の特別委員会として立ち上げられた生命教育倫理委員会のメンバー4名が参観に来られ、参観のみならず解剖を行い、生徒の取組に様子や、ニジマス解剖の利点について理解を深めていた。実習終了後には、授業者、参観者、および大学教員の間で、意見交換を行った。感想などは以下の通りである。

教員や参観者の感想

#### 【授業者】

- 生徒は食材としてさわることができるため、教材として適していると感じた。
- 一人では不可能な実習
- 魚の調理は授業として扱うことになってお

り、生徒には抵抗がない。

- 食材を生きている段階から扱うことで感謝の気持ちをもって食べることができる。
- 卒業後も忘れない授業の一つだろう。

#### 【参観者】

- 2時間の授業の中で、解剖学習と調理を終えることができたことに驚いた。
- 全員ができる実習であり、生徒が前向きに動いている様子がみられた。
- 内容をほぼ全員が理解できているようであった。
- 調理した魚を残さないように言葉に出さなくても、きれいに食べていた。
- 解剖学習は授業者一人では難しく、支援は必要になるだろう。
- 解剖に対する批判や、技術の不安に耐えられる解剖実習であると感じた。

この取組は、日本生物教育学会の大会でも報告され、解剖学習の進め方を検討する中で、解剖と食育という視点の事例として紹介された。

## 2. 理科教育法受講生による隣接校区との授業連携

(平賀伸夫、荻原彰)

【目的】 理科教育法では、指導力向上を目的とし、学生が隣接校区の学校（一身田中学校・一身田小学校）の理科授業の観察・補助を行い、また学生による実験講座を行っている。以下はその活動及び連携による学生教育の効果の概要である。

#### 【概要】

##### 1 授業科目名

理科教育法Ⅰ（前期，指導教員：平賀伸夫，荻原彰），同Ⅱ（後期，指導教員：荻原彰，平賀伸夫）。

##### 2 受講者数及び学年

理科教育コース3年生15名，技術教育コース2名，数学教育コース4年生1名，計18名。

##### 3 時期，学生の担当時間数

##### (1) 一身田中学校

前期：5月上旬～7月上旬（全50日間，学生1人あたり4～8時間担当し，1回の授業に3～4人の学生が参加した）。

後期：1月（全20日間，学生1人あたり2時間担当し，1回の授業に3～4人の学生が参加した）。

##### (2) 一身田小学校

後期：12月8日（4つのグループに分かれ，それぞれで15分程度の理科実験講座を担当した）。

##### 4 活動の対象となったクラス

一身田中学校1年生理科6クラス，一身田小学

校5年生4クラス。

## 5 活動の内容

### (1) 一身田中学校

前期に扱った単元は、一身田中学校1年生が理科第2分野「植物」、第1分野「光」であり、生徒が学習課題の解決に困っているときにアドバイスを与えるなど、ティーチング・アシスタントとしての役割を担当した。

後期の活動においては、実習生自身による授業を行った。単元は「水溶液の性質」であり、授業の内容は、ワインの蒸留実験である。

### (2) 一身田小学校

ビタミンC、種子の散布、3D画像、静電気をテーマとした実験講座を行った。

## 6 連携の効果

連携の効果を検証するため、活動前、前期終了後、教育実習後、後期終了直前のそれぞれの時期に、活動を振り返るアンケートを行って学生の意識変化を追跡した。また後期終了直前に、1年間の振り返りを行った。アンケートは「理科の教師に必要な力」を記述式で回答するという形式で行った。

以下はアンケートを資料とした振りかえりの中で行われた分析をまとめたものである。個々の学生については明らかに進歩がみられるが、大半

の学生に共通する変化を抽出することはできなかった。したがって以下の記述は傾向の指摘にとどまるものである。

### (1) 知識について

教科についての知識の重要性は活動前から意識されている。しかし活動前には、知識のとらえかたが、「理科についての専門的な知識」というような、やや一般的・抽象的にとらえる学生が多いが、「生活と結び付けられる」「どこまでが基礎でどこから応用・発展かの把握」というように、授業場面を想定した形で知識の必要性を捉え直す傾向が見られる。

### (2) 授業を構成する力について

活動前には授業展開についての言及は少なく、「先を見越した授業計画」のようにやや抽象的であるが、活動後は「主発問を軸とした統一性のある授業」「興味を引く導入からしっかりしたまとめまで行える首尾一貫した授業」のようにテクニカル・タームを使った具体性のある記述へと変化している。

### (3) コミュニケーション力について

信頼関係を基礎にした、生徒とのコミュニケーション力を重要だと考える学生が活動後には増加する。また教師とのコミュニケーション力や協力関係に言及する学生は活動前には見られなかったが、活動後にはわずか2人ではあるが見られるようになった。

## 3. 一身田中学校2年生希望者による「青少年のための科学の祭典」への出展

(後藤太一郎)

【目的】 一身田中学校の2年生が、三重大学で開催する「青少年のための科学の祭典」に実験ブースを出展し、理科を楽しく教える立場となる体験をしてもらう。

【概要】 本年度の「青少年のための科学の祭典」三重大学大会は11月27、28日に開催された。例年、2日間で約2500名が参加する規模の大会である。中学生による出展は、児童に人気の高い「ス

ライムづくり」であり、一身田中学校の米村教諭、林教諭、および向井教諭が授業の中で参加を希望する生徒に指導された、当日は、教諭と6名の生徒が指導にあたった。このブースには2日間で約1500名の児童が訪れるほど高い人気であった。中学校では翌週から定期試験があるということで、課外活動は制限されている中で、是非参加したいと希望する生徒が多いということで実施に

いたった。この祭典が一身田中学校の生徒の中に浸透しており、楽しみにしてくれていることは、本大会にとってもたいへんありがたいことであ

る。生徒たちは、児童らが喜ぶ姿を見て熱心に指導を行っていた。

#### 4. 一身田小学校4年生を対象とした理科の出前授業 ー身近な樹木の観察

(平山大輔)

【目的】 校庭、道端、社寺林など、私たちの身近な場所には驚くほど多様な植物が生育している。今回の取り組みでは、昨年度に引き続き一身田小学校の校庭および高田本山専修寺の境内で樹木の果実を観察し、植物に備わる「生きていくための仕組み」を学ぶことを目的とした。

【概要】 10月15日に4年4組の生徒を対象に、PTAの学級活動(親子活動)における連携授業として行い、生徒だけでなく保護者の方々にもご参加頂いた。大学からは理科教育コース4年生2名が授業補助として参加した。

最初に、教室で樹木の果実に備わる仕組みについて説明した。風を利用したり動物に食べられたりすることで植物の種子は移動すること、動物のフンの中には植物の生きた種子が多数見つかること等の説明の際には、児童が植物の果実に強い関心を抱く様子が見られた。次に、校庭の樹木の観察を行った後、一身田小学校そばの高田本山専修寺の境内に移動し、果実の観察・採集を行った。

校庭では、アラカシ(ブナ科)、センダン(センダン科)、クロガネモチ(モチノキ科)、カリン

(バラ科)などの樹木を観察し、高田本山では、トウカエデ、イロハモミジ(カエデ科)、クロマツ(マツ科)、トベラ(トベラ科)、イヌマキ(マキ科)などの樹木の果実を採集することができた。カエデ類の翼果を空中に投げ上げてプロペラを回転させる遊びの際には、多くの生徒が夢中になって取り組む様子が見られた。また、種子から発芽したスギやマツなどの実生(芽生え)を発見し、近くに親の樹木がないか探そうとする児童も見られた。担任の中川淳子先生および保護者の方々の温かいサポートにより、楽しい学級活動となった。

果実・種子には、普段動くことのできない植物が「動く」ための多様な仕組みが備わっており、果実の形態には植物の生存戦略が如実に反映されている。そのため、植物の生活(生存戦略)と関連付けた観察を行うことにより、形態のもつ意味の理解や興味の惹起につながる事が期待できる。これからも身近な自然の観察授業を継続していきたい。

#### 5. 栗真小学校・白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園を対象とした大学キャンパスにおける自然観察 ー2年目の取り組みー

(平山大輔)

【目的】 自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験学習の重要性は益々大きくなっている。今回の活動では、昨年度に引き続き、三重大学キャンパス内の木の実拾いや植物観察を通して身近な自然の多様性に触れることを目的とした取り組みを実施した。2年目の今年は活

動の輪を広げ、より多くの学校園および学生の参加を得て行うように努めた。

【概要】 初回は、10月26日に栗真小学校1、2年生を対象として実施した(図1)。次に、11月5日に白塚幼稚園と北立誠幼稚園の園児を対象として実施した(図2)。当初は南立誠幼稚園も

含めた三園合同で10月28日に行う予定であったが、雨天による日程変更にもない二園での実施となった。三重大学教育学部からは幼児教育講座の河崎道夫先生(11/5)と滝口圭子先生(10/26、11/5)にご協力頂いた。また、理科教育コースおよび幼児教育コースの学生を中心に参加を呼びかけた。

栗真小学校の活動では、午前9時半に教育学部前に集合し、事前に選定しておいた場所で説明を交えながら木の実拾いと観察を行った。11時半頃から講堂前の芝生で昼食をとり、午後1時半頃まで採集を行い、活動を終えた。白塚、北立誠幼稚園の活動では、午前10時に集合して木の実拾いを行い、11時半から教育学部横の芝生で昼食をとった後解散した。

両日ともに、多種の木の実を観察・採集することができ、子どもたちが楽しく取り組む様子が見



図1. 栗真小学校との活動の一場面。

られた。また、昨年度は4名だった参加学生数が25名に増えた。内訳をみると、所属コースは理科教育が10名、幼児教育が14名、学校教育が1名であり、学年は、大学院生3名、4年生11名、3年生7名、2年生3名、1年生1名であった。参加学校園数および参加学生数ともに昨年度より増えたことは、隣接学校園との連携を核とした教員養成の観点からみて非常に有意義であったと言える。また、参加学生の感想をみると、多くの学生がこうした自然観察の意義を感じていることが分かった。

教師・保育士を志望する学生が、自然の面白さを体験によって伝える能力を養う場として、また、近隣の学校園の身近な自然観察の場として、大学キャンパスの積極的な活用が進むよう来年以降も積極的に取り組んでいきたい。



図2. 白塚・北立誠幼稚園との活動の一場面。

## 6. 南立誠小学校におけるICTを活用した植物の光合成実験

(平山大輔)

【目的】 データロガーと電子黒板を活用し、小学校6年理科で学習する植物の光合成の実験を演示することで、植物の生命現象や科学実験に対する児童の興味を惹起する。

【概要】 南立誠小学校の課外活動「おもしろ科学クラブ」の児童(6年生)を対象に、5月31日に実施した。理科教育コースの3年生3名が実験の補助にあたった。

最初に、植物の光合成の概要を説明した後、ス

パーク社製の理科教育用データロガーとミミオ社製の電子黒板等を用いて植物の光合成実験を演示した。約一時間という短時間の活動のため、材料の植物には、あらかじめ大学構内で採取しておいたサクラ(ソメイヨシノ)を用いた。なお、参加した児童の全員がすでに授業で学習しており、光合成に関する知識は習得していた。

データロガーを用いることで、光合成のガス濃度を直接的に測定し、その変化の過程を目で見る



ことができるため、児童は非常に興味を持って演示実験を見ていた。また、演示後には、データロガーや電子黒板に触れてみたいという声が多く、光合成の現象だけでなく、用いた ICT 機器への関心も高いことが分かった。

学校における現在の光合成実験では、指示薬を用いて光合成による二酸化炭素濃度の低下と酸素濃度の上昇を確かめる方法と、ガス検知管を用

いて光合成前後のガス濃度を比較する方法の二つが主に採られているが、これらの方法では光合成の過程を定量的に可視化することはできない。ICT を活用することで、光合成についての児童の興味の高まりが大いに期待できる。理科における ICT 活用の可能性と有効性を十分に感じることでできる活動となった。これからも、連携授業の中で ICT の活用を進めていきたい。

## 7. 南立誠小学校での出前授業

【目的】 小学校6年生の理科の単元「大地をさぐる」に関連して、川での流水実験による土砂の移動の観察、堆積物と地層との比較を行うことにより、山から運搬されてきた土砂が海に運ばれ、やがて地層になるということを学習した。

【概要】 干潮時の安濃川河口の干潟において、2010年10月24日 4限目(11:35-12:20)に南立誠小学校6年2組(37人)、5限目(13:25-14:10)に6年1組(36人)を指導した。まず、各班に洗浄ビンを渡し、洗浄ビンから水を流し、流水の量によって土砂の移動の様子が変化することを確認した。そして、川では通常時には土砂の運搬量は少ないが、洪水時には土砂の運搬量が多くなり、土砂は最終的には海に運搬されることを話した。用意しておいた安濃川上流の砂と町屋海岸の砂を実際に見比べてもらい、どちらにも共通して雲母が特

(栗原行人)

微的に見られることを確認した。また、河口付近の干潟には特有の貝の死殻(シジミ、イソシジミ)が観察されるが、それらが土砂に埋没することによって化石となることを紹介し、それらが化石となった場合には古環境復元に使えることを説明した。



図 1. 流水実験の様子。

## 8. 南立誠小学校における粉の性質に関する実験

(國仲寛人)

【概要】

担当：國仲寛人 小学校教員：田中秀幸

日時：2010年12月6日15時～16時

場所：三重県津市立南立誠小学校

参加者：南立誠小学校理科クラブの生徒(4年生～6年生)11人程度

南立誠小学校理科クラブにて、粉の性質に関する実験を行った。まず生徒達は3つの班に分かれ、砂の持つダイランシーという性質に関する実験を行った。具体的には、砂を入れた風船に透明なアクリルパイプを差して水を入れ、風船に力をくわえた時に直観に反して水面が下がる現象を

観察した。その後、なぜそのような現象が見られたのかを担当者（國仲）と共に考察した。

次に、コーンスターチに水を混ぜた系を各班で作成し、力を加える速度によって系が固化したり流動化したりする様子を観察した。系の流動状態が手の感触で確認できるため、生徒達は楽しそうに実験に取り組んでいた。更にこの系を発振装置に接続したスピーカーの上に流し込み、振動の振幅や周波数によって系の表面に生じるパターンの違いを全員で観察した。コーンスターチと水を混ぜた系を加振すると、特定の振幅と周波数の時に不規則な形で踊り出すようなパターンが観測される。そのようなパターンを再現して見せたところ、生徒達は歓声をあげてその特異な振る舞いに関心を示し、面白い動きをする構造を作ろうと、夢中になって系を割りばしで突つくなどして

いた。

この実験で用いたコーンスターチと水を混ぜた系はダイラタント流体とも呼ばれ、加振した時の特異な挙動の理論的説明にはまだ誰も成功していない。生徒達は普段の理科の授業において、身の周りの自然現象について観察や実験をした後に、最終的にはそのメカニズムに関する説明を教師から与えられていると思われる。だが今回は、世界中の物理学者達が今まさに手を焼いている複雑な現象を目の当たりにし、未だ説明がつかない現象が身近に豊富に存在することを理解したように思えた。これこそが今回の出張授業で担当者が最も強調しておきたかった点であり、身近で複雑な問題に挑戦する人材がこの理科クラブからも出てくることを期待するという旨を述べて実験を終えた。

## 9. 橋北中学校における土曜日学習支援

【目的】 橋北中学校では土曜日に数学と英語の学習支援（Saturday Step-up School, 略してSSS）を実施している。その補助スタッフとして大学生が関わることで、生徒一人ひとりの学習進度に応じた指導する体験を重ねる。

【概要】 SSSは土曜の8時半から12時半までであり、理科教育コース1年生が学校現場にはじめて関わる機会として、SSSが適当であると考え、昨年度から開始した。本年度は、15名の学生が毎回5名関わることとし、期間は前期に5月29日から6月26日までの5回と、後期に11月6日から2月26日までの12回が計画された。前期は、「理科ゼミナール」の一環として位置付けた。

前期は初回に数名の欠席者があったが、参加学生は、学校現場におけるはじめての指導経験ということもあり、生徒との関わり方や、助言の仕方

（後藤太一郎）

に戸惑いながらも経験を重ね、多様な生徒を知る機会となったようだ。しかし、参加予定学生の中で欠席者がみられた。土曜日の活動ということもあり、クラブ活動と重なり、参加が困難な学生もいた。後期については、この活動は授業と関係なくボランティアとなったためか、参加者はさらに減り、1-2名の学生しか参加しないことが続いた。学生にとっては、具体的な活動が明確になっていなかったことなど、担当者である後藤の指導体制に大きな問題があったと反省している。

このように、この学校活動に大きな支障をきたすことになり、学校側には多大なご迷惑をかけることになった。参加学生は理科教育コースだけでなく、広く参加者を募らなければならず、そのため案内や説明会など、十分な準備など、この活動に対する多くの課題が残された。

## 5. 音楽教育

本年度、音楽教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校および橋北中学校とのコラボ音楽祭および合唱支援の実施（9～10月）
2. 栗真小学校における授業支援の実施（通年）
3. 栗真小学校における研修会開催および助言の実施（2回）
4. 栗真小学校における音楽会の開催（1回）
5. 南立誠小学校における音楽活動・授業の実施（3回）

以下、特に、授業との往還が担保された取組について報告する。

### 栗真小学校との連携における新しい学びの形態

（根津知佳子）

#### 【目的】

現場の先生と大学教員が協働する場に参与することを通して、実践が現場で創られていくことを理解する。

#### 【概要】

音楽教育講座では、コラボ音楽祭の合唱支援や音楽活動や授業の実践を中心に隣接学校園との連携を深めてきたが、学生が児童・生徒と直接関わることに對して大学教員がコメントする、という形態が多かった。また、日頃大学で学んでいる実技や知識を児童・生徒の指導にいかす、ということ活動を意義としていた。

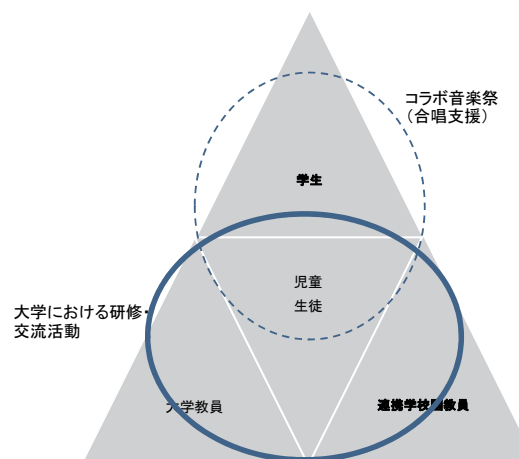
今年度は、栗真小学校の先生と大学教員が「学び合う場」に学生が参与する機会をもった。前期には、特別支援学級の研究会を参観した後、大学教員のコメントについて調べるなどの教員養成PBLの授業を実施した（水1コマ『言語表現と非言語表現（音楽）』）。

後期の『音楽療法概説（水1・2コマ）』では、次のようなPBLに取り組んだ。

- \* 学生がプログラムを考案する。
- \* 大学の施設で実践する。
- \* 児童を対象に実際に体験する。
- \* 教員研修の場に参加する。

『音楽療法概説』は、音楽教育コースの2年生の必修授業であるが、医学部看護学科（1名）、大学院生（1名）、人間発達科学コース（1名）、英語教育コース（2名）、特別支援コース（7名）など専門領域も学年も異なる学生が受講している。様々な専門領域の理論を基盤に相互討論できるのがこの授業の特徴である。

11月24日にメディアホールで開催された特別支援学級の児童34名を対象とした音楽活動（教員研修）では、例えば特別支援教育コースの4年生のグループが企画・実践した“リラクゼーションプログラム（洗濯・花になる・木になる）”について、専門領域の違いによって異なる振り返りが見られた。





【特別支援コースの学生の考案した活動】

実際に始めてみると、一緒に歌ったり、積極的に参加してくれたのでとても安心した。私たちと子どもたち、また子ども達同士も初対面だった中、音楽を通したことでリラックスした気持ちで臨むことができたように思う。

音楽教育コース 2年

音楽という言葉以外のコミュニケーションツールによって交流でき、とても素晴らしい体験ができてよかった。

英語教育コース 3年

子ども達も楽しく安心して参加できるように、自分自身が楽しんで支援できました。このことから、子ども、大人という区別もなく、同じ“人”として音を楽しむことができると考えました。

医学部看護学科 4年  
規律と自由(子ども達の子どものらしさが制御されない状態の意味で)の境界線の引き方の難しさ

人間発達科学コース 3年

楽器を使ううちに笑顔になり、子ども同士の関わり合いも見られるようになったので、楽器や布などの道具を介しての出会いもあるのだと感じました。

特別支援教育コース 4年



【音楽教育コース1年の演奏】

一方、『音楽療法概説(水2コマ)』は、音楽教育コース1年生9名が受講している。後期は、11月20日に志摩市の小学校の文化祭において『教育実地研究基礎』として構成したプログラムの一部を音楽棟で再演した。

小学校のステージの上で感じたことと、実際に目の前で子ども達と相互に反応しあいながら演奏する体験の相違について考える場となった。

以上、実践が現場で創られているという現実を、学生同士の省察によって相対化する、という新しい学びの形態を創出できたことが今年度の成果である。



**連携音楽祭  
合唱や演奏**  
津・橋北中と三重大  
津市橋北中学校と三重大が連携した音楽祭「獅子奮迅」が十九日、同大であった。写真。同大の地域連携事業の一環で、こし初めて実施した。教育学部音楽科の学生らが一月前から同中を訪れ、本番に向けて演奏や合唱指導をしてきた。

この日は、同中の全校生徒四百四十九人と

学生四十人が参加。クラス別の合唱で表現力を競い合ったほか、吹奏楽部による映画音楽などの演奏や、生徒個人の英語スピーチ発表があった。

三重大生も合唱を披露し、生徒らは調和の取れた歌声に耳を傾けていた。(古谷祥子)

# 合唱コンや演奏披露

## 三重大と橋北中 コラボ音楽祭

【津】津市立橋北中学校「獅子奮迅」が十九日、津三重大教育学部音楽科市栗真町屋町の同大学三翠ホールで開いた。



コラボレーション音楽祭で練習の成果を発表する橋北中学校吹奏楽部＝津市栗真町屋町の三重大三翠ホールで

ール、同校吹奏楽部の演奏、生徒の学習発表、生徒会企画など盛りだくさんの演目で観客を楽しませた。

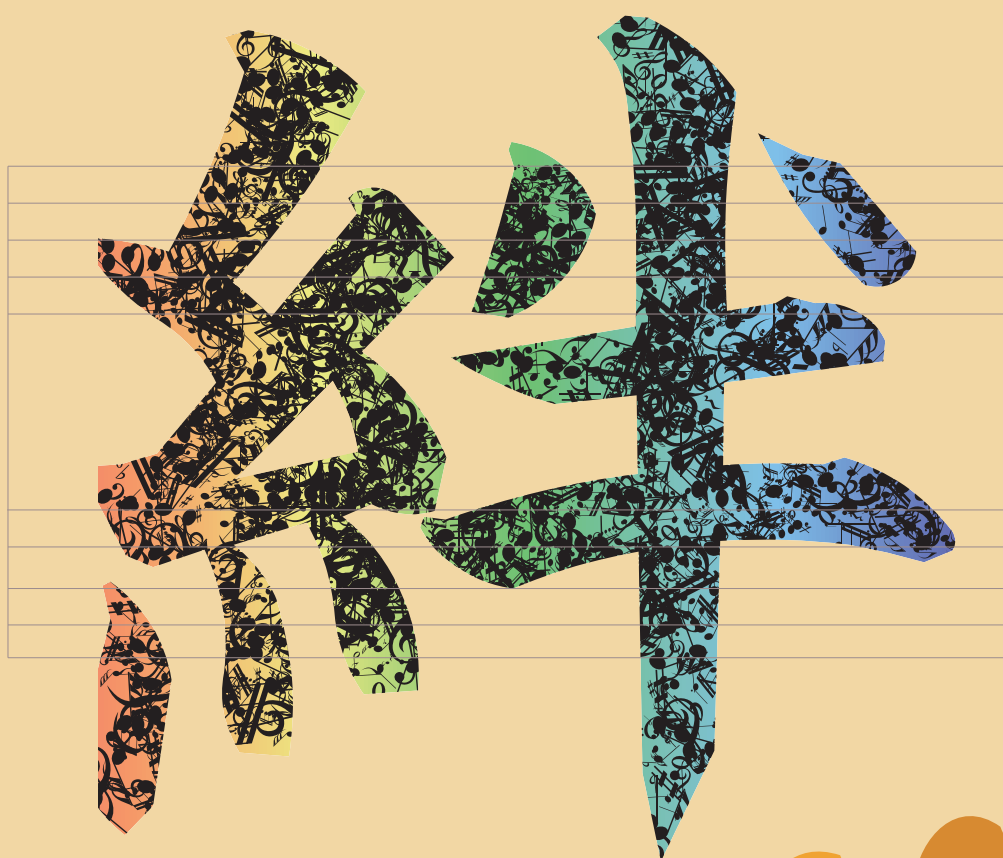
コラボレーション音楽祭は同学部の地域連携事業の一環で、一身田中学校に続き二回目。橋北中学校は学校祭文化的行事として今回初めて。中学生らは本格的なホールで緊張しながらも練習の成果を発表した。

コーラスコンクールでは、三年一組がグランプリを受賞。スペシャルゲストとして教員らも合唱に参加した。学習発表では、全日本中学生高円宮杯英語弁論大会に出場する伊井彩都さんの英語スピーチや交通安全作文を発表。生徒会企画もあり、場内を盛り上げた。

平成22年度 津市一身田中学校 文化祭

# 一身田中学校&三重大学教育学部音楽科 コラボ音楽祭

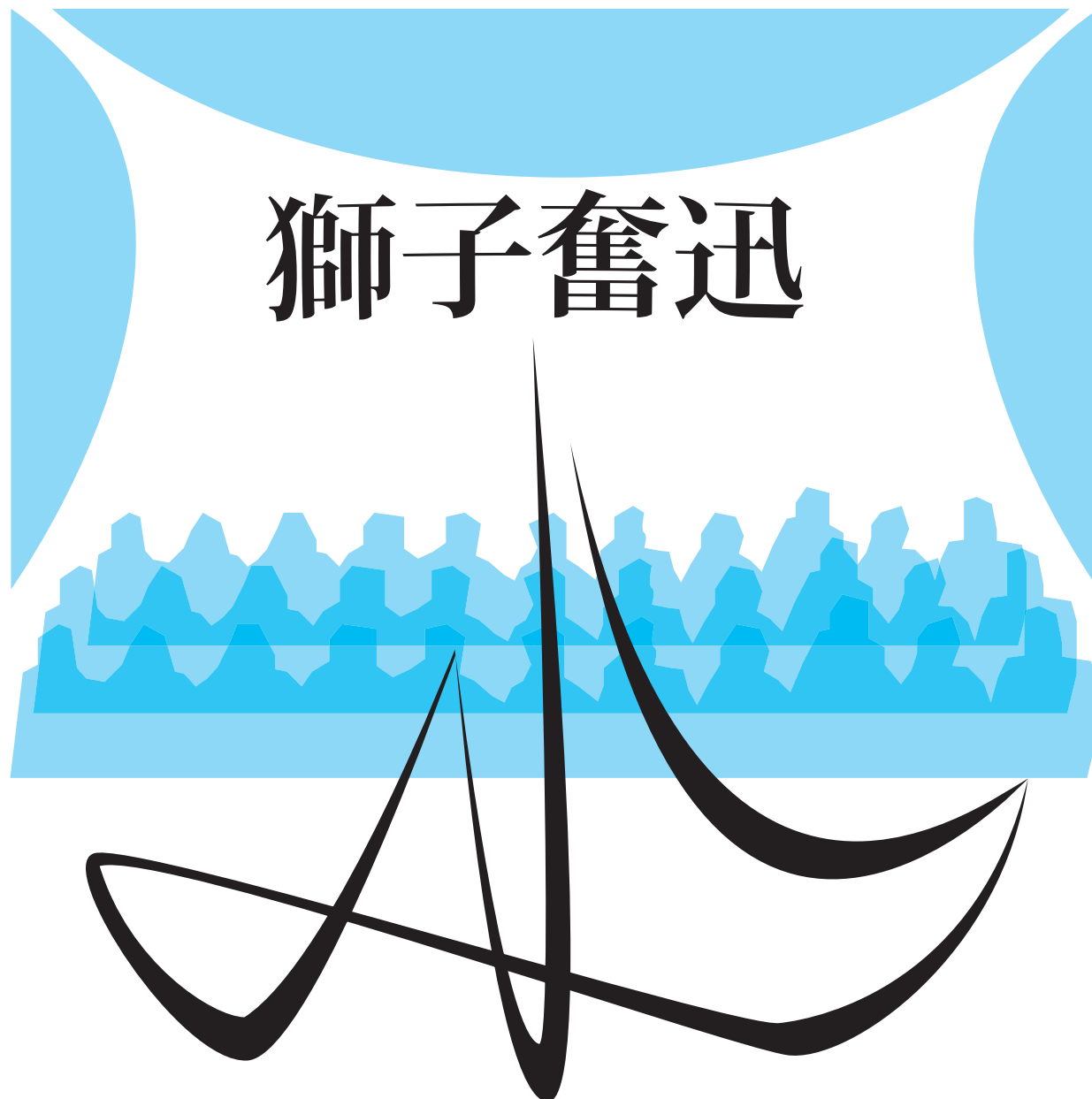
日時：平成22年10月15日（金） 8：40～12：20



開会式	8：40～ 8：45
合唱コンクール	
1年生	8：45～ 9：20
2年生	9：20～10：00
3年生	10：00～10：40
三重大学教育学部音楽科	10：40～11：00
吹奏楽部の演奏	11：20～11：50
審査結果発表、表彰式	11：50～12：15
閉会式	12：15～12：20

会場：三重大学三翠ホール（大ホール）

# 獅子奮迅



**10月19日(火)**

**開場 9:50 開会 10:00**

**会場 三重大学三翠ホール(大ホール)**

開会式	10:00~
全校合唱	10:15~
コーラスコンクール	10:35~
三重大学学生合唱	12:00~
学習発表	13:00~
ブラスバンド部発表	13:30~
生徒会企画	14:30~
コーラスコンクール	
結果発表	15:20~
総合閉会式	15:40~

## 6. 美術教育

本年度、美術教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田小学校における図画工作科の授業づくりをとおしての連携
2. 西が丘小学校における図画工作科の連携授業

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田小学校における図画工作科授業づくりをとおしての連携 —第2学年「ヌルヌル ペタペタ 大きな絵」の実践—

(上山 浩)

#### 【授業実施に至る経過】

5/18: 一身田小学校から、6月中旬から下旬に、第2学年図画工作科として、全4学級を対象にした「フィンガーペインティングを楽しむ」を内容とした授業支援のオファー頂いた。

5/20: 上山から、一身田小学校ご担当の村田真理先生(2年3組担任)に「前向きに検討させて頂く」として、題材のイメージの詳細を打診するとともに上山の実践例をお知らせした。

5/21: 村田先生から以下の旨の題材イメージをお示しいただき、上山の方で支援が可能だと判断し、打ち合わせに入ることにした。

- ・画材を、お決まりにではなく、いろいろ試したり、できれば身体を使って思いっきり楽しませたい。
- ・四つ切ではない、大きい紙にグループでの表現を取り入れたい。

5/27: 一身田小学校にて、村田先生、河野先生(図工専科)、上山の3名にて以下の事項を中心に情報交換・調整・打ち合わせを行った。

- ・当該児童について、これまでの経験、表現に見られる様子、指導する上での留意点等。
- ・描画材の性質、紙のサイズ・使用法等の適切性等。
- ・造形表現に関わる題材観、題材事例、指導観、その他日程、使用教室等。

6/4: 上記打ち合わせ事項などを元に、上山にて「実施要項」を作成し、一身田小に送信した。

6/7: 上記実施要項を一身田小第2学年担当・図工担当の6名の先生にて検討、微調整を行った。

6/8: 上記実施要項にて、後藤連携推進委員長に予算使用等を打診し了承を得る。具体的な準備を開始する。

6/18: 上山にて学習指導案に準ずる「指導メモ」(クラス共通)を作成し、一身田小に送信。併せて、学生による授業実施(全体指導)の可否、直前の教室準備の要領などを打診した。

6/20: 一身田小より指導メモの了承(「読んでだけでわくわくする」とのコメント)等を得る。

6/22: 本活動参加学生(4年生3名、3年生1名いずれも美術教育コース)と事前のミーティングおよび、描画材等の事前準備を行った。

6/29(授業前日): 16:00頃より、物品の搬入等実施教室の準備を行う(作業台の移動は一身田小第2学年担当の先生方で事前に終了)と最終打ち合わせを行う。

#### 【授業実施概要】

6/29(1日目)

1-2限(8:45-10:25) 2年3組の授業

学級担任(図工科担当)の村田先生が全体指導を行った。上山がアシストを行った。学生は、4年生3名が記録撮影および、適宜補助を物品配布、部分清掃、個別サポートなどの補助を行った。



### 3-4 限 (10:45-12:25) 2 年 1 組の授業

美術教育コース 4 年の松原さんが全体指導を行った。図工科専科担当の河野先生、学級担任の先生、上山がアシストを行った。サポートを行った学生は 2 名。

7/2 (2 日目)

### 1-2 限 (8:45-10:25) 2 年 4 組の授業 (大学授業科目「美術教育演習 III」の一部として実施)

図工科専科の河野先生が全体指導を行った。上山がアシストを行った。サポート学生は 4 年生 3 年生共に 1 名。

### 3-4 限 (10:45-12:25) 2 年 2 組の授業

上山が全体指導を行った。図工科専科の杉田先生、学級担任の先生がアシストを行った。サポート学生は同上。

村田先生より学生向けに水分補給等の配慮を頂いた。

参加学生の直後のコメントとして全員に共通して「しんどかったが、むちゃくちゃ楽しかった」「このような活動が再度企画されれば是非参加したい」という声が聞かれた。

#### 【授業実施後】

直後

7/2-3 : 村田先生と上山にて、事後の電子メールにて事後の振り返りの討議を行った。

7/6 : 上山より静止画約 1000 点を記録した DVD メディアを送付した。

7/6 : 村田先生より、当該授業の振り返り報告をまとめた学級通信 (保護者向け) をお送り頂いた。その内容は、今回の連携にて村田先生の日頃

思い描いていた授業が実現したこと、子ども達の当日の様子の詳細、直後に上山とやりとりした振り返りの一部、5 名の子どもによる感想など。

後日

・8 月に実施された図工・美術の先生方で企画運営している子どもの造形活動のワークショップに、この活動の参加学生に補助員としてのお誘いを頂き、一部の学生が参加した。

・10 月に実施された県教研の美術教育分科会にて村田先生がこの連携活動について、特にご自身のご担当のクラスでの実践について報告された。それに先立ち 9 月には、報告書の内容について、電子メールにて上山と討議を重ねた。また、上山の研究室にて、その後の子ども達の経過の情報などを交えて事後検討を行った。

・翌年 2 月に実施予定の市教研にて、上山は講師として、本連携活動の報告を中心とした報告を要請されている。

本連携は、日常の業務に加えてそれに平行して行う諸準備など必ずしも伴う負担は少なくないが、附属学校での連携授業同様に、得るものも豊富な活動だとの実感があつた。



## 2. 西ヶ丘小学校における図画工作科の連携授業 —第6学年「今日からキミは〇〇だ！」の実践—

(山田康彦・中手拓哉)

### 【目的】

西ヶ丘小学校より6月に依頼があった。当初の依頼は、6年生の風景画の指導だった。具体的には学校のまわりの風景を描く活動を行う際に、風景の切り出し方や構図のとり方を指導してほしいという内容だった。その後2回事前相談を行い、風景画の技術的な指導というよりも、個々の生徒が学校の校庭で、これまで気がつかなかった新しい風景を発見して、新鮮な感覚と意欲を持って風景画に臨むような取組にすることと、そうした風景の発見と下書きだけでなく、着彩の指導も行うことにした。こうした意図をふまえて、次のような授業を行った。

本授業では生徒一人ひとりが〇〇になりきり、〇〇の視点から見える西ヶ丘小学校校庭の風景や物を絵に描くという活動を行なった。〇〇と

は生徒のなりたい虫、鳥などの小動物である。今回の連携授業では生徒に人間とは別の視点で、普段注視することのない風景の面白さに気づかせたいという思いや、普段とは別の角度からモチーフにアプローチし、表現を工夫する楽しさも知ってもらいたいという意図をもって取り組んだ。

児童生徒は第1回授業にスケッチを、第2回では主に着彩を行なった。



### 【概要】

#### (実施日程)

第1回：風景の発見と下書き

9月28日(火)

3・4限目(10:40~12:15)6年3組

5・6限目(13:40~15:15)6年1組

10月1日(金)

3・4限目(10:40~12:15)6年3組

3・4限目(10:40~12:15)6年3組

第2回：着彩

10月12日(火)

3・4限目(10:40~12:15)6年1,4組

5・6限目(13:40~15:15)6年1組

10月14日(木)

1・2限目(8:45~10:20)6年2,4組

5・6限目(13:40~15:15)6年1組

#### (スタッフ)

西ヶ丘小学校

連携担当 中川弘子先生

6年生各学級担任の先生方

三重大学

教員 山田康彦

主授業者 4年 中手拓哉

サポート

M1 竹下香織

4年 小林由実 鈴木奈都世 中野ひかり

中山光悠 松原由紀子

#### (授業のねらい)

1. 動物の視点にたつて、学校内の面白い風景を発見できる
2. 本題材を通して画面構成を工夫して作品を制

作することができる。

3. 絵の具の使い方の幅を広める

### (授業の進行)

①授業の導入部で、いろいろな小動物から見た風景の写真(資料1)を提示し、生徒に気づいたことを発表してもらおう。次に「アリからみた遊具」の参考作品(資料2)を提示し、生徒が行う活動の内容を説明する。

②導入後、小動物の視点から見える風景を発見するために、校庭でスケッチ用紙(資料3)スケッチをする。スケッチが終わった生徒から下描きをする。

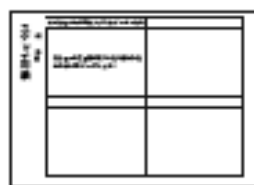
③生徒が下描きを終えた後、着彩について説明する。主に塗り残し防止、均一に描き進め易くするための下塗り(資料4)や重ね塗りをしている際の水の量の調節方法を説明する。



(資料1)



(資料2)



(資料3)



(資料4)

### (スタッフの個別指導の内容)

(風景の発見・下描き)

1. 生徒が面白い風景を発見するのを必要に応じてアドバイスする。
2. 面白い風景としてメモしたものから一つ選ぶ時にアドバイスする。2時間目に入下描きに入る前に、生徒にお互いのスケッチを見せ合う。次に生徒にどのスケッチを下描きにするか自分で決めるようにする。自分で決めることができないで迷っている生徒がいたら、下描きに入る前に学生スタッフが相談に乗る(授業者が指示する)。
3. 下描きを描いているときに必要に応じてのアドバイスをする。

(授業の実際)

- ・小動物の視点から風景を発見しスケッチをする作業は、多くの生徒が1時間で自分なりの風景を発見し、スケッチをすることができた。
- ・2時間目に早速下書きにはいった。ほとんどの生徒が熱心に下描きを進めることができた。しかしどの程度まで細かく下描きしたらよいのか判断がつかない生徒も多かった。1時間では描き終えなかった生徒が多かったため、後の作業は担任

(着彩)

1. 着彩の導入の内容に沿って、必要に応じてアドバイスをする。
2. 特に着彩を簡単に終わってしまうような描き方をしている生徒には、こちらからアドバイスをする。



の先生に指導をお願いした。

- ・着彩については、全体に薄く下塗りをするという作業が初めての生徒がほとんどだった。しかし粘り強く下塗りをすることによって、本塗りが急速に進んだ。2時間では完成しない生徒が多かったため、再び後の指導を担当の先生をお願いした。後日、三重大大学のスタッフと西ヶ丘小学校の先生方と絵を前に研修をした。

## 7. 保健体育教育

本年度、保健体育講座で実施した取り組みは、次の9件である。

1. 一身田中学校における教育実習
2. 一身田小学校における校内研修(授業研究)支援
3. 栗真小学校における体育授業実践
4. 南立誠小学校における親子活動実践
5. 南立誠幼稚園における親子活動実践
6. 南立誠幼稚園における運動遊び実践
7. 一身田中学校におけるGボールを使った「体づくり運動」の授業実践
8. 橋北中学校における保健体育授業(ラート運動)支援
9. 学生と現場教師の協働による子どもの生活・健康実態調査、各種測定に基づいた健康教育実践能力向上—橋北中学校・南立誠小学校・北立誠小学校・西が丘小学校—

以下に、学生と担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校における教育実習

#### 【はじめに】

私たちは2010年9月1日から9月28日まで一身田中学校(以下、一身田中)で教育実習を行った。私たち3人は、2年生と3年生の保健体育科授業(ラート運動、器械運動、保健)を担当させてもらった。本稿では、ラート運動の授業について報告する。

#### 【教育実習前の私】

私たちは、実習を行う上で、全く知らない環境で実習を行うということ、そして今までに教育実習で行われたことのないラートという教材を扱って実習を行うということで、大きな不安があった。

実習の2ヶ月前から大学の担当教員と何度も指導案についての検討を行った。ラートを体づくり運動で取り上げる意図は何なのか、ラートでしか味わうことの

できない身体感覚は何か、実習校の生徒たちはどれくらいラートを扱うことができるのか、生徒のラートに対する関心はどの程度のものなのかといったことを考えながら指導案を作成していった。

実習を2週間ほど前に控えた8月18日に一身田中の先生方との指導案検討会を行った。大学の担当教員に指導してもらいながら考えた指導案をもとに、一身田中の生徒の実態を考慮しながら検討を行った。

検討内容としては、ラートが過去2年間においてどのように行われていたのか、そして、ラートの授業の中で生徒が求めていたものはどういうものであったのかなどである。その中で、私たちが考えた授業内容では生徒を満足させることは難しいのではないかということを指導していただいた。

指導案検討会を終え、実際の授業現場で求められている声を聞いたうえで、再度指導案検討を行った。私たちが考えた授業では、簡単な基本的な技を身につけ、それをベースとしてスピードの変化や発展的な技を行い、自分や他者の気づきということを目標に指導案を作成した。しかし、実際に一身田中の先生からは、生徒たちは技の発展等よりも、多くの新しい技に挑戦していきたいという気持ちが強く、ラートを使ったダイナミックで派手な技に対して強く関心を持っていることを伝えられた。指導案検討会を行い見えてきた課題として、これらの点を踏まえて、私たちの考えた授業を現場で求められている声に合わせて改良していけるように検討直すことであった。

一身田中の先生方と指導案検討を行った同日午後のラート実技研修会に、津市内の体育教員の方々と一緒に参加した(写真1)。ここでは、日本ラート協会の講師の方から、主にラートの扱い方や、運動の特性、基本的な技について、実技を交えて指導をしていただいた。ここで、私たちはラートの基本的なことを学び、実習までの期間に大学で自主練習等を行った。

指導案検討会とラート実技研修会を終えて見えてきた課題から再度指導案作成を行った。課題としてあげた、現場で求められる授業を私たちが実践しようと考えていた授業にうまく合わせ、両方の要素を取り入れ

た授業づくりを行った。再度大学の担当教員と何度も指導案検討を行い、実習当日に向けて最終調整を行った。また、同時に私たちがラートをしっかりと扱えるよう、大学でのラートの実技練習も実習までの間に行い、基本的な技の習得を目指した。



写真1

#### 【教育実習中の私】

教育実習が始まり、今まで考えてきた指導案をもとにした授業を行った。私たちが実際に行った授業は、私たちが重視している身体の認知ということをしかりとおさえつつ、現場の生徒が求めている様々な技に挑戦するといった要素も取り入れいくといった授業であった。つまり、様々な技に挑戦する中で、体づくり運動の目標である、身体の気づきを重視した授業展開というものを目標にして授業を行った。

その結果、まず「伝達」といった観点から3つの課題がでてきた(写真2)。生徒に合わせた声かけができない、生徒からの求める声に適切に対応できない、そして、授業中の指示が生徒全員に届かないといったものである。こうした課題点に対して、私たちはそれぞれ、生徒の特徴、授業中の様子等をしかりと観察し適切な声かけを行う、生徒が授業に求めることと教師が授業で教えたことをできる限り近づけていく、生徒が聞きやすいような体勢づくりとして小さく集めて座せる等の工夫を行った。また、安全面では生徒たちがどの程度ラートを扱えるのか把握していなかったことにより私たちが予想していない危険が授業中に見えてきた。指導案を作成している段階で活動の基準が私た

ちにしかなかったために、これくらいなら安全に行うことができるだろうと考えていた活動が、予想以上の危険が伴っていた。さらに、一人でクラス全体の生徒の活動を把握するのが非常に困難で、一つのグループへ指導に入ってしまうと他の生徒たちの活動に全く目を向けられない状況に陥ってしまうことがあった。

授業展開では、生徒たちが授業内容にすぐに飽きてしまう、身体の気づきよりもどうしても技の「できる—できない」に気持ちがいってしまうといった問題が浮かび上がってきた。授業内容に飽きてしまったり、自分が思っているよりもどんどんと進度が上がった場合には、その生徒の授業進度に合わせて新たに内容を変更していくことが必要であった。また、技の「できる—できない」にどうしてもこだわってしまうことに対しては、授業の目的が技の目的ではないことをしっかりと伝え、理解させることが必要になってきた。



写真2

#### 【特練反省会の私】

特練反省会では、見本をどのように行えばよいのかといったことが課題としてあがったが、見本を行う場合、どのように行えば生徒が教材の中にもっと入ってくることができるのかを考えたところ、見本は教師が行うのではなく、生徒に行わせることに意義があるのではないかと思った。生徒が見本を行うことによって教師が指示をだすことができ、活動に親近感を持たせることができ、より活発に活動を行うことができるように感じた。

また、私たちがラート運動を体育の中で行う際、ラ

ート運動のどの部分がおもしろいのかを考えてみたところ、「恐さ＝おもしろさ」がラート運動の中に含まれ、「恐れけどやってみよう」というところに醍醐味があるのではないかと考えた。

### 【教育実習後の私】

大学と連携していることで、今まで体育授業には取り入れられていなかったラートという教材をいち早く使って実習を行うことができたことは非常にプラスとなることであったし、指導案検討の時間においても多くの時間を割いていただけたことが非常に良かった。また、クラスに一人の実習生であり、このクラスは自分の受け持つクラスであるから責任を持ち、自分の考えを行動に移すことができた。さらに、担当教員や生徒とのつながりも密となり、関係構築の面で非常に良かったと思う。

私たちが協力校で実習を行う中で感じた課題点を最後にあげたいと思う。協力校ということで事前の情報が少なく、生徒、学校の様子、何の授業を何時間行うのか、昨年までの授業内容等、分からないところばかりであった。また、担当教員との打ち合わせの機会が少なく、生徒はどの程度取り組むことができるのか、どのような授業が求められているのかをもっと事前に打ち合わせの中で考えていければと感じた。

本稿は、平成 22 年 12 月 1 日、三重大学三翠ホールにて開催された「教育フォーラム」において、学生が発表した「連携校における教育実習報告」を加筆修正したものである(写真 3)。

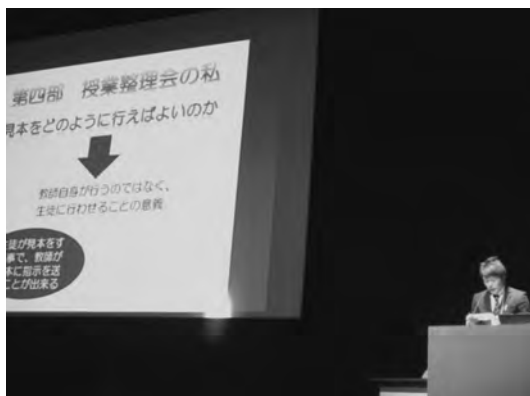


写真 3

(文責: 保健体育科 3 年 安田崇幸・大井聖也・谷口耕輔)

### 【おわりに】

本教育実習で取り上げたラート運動は、通常の体育授業の学習内容には位置づけられていないものである。ゆえに、教材研究や学習指導の開発、安全対策などについて、現場教員、大学教員、学生の三者が一体となり、教育現場の実態を踏まえた授業実践が必要になってくる。

今回は、特に安全対策が課題としてあげられたため、早急に学校側と問題を共有し、専門機関（日本ラート協会、筑波大学）との連携を図りながら、ラート実施上の安全管理、補助等を中心とした研修会を開催した（平成 23 年 1 月 25 日、三重大学にて）。

研修会には、日本ラート協会の西井先生を招聘し、一身田中教員 4 名、大学教員 2 名、学生 3 名の参加のもと、以下の内容で進められた。

- ・専門機関が作成した DVD 「ラート指導のための安全マニュアル・基本編、周辺系編」に基づいた解説。
- ・一身田中におけるこれまでのラート運動における事故例に基づいた対策。
- ・ラート実施上の補助実技（写真 4）。



写真 4

以上のように、連携校における教育実習はこれまでとは異なり、教育実習前（教材研究、実技研修会、実技練習、指導案作成、指導案作成検討会）、教育実習中（授業観察・指導、特練参加・指導）、教育実習後（実習の振り返り、報告書作成、研修会の開催）のすべてのプロセスにおいて、大学教員が関与し続けるといった点が特徴としてあげられる。

(岡野 昇・後藤洋子)

## 2. 一身田小学校における校内研修(授業研究)支援

### 【はじめに】

一身田小学校(以下、一身田小)において、2年生の算数(かけ算)の公開授業と全体研修会が行われた。全体研修会では、「学び合いつながり合う授業の創造」をテーマに様々な意見が出された。なかでも、子どものつまずきをどうつなげるかについて、多くの議論が交わされた。そこで本稿では、子どものつまずきから学びを深めるということについて考察する。

### 【概要】

平成22年10月5日(火)、一身田小学校にて開催され、参加者は一身田小教員、津市教育委員会指導主事1名、三重大学教員1名、三重大学生1名であった。

全体研修会は、公開授業の内容についてグループにわかれて討議することから始まった。討議の後、全体で各グループの討議内容を共有し、総括を三重大学教員と津市教育委員会指導主事が行った。

その中で、授業の一場面がピックアップされ、特に「かけ算の意味」について、子どもが共有できる授業にするためにはどの子どもの発言をひろって、全体に共有させたらよいかについて取り上げられた。それは、人や花などがたくさん描かれた絵の中から、かけ算の式に表せそうな部分を探し、作った式を全体に発表するという一場面であった。「正解」である式がたくさん発表される中で、一人の子どもが「 $5 \times 5$ 」という明らかに絵には表されていない「間違っただけ」を発表したのである。そのとき教室は少しざわついたが、授業者はその「間違い」には触れずに、授業を進行していった。

### 【考察】

教師は、1年で決められた単元を全て消化しなければならぬため、限られた時間の中で授業をスムーズに展開していかなければならないのであろう。そのため、子どもたちからすぐに「正解」を引き出そうとし

がちである。このことは、「学ばせたい内容」にたどりつくまでのプロセスにおいて、できるだけ合理的・効率的に授業を展開するということが意図されているように感じられる。例えば、簡単な問題は、学力の劣った子どもにあてて、少し難しい問題は、学力の高い子どもにあてるとのことである。これは、正解探しとしての営みとして位置づけられ、「間違い」から分かりなおすという学びが保障されていないのではないだろうか。

今回でいえば「 $5 \times 5$ 」という「間違い」つまり、「子どものつまずき」を全体に問う(もどす)ことによって、「かけ算の意味」を全体で共有できたのではないかと考えられる。単に「 $5 \times 5$ 」が間違いで、「 $5 \times 2$ 」が正解であるということをおさえるのではなく、何が間違っていたのかをおさえること大切になってくるのではないだろうか。間違っただけの本人は「 $5+5$ 」と「 $5 \times 5$ 」の「+」と「 $\times$ 」を間違えた」と記号の書き間違えとらえている。しかし、「 $5+5$ 」は「 $5 \times 2$ 」で、「 $5 \times 5$ 」は「 $5+5+5+5+5$ 」であり、それは「1つ分の数 $\times$ いくつぶん」という「かけ算の意味」の問題である。

こうした「子どものつまずき」に寄り添うことで、間違えた子どもにとっては間違えの意味に気づき、また、間違えていなかった子どもにとっては分かり直すという学びが成立するように考えられる。こうした営みが、子どもの学びの質を深めていくものと思われる。

### 【おわりに】

本稿では、一身田小校内研修会において、「子どものつまずき」を問うことは、クラス全体の学びの質を深めることになり得るということが考察された。

なお、本稿で取り上げた校内研修(授業研究)にかかわり、8月30日(月)と10月1日(火)の2回、2年生の担任の先生方と研修部の先生方との指導案検討会を開催した。また、このほかに6月30日(水)には、4年1組の体育科授業研究(校内研修)にも関与し、三重大学教員と学生が参加した。

(文責:スポーツ健康科学コース4年 林 直哉)

(岡野 昇)

### 3. 栗真小学校における体育授業実践

#### 【はじめに】

栗真小学校（以下、栗真小）において、保健体育科の学生（以下、学生）によって「体ほぐしの運動」の授業実践を行った。この授業実践をもとに、他者との関係をほぐすことで、子どもが活発にかかわり始めることの背景には何が起きているのかを考察する。

#### 【概要】

平成22年10月19日（火）、栗真小体育館にて開催され、参加者は栗真小1・2年生32名、栗真小教員2名、三重大学教員1名、学生6名であった。

今回の体育授業実践は、現場からの体ほぐしの運動の研修依頼を受けるかたちで、学生が「交流」に重点をおいた授業デザインを作成し実践を行った。授業の目標は、「1人では、生まれない運動をすることによって、いつも遊んでいる人と違う人がいても楽しく運動をすることができる」とした。活動内容は、「①自己紹介、②手たたきゲーム、③集合ゲーム、④風船トス、⑤子取り鬼、⑥新聞やぶりダンス（写真5）、⑦新聞集め競争」を行った。活動中は、学生1名が全体の進行を行い、残りの5名が授業のアシスタントとして参加した。



写真5

授業中の子どもの様子は、②の手たたきゲームや③の集合ゲームでは、授業とは別のところに関心が向いていたり、活動から離れていってしまう子の姿が見られた。しかし、活動が進行するにつれてそのような子

も活発に仲間とかかわり合う姿に変わっていった。

#### 【考察】

今回の体ほぐしの運動の授業は、自己と他者の関係をシャッフルしたり関係を深く結んだり、運動を変えるごとに他者関係を変えていくことで、子どものかかわり合いが変わることをねらいとした。その結果、子どもの体が動き出すという実体の背景には、「自己の存在が保障されること」と「他者を受け容れること」の2点があると見えてきた。

1点目の「自己の存在が保障されること」とは、仲間の一員としての自己を感じることができるということである。風船トスを通してチーム内の関係の結びつきを強くした後に子取り鬼を行い、チーム内の自分の役割を変化させるといった、関係性を意識した活動内容によって、自己が他者から仲間として受け容れられていたと考えられる。

2点目の「他者を受け容れる」とは、相手の体から発信されているメッセージを聴いているということである。新聞破りダンスでは、リズムに合わせて楽しそうに新聞を破る仲間の体が運動の楽しさを伝えていたと考えられる。

以上の2点から、自己の存在というものを実感し、他者の体から発信されるメッセージを聴くことで他者を受け容れた結果として体が動き出し、活発にかかわり合う子どもの姿が見られたと考えられた。

#### 【おわりに】

子どもの体は、何かの働きかけによって動かされ、その結果が実体として目に見える形で現れる。結果となった実体を変えるためには、その実体が現れる前の体に対して何がその体に働きかけているのかを見ていくことが大切だと考えることができた。

（文責：保健体育コース3年 小山大貴）

（岡野 昇・山本俊彦）



#### 4. 南立誠小学校における親子活動実践

##### 【はじめに】

南立誠小学校（以下、南立誠小）3年生とその保護者を対象に親子活動の実践を行った。活動の発案および進行は、保健体育科の学生（以下、学生）が行った。本稿では3年1組の活動中における授業者（筆者）の立ち位置と、それに伴う児童の行動から、「授業者との距離」について考察する。

##### 【概要】

平成22年11月30日（火）、南立誠小体育館にて開催され、参加者は南立誠小3年生76名、保護者55名、南立誠小教員2名、三重大学教員1名、学生6名であった。

南立誠小学校の3年生の児童とその保護者での親子活動を、1組と2組で2本行った。内容は体づくり運動領域であり、学生が発案し実行した。活動は、①船長さんの命令、②集合ゲーム、③サークルジャンプ、④新わっか通し、⑤新聞破りダンス、⑥新聞集め競争を行った。②の集合ゲームでのグループ分けは、今回は親子の関係は崩さず、親子を同じグループにした。④の新わっか通しは数人で円になり、手を繋いだままの状態、新聞紙で作った輪に体を通して輪っかを次の人に繋いでいくというゲームであり、どのグループが1番早く1周回せるかを競った。1回戦で1位になったグループに商品として小さなわっかを渡して2回戦を行ったところ、1位だったグループが最下位になり、盛り上がった。⑤の新聞破りダンスは、音楽に合わせて新聞を破り、曲のサビで新聞紙を巻き上げるといった活動であり、1番盛り上がった活動であった。今回は事前に南立誠小学校の先生から「AKB48」が人気と聞いていたため、「ヘビーローテーション」を使用した。⑥の新聞集め競争は、保護者VS児童で行い、児童の圧勝となった。

##### 【考察】

筆者は集合ゲームの途中まで、参加者の前に立ち、

中に入ろうとしなかった。そのため参加者との距離ができてしまっており、「もう少し広がって、前にも来てください」と言っても、なかなか筆者に近づいて来てはくれなかった。しかし筆者が中に入り始め、④の新わっか通しの後、「私の周りに集まって」と言うと、児童が一斉に集まってきて、筆者の両足にしがみついた。

前者と後者で何が違うのかと考えると、児童にとっての授業者との関係、つまり筆者との関係であった。前者で児童にとっての筆者は、単に活動を進める学生であり、遠い存在だったと言える。それが後者では、筆者は活動を進める学生ではなく、一緒に活動してくれる学生となっており、近い存在となっていたのではないだろうか。その意識の違いが、実際に筆者との距離となって表れたと考える。つまり授業者と参加者の距離は、立ち位置関係だけでなく、運動の世界づくりにも影響をしてくる。より楽しいと感じるのは後者の時であり、そのためにも授業者は参加者にとって近い存在であることが大切であると考えられる。

##### 【おわりに】

授業者との距離は、参加者との関係に大きく影響する。より楽しい活動にするためには授業者との関係が近いことが重要であるため、遠くから指示をするのではなく、参加者の中に入って近い存在となることが必要であると考察された。

なお、本実践にかかわり、11月4日（木）の「体育教材研究演習」の授業に、南立誠小3年担任の先生方2名に参加していただき、学生の立案したプログラムの検討を行った。ここで出された課題（保護者が参加する意図の確認、保護者が参加できない子どもへの対応、活動への参加が消極的な子どもへの対応、活動中における担任の先生方のスタンスなど）は、再度検討し直し、プログラムを再構成し、当日の流れに沿った実演を繰り返し、本番当日に臨んだ。

（文責：保健体育コース3年 山口優子）

（岡野 昇・山本俊彦）

## 5. 南立誠幼稚園における親子活動実践

### 【はじめに】

平成22年6月20日、三重大大学の総合演習の授業の一環として、南立誠幼稚園（以下、南立誠幼）の子どもたちとその保護者を対象とした親子活動を立案し、実践を行った。活動中の様子と、活動後に聞いた南立誠幼の子どもたちの「コアラが一番楽しかった」という感想から、触れ合いから安心感や心地よさ、楽しさを感じ取ることをヒフ感覚と捉え、相互主体の関係が成り立っている触れ合いについて考察する。

### 【概要】

平成22年6月20日（日）、南立誠幼遊戯室にて開催され、参加者は南立誠幼稚園児21名と教員、保護者21名、三重大学教員1名、三重大学生9名であった。

今回、南立誠幼で行った親子活動のテーマは、触れ合いを通して感じるヒフ感覚であり、子どもにとって一番近い他者である親との身体の触れ合いによる安心感や楽しさを感じることを目的とした『うちの人と遊ぼう』のポスターの遊びを、イメージしやすいように「動物園に行こう」という設定のもと、動物のまねをすることによって行った。初めは「動物ごっこ」を行い、親子であらいくま、かめ、うま、ペンギン、さる、白鳥、ぶたの親子になって遊んだ。次にオオカミに扮した大学生が子ぶたを食べに登場し、親ぶたは子ぶたがオオカミに見えないように守るという「オオカミがきたぞー！！」（写真6）を行った。



写真6

次にNHKの「おかあさんといっしょ」で行われていた「ジャングルポケット」の曲に合わせて踊る「ジャングルポケット」を行った。最後にクールダウンとしてコアラの親子になってしばらく「ぎゅっ」と抱きしめ合い、その後うつぶせになった子どもたちを保護者が手のひらで優しくたたき「パタパタ」を行って親子活動は終了した。

### 【考察】

私たちは最初、子どもたちは運動量の多い活動が楽しいと答えるだろうと予想していた。しかし実際子どもたちが一番楽しかったと答えたのは、運動量としては一番少ないクールダウンで行ったコアラの活動であった。コアラの活動では、親に「ぎゅっ」とされる客体であると同時に、親を「ぎゅっ」とする主体でもある、相互主体の関係が成り立った触れ合いを感じることができた。だから子どもたちはヒフから安心感や心地よさを感じ、楽しかったという印象が強く残ったのだと考える。生活の中で十分に触れ合いのとれていると思われていた親子でさえも、子どもたちにとっては触れ合いが十分ではなかったのかもしれない。子どもたちは私たちが思っている以上に、相互主体から成り立つ触れ合いを求めており、コアラの活動はそのことを最もわかりやすい形で示してくれたものと思われる。

### 【おわりに】

子どもたちは「触れる—触れられる」という触れ合いによって、ヒフから安心感や楽しさを感じ取ることが明らかにされた。

なお、本実践にかかわり、5月20日（木）の「総合演習」の授業に、南立誠幼の先生方に参加していただき、学生の立案したプログラムの検討を行った。また、7月22日（木）の「総合演習（学生による親子活動実践報告会）」の授業にも参加いただいた。

（文責：保健体育コース3年 山口優子）

（岡野 昇・山本俊彦）

## 6. 南立誠幼稚園における運動遊び実践

### 【はじめに】

私たちは、カイヨワの唱える遊びのカテゴリーの一つであるイリンクス研究の一環で、南立誠幼稚園（以下、南立誠幼）で年長児を対象にキャスター（スクーターボード）遊びを行った。本稿では、この実践をもとにイリンクス遊びについて考察する。

### 【概要】

平成22年9月2日（木）、9月7日（火）、南立誠幼遊戯室にて開催され、参加者は南立誠幼稚園児15名と教員、三重大学教員1名、三重大学生（以下、学生）7名であった。

カイヨワの唱える遊戯論の「遊びの意味世界」の一つであるイリンクス研究の一環でキャスター遊びを行った。

1日目は「キャスターに乗ってられるかな」という主題のもと、学生がキャスターの操作を行った。キャスターに乗っている最中の子どもたちは表情が硬く、終わってキャスターから降りると笑顔で「楽しかった」と感想を述べていた。（写真7）



写真7

2日目は「キャスターに乗って進むことができるかな」が主題で、子どもたちは自分自身でキャスターを操作する活動を行った。キャスター遊びをする中で条件をいくつかかえることで子どもたちは乗り方や進み方を考え、楽しんでいた。そして、自然と隣の友達と競

争する子どもが出てきたり、その場でコマのようにグルグル回り出す子どもも出てきた。

### 【考察】

子どもたちはキャスターで遊ぶ中で、こちらが条件をいくつかかえることにより、乗り方や進み方などを考え、楽しんでいた。遊びの中で一番人気があったのはキャスターに乗り、コマのようにぐるぐる回る遊びであった。これは目が回り、クラクラするのを楽しんでいて、イリンクスの世界を楽しんでいたといえよう。

しかし、自然と隣の友だちと競争したり、泳ぐようにキャスターを漕いだり、キャスターを2人で操作することでどこに行くかを楽しんだりする子どもも出てきた。

これらのことから、子どもたちはキャスター遊びを通して、イリンクスのおもしろさだけでなく、アゴンやミミクリー、アレアといった意味も感じて、楽しんでいたことが考察された。

### 【おわりに】

今回の南立誠幼の2日間の活動で以下のことが考察された。今回のキャスター遊びを通じて子どもたちはイリンクスの世界だけでなく、アゴンやミミクリー、アレアの世界も楽しんでいた。また、本実践で得られた事実に基づきながら、「体育教材研究演習」の授業において「キャスター遊び」のカードを作成した（図1）



図1

（文責：スポーツ健康科学コース3年 岡田雄輔）

（岡野 昇・山本俊彦）

## 7. 一身田中学校におけるGボールを使った「体づくり運動」の授業実践

### 【目的】

中学校保健体育の必修単元「体づくり運動」の中で、姿勢調整、身体感覚やバランス脳力の向上などに効果があると言われているGボールを使った運動を取り入れ、新しい教材の可能性を検討する。

### 【概略】

#### 1. Gボールを使った運動について

Gボールの特性を活かした運動として、バランス系（ボール上でバランスを取る運動）、バウンド系（ボールに乗って弾む運動）、ローリング系（ボールに乗って転がる運動）の3要素18種類の運動例を提示するとともに、Gボールを使ってバランスを取りながらストレッチを行った。

#### 2. 授業実践について

一身田中学校1年生全5クラスについて、6単位時間実施した。指導計画は以下の通りである。

##### ・1時限：姿勢を計る

Gボールに座った姿勢を側面から写真撮影し、姿勢に対する意識を高める。

##### ・2～3時限：課題に挑戦

Gボールを使ったストレッチ、バランス系、バウンド系、ローリング系の様々な運動に挑戦する。

##### ・4時限：運動の組み合わせ

数人のグループを作り、挑戦した運動から6種類、自分たちで考えた運動を1種類以上選択して組み合わせる。

##### ・5時限：練習と測定

組み合わせた運動を連続してできるように練習する。

2回目の座位姿勢の写真撮影をし、良い姿勢について考える。

##### ・6時限：運動の発表

グループ毎に組み合わせた運動を発表し、お互いに評価する。

### 【成果と課題】

1時限と5時限で測定した姿勢を比較すると、Gボールに座ってバウンドすることにより背中がまっすぐになる傾向が認められた。

「体づくり運動」では「できた」「できない」にあまりこだわらず、多様な運動を経験させることが重要である。生徒達は意欲的に取り組み、次々と運動課題を要求する姿が見受けられた。それに答えるとともに、生徒が自ら運動課題やGボールの活用例を工夫できるような場を設定することが今後の課題となった。



写真8



写真9

(後藤洋子)

## 8. 橋北中学校における保健体育授業(ラート運動)支援

### 【はじめに】

本年度、橋北中学校の保健体育授業でラート運動を導入することになった。同中学校では全く新しい試みであるため、三重大学の保健体育講座教員2名が実技研修会および指導案検討会の開催、授業補助などの支援を行った。また授業担当教員は2009年度より準備を開始し、事前に自主研修をする等、実技実践力を高めていった。

### 【概略】

保健体育授業においてラート運動を導入するための事前準備として、2009年12月24日に三重大学屋内トレーニング場で第1回実技研修会を実施することから開始した。その後、研修会および指導計画等立案のための検討会等を行い、平成22年12月に3年生4クラスを対象に6時間扱いの教材として授業を実践した。

教材の特性から安全に授業を実施するうえで、複数の教員が授業に関わることが望ましいため、橋北中学校では保健体育科以外の教諭も授業に参加するなど、教科の枠を超えて協力体制がとられた。

ラート運動の授業を実践するに当たり、通常は男女別で授業を実施しているが、器具と運動の特性から男女合同のクラス単位で実施することとした。身長を基準として男女合同で数人のグループをつくり、適したサイズのラートに割り当てた。授業の流れは、授業中グループのメンバーは非常に良く協力していて、ラートで実際に運動している生徒は1～2人であるが、補助や付き添いとしてほぼ全員が関わっていた。また、授業の後半でラート運動中の様子をデジタルカメラで動画撮影し本人に見せると、非常に興味を持ちグループ全員でお互いに姿勢などを確認し合う姿が見られた。

### 【成果と課題】

全ての授業を終了した後に、生徒にアンケート調査を実施した。その中の自由記述による感想で、「はじめ

は怖いと思ったが、やってみると楽しくなった。できないと思ったが回れたときは嬉しかった。意外と回れた。もっとやりたい(時間が少ない)。またやりたい。貴重な経験ができて良かったと。みんなで協力した」と書いていた生徒が非常に多かった。中には「回る前は怖くて手足が震えた」けれども「またやりたい」と書いていた生徒もいた。一方、「目が回った。気持ち悪くなった。足と腰がきつかった」と書いていた生徒も僅かながら見られた。

生徒にとって今までに無い新しい感覚を味わえたこと、当初の自分の思い込みとは異なった結果や意外性に驚きがあったこと等、授業中に心が動く機会が多くあったことが伺える。しかし目が回ったり、運動中の姿勢調整がうまくできずに腰などに過剰な負担が掛かってしまったり、落下した生徒も見られたので、比較的恐怖感のない運動を多数経験したり、スモールステップで刻み、一つ一つの動作をゆっくり確認しながら進めたりする方法も検討する必要があるだろう。また、器具の準備と片付けに時間が掛かるので、生徒たちは迅速に対応していたが、工夫の余地があるように感じた。

体づくり運動の領域は学習指導要領で重視されている割には実践するために課題が多い領域でもある。今後さらに研究を重ねて、生徒たちの学びが多い良い授業実践モデルとなるようにしたい。



写真10

(後藤洋子・岡野 昇)

9. 学生と現場教師の協働による子どもの生活・健康実態調査、各種測定に基づいた健康教育実践能力向上—橋北中学校・南立誠小学校・北立誠小学校・西が丘小学校—

【目的】

時代の変化に伴い、食習慣や運動習慣など児童・生徒の生活習慣も大きく変化している。その結果、子どもの低体力化や肥満傾向・痩身傾向、喘息・アレルギーを有する児童、近視児童の増加など過去には少なかった健康問題が多様な教育課題の一つとして顕在化してきている。幼・小学校期や中学校期は生涯にわたる健康の基礎を築く時期であるため、客観的な情報に基づいた健康教育が適切に行われることが望ましい。また、その健康教育は座学としてのものだけではなく、実際にからだを動かしたり、食物（給食）を食べたり、休んだりする中で自分のからだの反応を感じさせながら行っていくことがより効果的である（KYB 教育）。一方、学校における健康教育は主に養護教諭を中心として行われるが、中・高で保健の授業を担当する保健体育科教員、もしくは小学校教員を目指している保健体育科学生もその専門性から重要な役割を担うと考えられる。

そこで本取り組みでは現場の保健体育科教師、養護教諭等との協働により児童・生徒の生活や健康実態調査、体組成（体脂肪率・除脂肪量）、骨密度の測定を実際に行い、その情報を卒業研究としてまとめていく過程の中で子どもたちの健康に関わる現状を深く考える機会を持ち、将来の健康教育実践能力の向上を図ることを目的とする。

【概要】

平成 22 年度は昨年度の取り組みを踏まえ、小学校期における食習慣、運動習慣と体組成、骨密度との関連について明らかにし、それらの情報を用いて健康教育を実施すること（課題 1）、また、昨年体組成や骨密度を測定した中学生を対象に 1 年経過した今年度の状況を再度評価し、それらの変化と食習慣、運動習慣と

の関わりについて検討した（課題 2）。

【まとめ】

両課題とも学生が現場教員と協働できるよう打ち合わせの場を設け、子どもたちの健康に関わる現状を聞く中でより問題意識を高めていった。調査・測定に関しては生活習慣に関わる調査紙の作成、体組成計・骨密度計といった測定機器の操作方法の修得、測定スケジュールの作成などを通して、客観的で正確な情報を得るために必要な事柄を学んでいった。測定時には実際に子どもたちと会話をしたり、顔色を見たり、体格を見たりする中で、文献を読んだり現場教員からの話だけからでは得られない子どもの健康状態の現状を自ら感じ取っていた。課題 1 では測定終了後、食習慣・運動習慣と筋肉や骨をたくましく育むことに関わる健康教育の時案を作成し、測定した情報に基づきながら 1 時間の授業を実施した。子ども達からの評価も高く、また学生本人も小学校期における健康教育の重要性について認識を深めることができた。課題 2 では中学校期における 1 年間の体脂肪・筋肉量の変化、骨密度の変化について、食習慣（エネルギー摂取量、カルシウム摂取量など）、運動習慣（運動クラブへの参加、外遊びの実施など）との関わりについて検討し、中学校期における適切な栄養摂取、運動実施の筋肉や骨に対する意義について確認した。これらの結果を用いた健康教育も中学生を対象として実施し、この課題に取り組んだ学生の健康教育実践能力の向上に結びついたものと考えられる。

（富樫健二）

## 8. 技術教育

### 2010 年度北立誠幼稚園ものづくり出前授業での取組

三重大学教育学部技術教育講座 魚住明生

#### 1. 出前授業の目的

今日、子どもたちのものづくり離れが進んでいると言われていいます。ものづくりに対する興味・関心は幼い頃から培われるため、幼稚園時代のものづくり体験は大変重要であると考えます。また、個々の園児とのつながりを基盤とした幼児教育は教育の原点であり、将来教職を目指す学生にとって、このことを実地に体験できることは大変有意義です。これらのことから、北立誠幼稚園の先生方のご理解とご協力のもと、技術教育コースではものづくり出前授業に毎年取り組んでいます。



図1 うさぎのサークル

#### 2. 題材：「チョコちゃんのサークルを作ろう」について

今回の授業では、題材として幼稚園で飼育されているうさぎ「チョコちゃん」が自由に駆け回ることができるサークル（図1）の製作を取り上げました。この題材では、園児たちが身近なペットのために物を作るという、ものづくりの原点を体験できると共に、みんなで協力して作るものづくりの楽しさや、自分たちで作ったものを使って実際に遊ぶ楽しさを体験してもらうことを目的としています。この製作過程で園児は多様な工具（図2）や素材に触れることができます。



図2 うさぎのチョコちゃん

#### 3. 出前授業での活動

活動の対象は北立誠幼稚園の年長児18人と年少児9人で、指導は技術教育コースの学生10名（2年生：3名、3年生：3名、4年生：4名）で行いました。具体的な活動内容を以下に示します。

##### (1) 出前授業の事前打合せ：5月26日（水）

今回の出前授業は主に2年生の3名が担当しました。指導教員と共に北立誠幼稚園に出向き、先生方と打合せを行いました。具体的には、幼稚園の先生方から製作物の概要や、園児に体験させたい作業の内容、活動する際の留意点、今後の日程等について話し合いを行いました。これらのことを踏まえ、学生は指導案を作成し、後日先生方にご指導頂くこととしました。

##### (2) 指導案の検討：6月2日（水）

幼稚園の先生方と打ち合わせした内容を基に、まず担当の2年生が指導案を作成しました。次に、その指導案をゼミにて2～3回検討しました。その過

程では、教材や活動計画、園児への支援、作業の安全等について真剣に話し合いを重ね、指導案をより良いものにしていきました。出来上がった指導案は2年生が幼稚園に出向いて先生方に説明し検討して頂き、後日指導して頂いたものを基にして、さらにより良い指導案へと改善していきました。

##### (3) 園児との顔合わせ：6月9日（水）

幼稚園の先生からの提案により、出前授業の前に園児と学生が交流する場を設定して頂きました。具体的には、まず学生と園児が相互に自己紹介し、今度の出前授業で製作するサークルについて説明しました。そして、そのサークルにそれぞれの園児が板材に描いた絵を釘で打ち付けることを話しました。このことにより、園児と学生が相互に気持ちを交流させ、出前授業に向けて和やかな雰囲気と親密な関係づくりを行うことがで、さらには園児にもものづくりへの動機づけを行うことができました。

#### (4) 出前授業当日：6月16日（水）

当日は、まず前日に準備した活動に必要な用具・材料を遊戯室に運び込むことから始めました。園児が安全に作業できるように作業空間に配置しつつ準備を進めました。準備終了後、園児と大学生全員が遊戯室に集まり、自己紹介をします。次に、大学生が製作したサークルを見せながら、本日の活動について説明します。具体的には、園児が板材に描いた絵にきりで下穴をあけ、玄翁(げんのう)で釘打ちを行います。釘打ちに関しては、事前に下穴をあけておいた練習用の木材で1人10本の釘打ちを練習します。その後、本番用の板材に下穴をあけ、木工用ボンドを塗り、サークルに釘打ちしていきます。すべての作業が終了したら、自分の回りや部屋を片付けます。その後、場所を園庭に移動し、完成したサークルを組み立てて、サークルにチョコちゃんを入れて一緒に遊びます。最後に、遊戯室に集まり、活動の振り返りとして、頑張ったことや楽しかったこと、難しかったことなどを発表します。



図3 園児が釘打ちの練習をしている様子



図4 園児がサークルに自分が描いた絵を釘打ちしている様子

#### 4. 成果と課題

今回の活動を通して学生は以下に示す成果と課題を挙げています。

##### 【成果】

- ・全体を通して、園児が楽しんで活動に参加できるような授業を進めることができました。
- ・その過程では先生方の園児への指導を間近で見ることができ、勉強になりました。
- ・作業の場面では、園児にきり・玄翁の使い方を見せ、実際に安全に工具を使用してもらうことができました。
- ・特に、釘打ちでは個人差があるため、個々に対応して指導することで、園児全員に正しく釘打ちをしてもらうことができました。
- ・遊びの場面では、サークルの柵から手を伸ばしてチョコちゃんを触るなどして楽しく遊んでもらうと共に、他の園児が作った作品を見てそのよさを感じてもらうことができたようでした。

##### 【課題】

- ・授業を振り返ると、園児に説明する際に上手く説明ができないことが何度かありました。園児にとって分かりやすい言葉を用いて説明することが重要で、事前に使う言葉を吟味するべきだったと思いました。
- ・今回の作業(釘打ち)はほとんどの園児にとって、



図5 園児が出来上がったサークルにチョコちゃんを放して遊んでいる様子

初めて経験する内容だったので、教材や工具についての専門的な知識を持っていないかならなと思いました。

以上のように、今回の出前授業の活動を通して、学生は数多くのことを実感として学ぶことができています。この学びは大学での授業だけでは得ることができないものです。教育の原点とも言える幼児教育の現場に向いて実際に取り組むことで得ることができたものと考えます。今後、さらに地域連携が進展し、数多くの学生が実践での学びを実感し、そこで得たものを大学での学びに高めていけることを願っています。



## 9. 家政科教育

本年度、家政教育講座で実施した取組は以下の通りである。

1. 西が丘小学校における総合的な学習の時間の実習の支援
2. 西が丘小学校における家庭科の調理実習の支援
3. 栗真小学校における家庭科および総合的な学習の時間における連携実践
4. 白塚小学校と白塚幼稚園の幼小連携活動から学ぶ
5. 一身田中学校における家庭科の調理実習の支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 西が丘小学校における総合的な学習の時間の支援

(磯部 由香)

#### 【目的】

小学3年総合的な学習の時間で行った「豆腐づくり」実習の補助を行い、子ども理解や指導方法についての理解を深める。

#### 【概要】

本取組は、家政教育コースおよび消費生活科学コースの教員免許取得学生に広く募集をし、ボランティアで行った。支援にあたって、西が丘小学校3年担当教諭、参加学生、大学教員との事前打ち合わせを行った。4クラスの活動を分担して手順に従って補助活動を行った。

#### 【成果と課題】

本取組には1年生～4年生までの17名が参加した。授業については「実習活動の進め方の難しさ」「実習のための説明教材」「教師の指示の仕方」など、子どもたちについては「子どもたちの反応」「発達段階」「性差」などについての気づきが見られた。振り返りの記述から、学年によって様々な視点からのコメントがあったことから、振り返りシートを用いた学生間の共有を行うことで、より深い学びが得られると思われる。



## 2. 西が丘小学校における家庭科の調理実習の支援

(平島 円)

### 【目的】

小学5年家庭で学習する「料理って楽しいね！おいしいね！」の単元の中で行われる調理実習の支援を行い、調理実習の準備、卵や野菜の調理方法の指導について学ぶ。

### 【概要】

本取組は、4年生履修の「教育実地研究」の一環として実施し、受講学生2名が参加した。この授業は4次から構成されたものであった。

第1次 1日の食事を調べよう

第2次 簡単な調理をしよう

調理の計画を立てよう

ゆでたりいためたりしよう

第3次 つくってみよう

ゆでたまご、野菜炒め

第4次 なぜ食べるのか考えよう

第1次と第2次には子どもたちの様子や雰囲気を知るために授業参観の形で参加した。第3次は調理実習で実際に子どもたちに作業の仕方を指導しながら授業に参観した。

### 【成果と課題】

学生がこの取組に参加することにより、多くのことに気付くことができた。子どもたちへの理解としては、調理実習を楽しみにしていること、調理経験が少なく不慣れであること、嫌いな食べ物でも自分たちで作ったものは食べること、班での作業が苦手であること、普段の授業とは違う顔が調理実習ではみられることがあげられた。授業を行うにあたっては、実習の手順を示す方法として実物や動画を用いる必要のあること、実習の準備には多くの時間を必要とすること、安全面への配慮が非常に必要であることなどがあげられた。

## 3. 栗真小学校における家庭科および総合的な学習の時間の連携実践

(磯部 由香)

### 【目的】

小学5、6年家庭科の「弁当作り」および総合的な学習の時間で行った「大豆に関する学習」における連携実践を通して、子ども理解、授業づくりおよび指導方法についての理解を深める。

### 【概要】

本取組の一部は4年生履修の「教育実地研究」の一環として実施し、各実践に受講学生2名ずつが参加した。それぞれの取組は以下の通りである。また、(1)5年家庭科「弁当作り」に関しては、一部、3年生が教育ボランティアとして実習補助を行った。

(1) 5年家庭科「弁当作り」

この授業は9次から構成されたものであった。

第1次 料理っておいしいね

第2次 調理実習の手順

第3次 ゆでたりいためたり

第4次 ゆでたまごを作ろう

第5次 どんなお弁当にしよう

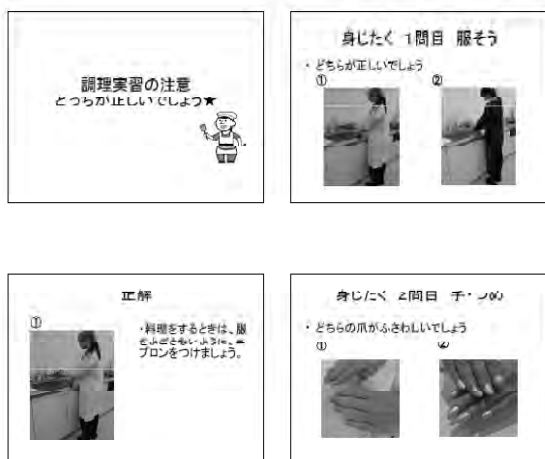
第6次 たまごと野菜を使った料理

第7次 調理実習計画

第8・9次 お弁当につめる副菜作り

上記の授業の中で、第2次 調理実習の手順で使用するパワーポイント教材を作成した。

また、第3～5次の授業を参観し、グループ活動などの補助を行った。第5次では、フードモデルを使用したバランスのよい弁当についての学習を行った。



指導用教材（スライド）



弁当バイキングフードモデル

## （2）6年家庭科「弁当作り」

- ・3品の弁当作りをする上で、主菜について考える活動1時間についての授業案を作成した。
- ・調理実習の補助を行った。

## （3）3年総合的な学習の時間「大豆に関する学習」

- ・栄養教諭による食教育の授業を参観した。
- ・「とうふ団子・きなこ作り」実習の授業案作成と指導を行った。
- ・「とうふ・おからマフィン作り」実習の授業案作成と指導を行った。

## 【成果と課題】

「教育実地研究」として実施したことから、一授業だけでなく一単元にわたって授業を見ることが可能となったことや、授業づくりの一部に携わらせていただく機会を持てたことから、学生の振り返りには、単なる授業補助の際には見られない深い気づきがあった。しかし、一部の活動で、参観する前に指導案や教材を作成することになったが、事前に子どもたちのことを知る機会が必要であったとの反省があった。また、単元すべての授業に参加できたわけではないので、子どもたちの様子を知るなどの小学校側の授業担当教員との振り返りの機会を持つ必要がある。

なお、上記2および3の取組については、「教育実地研究」の最後のまとめの授業において、各活動を報告し、お互いに意見や感想を交流する機会を設け、「子ども理解」、「指導力」、「コミュニケーション力」の視点から自己評価を行った。この振り返りから、「教育実地研究」の中に連携活動を取り入れることは、学生の実践的指導力を向上させる上で非常に重要な取組となり得ることが示唆された。

## 4. 白塚小学校と白塚幼稚園の幼小連携活動から学ぶ

（林 未和子）

### 【目的】

白塚小学校と白塚幼稚園において行われている幼小連携活動を参観させていただくとともに、担当の先生方からお話を伺った。その具体的な取組

から学んだことをもとに、卒業論文をまとめた。

### 【概要】

学生は、以下の連携活動を参観させていただいた。  
やぶねりを体験しよう 7月8日

運動会 9月18日

一緒に遊ぼう 10月12日、11月16日

さつまいもの収穫 11月8日

凧あげ 12月2日

また、幼小連携活動についてのご意見を伺うため、10月29日に小学校の校長先生にインタビューを、11月16日に幼稚園の園長先生と連携担当の先生にアンケートを(同じ質問項目で)させていただいた。白塚小学校と白塚幼稚園の幼小連携活動は、2004年度から継続して行われており、年間を通じて、1年生から6年生まで、全ての学年の小学生が幼稚園児と様々な形で関わっているのが、卒業論文で取り上げる事例として、大変参考になった。

#### 【成果と課題】

教育学部に所属し、教師をめざす学生が、小学生・幼稚園児と関わる機会を与えていただき、多くのことを学ばせていただいた。特に、今の子どもたちがどのようなことに興味・関心を持っているのか、子どもたち同士の会話や話題、小学生と幼稚園児との関係を生で見ることによって、子どもたちの実態や生活の一端を知ることができた。また、授業や行事の参観、インタビューとアンケ

ートを通じて、先生方は子どもたちにどのように接しておられるのか、どのような思いで幼小連携活動を行っておられるのかといった教師の視点も知ることができた。学生は、学ばせていただいたことを、今後、自分が教師になったときに、活かしていきたいという意欲を強めたようである。学生にとって、大学近隣の小学校・幼稚園には、授業の間の時間を有効に使えば、頻繁に足を運ぶことが可能であり、子どもたちと親密になることができるという大きなメリットがある。一方、「大学で学習したことを、近隣の小学校・幼稚園で実践してみてください。」と寛大なご理解を示してくださった先生方には、ご協力いただくばかりで、こちらから何も提案できず、申し訳ない気持ちである。今後の課題として、卒業論文等において、学生が実際の現場で授業実践をさせていただく場合、大学側と学校側でどのような指導をすべきかについて、検討する必要があるだろう。

※最後になりましたが、この場をお借りして、お忙しい中、インタビュー・アンケートに快くご回答いただきました先生方、学生への連絡や授業参観等でお世話になりました先生方に、厚く御礼申し上げます。

## 5. 一身田中学校における家庭科の調理実習の支援

(磯部 由香)

#### 【目的】

中学2年の理科および家庭科合同の「ニジマスの解剖の調理」における実習支援を通して、子ども理解、授業づくりおよび指導方法についての理解を深める。

#### 【概要】

本取組は、家政教育コースおよび消費生活科学コースの3、4年生がボランティアで行った。5クラスの活動を分担して手順に従って補助活動を行った。

#### 【成果と課題】

本取組には13名の学生が参加した。授業については「他教科(理科)と家庭科との合科による学習効果と課題」「実験・実習を用いることによる興味・関心の向上」など、子どもたちについては「子どもたちの理解度・反応」などについての気づきが見られた。また、この授業を「命をいただく」という食教育における感謝の気持ちを育てる効果的な教材としてとらえている学生が多かった。

## 10. 英語教育

英語教育コースにおける平成22年度の一身田・橋北校区連携活動

英語教育コースにおける活動一覧

6月10日(木)	橋北中学校と英語科1年生	英語授業参観
12月2日(木)	北立誠小学校6年生と英語科2年生	英語活動参加
12月3日(金)	西が丘小学校6年生と英語科1、2年生	英語活動参加
1月27日(木)	北立誠小学校5年生と英語科2年生	英語活動実施

### 1. 橋北中学校における英語授業の参観

実地研究基礎の授業内で英語科1年生16名が6月10日(木)に橋北中学校で若林先生の英語の授業を参観させていただく。

引率：宮地教員

時間：10：00－10：50

教室：3年3組(生徒数19名)

授業の単元：現在完了形(継続)

質疑応答：11：00－12：00

質の高い授業に学生は多くを学ぶことができた。授業後、若林先生への質疑応答では1時間取っていただき、学生全員から多くの質問が出た。若林先生もとてもわかりやすく、ポイントを押さえてお答えいただき、1時間では足りないくらいであった。学生にとってはとても有益な経験であった。

### 2. 北立誠小学校における英語活動参加

英語科教育特講Ⅰの授業内で英語科2年生16名が12月2日(木)に北立誠小学校の中野先生指導の6年生の英語活動に参加させていただく。

引率：荒尾教員

時間：13：00－14：00

教室：English room

内容：zodiac sign など

グループ活動として星座をあてたり、色や月の言葉を英語で聞き取るゲームを児童と学生で行った。またフリートークでは児童が学生に聞きたい質問を英語で行い学生が答えるといったコミュニケーション活動を行った。学生は英語活動の流れや組み立て方、児童の実態や先生の指導の仕方などを学ぶことができた。

### 3. 西が丘小学校における英語活動参加

総合演習の授業内で英語科2年生9名とボランティアの1年生4名が西が丘小学校の6年生4クラスの英語活動に参加させていただく。

引率：荒尾教員

時間：13：00－14：00

教室：6年生の各教室

内容：Who am I? など

自分の誕生日、自分の特技、自分の行きたい国、自分の朝起きる時刻などを画用紙に書いて4つ折りにして、「私はだれでしょう？」一つずつヒントとして紹介しながらあてるゲームを行う。学生もあらかじめ自分を紹介するものを準備していく。クリスマス前なのでトナカイとサンタクロース版も含め児童と交流しながら活動を楽しむことができた。英語をわかりやすく話す工夫や児童の前で堂々と英語を用いる重要性などが求められ英語活動をする上でのポイントなどを学ぶ機会となった。

### 4. 三重大大学における英語活動実施

総合演習の授業内で英語科2年生9名が中心となり北立誠小学校5年生を三重大大学に招き英語活動を実施した。

指導：荒尾教員

時間：13：15－14：00

教室：地域連携質 B

内容：世界の文化など

世界の祭りを紹介しその後、それに基つきコミュニケーション活動をしてグループに分かれ、そこから異文化についてのクイズを行う。活動の目標は、1. 様々な国の名前を英語で言うことができる。2. 基礎的な挨拶を英語で言うことや、英語で人に物事を訪ねることができる。3. 日本にはない各国独自の文化の存在を感じ、理解することであった。児童にわかり安く英語で伝え、時には日本語で説明を加えるなど工夫をしながらゲーム、クイズを行い児童に英語活動を楽しんでもらった。異文化の知識の伝え方や教材の準備など時間を割かれたが、児童の立場で英語活動を組み立てる工夫を凝らすなど良い学びとなった。

まとめ

4回のみであるが英語科の学生が一身田・橋北校区と連携させていただき英語教育に関連した活動ができたことはありがたいことであった。教育現場を経験し、児童と触れ合う機会は教員養成課程にいる彼らにとって貴重な経験である。日頃の授業内では見せないような輝いた学生の姿や表情からもそのことはよく理解できる。また学生が多少なりとも児童の学びに一役買えていれば喜ばしいことであり、このような活動が今後も活発に継続していくことを願わずにはおれない。



## 1 1. 幼児教育

本年度、幼児教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 生き物環境づくり
2. 「暗闇部屋」の実践
3. 白塚幼稚園における未就園児保育の企画及び運営：ぴよんちゃんクラブ・みんなで子育て2010
4. 北立誠幼稚園における未就園児保育の企画及び運営：たんぼぼ会に参加して2010
5. 南立誠幼稚園における未就園児保育の企画及び運営：うさぎ組・うさぎクラブ2010
6. 白塚幼稚園土曜参観における親子のふれあい活動の企画・運営2010

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 生き物環境づくり

(河崎道夫)

#### 【目的】

津市立白塚幼稚園において年長児と共に、カイコの飼育を行い、子どもと生きものとのかかわりの実際に触れ、実践の進め方、指導のあり方などを学ぶ。

#### 【概要】

<経過>

- ・5月...カイコの卵(昨年飼育していたカイコが生んだ卵を冷凍保存してあった)を冷凍庫から出し、卵を観察する。この日から子どもたちは毎日カイコの様子を観察し、観察記録を残していた。
- ・6月...カイコが孵化する。子ども達と共に学生もカイコを観察し、子ども達がカイコと触れ合う様子を観察する。カイコの餌となる桑の葉を学生と子ども達で取りに行った。
- ・7月...カイコが繭になる。カイコが糸をはいて繭になる姿を子ども達と一緒に観察した。
- ・10月...カイコが作った繭を利用して、コサージュ作りを保護者の方と共にする。

<子どもたちの様子>

カイコを初めて見る子もいて、興味津々だったようだった。子どもたちの最初の反応は、怖がることなく積極的にカイコに触る子もいれば、恐る恐る触る子もいたり、なかなか触れない子などさ

まざまであった。

しかし、エサである桑の葉をあげたり観察をしていくうちにカイコに慣れ始め、はじめは触れなかった子も触れるようになっていた。

日々成長していくカイコを見て、子どもたちの関心も高まり、大切に育てていた。

子どもたちは割とすぐにカイコに慣れていったが、私たち学生は慣れるまでに時間がかかり、子どもたちの純粋さを感じた。子どもたちは、カイコのちょっとした変化にも気づき、おもしろい表現をしていて、私たちに新たな発見を教えてくれた。

子どもたちがカイコと触れ合ったことで、さまざまな発見をしたり、いろんな思いを抱いたりしていて、カイコと共に子どもたち自身も、さらには私達も成長することができた。

<学生の感想>

初めて触れ合うカイコに私達の方が戸惑っていたが、子どもたちの無邪気さに後押しされて興味・関心を持つことができた。子どもたちが今後生き物と関わるときに、今回のカイコで学んだことや感じたことを生かしてくれたらいいな、と思った。

## 2. 「暗闇部屋」の実践

(河崎道夫)

### 【目的】

幼稚園の夏祭りに「暗闇部屋コーナー」を分担して参加し、子どもとふれあう活動を通して幼児教育現場の実際を知る。

### 【概要】

「暗闇部屋」とは「おばけ屋敷」と違い、ただ光がない真っ暗闇を子どもに体験してもらうための部屋であり、これまでも保育実践がある。

4月のオリエンテーション後、計画と準備を数回行い、段ボール集め(300枚目標)を行った。学生は、実行委員4名が部屋作成の下準備で幼稚園を訪れた。また幼稚園と子どもたちに慣れるため全員が1回ずつ幼稚園を訪問し、子どもたちと遊ぶ機会をもった。

夏祭り(2010年7月3日・土曜日)当日、遊戯室に段ボールで囲い真っ暗の部屋を作った。遊戯室の窓や入り口を、光がいきい入らないように業務用の黒いポリ袋や段ボールを使って覆うことに最新の注意を払った。

夕方、夏祭りの開始とともに暗闇部屋のコ

ーナーも開場、次々に子どもたちが挑戦していった。入り口の説明や案内、出口でのメダル渡し、部屋の中での待機と観察、出入り口でのビデオ撮影など分担して実施した。

大勢の子どもたちが挑戦し楽しんだ。一人では入れない子は友達、兄弟、お父さんなどと一緒に入った。入り口でピタッと止まり泣くだけで動くことができない子どももいた。出口から出てきた子はみなすてきな笑顔だった。2度、3度と挑戦する子もいた。幼稚園職員や父母も入って楽しんだ。

驚いたり怖がったり強がったりホッしたりと、子どもたちの様々な姿を見ることができた。

大学生として初めて実際の保育現場に関わることを企画・運営する、実施することができた。企画運営の難しさを経験するとともに、共同で一つのことを成し遂げる楽しさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさ、そして保育が保育者はもちろん、地域や保護者の協力共同で充実していくことに、改めて気付くことが出来たと思われる。



### 3. 白塚幼稚園における未就園児保育の企画及び運営：ぴよんちゃんクラブ・みんなで子育て 2010

(滝口圭子)

#### 【目的】

津市内の公立幼稚園において、ほぼ毎週実施されている未就園児保育の運営に関わり、保育内容の一部を企画、創作、実演することを通して、それまで培ってきた実践力をより確かなものにすると同時に、公立幼稚園が担う地域の子育て支援の具体的内容を知り、その課題と具体的対策について考察すること。

#### 【概要】

「ぴよんちゃんクラブ」とは、津市立白塚幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。

「ぴよんちゃんクラブ」の運営に、三重大学教育学部幼児教育コースの学生が参加させていただくようになってから、今年で4年目となる。

「ぴよんちゃんクラブ」の対象は、地域の保護者と子ども（0～4歳）であり、白塚幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。原則として、隔週火曜日に実施しているが、参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、白塚幼稚園岡田恵子園長、白塚幼稚園保護者ボランティア10名、三重大学教育学部幼児教育コース4年生の天野由貴、市川美帆、森陽子、吉村淳美であった。学生は、前期は平成22（2010）年5月から7月まで、後期は平成22（2010）年9月から平成23（2011）年3月まで、原則として毎回参加した。岡田園長には、毎回の活動後に、運営スタッフ全員での反省会を実施していただく

よう依頼した。また、未就園児保育に関する昨年度の反省から、①運営スタッフ全員での最初の打ち合わせに学生の参加をお許しいただき、②運営スタッフ間の連携を促すために、学生に自己紹介シートの作成を依頼した。また、学生には、③昨年度の先輩の最終レポートを読み、現時点での「課題」と課題克服のための「具体的な方法」を協議しておくよう求めた。

本活動は、平成22（2010）年度教育実地研究の授業として単位認定を行った。学生は、毎回の活動後に、具体的な活動内容や子どもや保護者の様子を実践記録ノート（ぴよんちゃんノート）にまとめて提出した。実践記録ノートは、毎回滝口が目を通し、必要に応じてコメントを書き込み学生に返却した。また、前期終了時に中間レポートを、後期終了時に最終レポートの提出を求めた。中間レポート及び最終レポートの作成に当たっては、自らの実践記録ノートを見返しながら、反省点、約3か月（中間レポート）もしくは約10か月（最終レポート）を経ての自身の変容の有無、自身の変容の具体的な内容や変容の契機等について記述するよう指示した。

ある学生は、中間レポートにおいて「反省会で、お母さん先生や園長先生と協議する中で、保護者の目線や現場の意見などを学ぶことができた。…中略…将来現場に出た時も、子どもの保育のみならず、保護者の支援についても積極的に取り組みたい。」とまとめている。



図1 自由遊び時間の落ち葉プール



図2 設定遊び時間の学生による読み聞かせ

#### 4. 北立誠幼稚園における未就園児保育の企画及び運営：たんぽぽ会に参加して 2010

(滝口圭子)

##### 【目的】

前項 3. と同様であるため省略する。

##### 【概要】

「たんぽぽ会」とは、津市立北立誠幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。学生は、平成 20 (2008) 年度、平成 21 (2009) 年度と、後期のみ「たんぽぽ会」の運営に参加していたが、本年度からは、本プログラムの実践の一環として、年度を通じて参加させていただき、且つ学生が主体となって活動を企画する機会もいただいた。「たんぽぽ会」の対象は、地域の保護者と子ども (0~4 歳) であり、北立誠幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。原則として、毎週月曜日に実施しているが、参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、北立誠幼稚園小菅なぎさ園長、北立誠幼稚園保護者ボランティア及び地域ボランティア 8 名、幼児教育コース 4 年生の雨皿麻希、迫田里紗、山口麻衣であった。学生は、前期は平成 22 (2010) 年 5 月から 7 月まで、後期は平成 22 (2010) 年 10 月から平成 23 (2011) 年 2 月まで、原則として毎回参加した。小菅園長には、毎回の活動後に、運営スタッフ全員での反省会を実施していただくよう依頼した。また、未就園児保育に関する昨年度の反省から、①運営スタッフ全員での最初の打ち合

わせに学生と滝口とで参加させていただき、②運営スタッフ間の連携を促すために、小菅園長及び学生に自己紹介シートの作成を依頼した。また、学生には、③昨年度の先輩の最終レポートを読み、現時点での「課題」と課題克服のための「具体的な方法」を協議しておくよう求めた。

本活動は、平成 22 (2010) 年度教育実地研究の授業として単位認定を行った。学生による実践記録ノート (たんぽぽノート) の作成と提出、滝口による添削、中間レポート、最終レポートの作成と提出については前項 3. と同様である。

学生による中間レポートには「…略…『すぐ動き回る子で、みんなと同じ活動ができないから、(たんぽぽ会に) 連れてきていいか不安だ』と相談された際、自信を持って、今までの経験を話すことができた。この未就園児保育の経験が私の力や自信になっているのだと思うと、少し誇らしかった。お母さん方も初めての経験で自信を持っていないことが多くあることは当然で、手探りで育児をしている状態なのだ気づいた。…略…少しでも、お母さん方の気づきを手伝うことができる関わり方を、他にも様々な角度から見つけていきたい。」という記述があり、幼稚園教職員やボランティアによる支援のもと、保育者として現場に出る前に、保護者対応について実践的に学習する機会を得ていることが確認された。



図 3 自由遊び時間の落ち葉プール



図 4 設定遊び時間の学生による読み聞かせ

## 5. 南立誠幼稚園における未就園児保育の企画及び運営：うさぎ組・うさぎクラブ 2010

(滝口圭子)

### 【目的】

前項 3. と同様であるため省略する。

### 【概要】

「うさぎ組・うさぎクラブ」とは、津市立南立誠幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。三重大学教育学部は、本年度平成 22 (2010) 年度から「うさぎ組・うさぎクラブ」の運営に参加させていただいた。そのため、連携活動開始当初は、関係者全員が試行錯誤しながら運営に当たったようだ。「うさぎ組・うさぎクラブ」の対象は、地域の子ども (0~4 歳) とその保護者であり、南立誠幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。南立誠幼稚園の未就園児保育の特色として、「うさぎ組 (0~3 歳)」と「うさぎクラブ (3 歳以上)」という対象年齢が異なる 2 クラスを設定しているという点が挙げられる。原則として、第 1 水曜日は「うさぎクラブ」を、第 2・第 3 水曜日は「うさぎ組」と「うさぎクラブ」を対象に開催している。参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、南立誠幼稚園丹羽立子園長、主任児童委員伊藤紀子先生、南立誠幼稚園保護者ボランティア 14 名、幼児教育コース 4 年生の伊藤加奈、藤岡真衣、森萌野であった。学生は、前期は平成 22 (2010) 年 5 月から 7 月まで、後期は平成 22 (2010) 年 9 月から

平成 23 (2011) 年 3 月まで、原則として毎回参加した。丹羽園長には、毎回の活動後に、運営スタッフ全員での反省会を実施していただくよう依頼した。また、未就園児保育に関する昨年度の反省から、①運営スタッフ全員での最初の打ち合わせに学生と滝口とで参加させていただき、②運営スタッフ間の連携を促すために、丹羽園長及び学生に自己紹介シートの作成を依頼した。また、学生には、③昨年度の先輩の最終レポートを読み、現時点での「課題」と課題克服のための「具体的な方法」を協議しておくよう求めた。

本活動は、平成 22 (2010) 年度教育実地研究の授業として単位認定を行った。学生による実践記録ノート (うさぎノート) の作成と提出、滝口による添削、中間レポート、最終レポートの作成と提出については前項 3. と同様である。

本活動において、学生は資格試験や採用試験に向けて、幼稚園教職員やボランティアから、保育技術等に関する具体的且つ丁寧な指導をいただき、また多くの励ましをいただいた。学生による中間レポートには、ピアノ伴奏や進行での失敗に対して「失敗してもいいんやから、元気よくやったらいいんやよ」とスタッフの方々に言っていただき、前向きに取り組めたことが綴られている。ここに記して深謝申し上げる。



図 5 設定遊びでのアンパンマン体操



図 6 学生によるエプロンシアター

## 6. 白塚幼稚園土曜参観における親子のふれあい活動の企画・運営 2010

(滝口圭子)

### 【目的】

津市立白塚幼稚園で実施される参観日の親子のふれあい時間を企画し、運営することを通して、子ども、保育者、保護者が関わる幼児教育の現場を知り、また現在の自身の課題と課題克服に向けての方策について考察すること。

### 【概要】

- 1) 活動日 平成 22 (2010) 年 6 月 12 日 (土)
- 2) 場所 白塚小学校体育館
- 3) 運営スタッフ 三重大学教育学部幼児教育コース 3 年生 10 名, 1 年生 11 名であり, 企画・運営の主体となったのは 3 年生であった。
- 4) 活動内容 白塚幼稚園において, 活動日までに事前打ち合わせを, 活動後に事後反省会を実施した (表 1)。当日の活動は, 実施順に「アブラハムの子 (準備運動)」「げんきにしずかに」「あくしゅをしながら」「ジェットコースター」「ゴールはどこ?」「手遊び: 落ちた落ちた・キャベツの中のあおむし」「じゃんけん列車」「みんなごうのしゅっぱつ」であった。
- 5) 学生が考える学生が親子活動に参加する意義 **園児や保護者にとって: 大学生あたりの年齢の人と関わることはあまりないと思われるので, 新鮮な気持ちを抱くことができる。白塚幼稚園にとって: 学生の参加により, 大人数での準備・運営が可能になるので, より大規模な活動ができる。学**

生にとって: 地域の幼稚園を知り, 「園児と保護者が愛情を感じあいながら楽しめる活動」の内容や運営について, 身を以て学ぶことができる。

### 6) 学生による親子活動の振り返り

普段, 家庭ではあまりできないような幅広い活動を取り入れることができたのではないかと。親子が, 体を動かしながらふれあうことを楽しめたと思う。また, 家庭間の交流の場とすることを, 今回の活動のねらいの一つとしていたが, 見慣れない学生に保護者や園児が戸惑ったこと, 学生の声かけが不足していたこと, プログラムの構成にねらいがあまり反映されていなかったことなどにより, ねらいはあまり達成されなかったと考えられる。

### 7) 学生が考える反省点

遊びのねらいをしっかりと定め, ねらいに沿って計画を立てることができていなかった。また, 決められた役割をこなすことばかり重視してしまい, 状況を見ながらの声かけができなかった。

### 8) よりよい活動にしていくために

学生が, 事前に園児と交流し, お互いを知る機会を設け, その時の園児の姿に適した活動内容を考えていくことが望ましいのではないかと。また, 活動のねらいを自覚しながら積極的に参加することで, 参加者全員にとって有意義な活動になっていくのではないだろうか。

表 1 平成 22 (2010) 年度白塚幼稚園土曜参観親子活動運営スケジュール

日付	活動内容
4/20 (火)	大学でのオリエンテーション
5/10 (月) まで	3 年生が中心となり, 1 年生の役割分担も考慮しながら活動内容を計画する。頭の中で考えるだけでなく, 実際にやってみて実感を得ておくこと, 事前打ち合わせで <b>白塚幼稚園の先生方からの質問に答えられるように, 手順, 子どもや保護者への説明, 進行, 列の作り方等を具体的に考えておくこと</b> を指示した。
5/10 (月)	<b>3 年生全員で白塚幼稚園に行き事前打ち合わせをする。</b> 学生が白塚幼稚園で活動内容を説明し, 先生方から指導やアドバイスをいただく。
5 月 第 2~4 週	アドバイスを参考にしながら活動内容を練り上げる。
6 月 第 1 週	アドバイスを参考にしながら活動内容を練り上げる。白塚小学校体育館に行き, 実際の活動の場で距離, 間隔等の確認をする。
6/12 (土)	<b>白塚幼稚園土曜参観当日 親子活動時間 9:15~11:00am</b>
6/16 (水)	大学で当日の録画ビデオを確認しながらの反省会
6/21 (月)	<b>白塚幼稚園での反省会 各自感想レポートを持参し白塚幼稚園に提出する。</b>

## 12. 学校教育

### 1. わくわくコミュニケーションクラブによる小学生のコミュニケーション育成活動

(中西良文・松浦均・廣岡雅子)

#### 【目的】

私たちのグループは、子どものコミュニケーション能力の育成をねらいとした「わくわくコミュニケーションクラブ」と称する活動を行っている。そこでは、活動の目的として、心理学をベースとしたコミュニケーション能力の育成のためのプログラム開発、実践および評価を掲げている。

#### 【概要】

わくわくコミュニケーションクラブ(当初、土曜わくわくクラブ)は、2004年度から津市立南が丘小学校区内の児童を対象として開始し、2007年度からは北立誠小学校区内の児童を対象として実践してきた。そして、2009年度秋からは、対象児童を津市内から広く募り、三重大学を会場として実践を継続している。三重大学での実践では、南立誠・北立誠・白塚・一身田小学校を含む複数の小学校から子どもたちが参加しているため、もともとは顔見知りでない子ども同士の関わりが生まれている。違う地域、違う学年の子ども同士が新しく人間関係を築いていけるという点も、この活動の特徴の一つであると考えている。

わくわくコミュニケーションクラブは大学院生を中心に立ち上げられ、教育学部学生・大学院生および大学教員、修了生などで構成されてきた。常時10人前後の中心的なスタッフが在籍しており、年度毎に入れ替わっている。

スタッフは、各活動の準備・実施・ウェブ上での実践検討を行う。2～3人のスタッフが活動1回の企画・立案を担当し、当日は活動の進行役となる。また、5～6人の子どもでグループ活動を行うため、各グループにグループスタッフを2名ずつを置き、グループ内での進行役や援助などを行う。その他のスタッフは、全体の把握や子どもとの個別的な関わり、授業者やグループスタッフの補助、写真やビデオで活動

の記録などを行う。スタッフミーティングは毎週行い、スタッフ全員で検討・改良をした上で各回の活動内容を決定する。活動後はスタッフ全員が活動内容全体を振り返り、考えたことや疑問に思ったことなどをウェブ上に報告し、スタッフ間で共有できるようにしている。

各回の活動は、「ウォーミングアップ(短時間で楽しめる体ほぐし等)→トライ(自宅等で振り返るためのワーク)の確認→メインの活動(デモンストレーションとエクササイズ)→シェアリング(メイン活動で感じたことの共有)とまとめ→活動内容や学習の振り返り」から成る。メインの活動では、話す・聞く・頼む・断る・協力する・表情を適切に表出するなどのスキルを取り上げ、まず、児童が日常生活で体験しているであろう場面を設定して、スタッフによるスキルのデモンストレーションを行う。このデモンストレーションを通して、子どもたちがスキルを使うことに興味を持てることを目指している。そして、エクササイズで子どもたちが実際にスキルを使う体験をし、スキルについて学んでいる。シェアリングとまとめでは、メインの活動で感じたことや考えたことを共有し、深める。シェアリングでは、話し合いの力をつけることもねらいの一つとしている。

活動に参加した子どもたちからは、「学年、クラスのちがう子と一緒に活動できてよかった」「話し合いがうまくいかなかったけどうまくできるようになった」といった感想がよせられている。保護者からも、「相手のことを考えることができるようになった」「学校でも自分の気持ちをクラスメートに伝えられるようになってきた」という感想をいただいている。

今後の課題としては、この種の活動が求められているところへ、これらの活動を広げていくことが考えられる。

## 13. 教育実践総合センター

本年度、教育実践総合センターでは、以下の取り組みを実施した。

### 小学校におけるパソコンを用いた名刺づくりの支援

(下村 勉)

#### 1. 目的

小学校「生活科」において、パソコンを用いて児童が自分の名刺(名札)を作成する活動を学生が支援する。その活動を通じて、児童にわかりやすく説明すること、児童とふれあい交流すること、小学校の情報教育の一端を知ること、などをねらいとした。

#### 2. 取り組みの概要

昨年、小学校3年生の「パソコンを用いた名刺づくり」に対する支援の要請を受けて、私の担当する授業「教育工学」の一部を使って支援したが、今回はそれに続くものである。今回の特徴は、対象学年が小学校2年生と1学年低くなったこと、使用するパソコンが更新により新しくなったことがあげられる。前回同様、子どもたちは名刺づくりを楽しみ、とても喜びを感じていた。大学生もその様子に、支援活動に対する満足感を感じていた。実践の概要は以下のとおりである。

<小学校側>

- 1) 栗真小学校2年生19名(担任:岡山均先生)
- 2) 「生活科」での名刺づくりの支援  
目的は、名刺の作成。パソコンの操作は主目的でない。
- 3) 授業実施日:2011年1月20日(木)、  
10:40-12:25(2時間分)
- 4) 場所:栗真小学校3階パソコン教室

<大学側>

- 1) 三重大学教育学部授業:「教育工学」[(木曜・3-4限、担当:下村勉)の一部を活用する。]
- 2) 受講生 教育学部2~4年生 15名  
(4グループに編成)
- 3) 単なる手伝いにならないようにする。

- 4) 事前に自分で名刺のサンプルを作って準備する。想定されるトラブルや留意点をあげておく。
- 5) 交流授業のあと、感想等をレポートする。

#### 3. 「パソコンを用いた名刺づくり」の支援の取り組み経過

##### 3.1 準備

###### (1) 担当教師との打ち合わせ

昨年の実践があるため、授業の目的、実施条件、パソコン環境、印刷チェック、使用ソフト、必要な消耗品などの打ち合わせを1回で済ませることができた。

昨年同様、名刺づくりに使用できるソフトが小学校側と大学側に同じものがそろっていない点が問題であった。今回は、大学側に小学校で使われている「ジャストスマイル」を購入・準備することで対応した。

###### (2) 授業「教育工学」における準備

実践に当たって、「教育工学」の授業1コマ分をあてた。「ジャストスマイル」を用いて、小学生が作成する手順を踏んで自分の名刺を作成した。作成の容易さを優先して、テンプレートは「名刺」ではなく「名札」を使うこと、文字入力はキーボードの代わりに「クリックパレット」を用いること、などを留意した。

なお、学生には、作成した名刺を当日に持ってくること、小学生とコミュニケーションしながら作業をすること、などを指示した。

##### 3.2 授業の実施

###### (1) 直前の指示

パソコン室に集合した学生に対して、プリントを配布して、担当する児童とパソコンとの対応お

よび留意事項を指示した。児童は 19 名、大学生は 12 名、パソコンは 26 台である。

児童は一人一台のパソコンを利用でき、児童 1-2 人に対して大学生一人がサポートした。

## (2) 名刺づくりの共同作業

パソコン室に小学生が入り、指定された場所に着席した。大学生が持参した名刺入り名札を用いて、担当グループの子どもたちに自己紹介をしてから作業が始めた。

名刺作成ソフトを立ち上げ、まず名札のテンプレート（デザイン）を選択する。選んだテンプレートで、学校名、氏名、ふりがななどを「クリックパレット」で入力した。好きなイラストや図形を加えて、1 枚の名刺を完成させた。つづいて同じものを全面コピーで 10 枚作成し、専用の名刺ラベルシートに印刷した。

### 3.3 事後指導

学生に、授業の感想を Moodle に記入するように指示した。また、最終のレポート課題の 1 つに「今回の実践をもとに、今回の改善点やどのようにこの授業を発展させるか」を設定・奨励した。

## 4. まとめ

実践後の大学生の感想を、以下に示す。

- ・子どもたちは最初は緊張していたようだったが、「楽しかった」とか「名刺が作れてうれしい」などの感想が聞けて、僕自身もうれしかった。また、教えたことをどんどん吸収して行って、サポートのいらなくらい上手にパソコンを操作できるようになったので、非常に驚いた。
- ・名刺作り自体はとても楽しんでくれた様子で、友達や私たちと名刺交換をしたりして盛り上がっていたのが印象的だった。「もっと作りたい！」という声が多く聞こえたので良かったと思う。
- ・やはり子供と触れ合うことは楽しく、私自身がとても楽しむことができました。
- ・クリックなどをどうやって言ったらいいのか初めはよくわからず、私も緊張していたが、私が担



(写真 名刺を作成する児童と大学生の支援)

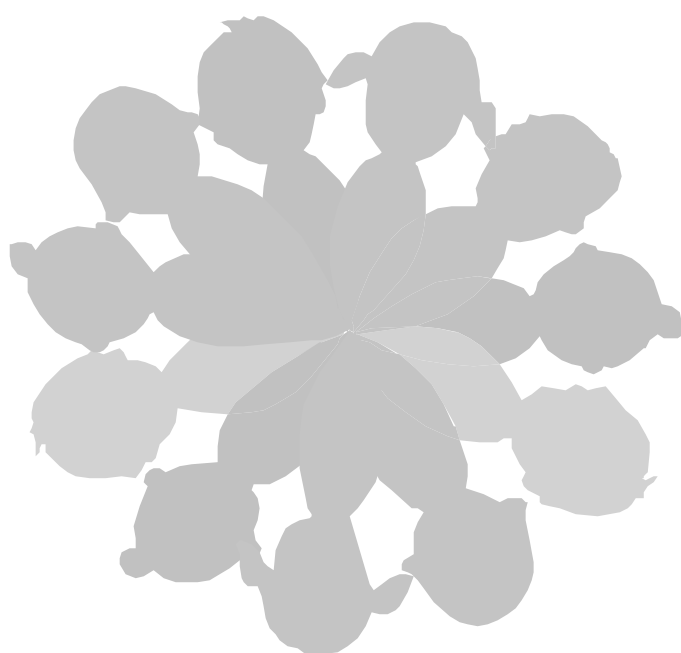
当していた子はすぐにパソコンの操作に慣れ、自分で様々なことができるようになっていったのでよかった。最後には「もう一つ作りたい！」と言ってくれたので、うれしかった。

・子供を実際に触れ合う体験はほとんどしたことがなかったので、すごくいい体験になった。

以上のように、この実践に参加できたことに対して肯定的な評価がほとんどであった。名刺が印刷できてそれを手にしたときの児童の喜びは昨年以上のものであった。名刺づくりは、単に名刺を作るだけでなく、名前の代わりに学習したことに変えることで、いろいろな学習に活用することができる。そのような活用を今後の課題としたい。

最後に、この授業実践を企画実践いただき、学生の支援の機会を与えていただいた栗真小学校、岡山均先生に感謝します。

### Ⅲ 隣接学校園からみた連携活動







# 1. 白塚幼稚園

本年度の白塚幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 生き物環境作り（カイコの飼育活動・コサージュ作り）
2. 休日参観・親子活動の企画と運営
3. 夕涼み会での「暗闇部屋」の計画と実施
4. 「食教育」の講演と調理実習、白塚ママのレシピ集作り（保護者向け）
5. 未就園児保育（びよんちゃんクラブ）の計画と運営
6. 幼小連携活動について考える
7. 大学キャンパスを活用した木の实拾い
8. 子育て講演会（保護者向け）

以下に活動報告を示す。

## 1. 生き物環境作り（カイコの飼育活動・コサージュ作り）

### 河崎道夫先生と幼児教育コース4年生

#### 【目的】

1. カイコの継続的な飼育活動を通して、成長を観察したり、孵化や産卵などの命のつながりについて考えたりする。
2. 子どもたちが飼育したカイコの繭を利用して、修了式のコサージュを作成する。

#### 【概要】

2010年5月20日に、カイコの卵を、冷蔵庫から出し、卵の様子を観察した。（卵は、昨年飼育していたカイコガが産んだものを冷蔵庫で保存しておいた。）今年初めて、冷蔵保存していた卵を孵したが、本来ならば24時間位で孵るはずであるところ、日中の気温が上がらず、卵が孵り始めるのに2週間程かかった。子どもたちも「これが本当にカイコの卵なの？」と疑問を持ち出す姿も見られた。この日から子どもたちは毎日カイコの様子を観察し、観察記録を残していった。

6月に入り卵が孵化し始めると、教師が用意したり、学生が大学構内で採ってきてくれたりした桑の葉を、当番の子どもたちが中心となり、カイコの生長に応じた大きさに切ってあげるようになった。虫嫌いの子どもも、自分があげた葉をカイコがむしゃむしゃ食べる様子を見ると、かわいく思うようになり、そっと手にのせてみるようになった。また、桑の葉を園近くの神社まで、学生や子どもたちと一緒に採りに行くこともあった。

7月になると、カイコが口から糸を吐き、繭を作り始めた。子どもたちは、昨日まで元気に葉を食べていたカイコが急に動かなくなった様子を見て、「元気がないよ。」「カイコが寝てしまったよ。おうい、起きろ。」などと、不思議そうに観察していた。また、カイコの糸を見た子どもが「クモがいるんじゃないか。」と言ったり、繭を見た子どもが「白いフワフワの卵みたいなのがある。」と言ったりする姿があった。教師は、「カイコはどこにいったのだろうね。」と問いかけながら、その様子を見守った。図鑑で調べた子どもが「カイコはこの中（繭）にいる。」と周りの子どもに教え、周りの子も感心しながら聞いている姿が見られた。

そのうち、白くきれいな繭に茶色い汚れが見られた。驚いた子どもたちは、しばらくすると繭から出てきたカイコガを発見した。その真っ白で、羽根をバタつかせる様子を興味深く見て、「飛んでいく！」とふたを閉めていた。

その後、産卵させるものと、コサージュ用の繭とに分けた。産卵させたものは来年のために冷蔵保存し、コサージュ用の繭は教師が夏休みに天日干ししておいた。

10月から、保護者と学生が共に、繭を使ったコサージュ作りを始めた。

1月に、年長児に好きな色を聞き、保護者がその色の染料を用意しておいた。子どもたちは、学生、

保護者に教えてもらいながら、あらかじめ用意してもらった染料液に繭をつけ、染めていった。

2月に、保護者と学生が、コサージュを仕上げる予定である。

#### 【成果と課題】

- ・ 成長が著しいカイコを継続的に飼育・観察することにより、子どもたちは飽きることなく、日々驚いたり、発見したりしていた。また、桑の葉を成長に応じてハサミで切るなどしながら毎日欠かさず与えたり、カイコに声をかけながら育てたりするなど、子どもなりにカイコの成長を願って、

大切にしようとする姿が見られた。

- ・ 園児が学生と桑の葉を園の近くに採りに行った、葉を採ってきてもらったりして触れ合う中で、園児が学生にカイコの成長を知らせようとする姿や、それを興味深く聞こうとする学生の姿が見られた。
- ・ 修了式で子どもたちが着けるためのコサージュ作りでは、カイコの飼育に関わった学生が、園児の保護者と共に作業することで、子どもに対する親の思いや願いに触れることができたと思う。

## 2. 休日参観・親子活動の企画と運営

### 滝口圭子先生と幼児教育コース3年生・1年生

#### 【目的】

- ・ 休日参観で、親子の触れ合いを持ちながら体を動かして楽しく遊ぶ。

#### 【概要】

2010年6月12日（土）に、土曜（休日）参観を行う。その内容として、親子で体を動かして遊ぶ機会を持つことをテーマにかかげる。学生は、3年生が中心となり、いくつかの案を持って、事前打ち合わせに来た。教師たちは、学生に自分のクラスの子どもたちの様子を話し、配慮してほしいことや、こんなところで学生の力を貸して欲しいといった希望を聞いてもらった。その時、学生の持参した案を園の子どもたちに照らし合わせて、子どもも大人も一緒に楽しめる内容にしていこうと思い、学生に意見や感想を述べた。

参観日当日、年長児8名はどの子も昨年の経験があり、学生の進行に自ずとついて行こうとする姿がどの子にも見られた。園生活によく慣れてきた頃の年少児は、初めて経験する場や雰囲気についていけず、壁際から離れられない子どももあり、もちろん子どもに合わせて親の方も動けずにいる組がいくつか見られた。教師は親を動かせば子どももついて行くだらうと思い、とにかく親に声をかけ、学生にもその場その場で「あの保護者にはこうして欲し

い」「兄弟で在園している親子については、交代で母親が子どもについてやれるよう、子どもを見て欲しい」といった指示を出す。学生たちは、緊張感があるだろう中、1年生も一生懸命に動き対応してくれた。後半、みんなでつながり遊ぶところでは、

全部の親子が参加し、大きな輪ができたところで子どもたちは「うわー！」と声を上げ、大喜びする。体育館から、園舎の方への移動時も、一人（一組）ずつ、学生さんに見送ってもらい、子どもたちの恥ずかしそうではあるけれど、満面の笑みがみられた。親子で楽しく触れ合い、思い出に残る、楽しい休日になった。



### 【成果と課題】

学生との事前打ち合わせで、今年度の園児と家庭の様子を伝えておくことができ、当日、教師の声かけで即、学生に配慮ある行動をとってもらうことができた。教師の願いとして、どの親子にも楽しく、心に残る時間を過ごして欲しい思いがある。それを、細かい部分まで学生に話すことで、どの親子も安心して取り組める環境を作っていく結果になったと思う。

・年少児親子にとってみれば、入園後まだ、日が浅く、このような参観では緊張もあり、恥ずかしさもあり、一歩がなかなか踏み出せない。その雰囲気

壊して、子どもが進行する学生の方に（中央に）、進み出ていけるような一工夫が必要であった。親が動けば、子どもは自然と引っ張られ動くはずだから。今後の課題として、進行する学生、今回のように中央に進み出られない親子を導く学生、後押しする教師と、チームワークよく進めていける役割分担を綿密に事前打ち合わせするようにしたい。この点をクリアできれば、家庭間の交流といったねらいに近づけたと思う。

## 3. 夕涼み会での「暗闇部屋」の計画と実施

### 【目的】

- ・夕涼み会のコーナーで、子どもも大人も心躍らせて、自ら体験するものを作る。
- ・子どもたちが自分の気持ちに折り合いをつけて、暗闇部屋に挑戦することを楽しむ。

### 【概要】

昨年度も実施していただき、大盛況であった「暗闇部屋」。今年度も2010年7月3日（土）の夕涼み会で「暗闇部屋」を計画・実施してもらった。

6月、子どもたちに慣れてもらうために、学生が数回にわかれて、幼稚園に来て子どもたちと遊ぶ機会を持つ。子どもたちはこの時のことをよく覚えていて、実際、夕涼み会当日の準備時に「あっ、〇〇お姉ちゃんだ！」と、学生の姿を見つける姿があった。昨年経験があるため、年長児は一人ひとりが「今年は一人で最初から、暗闇部屋入るぞ！」「僕なんか、100回入ったるんや！」と、暗闇部屋に期待し、楽しみに待つ子どもたちの様子が見られた。

暗闇部屋作製時、子ども達は保育中であったため、遊戯室前を通る時に暗闇部屋が出来上がっていく過程にも関心を示し、学生に声をかけながら、中をのぞかせてもらうこともあった。

夕方、夏祭り開始とともに、真っ先に暗闇部屋に

### 河崎道夫先生と幼児教育コース1年生

とんでいく子もいた。子どもたちがあまりにわくわく・どきどき感いっぱい、楽しみながら入っていくので、保護者も下の小さい子どもを連れて入っていく姿もあった。

夕涼み会の時間だけ楽しめる、入ることができる暗闇部屋。子どもたちにとって、大変スリルがあり、貴重な体験となった。

### 【成果と課題】

・「暗闇」というだけの空間が、子どもたちにとってこんなにも心動かされ、魅力的なものであることを今年も考えさせられました。今年も大盛況で、夕涼み会の定番コーナーになりそうだ。

・学生が全て、計画・準備・実施しており、ただ暗闇という空間を作る大がかりな作業を、学生全員で朝から取りかかっている様子を、となりで気にしながら見る子どもたちとの関係にも意味があることに気づいた。

・夕涼み会という保護者参加の行事で、その中のコーナーであるため、夕涼み会終了後の降園に間に合うよう、保護者たちも学生に混じり暗闇部屋の片付けをする姿があった。保護者たちの感謝の気持ちが学生にも伝わっているはずである。

#### 4. 「食教育」の講演と調理実習、白塚ママのレシピ集作り（保護者向け）

磯部由香先生

##### 【目的】

- ・いつも何気なく摂っている食について、考える機会をもつ。
- ・手作りの調理をする事で、親子の触れ合いや調理の楽しさに気付く。

##### 【概要】



(講演会の様子)

2010年6月24日「食べることは生きること」と題して磯部先生より保護者向けに講演をしていただいた。

パワーポイントを使ってお話していただいたので、視覚・聴覚にうたえて理解しやすかった。また、アレルギーの子の食事について、偏食について等の質問にもきめ細やかに応じていただき、いい機会をもってもらったと保護者からの声があった。

その後白塚小学校の調理室を借りて、磯部先生指導のもと保護者が「手作り餃子作り」に挑戦した。餃子の包みには、年長児も参加させてもらった。本物の材料を使っての経験という事で、子どもたちはいつになく、生き生きと取り組んでいた。

また、いろいろ餃子のレシピで子どもたちが好きなソーセージやシーチキンを使って調理したこともあり、家で再び作ってみたとの声も多く聞かれた。

12月白塚ママのレンジ・フライパン・で作るレシピ（おやつ編）を作成することになった。好評だった20年度の、お弁当レシピ・21年度の朝ごはんレシピに引き続き、保護者・職員の原稿・写真ができ、もうすぐできあがる予定。



(調理実習の様子)

##### 【成果と課題】

保護者は勿論職員にとっても、日常当たり前のようにとっている食について、改めて考えるよい機会になった。

外食産業の発達や冷凍食品に頼らず、家庭の味を子どもたちにも伝えていけるように努力したい。

小さい子のいる保護者は、調理実習に参加できないことが課題として残った。

## 5. 未就園児保育（ぴよんちゃんクラブ）の計画と運営

滝口圭子先生と幼児教育コース4年生

### 【目的】

- ・白塚地区の子育て支援としての機能の充実を図る。
- ・ぴよんちゃんクラブ（子育てサークル）を拡充する。

### 【概要】

毎月火曜日（園行事・休日を除く）に9時30分～11時迄未就園の子どもたちとその保護者に幼稚園に来てもらって、一緒に遊んだり子育てについて話したりする。

ぴよんちゃんクラブの一日

- 9：30 ・ お家の人と一緒に幼稚園やってくる。
- ・ 靴を履き替える
  - ・ お便りのノートにシールを貼る
  - ・ お家の人と一緒に、部屋や園庭の遊具で遊ぶ
- 10：40 ・ 片づけをする
- ・手を洗ったり、トイレに行ったりする
  - ・みんな一緒に遊ぶ
- 11：00 ・ さよならのあいさつをして帰る
- ・毎月その月に生まれた子の誕生会をする。
- 11：00～・お母さん先生・三重大生の方・職員で反省会をする

三重大の学生さん達の力を借りて、受付けや保育室の環境づくり、また季節に応じて園庭の活動を充実したり、落ち葉を集めてきてもらって落ち葉のプール遊びをしたり、クリスマス会をより楽しくするため、いろんなアイデアを出してもらった。



（クリスマス会の様子）

ぴよんちゃんクラブの保護者の方も、お母さん先生や職員に子育ての悩みや日常の家庭生活について話す事（井戸端会議）で、ストレスを発散したり、子育ての悩みを解消したりする姿が見られた。

反省会では、お母さん先生や三重大生の感想やその日の反省を聞いたり、お母さん先生の子育てに対する思いを聞き、学ぶ事も多くあった。

### 【成果と課題】

三重大生の若さ溢れるエネルギーやアイデアを借りて、白塚地区の子育て支援を楽しくまた充実したものとして、すすめる事ができた。

反省会は十分に時間を取ることができた。朝の時間は短いので、打ち合わせのための時間を有効利用をする事が課題である。



（落ち葉のプール）

## 6. 幼小連携活動について考える

### 林未知子先生と家政教育コース4年生

#### 【目的】

白塚幼稚園が白塚小学校と続けている連携活動について、その意味と今後のあり方について考える。

#### 【概要】

学生が、白塚幼稚園が白塚小学校とどんな連携活動をしているのかを尋ねてきた。連携活動をする日には、学生も見学し子ども達の様子を記録した。また、11月に学生が用意したアンケートを、幼稚園・小学校の全教員を対象に実施した。



(6年生と地域の行事やぶねりを一緒に)



(2年生とサツマイモの収穫)



(4年生と一緒に凧上げ)



(5年生の計画してくれたゲームを楽しむ)



(3年生と落ち葉の掃除)

#### 【成果と課題】

アンケートの結果、以下のような成果と課題がみえてきた。

連携することで、小学生には園児を思いやり、助けようという気持ちが生まれること。また、幼稚園児は小学校が身近に感じられるとともに、小学生の言動に触れることで、将来の小学校生活に見通しをもつことができる。

少人数の園児に対して、小学校は6学年で人数も多いため、連携する日程や活動内容の吟味がたいへんであるという課題もある。今後も、園児や小学生の実態に合った、意義のある連携活動のあり方が求められる。

## 7. 大学キャンパスを活用した木の実拾い

平山大輔先生と理科教育コースの学生、幼児教育コースの学生

### 【目的】

大学キャンパス内の木の実拾いや植物観察を通して、身近な自然の多様性に触れる。

### 【概要】

2010年11月5日に、北立誠幼稚園との交流を兼ねて三重大学キャンパスで木の実拾いをした。

平山先生に教えていただきながらマテバシイやカシの木などのドングリや松ボックリ、プラタナスの実などを拾い集めたり、イチヨウの木の下でぎんなんを見つけ、「くさい。」と強烈なおいに声を上げたり、草むらに入り込んで体中にヌスビトハギなどの「くつつきむし」を付けて来た友だちの姿を見て驚いたり、キャンパスの自然を存分に楽しんでいった。



その後、キャンパス内で北立誠幼稚園の園児、大学生たちといっしょに弁当を食べながら交流した。

昼食後、近くのバス停まで、平山先生と学生さんに見送っていただき、子どもたちはたくさんのおみやげ（拾った木の実）袋を持って園に帰る。

### 【成果と課題】

- ・大学キャンパスにはたくさんの種類の木の実があり、子どもたちはそれを拾ったり観察したりして、楽しく活動できた。
- ・多くの学生が参加しており、活動中に園児の安全を見守ってくれたり、声かけをしてくれたりしたことで、より活動を楽しむことができたと思う。
- ・拾い集めてきたマツボックリやドングリを利用してリース作りに飾り付けする園児の姿が見られた。
- ・その後、園（小学校と運動場・園庭を共有）で、ドングリを見つけてきては、大学キャンパスで拾った時のことを思い出し「あのときと同じドングリ見つけた」と、形の違うドングリを一つずつ確かめる姿が見られた。
- ・来園した事のある学生（お姉さん・お兄さん）が日頃通っている大学キャンパスに入ることができて、子どもたちは尊敬の思いを持つ事にもつながった。

## 8. 子育て講演会（保護者向け）

中西正治先生

### 【目的】

・保護者が子どもの進級・進学を控え、これからどのように子どもと向き合っていくかを考える機会にする。

・父親（男性）の立場であり、小中学校教師の経験のある中西先生の子育て体験談を聴くことで、保護者の子育てに幅を持たせたい。

### 【概要】

先生の豊かな体験の中からでてくるものや温かい

人柄が伝わってくる話し方は、聴いている保護者や職員に子育てで大切にすべき事が、しっかり伝わってきた。また、質問形式で話されたので、聴き手にも適度な緊張感があったり、ユーモアあり、真剣に聴き入ったりで、1時間余りの時間を有意義に過ごす事ができた。

乳幼児期は、遊びの中で育つものが沢山ある。基礎体力や指先を動かす事で脳の発達を促したり、言葉を豊富にしたり等などである。十分に体を動かし



て遊ぶことが大切である。

家庭の中で子どもを十分に愛し、スキンシップをはかりながら、基本的な事・価値観・善悪の判断等を伝えていく必要がある。小さい時から親の感じている事思っている事等しっかりと伝えていく事も大切にしていきたい。

子育てでは、親子が友達関係をつくることではない。友達関係には、妥協があるが、親子関係では妥協ではなく、信頼関係を結ぶことである。信頼関係を築く中で、子どもに対して衣食住をしっかりと保障する必要がある。親は子どもが安定して過ごせる家庭を築くように努力する必要がある。

褒めて育てる。子どもに自己肯定感をしっかりとつける意味からも、存在をしっかりと認め、次もがんばろうとする気持ち・意欲につながるようにしたい。

兄弟姉妹は、比較して育ててはいけない。一人ひとりの人格を大切にしながら育てていくようにしたい。

比較して子育てをすると、兄弟関係は勿論親子関係も悪い影響を及ぼすことになる。

担任の批判は、しないようにすることが大切である。子どもと先生の信頼関係がくずれ、学習しなくなる原因につながる事もある。苦情は直接担任に話すこと。

子どもを塾に入れて安心するのではなく、家庭で学習の習慣が身につくように、安心感がもてるような家庭をつくり、繰り返し習慣を身につけるようにすることが大切である。

等など子どもが小・中学校と成長するうえで、大切にしなければいけない事を多く学んだ。

#### 【成果と課題】

講演会の後学級会学級懇談会が行われた。その中で、保護者より具体的で分かりやすいお話だったと好評だった。

講演会をする場合、在園児の妹や弟の託児をどうするかは課題である。

## 2. 北立誠幼稚園

本年度の北立誠幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 生き物とのかかわりを通して
2. ものづくり出前授業
3. 親子活動
4. 大学キャンパスを活用した自然観察
5. 毛筆体験活動
6. 未就園児の遊ぶ会 運営支援

以下に活動報告を示す。

### 1. 生き物とのかかわりを通して —ようこそ うさぎちゃん！—

#### 【目的】

幼児たちに親しみがあがり、触れ合っかかわることができるうさぎを飼育することで、幼児の心を豊かにしたり、身近な生き物を大切にする気持ちを培ったりする。

#### 【概要】

月日	内容
5月11日	うさぎの飼育開始
5月13日	園児とうさぎの出会い 年長児による名前付け
5月14日	後藤先生より、園児たちにうさぎの飼い方の話～紙芝居の読み聞かせや心音を聞く～
	現在、幼稚園で飼育中

5月11日にうさぎをいただき、うさぎが園の環境に慣れた2日後に園児たちと対面した。園児たちは、歓声を上げて喜び、うさぎを迎えた。そして、年長児がうさぎに「ちょこちゃん」と名付けた。自分たちで名前を付けることは“自分たちの園のうさぎ”という親しみの気持ちを持ち、大切に接していくことに繋がる。

次の日、後藤先生から、紙芝居を使ってうさぎの性質や特徴、かかわり方や世話の仕方を全園児に教えてもらった。園児たちは真剣な表情で話を聞き、その表情から“これから自分たちがうさぎを大切にするんだ”という気持ちが感じられた。また、うさぎの心音を聞かせてもらい、園児たちは“うさぎも自分たちと同じ、生きているんだ”ということを実感している様子であった。

#### 【成果】

- 園児たちは、うさぎに親しみの気持ちを込めて、話しかけたり自分が作った物や絵を見せたり

していた。また、うさぎのふわふわとした柔らかい感触や撫でられてもおとなしくしていることから、園児たちにとって愛おしい存在になった。うさぎとのかかわりは、ほっと癒されるひとときになっている。

- 一人の年長児が、うさぎに触れながら歌を口ずさんだ。その歌が「ちょこちゃんの歌」として園全体に広がった。園児たちの生活の中で、うさぎのちょこちゃんの存在が大きくなった。そして、生き物を大切にする気持ちが育まれ、園児の生活が豊かになった。
- 来年度の4月に新入園児を迎えるにあたり、うさぎの存在が、入園当初の緊張や不安な気持ちを和らげるであろうことを期待する。



## 2. ものづくり出前授業 ―ちょこちゃんのサークルを作ろう―

### 【目的】

ものづくりの興味関心は幼い頃から培われるため、幼稚園生活においてのものづくり体験は大切である。そこで、園児たちにとって身近な飼育物である「うさぎのちょこちゃん」のために、いろいろな工具や素材を使い、サークル作りを行うことにした。

### 【概要】

月日	内容
5月26日	自己紹介・年間計画・内容打ち合わせ
6月2日	指導案検討
6月9日	園児と学生の顔合わせ
6月16日	サークル作り・反省会

園児たちが自発的にちょこちゃんのためにサークルを作りたいという気持ちになるように教師から投げかけをした。園児たちから、「木の家がいい」「釘を打って作ろう」「自分たちも一緒に入ってちょこちゃんと遊べる家がいい」「家の壁に絵を飾って、ちょこちゃんに喜んでもらいたい」等の声が上がった。“させられる活動”ではなく“自分たちがしたい活動”として進めていくことは、大きな意欲につながり、園児たちは、少し困難な事や根気がいる作業に対しても一生懸命に取り組む。活動に入る前に子どもたちの気持ちが繋がっていくような配慮が、その後大きく影響していくと思われる。

6月16日に、北立誠幼稚園遊戯室に於いてサークル作りを行った。どの園児も初めて扱う玄翁や釘、きりといった道具や用具に目を輝かせていた。学生が準備してくれた釘打ちの練習用の木材に慎重に釘を打ちつけていった。玄翁の扱い方や力の入れ方など戸惑っている園児に対し、学生が一对一で丁寧に根気よく接してくれたため、園児たちも次第に慣れていき、笑顔が見られた。

その後、自分たちが描いた壁掛けの絵を打ちつ

けた。サークルが出来あがってくると「早くちょこちゃんに入ってもらいたい」という期待の声が聞かれた。

実際にちょこちゃんをサークルに入れた時には、園児たちの得意そうな表情や満足気な様子が見られ、“釘を打つのは難しかったけれど、ちょこちゃんのためにがんばった”という気持ちが感じられた。

### 【成果】

- 今回の活動を通し、園児たちは、日頃目にしたり扱ったりすることがない道具や用具を知り、それらを使って製作したことげで、ものづくりの興味関心が大きく膨らんだと思われる。
- 11月に再び教師と園児で、玄翁や釘を使って木工製作を行った。園児たちは、6月の出前授業でしっかりと扱い方を教えてもらったことを十分に活かし、積極的に作っていくことができた。このことは、大きな成果であった。



### 3. 親子活動—どろだんごを作ってみよう—

#### 【目的】

「どろだんご」作りは、園児たちが日頃から楽しんできた遊びである。その遊びを親子で楽しむことで、園児たちの関心を更に深めると共に、保護者にも興味をもってもらう機会とする。また、大学の先生に作り方を詳しく教えてもらうことにより、新たに気付いたり試したり考えたりする体験の場となるようにする。

#### 【概要】

10月は気候が良く、園児たちは戸外での様々な遊びを楽しんでおり、そのひとつが「どろだんご」であった。その遊びを家の人と一緒にすることや、大学からどろだんご作りの名人の先生に来ていただくことを知らせると、園児たちはとても喜んでいました。

事前に、園庭のどの辺りの土や砂を使うと良いか、大学の河崎先生と打ち合わせをし、粒の大きさの違う砂を3種類程、園児と教師と一緒に集めておいた。そうすることで、園児たちの活動に対する期待が高まった。

10月18日に、北立誠幼稚園の園庭に於いて、親子活動を行った。初めに、河崎先生からピカピカに光っているどろだんごを見せてもらうと、親子共に大変興味をもち、活動を楽しみにする気持ちが深まったようであった。その後、河崎先生が実際にどろだんごを作っていく様子を見ながら、作り方の行程を聞き、親子で活動を始めた。

水と土を混ぜてだんごを作り、その上から感触の違う砂を徐々にまぶしていき、指で撫でて形作っていくことを、園児たちは集中して楽しんでいました。また、保護者もどろだんご作りに一生懸命で、夢中になって楽しむ姿が見られた。

活動の中で、園児と保護者、園児たち同士、保護者同士が作り方を尋ね合ったり、どろだんごができつつある様子を見せ合ったり、分からないことを河崎先生に尋ねたりして、かかわる姿があった。また、作っている途中でだんごが崩れてしま

ったり、ひびが入ったりすることもあった。しかし、壊れては挑戦し、幾つも幾つも作っていく中で、満足いくものができるというどろだんご作りならではのおもしろさを河崎先生から聞くことができた。

#### 【成果と課題】

- 園児たちが、どろだんご作りを更に楽しむ姿が見られるようになった。途中でだんごが壊れても、繰り返し挑戦し、納得のいくまで作ろうとする意欲が感じられた。一度の活動で終わるのではなく、遊び続ける中で、園児たちの経験が深まったのではないかと。
- 年少児が年長児の姿を真似てだんごを作ろうとしたり、年少児が困っていると年長児が教えたりする姿があった。異年齢間で遊びの刺激を受けたり、優しくかかわったりする様子が自然に見られ、良かったと思う。
- 今回の活動を通して、遊びの大切さ（子どもたちが遊びを楽しんでいく過程で、気付きや学び、意欲、根気などを身に付けていくこと）を保護者に知ってもらうことができた。また、一緒にどろだんごを作ったことにより、遊びの大切さを分かってもらえたのではないかと思う。
- 保護者には、今後もいろいろな機会をとらえて子どもたちの遊びの様子を知らせることが大切だと思われる。遊びの中で子どもたちが様々な感情体験をしたり、思考力や意欲を身に付けていったりすることを知らせていきたい。



#### 4. 大学キャンパスを活用した自然観察 ―木の実を探そう―

##### 【目的】

自然豊かな三重大キャンパスで、木の実拾いや植物観察をして、秋の自然物に親しむ。

##### 【概要】

(1) 期日：11月5日(金)

(2) 日程：10:00～集合

木の実拾い、自然観察

11:30～昼食

13:30 解散

(3) 参加者

○白塚幼稚園、北立誠幼稚園合同

○三重大学

(教員) 平山先生(理科教育)

河崎先生(幼児教育)

滝口先生(幼児教育)

(学生) 理科教育 4年3名、院生2名

幼児教育 4年6名、3年5名、

1年1名

学校教育 院生1名

##### 【成果と課題】

○ 平山先生に案内していただき、子どもたちは楽しく構内の様々な木の実を観察、採集することが出来た。

先生に教えてもらっている時、特に年長児は、専門的な言葉を耳にすると、自分が大きくなった気分になるのか、いつも以上に植物に興味・関心が高まり、普段見過ごしてしまうような小さなことにも気づいたり、積極的に質問をしたりする姿が見られた。専門知識をもった先生と接することで、より大きな刺激を受け、豊かな体験の場となった。

○ 子どもたちは、いろいろな植物を観察したり、拾ったりする中で、“これは何だろう”“この形、おもしろいな”“鳥が実を食べて、種を遠くに運んでくれるんだって。鳥を見つけ易いように真っ赤な色をしているのかな”“これとこれはよく似ているけど、同じ仲間なのかな”などと、

興味をもったり、教えてもらった事から更に疑問がわいたりした。幼児期には、発見したり、不思議に思ったり、疑問をもったり、感動したりするなど、心を動かせることがとても大事である。今回の活動を通して、そのような貴重な経験が出来た。

○ 豊かな自然環境に恵まれた大学キャンパスなのに、ほとんどの学生が自然物に親しんだり気付いたりしていないことに驚かされた。しかし、平山先生から丁寧に説明を受けたり、実物を見せてもらったり、植物で遊んだりする中で、学生自身もたくさんの発見や感動があり、自然のおもしろさを体験する場になった。そのおもしろさや感動を忘れず、今後、教育現場に出た時にも、子どもたちと感動を分かち合える存在であってほしい。

○ 専門教科を越え、たくさんの学生に参加してもらった。理科教育コースや学校教育コースの学生は、幼児と触れ合う機会がほとんど無いと思われるが、豊かな自然環境の中で、木の実拾いを通して自然にかかわることが出来、よい経験になったのではないだろうか。また、今回は、隣接幼稚園との交流保育の一環として、白塚幼稚園と合同で行った。多人数なので、たくさんの学生に参加してもらい、子どもたちも安心して活動することが出来た。

○ 今年度は、秋に実施したが、来年度は、違う季節にも大学に行かせてもらい、また違った経験が出来るように取り組みたい。



## 5. 毛筆体験活動 ―筆！墨！紙！で遊ぼう！―

### 【目的】

日頃、園児たちは様々な表現活動を楽しんでおり、その方法の幅を広げることは表現を豊かにすることにつながると考える。

そこで、筆と墨を使う体験を通して、筆のおもしろさを発見し、筆で表現することへの関心を高める機会とする。

### 【概要】

年長児は昨年度にも筆を使った経験があるが、年少児は初めてのため、そのことを考慮し、活動を2回に分けて行った。また、活動内容については、各学年の発達段階に応じて考えるようにした。

< 1回目 11月18日 >

テーマ：筆に慣れよう

年少児が安心して取り組めるよう、園全体で行動する時にペアとなっている年少児・年長児とが一緒に活動できるようにした。

初めに全体活動として、大学の林先生から書道用具について、園児たちに分かりやすく説明してもらった。その時に、用具の正しい扱い方、大切に使うようにすることも、きちんと知らせてもらうようにした。

続いて、年少児・年長児のペアを基にした個別活動として、紙に筆を使って線や図形、絵などを好きなように表現することを楽しんだ。年少児にとって、初めての経験であったが、気負いなく楽しんでいる園児が多かった。また、年長児は昨年度の経験があるため、意欲的に取り組む姿が見られた。

一人4枚程度、紙にかくことを楽しんだ後、グループ活動として、4人1組のグループで大きな紙に絵をかいた。園児たちは、思い思いの方向から、表現することを楽しんでいた。

個別活動、グループ活動共に、園児1名に対して学生1～2名がついて支援してもらった。

< 2回目 12月1日 >

テーマ：年少・・・筆で表現することを楽しむ

年長・・・来年の干支「う」を書く

2回目の活動は、学年別で行った。年少児は、個人活動として、好きな絵や図形などを数枚かき、その後、2～3人のグループで大きな紙に絵をかいた。場の様子に慣れ、筆で表現することを伸び伸びと楽しんでいた。年長児は「う」の文字を色紙と葉書に書くことをねらいとし、練習してから清書した。筆で文字を書くことに、真剣な表情で取り組む姿から、心地良い緊張感を感じていることが伺えた。

大学生には、1回目の活動で支援した園児と同じ子にかかわってもらうようにした。同じ学生に支援してもらうことで、個人差はあるが、園児たちも安心して活動できたと思う。

### 【成果と今後の課題】

○ 幼児期は、目新しいことに興味をもちやすい。また、林先生の分かりやすい導入によって、園児たちの関心が高まり、ほとんどの園児が筆や墨を使った活動を楽しめたと思う。表現活動について、教材の幅が広がったことは良かったと考える。

また、園児に学生から個別の支援をしてもらったことで、活動の流れがよく分かり、園児一人一人の楽しさにつながったと思われる。

○ 年齢の小さい幼児であっても、今回の活動のように、全体の場で用具の正しい扱い方、用具を大切に使うことなどを知らせてもらうことは必要である。

また、個々の園児の様子を見ながら、その都度支援していくことも、大切だと思われる。

○ 初めて出会った園児とかかわり、活動の支援をすることには、難しさもある。人とかかわりや新しい活動に戸惑いを感じる園児には、その子に合わせた配慮が必要であるため、教師がその役割を担ったり、学生にかかわり方を知らせたりするべきであったと反省する。

○ 園児は活動を楽しむことができたと思うが、学生への支援という面から考えると、難しさを感じた。参加人数が多く、それによって園児に対する個別のかかわりも可能となったが、学生への支援を心に留めた上で教師の位置、何を知らせるかについては、迷うところもあった。

教科の専門性を活かしながら、幼児教育の視点から学生への支援を考えていくことが、今後の課題である。



## 6. 未就園児の遊ぶ会「たんぽぽ会」の運営支援

### 【目的】

未就園児の遊ぶ会「たんぽぽ会」の運営支援として、幼児教育コース4年の3名の学生が参加し、一緒に遊んだり全体活動の立案、指導をしたりする。その中で、大学で培ってきた実践力をより確かなものにすると同時に、乳幼児へのかかわり方や環境設定、教材研究、保護者対応等、教師としての感性や力量を高める機会とする。

### 【概要】

#### (1) 未就園児の遊ぶ会「たんぽぽ会」

当園では、月2～3回、月曜日の午前中を中心に地域の未就園児（0歳～3歳）が保護者と共に遊ぶ会（たんぽぽ会）を実施している。

その運営は、幼稚園の担当教員と子育て支援ボランティア（お母さんボランティア、北立誠地区主任児童委員、地域の方等）が行っている。実施時間は、午前10時から午前11時30分までである。午前11時までの前半の時間は、粘土やままごと、絵画製作、積み木、砂遊び等をして親子で遊んでいる。その後、全体活動の時間となり、未就園児の発達や興味・関心を考えながら、担当教員が中心となり、ふれ合い遊びやリズム、歌、絵本の読み聞かせなどを行っている。

#### (2) 運営支援の内容

2009年度は、後期期間のみ、幼児教育コース3・4年の約30名の学生が、数名ずつ交替して参加した。親子が遊んでいる様子を観察したり、一緒に遊んだり、全体活動の一部分を担当してもらったりした。

今年度は、幼児教育コース4年の3名の学生に、年間を通じて、継続的に参加してもらった。前半の活動では、様子を見たり一緒に遊んだり、保護者対応をしてもらったりした。後半の全体活動は、学生が中心となり、活動内容の立案、指導をした。たんぽぽ会終了後は、子育て支援ボランティアの方も入り、全員でその日の反省会を実施した。

全体活動の内容は、以下の通りである。

月 日	活 動 内 容	参加者
5/11	<打ち合わせ会> 自己紹介と自己紹介シート 作成、昨年度の反省と今年 度の年間計画立案等	滝口先生 学3名 保7名 小菅
第1回 5/17	ふれあい遊び、手遊び、 絵本	学3名 保5名 小菅
第2回 5/25	ふれあい遊び、手遊び リズム、絵本	学2名 保4名 小菅
第3回 5/31	ふれあい遊び、手遊び リズム、絵本	学4名 保5名 小菅
第4回 6/15	幼稚園の友達と一緒に遊ぼう リズム、盆踊り	学0名 保4名 小菅
第5回 6/21	ふれあい遊び、体操、絵本	学3名 保4名 小菅
第6回 6/29	七夕の飾りを作ろう ふれあい遊び、歌	学2名 保4名 小菅
第7回 7/5	水遊び 手遊び、歌、絵本	学3名 保5名 小菅
第8回 7/13	水遊び 手遊び、絵本	学3名 保3名 小菅
第9回 9/13	ふれあい遊び、手遊び リズム、絵本	学0名 保3名 小菅
第10回 10/18	泥だんご作りに挑戦しよう 手遊び、リズム、絵本	学3名 保3名 小菅
第11回 10/25	手遊び、リズム、絵本	学2名 保3名 小菅
第12回 11/8	秋の自然物を使って遊ぼう 手遊び、リズム、絵本	学3名 保4名 小菅
第13回 11/15	秋の自然物を使って遊ぼう ふれあい遊び、手遊び、 リズム、絵本	学4名 保3名 小菅
第14回 11/26	作品展をみよう 手遊び、表現遊び、リズム、 エプロンシアター	学4名 保2名 小菅



第15回 12/6	クリスマス製作をしよう ふれあい遊び、手遊び、 リズム、紙芝居	学 3名 保 3名 小菅
第16回 12/15	クリスマス会 ふれあい遊び、手遊び、ペ ープサート劇、ハンドベル 演奏、リズム、歌、 サンタさんからプレゼント	滝口先生 学 7名 保 5名 小菅
第17回 1/12	お正月遊びをしよう 手遊び、リズム、絵本	学 3名 保 3名 小菅
第18回 1/31	ふれあい遊び、リズム、 絵本	学 2名 保 3名 小菅
第19回 2/7	リズム、歌、絵本	学 0名 保 3名 小菅
第20回 3/7	お別れ会	学 3名 保 6名 小菅

\*学は学生、保は子育て支援ボランティア

\*各月の最終回は、お誕生会と身体測定を実施

\*ふれあい遊び、手遊び、絵本などの詳細は、省略

### 【成果と課題】

- 未就園児の遊ぶ会に参加する子どもたちは、毎回同じであるとは限らず、開催日により参加人数に変動がある。その上、年齢にも幅がある。乳幼児期の月齢差による発達差は大変大きく、全体活動の立案や指導は難しかったが、毎回の反省を活かし、次の実践につなげることが出来た。また、年間を通して、同じ学生に参加してもらったことで、未就園児の子どもやその保護者と顔馴染になり、親しくなることが出来た。
- 大きな行事の一つであるクリスマス会は、担当教員との打ち合わせ後、全てを学生で立案、実践をした。一つ一つの出し物はもちろんのこと、それらを繋ぐ間合いや子どもの反応、準備等、十分配慮しながら実践することが出来、昨年度の経験が十分活かされていると感じた。また、学生の意欲的な姿やチームワークの良さ、一生懸命さが伝わってきた。
- “お母さんボランティアの考えも聞かせてほ

しい”という学生の希望もあり、毎回の反省会は全員で行い、その日の感想や反省、質問等を出し合った。母親の立場としての貴重な意見を聞かせてもらうことが出来、参考になったと思われる。しかし、お母さんボランティアの中には、そのことをやや負担に感じている方もあり、温度差を感じる面もあった。また、お母さんボランティアを在園児や修了児の保護者、地域の方をお願いしているので、学生からの質問や幼稚園側として学生に学んでほしい事例があっても、曖昧にしなければならないことが多々あり、上手く伝えきれないことがあった。来年度は、研修を深める意味からも、個々の事例については、学生と担当教員で話し合いの場をもつことも検討していきたい。同時に、公立幼稚園が担う地域の子育て支援の課題についても、さらに考察していきたい。

- 学生からは、「継続して参加出来たので、子どもの成長過程をより近くで感じられた」「前半の活動の中で、子どもと同じことをして遊ぶことで繋がりが出来、子どもとの距離が近くなった。そのことを全体活動の場にも活かすことが出来た」「保護者への言葉かけが難しかった。最初の一言を言う勇気をもつことが大事であることを実感した。親しくなると、保護者から子どもの家での様子も聞かせてもらえるようになり、子どもを見る視野が広がった」「初めは、年齢の小さい子どもと接することが苦手だったが、積極的にかかわり、自分自身が楽しむと、子どもも保護者も笑顔を返してくれるようになった」等の感想が出された。
- 来年度の未就園児の遊ぶ会の運営支援には、今年度、当園で教育実習をした学生にかかわってもらおう予定である。共に学び合っていきたい。



### 3. 南立誠幼稚園

本年度の南立誠幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 子育て支援 未就園児の遊ぶ会「うさぎクラブ・組」の運営と支援
2. 『生き物とのかかわりを通して』南立誠幼稚園 5歳児「安濃川での川遊び」
3. 『わくわく！どきどき！はらはら！のりのり！お家の人と動物ごっこ』

南立誠幼稚園「日曜参観 親子での運動遊び」

4. 『キャスターで遊ぼう』南立誠幼稚園 5歳児「キャスターを使った運動遊び」

以下に活動報告を示す。

#### 1. 子育て支援 未就園児の遊ぶ会「うさぎクラブ・組」の運営と支援 南立誠幼稚園



平成22年5月11日～平成23年3月9日まで  
滝口圭子先生・三重大学学生 伊藤・森・藤岡  
保護者ボランティア・主任児童委員・園長

##### 【目的】

\*地域子育て支援に、学生が未就園児や保護者や地域の人、教師と関わる中で、幼児や保護者理解、現場に即した活動内容の研修向上につなげると共に、園として、子育て支援の充実を図る。

##### 【概要】

・毎月第1・2・3水曜日に行う子育て支援(未就園児の会)「うさぎクラブ・組」に保護者ボランティア、主任児童委員と一緒に三重大学教育学部の3人の学生(伊藤さん・森さん・藤岡さん)がかかわっていただいた。第1回目の打ち合わせ会では、それぞれの紹介カードを園で用意し、互いを紹介することで親睦や理解を深めることができた。

10:30～11:30までの自由に遊ぶ時間では、0～3歳までの未就園児やその保護者と積み木や・粘土・おままごとのコーナー等で、親子で遊んでいる様子を見たり一緒に遊んだり話をしたりしてもらった。

11:00～11:30までのみんなで楽しむ活動では学生が中心となり計画を立て、毎回、体操やリズム遊び、歌やパネルシアター、絵本など、園ボランティアや主任児童委員の方と一緒にしてもらった。

終了後の反省会では、保護者ボランティア、地域児童委員や園長と、子どものこと保護者のこと、子育て支援のこと、指導内容などについてそれぞれの立場で積極的に意見交換をしながら交流を深めることができた。

##### <終了後に話し合った主なこととしては>

・始まった当初は、まだなれていないお子さんやお母さんがみえるので、友達と直接手をつないだりじゃんけんしたりするなどの活動は少し無理があったのでは、もっと親子で触れ合ったり、おかあさんや先生と一緒に手遊び等で楽しい雰囲気を感じられるものがよかったのではないかなどと保護者の立場から具体的な意見がでた。

・0～3歳は繰り返すを楽しむ時期なので、最初にする体操、リズム、最後の歌など決めて安心してできるものを計画していくと良い。など、児童委員の今までの経験も生かしての学生との意見交換ができた。

・それを受けて、最初に「サンサン体操」を、終わりに「バイバイバイ」のリズムをするなど、うさぎクラブ・組のテーマ曲として決めておくことで、参加する幼児や保護者に分かりやすく親しみやすいものとなった。

・ボランティアや学生と一緒に進めていくには、

打ち合わせが必要ということで、前日に保護者ボランティアが会場を準備する時に、園長が中に入って打ち合わせをしていくことになった。

・ピアノの弾き方など、地域の児童委員（ピアノ教師）や保護者が指導してくれ、子育て支援や学生支援を自分たちのこととして考えてくれている様子がありがたかった。

・保護者より学生さんの緊張感が伝わってくる。一生懸命さがよい。子どもたちが先生やお母さん方を見て一生懸命真似ようとしている姿に感動した。歌・踊り等いろいろと前回と違ったものもありよかった。という評価も頂き、学生にとっての励みとなった。



・話し合う機会を得ることは、「下の子をボランティアが抱いてあげることで、おかあさんがしっかりと子どもとかかわることができる」というボランティア自身の良さを再確認できる場ともなった。

・学生より事前にうさぎクラブ・組のチラシを作り印刷をして保護者に当日何をするのか知らせ、歌や手遊びの歌詞を書いて渡しておくと一緒に楽しんでもらいやすいとの提案があった。

このことで他のボランティアの方にも当日の内容が伝わりやすく協力してもらいやすくなった。しかし、園にて至急に印刷するなど、内容等も含めて計画的実施や時間的余裕が課題となった。

#### 【成果と課題】

・学生は、子どもと同じように粘土をしたり表情や様子をみたり声をかけ関わる中で、幼児や保護者と親しくなっていくことができた様に思う。また、事後の反省会では、地域児童委員や園保護者の方々と話し合う場が持てたことで、いろいろな

世代とのコミュニケーションがとれ、気軽に話せるようになった。

・反省したことを生かす、保護者や子どもの希望なども聞いて内容を計画し充実していくといったように、課題意識を持ってみんなで創意工夫することができた。学生は、大学内の落ち葉を集めての落ち葉プールや、クリスマス会での子どもたちへの帽子作りなど、新しい新鮮な発想で子どもたちが喜ぶものを創意工夫することができた。このことは、実力をつけることや将来への自信につながるのではないかな。



・学生、保護者、地域民生委員、園長で話し合い力を合わせることでより楽しく豊かな会となり、喜んでもらうことができた。また、それぞれの立場で学び合うことが多くあった。

・幼稚園の職員が少ない中、新鮮な目で物事をとらえ子どもたちと関わる様子には学ぶところがあった。意見を真摯に受け止めて次につないでいくことの大切さを感じ取ってもらえたのではないかなと思う。

・事前事後の話し合う時間の確保が難しかった。このことが次につないでいくことや関係者との信頼関係につながる大切なこととなるので、今後も計画的に進めていけるように努力していきたい。



## 2. 『生き物とのかかわりを通して』南立誠幼稚園5歳児「安濃川での川遊び」

### 【目的】

当園では、毎年、年長児が幼稚園から、歩いて10分ほどにある安濃川に園外保育に出かけ、川遊びを行っている。今年は、三重大学の後藤先生、学生さんにも一緒に同行していただき、魚やカニなどの採集や観察をし、地域での身近な生き物とのかかわりを通して、自然に親しみや、興味関心が持てるようにする。

### 【概要】

平成22年5月25日（打ち合わせ）

平成22年6月10日9:30～

南立誠幼稚園5歳児14名

後藤太一郎先生、三重大学生2名、地域ボランティア栗本さん、園長、担任、養護教諭

幼児は、教師たちと共に、園から安濃川堤防まで徒歩で出かけた。入水の範囲、教師たちのそばから遠く離れないことなど、注意事項を確認し、安全に川遊びができるよう配慮した。

ちょうど干潮時間と重なり、川のところどころに潮だまりが、出来ていたので、幼児たちは、持参したたもを使って、ハゼなどの小さな川魚や、かに、などを採集することができた。



また、採れた小さな魚やカニの名前をすぐに大学生や、後藤先生に尋ねたり、どんなところにたくさんいるのかなど、観察する中で気付いたり、興味を持ったりする幼児の姿が見られた。魚の泳ぐ速さに驚いたり、堤防のコンクリートの細い小さな隙間からカニが出てくる姿に興味を持つ姿などが見られた。

後藤先生に「サワガニ」について、詳しく教え

ていただいたことは、幼児たちにとってとても興味深かったようで、園に戻ってからもしっと観察する姿が見られた。



### 【成果と課題】

直接的な体験を通して、生き物に触れ、興味を持ったり親しみを感じたりする貴重な経験となった。後藤先生、大学生の方に行っていただき、指導していただいたことで、その場で子どもたちの感じたことに共感していただいたり、わからないことにすぐに答えていただくことができよかった。

川遊びの後、採ってきた魚やカニなどを、クラスでも飼育することになり、その後も観察を続けた。図鑑を見て、名前を調べたり、何を食べるかなどを調べたりする幼児の姿が見られた。

今後は、生き物を通して、幼児の興味関心が深めていけるような活動を、継続的に連携できるような計画していきたいと考えている。

### 3. 『わくわく！どきどき！はらはら！のりのり！お家の人と動物ごっこ』

南立誠幼稚園 4, 5 歳児「日曜参観 親子での運動遊び」

#### 【目的】

日曜参観の親子活動において、親子での触れ合い運動遊びを行いたいと考えた。各家庭に『うちのひとと遊ぼう』のポスターを配布したところ、家庭でもやってみたといった声も聞かれ、興味や関心を持っている様子が伺えたことから、ポスターに掲載されている動きを取り入れた親子での運動遊び、触れ合い遊びを、幼稚園での親子活動に取り入れ、楽しいひとときを過ごせるようにする。

#### 【概要】

5月18日 子どもたちの様子を参観

5月20日 7月27日 打ち合わせ 反省会

6月20日 9:00～10:30

南立誠幼稚園遊戯室にて

三重大学生9名 岡野先生

4, 5歳児21名 保護者21名 教師5名

「動物園に行こう」では、動物になって親子であらいぐま、かめ、うま、ペンギン、白鳥、ぶたになって遊んだ。

「おおかみがきたぞー」では、おおかみに扮した大学生が子どもたちの子ブタを食べにくるので、親ブタは、力を合わせておおかみから、子どもたちを守るというスリルのあるゲームを楽しんだ。

「ジャングルポケット」のリズム遊びをして、最後は、コアラの親子になって、ぎゅっと抱きしめあい、うつ伏せになった子どもたちを親がパタパタと優しくたたくようにして、触れ合いを楽しんだ。



#### 【成果と課題】

親子での触れ合い遊びや運動遊びは、子どもたちにとっては、遊びの中で体を預けたり、抱っこしてもらったり、手をつないでもらったりと安心しておうちの人と一緒に楽しめる活動なので、どの幼児も笑顔が見られた。

大学生の言葉がけ、遊びの雰囲気、音楽など、の工夫により、盛り上がり、子どもたちも楽しめた。

「おおかみがきた」では、保護者も自分の子どもだけでなく、他の子どもや保護者とも関わり、協力する場面などがあり、コミュニケーションがはかれたと思う。

十分に安全面にも配慮いただき、子どもや保護者の動きに合わせての運動遊びが出来、有意義だった。

このことが、家庭での日常生活の中での親子の触れ合う場面として活用してもらえるといいと思う。

#### 4. 『キャスターで遊ぼう』南立誠幼稚園 5 歳児「キャスターを使った運動遊び」

##### 【目的】

子どもが生き生きと取り組める運動遊びについての取り組みを始めて 2 年目である。今年、遊具（キャスター）を使っただけの遊びについても取り組みを広げていきたいと考えた。5 歳児を対象に、三重大大学の学生、岡野先生に来ていただき、教師もその指導方法を学ぶ。

##### 【概要】

7 月 27 日 打ち合わせ

9 月 2 日 「キャスターに乗ってられるかな？」

9 月 7 日 「キャスターに乗って進めるかな？」

南立誠幼稚園 遊戯室にて

大学生 7 名 岡野先生

5 歳児 15 名 教師 2 名

キャスター 大 小 段ボール ゴム 机

1 日目は、大学生にキャスターの操作をしてもらい、2 日目は、子どもたちが自分自身でキャスターを操作するようにして活動した。

小さいキャスター、大きいキャスターを使って乗る、一人で乗る、2 人で乗る、友達とつながって乗る、うつぶせで、寝転んで、など乗り方を工夫したり、段ボールやゴムなどの障害物をくぐる、体当たりをする、斜面を滑る、つながって進むなど条件を変えることで乗り方や進み方を工夫する姿も見られた。

友達と競争したり、2 人で操作したり、ぐるぐるとこまのように回ることを楽しんだり、1 日目よりもさらに 2 日目は、自分なりにスリルを味わい、遊びの幅が広がった。



##### 【成果と課題】

普段はあまり出来ないような、遊具を使っただけの運動遊びは、子どもたちも興味を持ち、「やってみたい！」と意欲的に取り組む姿が見られた。

自由に操作が楽しめるキャスター遊びは、子どもたちにとっても魅力的で、2 日目には、もっとやってみたい、こんなこともできるよ！と挑戦してみようとする姿も見られた。

うつ伏せになって乗るなどは、普段の遊びの中では、あまりしない動きでもあるので、こういった運動を投げかけることの大切さを感じた。

一人で楽しむだけでなく、2 人以上の複数の友達とも遊びが広がっていくので、年長児の子どもたちにとっても楽しめる有意義な遊びであった。

キャスターには、大小があり、扱いやすさも異なるため、子どもにあった大きさ、扱いやすい遊具を使うことの大切さを感じた。今後、こういった運動遊びを系統立てて遊んでいくためには、子どもにあった遊具の必要性を感じた。

## 4. 栗真小学校

### 栗真小学校における連携活動

栗真小学校教諭 川辺健治

本年度、本校における連携活動の取り組みは、大きく次の3つに分けることができる。

1. 学校の教育的支援となる学生の实地研究
2. 学校の教員からの指導が主となる学生の实地研究
3. 主に大学教員による学校に対する教育支援活動

以下に1～3における活動報告を示す。

#### 1. 学校の教育的支援となる学生の实地研究

##### 【概要】

本校では、2年、3年、4年の3つの学年で实地研究学生を受け入れ、約1年間、毎週1時間を主に算数科の授業における児童支援を目的として行った。

##### 【成果と課題】

本校は各学年単学級の小規模校であり、全校児童数も100名余りであるため、毎週来てくれる学生をととても楽しみにしており、实地学年やそれ以外の学年の児童も一緒になって遊ぶ姿が見られた。また、教師一人では対応しきれない細やかな個別支援のよきサポートとなって、より子ども

たちにすばやく対応することができた。さらに、算数科における問題の答え合わせや問題作りなどを手伝ってもらい、授業を円滑に進めることができた。

その一方で、週1時間という限られた時間であるため、当日の担当教師との打ち合わせや次回での学習活動の展望に関する話し合いを十分することができずに終わってしまうことが多かった。学習効果を一層高める上でも、实地研究学生の大学での時間割と本校の学年の時間割調整を十分していく必要がある。

#### 2. 学校の教員からの指導が主となる学生の实地研究

##### 【概要】

9月初旬から4週間の教育実習を、本校3学年において担任指導のもとに行った。

##### 【成果と課題】

子どもたちと学校生活を共にし、一緒に子どもと遊ぶことで、職員も視点を変えて子どもたちの姿を捉えることができた。また、実習生は国語科において研究授業を行い、授業参観や事後反省会に職員も参加することで、教材の指導方法や子どもへの支援の仕方等の学習が共にできた。本校のように学級児童が20名前後の単学級の学校においては、教育実習生と児童との触れ合いは児童にとっても新鮮な刺激となっている。また、職員

数も少ない本校にとっては、運動会のような大きな学校行事において、運動会の全体練習を含めて、学生が貴重な運営スタッフとなって活躍してくれた。教育現場においては、日々、子どもを取り巻くいろいろな状況や問題に対処している現状の中で、実習生に対して十分な指導ができるとは言いきれないことを課題として上げておきたい。



### 3. 主に大学教員による学校に対する教育支援活動

この分野では、教育支援活動を、【1】特色ある授業づくり、【2】公開授業への指導・助言、【3】教科力アップ研修会 の3点から概要を示し、成果と課題については、「児童にとって」、「学校（教師）にとって」の観点から示しておく。

#### 【1】特色ある授業づくり

##### ①1・2年生の体験学習と教科支援

###### <習字体験>

###### 【概要】

1・2年生33名を対象に、体育館において毛筆で線や字、自分の名前を書く体験を行った。大学からは、林朝子先生と学生33名が指導にあたった。

###### 【成果と課題】

###### ○児童にとって

初めて毛筆を使って線や字を書くことにとても興味を示し、楽しく学習することができた。

###### ○学校（教師）にとって

毛筆の楽しさを体験させることができ、

3年生になったら書写の時間に毛筆ができることに期待と喜びをもたすことができた。また、低学年の児童に対して、児童一人に学生が一人ついてくれ、安心して書くことができた。



筆を手に、真剣に書いている子ども達

###### <体ほぐしの運動>

###### 【概要】

1・2年生33名を対象に、体育館において手たたきゲーム、集合ゲーム、道具を使って風船トス、子取り鬼、新聞破りダンスを行った。大学からは、岡野昇先生と学生7名が指導にあたった。

###### 【成果と課題】

###### ○児童にとって

楽しく遊びながら、体をほぐして、仲間と楽しく触れ合うことができた。

###### ○学校（教師）にとって

仲間と体ほぐしができて、運動の楽しさを味わわせることができた。また、音楽に合わ

せて新聞を好きなように破ることで、音楽に合わせた一体感を味わうことができた。



音楽に合わせて一斉に新聞を勢いよく投げ上げる子ども達



## <秋の木や木の実見つけ>

### 【概要】

1・2年生が遠足を兼ねて大学キャンパスを訪れ、キャンパス内にあるどんぐり、松ぼっくり、落ち葉等の説明と採集を行った。大学からは、平山大輔先生と学生約10名が指導にあたった。

### 【成果と課題】

#### ○児童にとって

近くの大学キャンパスで、身近な木や実について、大学の先生が分かりやすく話してくれて、子どもたちは自然に親しむことができた。

#### ○教師にとって

自然にふれ、命をつなぐためにどんぐりや松ぼっくり等の種が、いろんな形になって落ちることを学べ、自然や生き物を観察することに興味を持てた。また、教師も専門的なことを学んだ。



平山先生から木の実について学ぶ子ども達



どんぐりや松ぼっくりを集める子ども達

## <パソコンで名刺作り>

### 【概要】

2年生19名がパソコンの使い方を学び、パソコンを使っての名刺作りを体験した。大学からは、下村勉先生と学生11名が指導にあたった。

### 【成果と課題】

#### ○児童にとって

2年生の児童はパソコン操作の経験が少なく、専門の方から本格的に使い方を教えてもらうよい機会となった。テンプレートを使って、自分のオリジナル名刺を作ることに、楽しく取り組むことができた。

#### ○学校（教師）にとって

パソコン操作に不慣れな教師にとっては、大学からの専門家による支援はとても助けになり、教師自身も学ぶことができた。



パソコンで名刺作りに取り組む子ども達

## ②3年生への教科支援

### <すがたをかえる大豆>

#### 【概要】

3年生15名を対象に、国語科の発展学習として、大豆を使ったきな粉作りや白玉団子作りを体験させた。大学からは、磯部由香先生が事前指導を行い、学生2名が支援した。

#### 【成果と課題】

##### ○児童にとって

生の大豆から、炒ってきな粉を作り、白玉団子一緒に食べることで、大豆からきな粉にどのように変わったかを実感することができた。

##### ○学校（教師）にとって

きな粉作りや白玉団子作りは火や道具を使うため、学生が支援することで、安全に調理を進めることができた。

また、学生の支援によって調理をスムーズに進めることができ、教師も指導の巾を広げることができた。



きな粉をまぶした白玉団子を試食

## ③高学年家庭科への教科支援

### <お弁当作り>

#### 【概要】

6年生26名を対象に、家庭科の調理実習で卵を使ったお弁当の主菜作りに取り組んだ。大学からは、磯部由香先生が事前始号を行い、料理実習では、学生2名が支援した。

#### 【成果と課題】

##### ○児童にとって

児童一人一人が自分の考えた主菜作りを行うので、実習途上でいろいろな問題が生じてくる。その際、学生からリアルタイムにアドバイスをしてもらい、児童は自信をもって次の作業ができ、調理実習を進めることができた。

##### ○学校（教師）にとって

夏休みの期間を利用して、大学教官と打ち合わせをして、指導案作りに協力していただいた。教師だけでは目が行き届きにくいところを、学生2名に支援してもらったことで、安全かつスムーズに調理実習を行うことができた。



学生からアドバイスをもらう子ども達

### <調理実習>

#### 【概要】

5年生15名を対象に、家庭科の調理実習

を行い、学生が児童の調理実習を支援する。（現在、2月の実習に向けて学習中）

#### ④音楽集会や連合音楽会の練習支援

##### 【概要】

本校では、毎年11月に全校で音楽集会を開催する。その際、大学から楽器の模範演奏をしていただき、本物の音楽に触れる機会を設けている。大学からは、3名の学生に模範演奏をしていただいた。

また、本校では、4～6年生が毎年、津市連合音楽会に参加する。合同練習やパート別練習の際に、学生が支援した。大学からは、根津知佳子先生に事前指導をしていただいた。

##### 【成果と課題】

###### ○児童にとって

20分休憩や昼休みを利用しての楽器のパート別練習の際に、学生から個々の児童への個別支援をしてもらい、児童が自信をもって練習に取り組めた。

###### ○学校（教師）にとって

音楽科の学生から専門的な指導をしてもらい、練習成果が上がった。また、少ない職員では、パート別練習に対応しきれないことが多く、学生の支援は練習効果を高めることとなった。

音楽集会では、学生に金管楽器での生演奏をしていただき、児童に本物の音楽を実感させることができた。



音楽集会で学生の模範演奏を聴く子ども達



連合音楽会の練習成果を披露する子ども達

#### 【2】公開授業への指導・助言

##### 【概要】

本校では、今年度から校内研究の窓口を国語から算数科へと変更した。算数科における校内研究の初年度にあたり、研修会には大学から中西正治先生に来ていただき、研究授業では以下の学年で指導・助言をしていただいた。

- 1年生「ふえたりへったり」
- 2年生「かけ算(2)」
- 3年生「□を使った式」
- 4年生「角の大きさの表し方を調べよう」
- 5年生「図形の角のひみつを調べよう」
- 6年生「比べ方を考えよう」

特別支援学級においても、1年生を対象に「ことば・かず」の研究授業を行い、大学から根津知

佳子先生に事前・事後指導をしていただいた。

また、専科の研究授業においては、6年生を対象に理科の「生物とかんきょう」の授業を行い、大学から後藤太郎先生に事前・事後指導をしていただいた。



6年生における算数科の研究授業の様子



2年生における算数科の研究授業の様子



専科における6年生理科の研究授業の様子

### 【3】教科カアップ研修会

#### 【概要】

中西正治先生を講師に、夏季研修会として以下の研修会を行った。

- ・算数科の教科指導における理論学習
- ・算数科の教具や教材に関わる研修

#### 【成果】

算数科の初年度の校内研修として、大学の数学教育の専門家から、数の概念、1あたり量等、理論面の基礎からの学習ができ、指導案作りに生かすことができた。

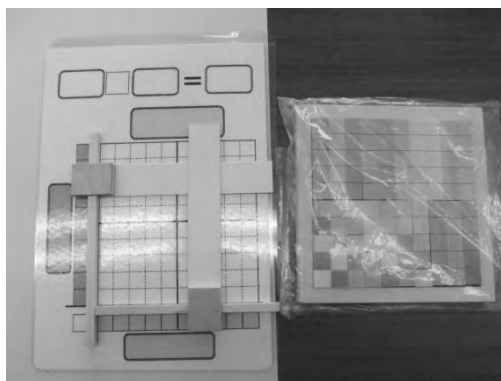
#### 【成果と課題】

##### ○児童にとって

算数科においては、理解をしやすいするための教具を使うことで、基礎的・基本的事項の理解に役立った。(例：4年生算数科での全円分度器の使用) また、算数の具体的活動の場を多く経験することができた。

##### ○学校（教師）にとって

算数科、理科、特別支援教育等、教育の専門的な立場から指導や助言をいただき、教科指導の在り方を改めて見つめ直す機会を与えていただいた。また、指導案の事前検討や研究授業の事後研修会では、教科指導や教材解釈等の適切な助言をいただき、わかる授業づくりへの意欲となっている。



算数科における教具の紹介

## 6. 白塚小学校

本年度の白塚小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 特別支援学級での取り組み（教育実地研究）
2. 1年生での取り組み（教育実地研究）
3. 3年生での取り組み（教育実地研究）

以下に活動報告、成果と課題を示す。

### 1. 特別支援学級での取り組み（教育実地研究）



個別学習の様子

算数、国語の個別学習や、生活単元学習で卒業生を送る会に向けての獅子舞の練習に担任と一緒に取り組んでもらった。子どもたちは、明るく元気な大学生の先生と一緒に勉強したり活動したりするのを楽しみにしていた。

担任が全体を見ていく中で、一人ひとりの様子に目を向けてもらった。個性豊かな子どもたちに戸惑うこともあったと思うが、どう

すれば子どもたちのやる気を引き出せるか考えながら取り組んでもらった。学習内容を習得できるまで学習していくので、子どもたちの気分が学習に向かないときも、やる気が出るような声かけを根気よくしてもらった。

また、子どもたちにとって週1回ではあるが、担任以外の新しい先生と学習するということが、慣れない人とのコミュニケーションをとるよい機会となった。



ししまい練習の様子（生活単元学習）

### 2. 1年生での取り組み（教育実地研究）



休み時間の様子

< A組 >

国語の時間に、主に、学習に集中できない子どものそばで、いつも声かけをして支援し

てもらった。その時間は、ずっと関わってもらえるので、子どもも落ち着いて学習することができた。プリントの採点や、机間巡視をしながらの支援をしてもらった。

< B組 >

国語の漢字学習に、よく付き添ってもらった。ふだん授業の中で目が配れない子どもにも目が届き、漢字の直しをしてもらった。

授業後の休み時間は、子どもと一緒に遊んでもらい、子どももよくなっていた。

### 3. 3年生での取り組み（教育実地研究）



ドリル学習の添削の様子

算数の時間に、一斉学習で理解することの難しい子どもへの助言や、ドリル学習の添削などを中心に行ってもらった。

学力差の大きい子どもたちの学習において、個々の子どもへの定着を図るために、机間巡

視をしながら、理解できているかを把握したり、授業に集中できるように声かけをしたりしてもらい、担任一人では目が行き届かないところを補ってもらえた。

学習内容を理解することが難しい子どもに、この子にはどのような説明をしたらいいのかと、試行錯誤をしながら、説明の仕方を工夫してもらっている場面が見られた。最終的に自分の力でできるようになるまでの間の支援が必要な子どもが何人もいる場合、TTとして学級に入ってもらえることはありがたかった。

### 4. 成果と課題

#### 【成果】

- 昨年度は、各学年に入ってもらったため、1学級に入ってもらう日が少なくなって子どもたちの状況を把握してもらいにくかったが、本年度は、入ってもらう学級を固定し、継続的に見てもらうことができるようにした。そのため、子どもの実態を把握しながら、支援してもらうことができた。
- 特別支援学級では、個々に応じた学習をしているので、個別に指導してもらうことにより、集中して学習に取り組むことができた。また、生活単元でもそれぞれの持ち場で、子どもたちと活動してもらい、目が行き届いた指導ができた。

#### 【課題】

- 教師の意図や配慮してほしいことなどを伝えたいと感じることもあったが、話し合う時間をとることが難しかった。当初はメールを使うことも可能かと思ったが、事務連絡以外のことをメールで伝えるのは難しい。
- 子どもたちの対応で、疑問に思うこと、悩んでいること等を、大学への提出ノートで後の方で知った。毎回コメントを書くのは時間的に難しいが、ノートを利用して思いを知りアドバイスしたり対応を考えたりする等改善していくことは可能である。

## 6. 一身田小学校

一身田小学校 永合 本幸

本年度の一身田小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 教育実地研究基礎
2. 学級活動（親子活動）の取り組み
3. 他の連携活動
4. 校内研修の取り組み

以下に活動報告を示す。

### 1. 教育実地研究基礎

今年度は、5名の学生を受け入れ、各学級の授業時に支援に入ってもらった。原則として毎回同じクラスに入ってもらい、個別支援、教材作り、

掲示などの補助をしてもらった。

成果としては、支援者が増えることで、授業の中で、子どもたちにきめ細かな指導ができ、

学習理解を助けることができたことであった。

また、担任が子どもへの向き合い方を整理する意味でも、来ていただけたことはよかった。毎回同じ学生に来てもらい、子どもたちも楽しみにし



ていた。それは、子どもたちの中に入っていきこうとする姿勢を、子どもたちが感じていたからであると考える。

課題としては、担任と学生が打ち合わせをする時間がとれないので、授業時の支援の仕方に深まりがなかった。だからかもしれないが、学生が実際どのように動いていいのかわからない様子で、ただ少し遠くから見ているという姿が見られた。一方、ある担任からは、「個人的に自分の思うように動いてほしいという思いから、最初の授業時に思いを伝えた。初めのうちはわからないようで動けなかったけど、少しずつ活動に参加してくれ、子どもたちにも関わってくれたのでよかった。」との意見もあった。

担当教員とのコミュニケーションを積極的に図るためにも、実地研究時に毎回記録しているノートをもっと活用するべきではないだろうか。学生が何を学びたいか、何を学んだのかなど、担当教員も学生の思いをつかむことが、子どもたちの為にも、学生の為にもなるのではないかと考える。

### 2. 学級活動（親子活動）の取り組み

#### 2年1、2、4組「体ほぐしの運動」

後藤 洋子先生・体育科の学生

三重大学の後藤先生、体育科の学生の指導・進行によりPTA学級活動を行った。

保護者の方の希望で「体ほぐしの運動」を行う



こととなり、担任3名が大学におじゃまして事前の打ち合わせを行った。

当日は体育館に親子約180人が集まり、親子



で楽しくできる体ほぐしの運動を教えていただいた。子どもたちも保護者の方も体を動かして楽しく1時間過ごすことができ、喜んでいただけた。



#### 4年4組「身近な樹木（木の実）の観察」

平山 大輔先生

樹木の実や種の動く仕組みを教えてもらった後、校庭の樹木の木の実を観察した。そのあと、高田本山専修寺の境内で、樹木の木の実を観察したり、実際に種をとばしたりした。

まず教室で、子どもたちは、樹木の種を見せてもらい、どのように種が運ばれるのかの話に興味を持った。特に動物がえさとして実を食べ、その排泄物の中に種が入っていて遠くへ運ばれることを知り、驚いたようである。

校庭・高田本山で、樹木に触れ、かえでの種をとばしてみたり、実を集めたりしていた。また、木の不思議を見つけては、先生や学生たちに質問をし、普段体験できないようなことをさせてもらった。

自然とふれあうことが大好きな子どもたちの目は、生き生きとしていて、保護者も子どもといっしょになって楽しんでもらうことができた。

#### 5年生「理科実験教室」

荻原 彰先生・理科の学生

荻原先生と理科の学生たちにお世話になり、次の4つの活動を行った。

「タネコプター」では、風に運ばれる種子がより遠くに飛んでいくための構造がどのようになっているのかを教えてもらい、画用紙で模型を作って飛ばしていた。クルクル回ったり、フワッと飛んだりする様子を楽しそうに何度も繰り返し飛ばしていた。

「偏光板を使った実験」では、二枚重ねて文字が消えたり現れたりする不思議を体験した後、月が近づいてくる3D映像を見せてもらった。映画



などで3Dを見たことがある子もいたが、楽しみながらその仕組みを理解することができた。





「ビタミンCの秘密」では、ヨウ素液にビタミンCを混ぜる実験を行った。鮮やかに色が消えるので驚きをもってビタミンCの存在を確認することができた。ビタミンCが含まれている食べ物を考え、ビタミンCが不足すると病気になってしまうということも教えてもらった。子どもたちは聞きなれた言葉ではあるが、生きていくために大切な要素であることを教えてもらい、自分の生活を振り返るきっかけとなった。

「静電気」では風船や蛍光灯を使った実験を見せてもらいながら、静電気の性質についてのクイ

ズを楽しんだ。溜めた静電気を手をつないで通す実験も行った。電気が体を通った時には伝わる速さに驚き、歓声をあげて楽しんでいた。4クラスと人数は多いのだが、4つの教室を移動し全クラスがすべての実験をさせてもらうことができた。

それぞれの活動で子どもたちが興味・関心を持って取り組めるよう、大学側で内容、方法などを考えていただき、準備もしっかりとしていただいた。また、子どもからの質問にもわかりやすく答えてもらった。

普段体験できない活動や、理科の学習につながる活動をさせてもらい、子どもたちは生き生きとした表情で楽しそうに活動することができ、本当に良い体験ができた。また、保護者の方々も親の立場ではなく一緒に楽しんでもらうことができた。

### 3. 他の連携活動

#### 2年生「ヌルヌル ペタペタ 大きな絵」

上山 浩先生

模造紙3枚をつなげた大きなキャンパスに、グループで体全体を使って描画表現(フィンガーペインティング)をする造形遊びを行った。本活動までに、上山先生に来校頂き概要の打ち合わせをしたり、メールで詳細な授業案を提示いただいたりした。

2年1組は4年の学生、2組は上山先生、3組は学級担任、4組は図工専科教員がメインの指導者となり、その他の学生や担任等が個々へのかかわりや絵の具の補充などのサポートにあたった。

はじめのうちはこわごわ手の平に絵の具を付けていた子どもたちだったが、時間の経過とともに心が解放され、足につけて歩いたり、塗り広げたりと行為の広がりが見られた。グループによって、はじめにテーマを決めてその世界を創ろうと



したり、行為そのものを楽しんだりとさまざまであったが、友だち同士のかかわりから生まれてくる創造の楽しさを味わっていた。

事後、上山先生とメールにて授業について振り返り討議を行った。子どもたちの活動について分析することで、造形表現における「ひと」「もの」のそれぞれの関係について考察を深めることができ、その後の図工科指導の在り方、考え方に大きく影響を与えた。本活動は、子どもたちに多様な表現活動を経験させるだけでなく、教師にとっても図工科の在り方を考えるきっかけとなり有意義な活動であったと考える。

## 世界を結ぼうクラブ

世界には様々な文化があることを知ることと、外国につながる子どもたちにとっては、母国の歴史や習慣、文化を深く知ることによってアイデンティティを構築すると同時に、日本の子どもたちには発信することを目標に、クラブ活動を月に1回の割合で行っている。

1学期は、ブラジルではめずらしい、トイレ、給食、プール、音楽室などの写真を撮って、メッセージを添えてブラジルのロンドリーナにある「めぐみ学園」に送った。そのときに学生に編集していただいた。2学期は編集したビデオを見た

り、ブラジルの遊びである「ホウバ バンデラ」をしたり、ブラジルのお菓子の「ホメウ イ ジュリエッタ」を作ったりした。「ホウバ バンデラ」をしたときは、子どもたちと学生がとても楽しく遊ぶことができた。3学期には、三重大大学の中国の留学生に中国の紹介をしてもらった。

本校には、日本語指導の教員がおり、一緒にクラブ活動を指導してきたが、学生にとっては現場で働く教員と関わることができるチャンスである。もっと積極的に関わってもらってもよかったと思う。

## 4. 校内研修の取り組み

本校は、昨年度より「主体的に学び、高め合う子どもの育成～学び合いつながり合う授業の創造～」を研究主題に校内研究を進めてきている。本年度も引き続き、岡野昇先生をスーパーバイザーとして研究を進めた。

まず、研修推進委員が岡野先生の研究室を訪ね、「学び合い」について学んだ。このときの内容は全教員にプリントにて報告し、その後の研究の考え方の基とした。

さらに、4年1組 体育科「守って走ってスーパーゲーム」2年3組 算数科「新しい計算を考えよう」の授業研究に、助言者として来校していただいた。事後協議会では、研究授業の事実から「学び合い」における授業の在り方や指導法など

のご指導をいただき、「学び合い」についての理論形成につながった。

特に、2年生の授業研究においては、学年担当4人が「学び合い」の考え方、教材研究および指導案検討と事前にたくさんの指導をいただいた。子どもたちの学びをジャンプさせる課題設定について考える機会となり、授業に反映することができた。また、事前に研修委員3名が打ち合わせを行うことで、事後協議会の充実を図ることもできた。

校内研究を進める上で、基礎となる理論は大切である。専門的見地から理論を伝えていただくことは、実践をより確かなものとするため、今後も指導を仰ぎながら研究を進めていきたい。

## 7. 北立誠小学校

### H22年度 三重大連携 活動報告書

各学年の連携一覧

1. <1年> 9月21日 オーストラリア Coogee Public School とのTV会議
2. <2年> 1月19日 三重大学教育学部生活科教材研究の学生との交流 (いろいろな遊びを通して)
3. <4年> 教育学部算数科の学生 学習支援 (毎週1回)
4. <5年> 1月27日 三重大学の学生との英語活動 (世界の文化にふれる)
5. <6年> 6月22日 テレビ会議のための準備  
6月29日 オーストラリア Coogee Public School とのTV会議  
「地域の環境を守るための活動」  
10月13日 骨密度の学習  
12月2日 三重大学の学生との英語活動  
教育学部算数科の学生 学習支援 (毎週1回)

#### <1年>

##### 1. 活動日

9月21日(火) 11時~12時

##### 2. 目的

- ・北立誠小学校1年生とオーストラリアのクージー小学校(幼稚園最終学年)・日本語クラスの子どもたちが、テレビを通してそれぞれの学校の様子をしっかりと話すことができる。
- ・テレビ会議に楽しく参加する。

##### 3. 活動概要

- ① 北立誠小学校1年生の一人ひとりが、日本の小学校生活についてボードに絵や言葉を書くことにより、日本語で説明をする。  
例. 日本の学校での休み時間の過ごし方  
日本の学校で食べるもの、勉強、行事などについて  
日本の旗
  - ② クージー小学校から北立誠小学校1年生に向けてオーストラリアの小学校について説明をする。
  - ③ クージー小学校の日本語クラスが、学校の様子について発表する。
- ※①から③の活動については、通訳をつけて相手に伝える方法をとる。

##### 4. 成果と課題

###### 【成果】

子どもたちは、外国の小学校とのテレビ会議を楽しみにしていた。テレビ会議の前に、児童一人ひとりが北立誠小学校の様子をボードに絵や言葉を書くことにより一生懸命表現しようと努力していた。当日は、クージー小学校の子どもたちとの交信ができとても満足であった。

###### 【課題】

互いの子どもたちの満足度をアンケートを使いながら検討していくことも大切である。また、相手方との話し合いを持ち、今後の中身の充実を図っていく必要があるのではないかと感じた。



## <2年>

1. 活動日 平成23年1月19日(水)
2. 目的 大学生が考えた「遊び」を体験するとともに、大学生と交流を図る。

### 3. 活動概要

生活科の学習「作ってあそぼう」のまとめとして参加させてもらった。グループに分かれた子どもたちが、大学生が大学の授業の一環として考えた12種類の「あそび」のブースを、時間を決めて順番にまわり、「あそび」を体験するとともに交流を持った。



### 4. 成果と課題

2年生の子どもたちが興味を持ち、十分に楽し

めるような「あそび」がたくさん用意されていて、子どもたちは交流を深めながら、意欲的に楽しく活動す



ることができた。全体が45分で1ブース5分程度と活動時間が短く、全部のブースを回れなかったことや一人ひとりの活動の時間が短かったのが残念であった。子どもたちの活動もただ遊ぶだけでなく、難しいかもしれないが制作の段階から関わるとより学習効果が大きいと思われる。またこの活動が継続されるのであれば、「あそび」も改良を加えていけばより内容の充実したものになると思われる。

## <5年>

### 1. 活動日

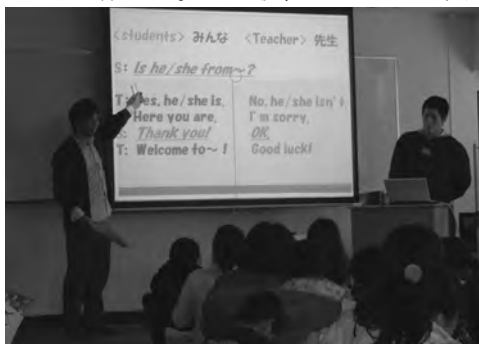
2011年1月27日(木)

### 2. 目的

- (1) 様々な国の名前を英語で言うことができる。
- (2) 基礎的な挨拶を英語で言うことや、英語で人に物事を尋ねることができる。
- (3) 日本にはない各国独自の文化の存在を感じ、理解する。

### 3. 活動概要

まず大学生に、6つの世界の祭りについて、調べたことをプロジェクターで紹介してもらった。児童はカードをもらい、そこに書いてある内容がどこの国に入るかを大学生のグループを尋ねて回り、国別のグループを作った。その後、それぞれの国に関す



< 世界の祭りの紹介 >

るクイズが出され、そのグループで相談してホワイトボードに書き答えていった。



< 国の特色 >

### 4. 成果と課題

今回の大学生との交流は、三重大学を訪問して行った。英語ゼミの学生が、世界の祭りについて調べたことを児童に分かりやすく、パワーポイントを使っての説明してもらった。珍しい世界のお祭りの映像に児童は高い関心を示し、日本の祭りとの違いに驚いていた。大学生の視点での英語活動にも、学生の支援を受けて楽しく参加できた。ただ文字については学習していなかったり、普段聞き慣れない単語もたくさん出てきたりするので、その支援の仕方が課題となる。児童の実態を考慮しながら活動内容を組み立てていく必要がある。

## <6年>

### 1. 活動日

#### 環境を守る活動について

#### オーストラリア Coogee Public School との TV 会議

6月22日 TV 会議に向けての準備

6月29日 Coogee Public School との TV 会議  
大学生との英語活動

12月2日

### 2. 目的

英語を使ってオーストラリアの子どもたちや大学生と自分の考えや思いを伝え合う。

### 3. 活動概要

環境を守る活動についてオーストラリア Coogee Public School との TV 会議は、環境を守る活動について6つのチーム (①Reduce ②Reuse ③Recycle ④Energy ⑤School ⑥Club)に分かれ、それぞれのチームで身近に行われている環境活動について伝える

内容を考え、大学生の支援を受けて英語でオーストラリア Coogee Public School の子どもたちに伝えたり、Coogee Public School の子どもたちの発表やを聞いたりして、互いの思いを伝え合った。

英語活動は、昨年度も英語科の学生との交流を行っており、子どもたちは、学生との交流に積極的な気持ちで、活動に取り組むことができた。

学生が来校し、“Let’s enjoy English with Mie university students” の内容で交流を行った。1グループ子どもたち4～5名に大学生2名が入り、ゲームや Free talking をほのぼのとした雰囲気の中で楽しみ、子どもたちは大満足の活動であった。大学生16名を迎えての交流であったので、大学生との関わりを密にもつことができ、ゲームや Free talking を通して交流の素晴らしさを体験することができた。



### <子どもたちの感想>

- ・前より英語は理解できたけどやっぱりまだまだ！！けど楽しかった。
- ・とても楽しかったし面白かった。少し英語が分かるようになった。
- ・すごく話しかけてくれたので楽しく交流することができた。またこうやって大学生と交流したいなと思いました。いろんな英語も知ることができてよかった。
- ・はじめ知らない同士で緊張したけどだんだん大学

生となれてきてよかったです。とても楽しかったです。また大学生の皆さんと交流したいです。

- ・分かりやすく言ってくれたし、ゲームもとても面白かった。緊張したけどうまく言えてよかった紅玉、白玉を使うのがとても面白かった。
- ・とってもとっても面白かった。いろいろ教えてもらってよかった。ゲームが楽しかった！キャッチワーズで協力しながらできてよかった。またやりたいとすごく思った。



### < 大学生との交流 >



## 4. 成果と課題

オーストラリア Coogee Public School との TV 会議では、外国の子どもたちとやりとりする貴重な体験をすることができた。また、英語活動では、英語で話す楽しさやもっと英語を話せるようになりたいという思いを持つとともに、大学生とのふれあいを満喫することができたことは、子どもたちにとって、すばらしい体験であった。

子どもたちは、大学生の方との交流を通しての学習に意欲的に取り組むことができ、大学生のきめ細やかな支援を受けて、生き生きと学びあう姿が見られた。今後も大学生との交流を行い、子どもたちのコミュニケーション力を伸ばし、学びあう喜びを体験させたいと思う。

## 8. 南立誠小学校

南立誠小学校・連携担当 山本 朝香

本年度の南立誠小学校の連携報告をさせていただきます。

1. 大学教員による教育支援活動
2. 学生による教育実地研究
3. 成果と課題

### 1. 大学教員による教育支援活動

日時	対象	活動	大学担当者	小学校担当者
4月23日	4年児童	<春の遠足> (三重大キャンパス・町屋海岸にて) 化学・物理・生物・地学の4つのグループに分かれての観察と実験	後藤太一郎	福島チヨ子 田中秀幸
4月26日	6年児童	<保健>骨密度の測定とデータ処理	富樫健二	廣田尚美
5月31日	科学クラブ	<理科>「光合成について」 最新のガス検知機器を使っての観察 パソコンによるデータ集計と電子黒板への表示	平山大輔	田中秀幸
6月17日 7月6日	2年児童	<国語>「スイミー」教材研究 低学年の読みの指導と授業づくり	守田庸一	山本朝香 竹田祐悟
7月7日	2年児童	<音楽>「ハンドベルとトーンチャイム」による演奏	根津知佳子	荻田美幸
7月13日	4年児童	<音楽> 「いろいろな楽器の音色を楽しもう」	根津知佳子	荻田美幸
11月24日	6年児童	<理科>「大地をさぐる」 近くの河岸にある堆積物の観察や流れる水のはたらきに関する実験など	栗原行人	東出賢一
11月30日	3年児童 保護者	<PTA活動> 「親子で楽しむ体ほぐしの運動」	岡野 昇	田中徹 天田章子
12月6日	科学クラブ	<理科>「粒子について」 「ダイライト流体」身近なコーンスターチを利用しての粒子実験	國仲寛人	田中秀幸
2月4日	1年児童	<音楽>「リズムであそぼう」 リトミック	根津知佳子	田中由美子 石川昭子

## 2. 学生による教育実施研究

本年度は、昨年度の教育支援活動に加え、教育実地研究として数学科の1年生4名の学生を受け入れ、週に1時間金曜日の4限目に、授業の支援に入ってもらうことになった。支援を希望する1年・2年・4年の学年に入ってもらい、学習の準備や後片付け、プリント等の採点・点検、困っている子への支援など

を中心に学級担任のアシスタントとして活動してもらった。

週に1時間であったが、子どもたちは、授業中に困ったことがあれば声をかけてもらったり、関わってもらったりすることで、安心して授業を受けることができたようである。

## 3. 成果と課題

### 【成果】

- 子どもたちにとっては、複数の支援者がいることで、安心して授業を受けることができた。
- 小学校にはない教材・教具を使った授業や体験を重視した学習活動がより可能になり、子どもたちが興味を持って学習することができた。
  - ・ 4年生が遠足の機会に、大学で実施した化学・地学・生物・物理の科学実験・観察
  - ・ 6年生対象に実施した骨密度測定
  - ・ 2年生で実施したハンドベルとトーンチャイムによる演奏
  - ・ 4年生で実施したいろいろな音色のことなる楽器の演奏
  - ・ 6年生の安濃川河口での堆積物の観察や地層の実験
  - ・ おもしろ科学クラブでの光合成やダイライト流体等の実験 など
- PTA活動として実施した親子レクでは、担任と大学教授や学生との綿密な打ち合わせを行い、子どもの実態とめあてに沿った内容で活動を展開することができ、保護者にも、大学との連携の良さを理解してもらった機会となった。
- 大学教授だけでなく、授業に複数の学生も関わることで、子どもたちは生き生

きと授業に参加し、いつもと違った雰囲気を楽しみながら学生と楽しくコミュニケーションを取る姿もうかがえた。

- 幅広く、専門的な知識をもつ大学の先生からいろいろな知識や指導法を教えていただき、授業づくり・授業改善につなげることができた。
  - ・ 大学の先生と2年生担任との「スイミー」の教材研究

### 【課題】

- 充実した活動にするためには、十分な事前の打ち合わせが必要である。しかし、大学と小学校との連絡がうまく取れなかったり、事前準備が直前になったりするなど時間的に難しさを感じるが多々あった。特に、年度初めには、大まかな計画を立ててはいるが、学年はじめの多忙な時期であり、本事業を優先することができず、綿密な計画を立てる余裕がない状況である。
- 連携をより一層充実させていくためには、本年度の活動や成果、課題を全教職員に示して、共通理解を図りながら、年度当初からスムーズに連携がなされるように事務引き継ぎをしっかりとしておく必要がある。



## 9. 西が丘小学校

### 三重大連携事業報告

津市立西が丘小学校

本年度の白塚幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 3年生の実践 1) 社会科「大門商店街のお客さんを呼ぶための工夫について」  
2) 総合的な学習の時間「豆腐作り」
2. 4年生の実践 算数科「角の大きさ」
3. 5年生の実践 家庭科「料理って楽しいね！おいしいね！」
4. 6年生の実践 1) 外国語活動「Let's enjoy communication in English」  
2) 図工「今日からキミは〇〇だ！」  
3) 理科「ヒトや動物の体」より第3次「血液の働き」  
4) 家庭科「感謝の気持ちを伝えよう」
5. 教職員対象の実践 1) 講演「見取図をかくことの困難性に関する一考察」  
2) 講演「電子黒板の活用方法について」

以下に活動報告、成果と課題を示す。

#### 1. 3年生の実践

- 1) 【単元】：社会科  
「大門商店街のお客さんを呼ぶための工夫について」  
【日時】：平成22年9月27日・28日  
各クラス 2時間  
【対象】：3年生4クラス

3年生は、社会科の学習で「店ではたらく人びとの仕事」について学習をした。

いろいろなお店を見学に行ったり、お話を聞いたりして学習をしていく予定であった。スーパーマーケットや大型店やコンビニエンスストアなどは、子どもにもなじみがあるが、大門商店街はあまり知らない所

だと考えた。そこで、三重大大学の永田先生と学生を招いて支援をいただき取り組んだ。

今の商店街の写真をたくさん見せていただいたので、商店街の様子がよく分かった。その様子を見ながら商店街の工夫を話し合った。いろいろな工夫がありながらも、なかなか人が集まらないのが現実である。そこで、子どもたちにどんな工夫があれば人が集まるのか考えさせ話し合った。子どもたちは、いろいろな工夫を考えることができた。

また、商店街の学習のおかげで、その後の「店ではたらく人びとの仕事」の学習を子どもたちは、意欲的に取り組むことができた。

- 2) 【単元】：総合的な学習の時間  
「豆腐作り」  
【日時】：平成22年2月11日・16日・17日  
各クラス 2時間  
【対象】：3年生4クラス

総合的な学習で、3年生は大豆作りに取り組んだ。

春の種まき、夏の水やり、そして収穫の秋を迎え、まず10月には枝豆にして、食べてみた。

11月国語科の勉強で「すがたをかえる大豆」

の勉強をしていく中で、大豆の様々な食べ方の工夫を学習してきた。子どもたちにも手軽にできる大豆の食べ方を考えていく中で、「豆腐作り」を計画した。夏季休業中に嬉野町にある野瀬商店で豆腐作りを体験して、子どもたちにも是非体験させたいと考えた。しかし、豆乳を熱したり、熱い生呉（大豆を砕いて水と混ぜて熱した物）をしぼって雪花菜と豆乳に分ける作業は、3年生の児童には少し難しいように思えた。そこで三重大学との連携事業で、学生さんたちにお手伝いしていただけるとありがたいと考え

## 2. 4年生の実践

【単元】：算数科「角の大きさ」

【日時】：平成22年10月4日・6日

【対象】：4年2組

4年生の算数の授業で、mimio-padを使っの授業を試みた。子どもが自分の考えを発表する時に、前に出て説明する必要がなく、その場で

## 3. 5年生の実践

【単元】：家庭科

「料理って楽しいね！おいしいね！」

【日時】：平成22年10月4日・6日・7日・15日

各クラス 2時間

【対象】：5年生4クラス

5年生は、家庭科「料理っておいしいね！楽しいね！」の単元「簡単な調理をしよう」で、ゆでたまごと野菜のための実習をした。「見つめよう！家庭生活」の単元「できる仕事をふやそう」で、ガスコンロの使い方や包丁の使い方の実習をしたが、初めての調理実習ということで子どもたちは楽しみにしていた気持ちともに「どんな風に野菜を切ればいいのか」と不安

た。三重大学の磯部先生と連絡を取り、11月1日に大学の方で磯部先生と学生さん20名ほどと打ち合わせを行った。

16日に1組、17日に3組、18日に2組4組が豆腐作りを行った。きめ細かい支援のおかげで、子どもたちは、大豆が変身するのを楽しみながら、上手に豆腐を作り上げることができた。そして、できたての豆腐を喜んで味わう姿が見られた。

また、大豆から様々な食品へと興味を広げて、その後の調べ学習へとつなげていった。

説明ができること、また、画面に書き込みができることで子どもたちは、集中して学習することができた。

算数は、少人数授業で行っているの、ほとんどの子どもたちが使用できて良かった。少人数授業で使えばさらに効果があがることがわかった。

な気持ちでもいるようだった。そこで、三重大大学の平島先生と学生の方に「包丁の安全な使い方」「ガスコンロの使い方」の指導の支援をお願いすることにした。前時の授業から見ていただき、支援をしていただくことになった。

ゆでたまごのゆで時間や野菜の切り方など、実習前に学習をしたことでも「これっていつから10分ゆでるんだっけ？」と聞いてきたり、「沸騰」が何なのかを初めて理解できたり、玉ねぎの切り方が図を見てもわからなかったりする子どももいたが、学生の方に質問をして教えてもらうことができ実習を進めることができていた。

授業後のノートには「学生の方に教えてもらって、ゆでたまごにヒビを入れてから水につけ

るとツルンとむけた」と感想を書いている子どもがいた。教科書には載っていないことも教え

てもらうことができ、子どもたちはより興味を持って実習に取り組んでいた。

#### 4. 6年生の実践

##### 1) 【題材】：外国語活動

「Let's enjoy communication in English」

【日時】：平成22年12月3日（金） 1時間

【対象】：6年生4クラス

小学校における外国語活動の目標の一つである、「外国語を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」をねらって、今回は三重大学生との交流を設定した。6年生の児童にとって、大学生は大変身近であり、正しい発音で会話をする大学生は、あこがれになるような存在である。実際、振り返りの子ども達の感想にも、「とても発音がきれいでびっくりした。」「自分もいつかあんな風に話せるようになりたい。」「たくさん話せるようになると、たくさんの外国の人と友だちになれるかもしれない。だから英語をがんばりたい。」など、子ども達のモチベーションがあがっている様子が伺える。

具体的な内容は、1年間をかけて活動してきた「英語ノート2」の中の4つの表現をShow&Tellの形で紹介することを取り入れた。子ども達は、自分のことを大学生に伝える活動で、積極的にコミュニケーションをとろうとする姿をたくさ

ん見せていた。と同時に、外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこともできた。

このように、英語をツールにしてコミュニケーションができる場を設定することは、小学校における外国語活動では、大変効果が見られる。

今回、荒尾浩子准教授にお願いして、三重大大学のバスを借りていただいた。その結果16人ほどの学生さんの派遣が実現した。子ども達は、もっとたくさん交流したいという思いを持っている。今後は、派遣がより円滑に気軽にできるように環境を整えていくことが必須である。

{子どもの感想}

・いつもの外国語の授業は楽しいけれど、大学生の人がいるともっと楽しかったです。だからいつもより時間がたつのが早かったです。もしよかったら、また来てほしいです。そのときは、もっとたくさん話して、自分のことを紹介したいです。そして、大学生さんのことももっともっと知りたいです。

##### 2) 【題材】：図工「今日からキミは〇〇だ！」

【日時】：平成22年9月28日（火）10月1日（金）

10月12日（火）10月14日（木）

【対象】：6年生4クラス 4時間

6年生の図工で何を題材にするかが子どもの意欲にも大きく関わり難いところがあった。また、一人一人に構図や着彩の指導が難しく一

人でも多くの方が子どもに寄り添い指導ができないかと思った。そこで、三重大大学の山田先生と学生の方（4名）を招いて支援をしていただくことにした。

大学の先生や学生のアドバイスにより「動物の視点にたつて、学校内のおもしろい風景」を描くことにした。一人一人がなりきりその視点で描くことは、普段とは別の視点で、普段見え

ない風景のおもしろさに気づくことができました。  
なかなか描くことができない児童には助言をいただいた。子どもがどうしたらいいか分からないこと今困っていることを紙に書き、答えていただいたクラスもあった。

着彩の時も来ていただき、下塗りを薄くしておく塗りが残しがなくなることなどを教えてい

ただいた。たくさんの学生さんに来ていただいたので、一人一人に助言していただくことが出来良かった。絵を描くことに自信がなかった児童も最後まで、意欲的に取り組むことが出来た。

仕上がってから山田先生と学生の方に来ていただき、教職員の研修として評価について教えていただいた。

3) 【単元】：理科「ヒトや動物の体」より  
第3次「血液の働き」

【日時】：平成22年6月4日（金）2～5限

【対象】：6年生4クラス

6年生は、理科の学習で「血液の流れ」について学習をする。

教科書では、メダカを用いて、血液の流れの観察を行う事例が掲載されているが、今までの経験から、学校にある顕微鏡で色素がある程度あるメダカの血流を観察することは視覚的に見づらく難しかった。そこで、三重大大学の後藤先

生と学生の方を招いて支援をしていただいた。

大学から、子供たちでも簡易に扱える顕微鏡と「ひどじょう（色素を持たないドジョウ）」を各班に2つずつ当たるように用意してもらった。子供たちは2～3人に1つの顕微鏡と「ひどじょう」を使うことが可能となり、自分の目で詳しく観察することができていた。

また、「ひどじょう」は色素がないため、メダカに比べて尾びれの血流の様子や、心臓の動き等がとても分かりやすく観察することが可能となり、充実した時間を過ごすことができた。

4) 【題材】：家庭科「感謝の気持ちを伝えよう」

【日時】：平成23年2月15日（火）2月18日（金）

【対象】：6年生4クラス 2時間ずつ

6年生は、家族の人にお菓子を作り、感謝の気持ちを伝えることにした。そこで、「リンゴ蒸しケーキ」作りを三重大大学の学生さんにきてもらって行った。

リンゴの皮を時には、こつを教えてもらったり、個別に教えてもらったりでき、包丁を使い慣れてない子も一人一人がリンゴの皮をむいたり、切ったりすることができた。

また、粉を混ぜるときや蒸す時には、それぞれの班の状態を確認してもらい、混ぜ方や蒸し時間などを教えてもらった。

## 5. 教職員対象の実践

1) 【内容】：講演「見取図をかくことの困難性に関する一考察」中西 正治先生

【日時】：平成22年8月6日（金）

13時30分から15時

【対象】：教職員

昨年度の学力検査の結果から、西が丘小学校の児童は、図形の分野が少し弱いということが分かった。そこで、図形の領域を教える時のポイントを教えていただくことにした。

子どもたちが学んでいることやどんな力が

ついていないかといった実態を正確に把握することが大切であることを教えていただいた。教科書を頼りに教科書に添ってやっていると、子どもたちから見て繋がってないことがあり、理解が難しい時があることをいろいろな資料から教えていただいた。（屋上で見取図の書き方を学ぶ）実際に体験させることの必要性

も教えていただき、自分たちで実際にやってみて、子どもたちの困り感やわかりにくさを感じたり、理解しやすい方法を教えていただいたりした。

今回は、見取図ということで、教えていただいたが、他の領域でも注意深く見ていくことの大切さを学ぶことができました。

- 2) 【内容】：講演「電子黒板の活用方法について」平山 円先生による講演  
【日時】：平成22年8月26日（木）  
13時50分から14時20分  
【対象】：教職員

電子黒板の使用法は以前に教えていただき、今回はmimio-padの使い方を教えていただいた。他の学校の電子黒板を使った授業例も見せていただき、効果的な指導法であることが分かった。

## 6. 成果と課題

- ・子どもたちにとって、大学生がそばにいてくれることで、分からないことをすぐに聞くことができたり、作業の面で不安なところを助けてもらったりすることができ、一人一人の充実した学習活動を保証することができた。
- ・子どもたちは、きょうだいが少ない中で、お兄さんお姉さんのような年齢層の人たちと交流することができ、技術的なサポート以外に、人とのふれあいも楽しみになったようである。
- ・連携で実施した授業が動機付けとなり、その後の授業にも意欲的に取り組める等の成果があった。
- ・専門的な知識を持った大学の先生による指導計画・指導内容のもとで授業実践をすることができ、レベルの高い指導内容を子どもたちは受けることができた。
- ・現場と大学側での打ち合わせをする時間がなかなか確保することができず、「学生の子どもとの関わり」や「支援の仕方」について、より充実した連携をしていく必要があると感じた。そのためには、合理的な連絡・打ち合わせの方法を考えていく必要がある。

## 一身田中学校

社会環境が大きく変化し、子どもたちが地域社会と関わる機会が減少している。そのため、地域との関わりの中で自然に身につけてきたことができず、子どもたちのコミュニケーション力や社会性の低下をまねいていると考えられる。そこで、本校では、実社会で求められる基礎的な社会人としての力を育むために地域社会や地域の高等教育機関の教育力を活用した教育活動を積極的に導入し、さらに激変していく社会に柔軟に対応し、創造的に物事を考え、主体的に行動できる力を育てていきたいと考えている。その根幹となっている取り組みが、今年度で5年目を迎えた三重大学教育学部との連携による教育活動である。

### 平成22年度 三重大学教育学部との連携活動

- (1) 数学科における学習支援
- (2) 数学科授業作り合同研究会
- (3) 青少年のための科学の祭典への出展
- (4) 理科での学習支援
- (5) 理科と家庭科によるクロスカリキュラムによる授業
- (6) 家庭科における学習支援
- (7) 社会科での学習支援
- (8) 音楽科での学習支援とコラボ音楽祭
- (9) 創造性を高めるキャリア教育の取り組み

#### (1) 数学科における学習支援

##### 【目的】

生徒の基礎学力の定着を図る。

##### 【概要】

三重大学教育学部の学生が、決められた授業時間に来校し、指導アシスタントとして授業に参加し、生徒の学習支援を行う。授業後には、フィードバックシートを毎時間記入し、中学校担当教員に提出する。

##### 【成果と課題】

授業で理解できないことや疑問に感じたことをすぐに聞くことができるので、生徒の学習理解に役立っている。また、授業の中での演習問題ができた時に赤ペンで○をつけてもらうこと

で生徒たちは達成感を持つことができ、次の課題へ学習意欲が高まるようである。

また、大学生の記入するフィードバック用紙は、授業者が授業の振り返りや次の授業への改善に役立っている。課題としては、授業内容によっては、アシスタントを生かしくい授業になってしまうことがあるので、よりよいアシスタントの活用法を研究していく必要がある。



## (2) 数学科授業作り研究会

### 【目的】

数学科教員の指導力の向上させ、わかる授業を実践する。

### 【概要】

9月に三重大学教育学部中西教授を講師に招き、数学科担当教員との合同研究会を開催した。研究授業における題材と授業案の検証を行った。

### 【成果と課題】

分かりやすい授業の実現のために授業の進め方

や教具の活用についての助言をいただき、自作教具を使うことの大切さを再認識することができた。授業の内容が、生徒にとってより興味や関心を抱けるような教具や実践例を紹介していただき、以後の授業実践に役立てることができた。また、2学期に行った研究授業でも助言をいただいた。教育現場が多忙ということもあり、研究会の開催が1回になってしまった。さらなる指導力の向上のためには、学期に1回ぐらいは開催することが望ましいと考えている。

## (3) 「青少年のための科学の祭典」への出展

### 【目的】

理科を楽しく教える立場を体験して、科学のおもしろさにふれ、実験の技能を高める。

### 【概要】

2年生の希望者で「科学の祭典」に参加し、「スライムをつくろう」というブースを設置し、幼児や児童を対象にスライムの作り方を指導する。

### 【成果と課題】

生徒は自分が教える立場となることで、材料の混ぜる比率や硬さがどれぐらいが適当かを試行錯誤しながら技能を高めることができました。また、幼児や児童たちと会話を弾ませながら一緒にスライムを作ることができました。2日間で約1000個のスライムを休むことなく指導し、

目標を達成できた生徒の表情は、普段の授業ではみられない達成感にあふれていました。



#### (4) 理科での学習支援

##### 【目的】

実験器具を正しく使用し、学習をスムーズに行うことにより、学習内容の定着を図る

##### 【概要】

平成22年度も昨年度に引き続き、1年生の理科の時間に学生が基本的な学習内容の理解と観察や実験の学習支援おこなう。

##### 【成果と課題】

1年生にとっては、観察や実験は興味や期待が大きい反面、扱いに慣れていない実験器具も少なからずある。そのような状況の中での授業に大学生支援が入ることで、顕微鏡を使った観察



やガスバーナーを使った学習をスムーズに行うことができた。生徒にとっても、わからないことがあったときには気軽に聞くことができ、生徒たちも安心して学習を進めることができた。

#### (5) 理科と家庭科のクロスカリキュラム（ニジマス解剖実習と調理実習）の実施

##### 【目的】

食材となる生きた魚の解剖実習を行うことで、脊椎動物の体のつくりとはたらきを学ぶとともに、解剖後に調理して食べることで「命をいただいている」という食育の基本を学ぶ。

##### 【概要】

平成22年度も昨年度に引き続き、2年生の全クラスで理科と家庭科で1時間ずつ学生の支援のもとで解剖実習をおこなう。

##### 【成果と課題】

ヒトの体のしくみを理解する学習のほとんどが、写真や図解、映像資料による学習形態によるもので、知識の習得にとどまっています。しかし、このニジマスの解剖では、生きたニジマスに触れることで、生徒は真剣な表情で解剖実習に取り組み、事前に学習した内容を実際に見たり、さわったりして学習できました。また、実習後の調理実習では解剖したニジマス調理し残さず食べることで、「命をいただいている」という意識を持つ機会にもなりました。





## (6) 家庭科における学習支援

### 【目的】

9月におこなう教育実習をスムーズに行うために、生徒の現状把握を行うとともに、実習における学習支援を行う。

### 【概要】

9月に教育実習を予定している学生が、1時間ずつ実習の授業に学習アシスタントとして授業に入り、生徒の現状を把握するとともに、生徒の学習支援を行う。

### 【成果と課題】

実習を行う前に、生徒の授業の様子を把握することで、実習時の指導計画が立てやすくなったようである。また、生徒にとっても、わからないところをすぐに聞くことができ、スムーズに作業を進められたようである。今年度は、1時間ずつしか時間がとれなかったが、さらに有意義な取り組みにしていくために学生の空き時間と中学校の授業時間の調整を進めていきたい。



## (7) 社会科での学習支援

### 【目的】

中学校1年生の夏休みの課題である「自由研究のテーマを考える際、クラスメイトの様々な意見や年齢の異なる大学生からのアドバイスを得て、幅広いものの見方や考え方をめばえさせる。

### 【概要】

各クラスの社会科の授業に、大学生が6人ずつ入り、生徒たちに自由研究のテーマについてのアドバイスをおこなう。



### 【成果と課題】

生徒ひとりでは偏ったアイデアや狭い範囲で物事を考えがちになってしまうが、大学生が授業に入ってもらったことで、生徒たちは、大学生の自分の自由研究の体験談や失敗談自分の足で現地に行き、その土地の雰囲気を感じ取ることの大切さを聞き、自由研究に対して前向きに取り組もうとする気持ちを持つことができた。また、様々な視点からアドバイスをもらったことで、テーマの偏りがなくなり、幅広いテーマの自由研究がつけられた。同じ日に全クラスの授業をおこなったこともあり、大学生との時間調整が今後も課題となる。

## (8) 音楽科での学習支援とコラボ音楽祭

### 【概要】

各クラス3回から4回程度、音楽の授業に三重大学教育学部音楽科の学生が、パート練習の支援や合唱練習の支援に入っている。音取りから始まり、練習が進んでいくと発声方法や音楽的な表現方法など専門的な内容にも触れていく。

10月15日(金)には三重大学三翠ホールで一身田中学校と教育学部音楽科とのコラボ音楽祭を開催した。

### 【成果と課題】

声楽を専攻している学生の歌声を間近で聞く機会ができ、生徒にとって大変貴重な体験の場になっている。学生にとっても、教育実習の時にこの支援の体験が役に立っているようであり、生徒にとっても学生にとっても有意義な取り組みになっている。この取り組みを継続的に行っ



ていることもあり、生徒のコーラスに対する意欲は年々高まってきている。

授業後の生徒の感想は、

『大学生が、ていねいに教えてくれて良かった』

『かなり上達できたので次回も来てほしい』

『ハミングの声の出し方を教えてもらった』

など次回の授業を楽しみにしている内容が多く見られた。

クラスによって、大学生が支援入る授業数に偏りが出てしまったので、大学生と中学校の授業の時間調整が来年度以降の課題となる。



## (9) 創造性を高めるキャリア教育の取り組み

### 【目的】

生徒たちに、学校教育と実社会が密接な関係にあることを実感させるとともに、創造力、チャレンジ精神、コミュニケーション能力、チームワーク力を育む。

### 【概要】

三重大学教育学部山根教授の開発した起業教育プログラム「会社をつくろう」を実践した。

今年度は、1年生が、「一身田を元気に！」をスローガンに掲げ、「環境・エコ」をテーマに24の会社を設立。各会社の考えたオリジナル商品を11月14日(日)に開催された一身田寺内町祭りで販売活動をおこなった。取り組みの過程では、山根教授から生徒たちへ直接助言もしていただいた。

### 【成果と課題】

生徒たちは、この取り組みを通して、地域の方々とのコミュニケーションを図るとともに、地域の一員として自らが課題解決のために行動することの重要性を実感することができた。また、販売活動当日は多くの保護者も参観し、生徒たちが造った商品の完成度の高さやアイデアの豊富さ、一生懸命に販売活動に取り組む姿

から我が子の成長ぶりを実感したという感想も届いている。24の会社を代表して、4社が11月21日(日)京都大学で開催されたバーチャルカンパニートレードフェア2010に出場し、プレゼンテーションと販売活動を行い、ベストショップ賞を受賞し、達成感・充実感を得ることもできた。



## 1 1. 橋北中学校

本年度の橋北中学校の取組

1. 三翠ホールでの学校祭文化的行事の実施
2. 音楽科との連携
3. 保健体育科との連携
4. 数学科との連携
5. 英語科との連携
6. S S S (Saturday Step-up School)の取組
7. 特別支援学級での連携

### 1. 三翠ホールでの学校祭文化的行事の実施

#### 【概要】

今年度初めて10月に、三重大学の音楽科とのコラボ音楽祭として合唱コンクール、学習発表として英語弁論・交通安全弁論・ブラスバンド部発表、生徒会企画発表としてダンス・合唱・自作映画の上映などを行った。

#### 【成果と課題】

コラボ音楽祭ということで、コーラスコンクールの審査委員長として、弓場 徹教授をお招きでき、講評・発声練習をしていただいたこと、また、音楽科の大学生による合唱を聞き、生徒だけでなく会場にいる保護者、教職員が美しい合唱の素晴ら

しさを感じることができたことは成果としてあげられる。設備の整った美しいホールでそれぞれの発表を行うことができ、とても有意義な文化的行事となった。一方、課題としては、会場使用の打ち合わせに長時間がかかったことがあげられる。連携担当の後藤教授や根津教授に時間をとっていただいたことで、当日の開催が成功したと言える。



### 2. 音楽科との連携

#### 【目的】

学校祭の文化的行事で行われるコーラスコンクールの練習を、大学生が支援することで、より高いレベルの合唱を目指す。

#### 【概要】

大学生が、各クラスでのパート練習や合唱を聞き、アドバイスをを行った。また、学年ごとに行われたリハーサルでも、曲想の表現について指導してもらった。

#### 【成果と課題】

学級担任が指導に苦勞する曲想の表現の指導を大学生にしてもらい、クラスでの練習がよりよいものとなった。課題としては、指導時間の調整が難しかったことがあげられる。



### 3. 保健体育科との連携

#### 【目的】

大学からの提案による調査や内容のアドバイスを取り入れ、体力増進への取組を図る。

#### 【概要】

骨密度・体脂肪率・脂肪量など10項目を2、3年生対象に行い、調査結果をもとに大学生に保健体育の授業を行ってもらった。中学生が自己の健康状態を知る機会となり、健康増進へのきっかけとなった。また、器械プログラムである「ラート」を後藤教授の支援のもとで行った。



#### 【成果と課題】

2、3年生対象に行った骨密度などの調査は、結果を踏まえて、大学生が保健体育の授業を行い、生徒にとっては自己の健康について深く考える機会となったと言える。また、「ラート」については、今年度の初めての取組ということもあり、体育科の教員だけでなく、すべての教職員に、定期テスト期間を利用し実技研修を行ったことはよい機会となった。授業は、体力が高いと考えられる3年生を対象に行った。「ラート」という、新しい器具を使つての授業に生徒は、興味を持って取り組めたと言える。授業計画への早期の取り組みが課題と言える。

### 4. 数学科との連携

#### 【目的】

数学科の大学生が授業で教師のアシスタント活動を行うことで、大学生が授業について考え、中学生を学習の支援者が増えることで、生徒の学力向上を図る。

#### 【概要】

大学生が、週1時間ずつ授業の支援活動を行う。教師のアシスタントとして活動し、生徒の学力向上のために学習支援を行う。

#### 【成果と課題】

生徒にとって、支援者が増えることにより、授業がより理解しやすくなっている。毎週同じ大学生が来ることにより、大学生との間に信頼関係もで

きている。また、教員にとっても、自分の授業の中で、大学生の支援をどのように入れるか考えることが、授業や生徒の学びについて深く考え直す機会となっている。今後は教員が不得手とする内容について、中西教授に教えてもらう機会を設けていただく予定である。課題としては、中学校の授業変更などで、事前に予定していた数学の授業が行えなかったことがあり、大学生に他の教科の授業を参観してもらったことが何度かあった。スケジュールの調整に課題が残った。



## 5. 英語科との連携

### 【概要】

6月に英語科の大学生16名が、中学3年生の授業を参観し、その後、授業者と交流会を行った。

### 【成果】

1時間の参観であったが、大学生からは実に多くの質問や感想が出され、その姿に中学校の教員も感心させられた。また、後日、宮地教授はじめ授業を参観した大学生から感想文が届けられ、それ

らのことから多くのことを学ばせていただいた。



## 6. SSS (Saturday Step-up School) の取組

### 【目的】

生徒の学習意欲を活かした土曜日の過ごし方を支援する。

### 【概要】

前期・後期の二期に分け、それぞれ希望者を募り、学年別、教科別に土曜日に教室を開放し、大学生がボランティアで指導者として来校している。教科は、数学と英語の2教科で実施。各学年の定員は40名とし、1教科につき50分間としている。実施期間は、6月・11月・12月・1月・2月で、SSSが実施されている土曜日の午前中は原則としてクラブ活動を中止している。



### 【成果と課題】

参加している生徒は、各自で持参した問題集などを使い学習をし、友だちと教え合ったり、大学生に質問したりと、自由な雰囲気の中で自主的に学習している。自ら学ぶ意欲のある生徒が参加しているので、短い時間ではあるが集中して取り組んでいる。課題として、大学生のボランティアが授業の都合などで少人数となり、大学生一人あたり指導する生徒数が多くなってしまったことがあった。学校と大学生ボランティアの協力体制の構築が課題と言える。



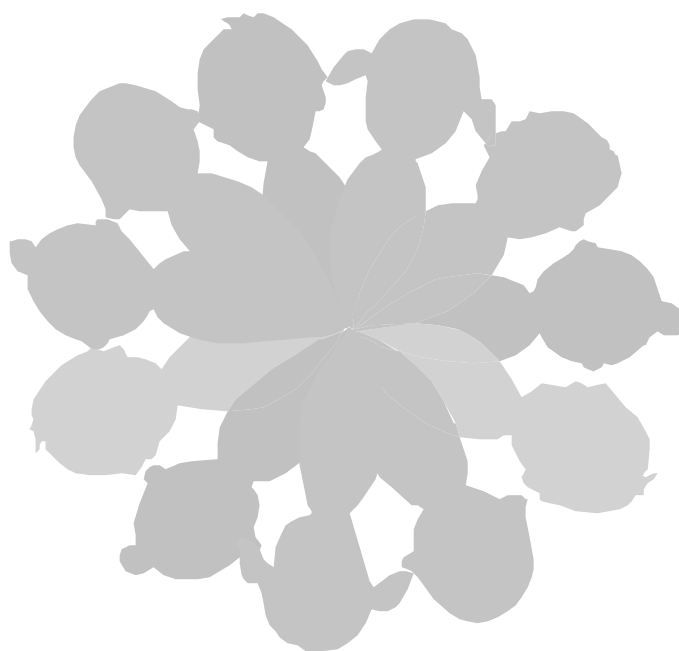
## 7. 特別支援学級での連携

特別支援コースの大学生が、特別支援学級で学習支援を行っている。教員が生徒に向き合う時間が

増え、生徒の学力向上につながっていると考えられる。



## IV 学修サポートと地域連携業務







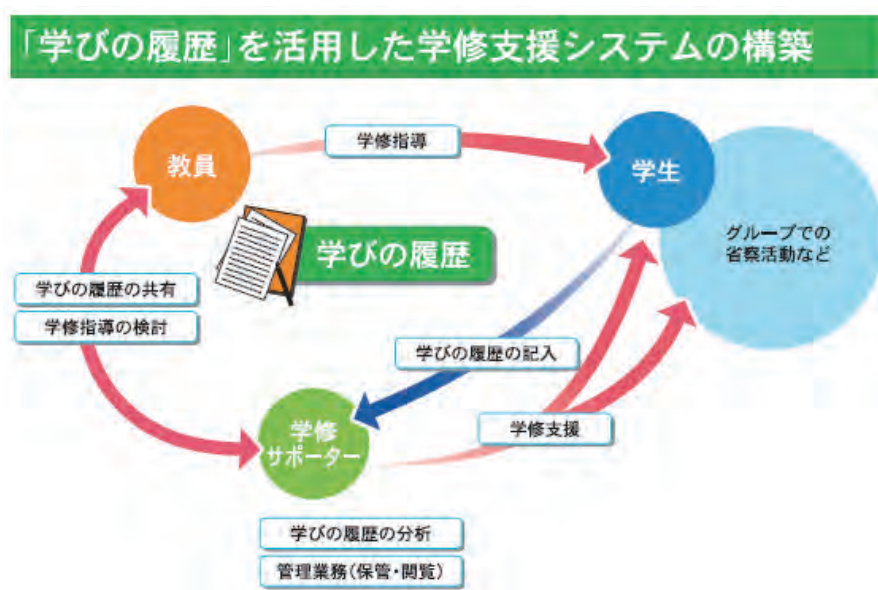
## 1. 活動概要

現在三重大学教育学部では、従来から行われている3年次の教育実習以外に、様々な教育現場体験がカリキュラムに取り入れられている。1年次の教育実地研究基礎（子どもや教員の実際に触れることによって、教職への動機づけを高める）、2年次以降の教科教育法等の授業科目での学校現場との関わり、そして3,4年次の教育実習に加え、介護等体験や連携活動、ボランティア等での各種教育支援活動も行われている。そのような教育学部の科目を系統的に履修するなかで、学生は多くの現場で、異なる立ち位置から、多様な体験をしていくことになる。それらの体験にともない、その時々学びや気づきを記録し、省察する必要性も高まっている。とくに、平成22年度入学生から教職実践演習\*が必修化されたことで、各学年や各体験活動での学びを記録するだけでなく、それらを蓄積し、見返すための「学びの履歴」の運用が義務づけられた。その履修カルテの企画、管理、フィードバックなどを通じた学修支援をおこなう場所として、平成22年度4月に学修サポート室が設置された。

学生一人ひとりが学んだことを積み重ね、それを振り返ることを大切にしたいという意図から、本学部では、「学びの履歴」を『学びのあしあと』という名前で運用している。『学びのあしあと』とは、入学時から卒業時まで、各活動に対応した用紙に目的や課題、自己評価などを記入し、一人一冊のファイルに綴じて作っていくものである。卒業時、教師としての一步を踏み出すまえに、教師としての自分の課題を明らかにし、力量形成のためのひとつの手立てとなることを期待している。

### \*教職実践演習とは

教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものである（平成18年7月中教審答申より）とされている。



本年度、学修サポート室で実施した取り組みは以下の通りである。

<活動一覧>

日時	活動名	実施内容	対象	参加人数
4月6日(火)	教育実地研究基礎説明(新入生オリエンテーション)	新入生全員に教育実地研究基礎一覧、『学びのあしあと』の説明、背表紙の配布	新入生(62期生)全員	約218名 (名簿による新入生数)
5月25日(火)	2週間教育実習事前の会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2009年度(3年次)の学びの履歴についての振り返り</li> <li>・2週間実習事前の『学びのあしあと』の記述方法について説明</li> <li>・学部長の講話・意見交流</li> </ul>	2週間実習を行う学生	約40名
7月21日(水)	学部長と教育実習を語る会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習に際しての目標設定についてグループワーク、意見交流</li> <li>・学部長のお話</li> <li>・4年生からのメッセージ</li> </ul> VTR <ul style="list-style-type: none"> <li>・4週間実習事前『学びのあしあと』の記入</li> </ul>	4週間実習を行う学生	141名
7月22日(木)	理科教育コース1年生の連携活動の省察支援	橋北中学校 Saturday Step up Schoolに1~3回参加した学生の毎回の振り返り	理科教育コースの62期生	15名
7月27日(火)	学部長と教育実習を語る会Ⅱ	学部長と教育実習を語る会(7月21日実施)を欠席した学生への代行措置	4週間実習を行う学生	31名
10月8日(金)	連携校教育実習振り返りの会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携活動体験の報告</li> <li>・4週間教育実習の振り返りと交流</li> </ul>	連携校で4週間教育実習を行った学生	10名
10月22日(金)	4週間教育実習振り返りの会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4週間教育実習の振り返り(個人)</li> <li>・グループワーク、交流</li> </ul>	4週間実習を行った学生	162名
12月1日(水)	平成22年度教育フォーラムにて報告	『学びの履歴』について報告		

12月1日(水)	愛媛大学、宇都宮大学の方々のサポート室訪問・交流	学修支援等について交流		
1月20日	鹿児島大学の方々のサポート室訪問	キャリア支援教育について交流		
2月8日(火)	62期生 1年間の学びを振り返る会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月当初に記入した「学びのあしあと（はじめのいっぽ）」の振り返り</li> <li>・「学びのあしあと（はじめのいっぽからつぎのいっぽへ）」の記入</li> <li>・2年次についてのオリエンテーション</li> </ul>	62期生全員	186名

## 2. 1年次の学修支援

### 4月6日(火) 教育実地研究基礎説明(新入生オリエンテーション)

2010年4月6日(火)におこなわれた62期生新入生オリエンテーションの参加者に、『学びのあしあと』の背表紙と、教育実地研究基礎一覧を配布した。今後卒業次まで定期的に振り返りを記述していくこと、この個人ファイルに各記録を蓄積していくことを説明し、学生各自で背表紙へ名前を記入した。(図1)

新入生は、教育実地研究基礎という授業で、はじめて教育現場に入る体験をすることとなる。この授業は、「子どもや教員の実際に触れることに

よって、教職への動機づけを高める」ことを目的としている。教育実地研究基礎を受講するにあたっての心構えや意欲を、これからの4年間を経て教職につながる「はじめのいっぽ」として、大切に記録してほしいという意図から、授業の目標やカリキュラムについての説明を併せておこなった。



図1. 学びのあしあと

### 4月14日(水) 62期生『学びのあしあと～はじめのいっぽ～』実施(コース毎に配布)

オリエンテーション後、第一回目の『学びのあしあと』として、62期生218名に向けて「学びのあしあと～はじめのいっぽ～」をコースごとに

配布した。入学後最初の『学びのあしあと』(学びの履歴)として、以下の3点を記述させた。

- ・受講または受講予定の教育実地研究基礎名
- ・教育実地研究基礎で学びたいこと、考えてみたいこと（何を知りたいか、どういうことに興味があるか、この活動を選んだ動機など）
- ・不安に思っていること、気になっていること

たとえば「不安に思っていること、気になっていること」の記述のなかには、カリキュラム・教職支援体制に対する疑問・不安（例：「教職に就きたいと言っても、具体的に何をすればよいのか、何を学ぶべきか自分でよく理解できていないこと」と、教育実地研究基礎の活動全体について気になること・不安（例：「生徒とうまくふれあ

えるか」「話し合いなどの場があった場合、自分の意見をはっきりと言えるか」）が挙げられていた。これらの記述を学生の声としてまとめて、カリキュラム改革特別委員会へ資料として提出した（4月30日）。

「学びたいこと、考えてみたいこと」の記述には、素朴に「実際の教育現場に行つてなにかを感じ取ってきたい」「自分の理想とのギャップを知りたい」「自分の言動が子ども達にどう受け取られるのか」といった、教育現場に対する期待や意欲があらわれていた。

### 7月22日（木） 理科教育コース1年生の連携活動の省察支援

理科教育コースの1年生を対象に、連携活動の省察の仕方について考える会を行った。この連携活動とは、橋北中学校で土曜日に行われている数学と英語の学習支援（Saturday Step-up School）において学生が補助スタッフとして関わり、生徒一人ひとりの学習進度に応じた指導を体験するものである。

会では、学生たち自身で活動を省察できる視点を身につけてほしいというねらいから、実践記録の書き方や記録を読み直す際の観点について、提示した。具体的には、活動に1～3回参加した学生の毎回の振り返り記録（成果と課題）から、いくつか「良い記録の例」として学生に紹介し、3

～4人のグループ活動を通して、記録として必要な情報、なぜその情報が必要なのかということを考え話し合う活動をおこなった。

参加した学生の感想には、「現場にいくだけでなく、それを振り返るということも大切だとわかったので、次回からはしっかりと振り返りをしたい」という、省察の意義を認識していることが記述されていた。

### 2月8日（火） 62期生 1年間の学びを振り返る会

後期試験期間の最終日に、62期生全員を対象として「1年間の学びを振り返る会」を開催し、『学びのあしあと』を記述した。記入項目は以下の3点である。

- ・教育実地研究基礎の自己目標（4月当初に「学びのあしあと（はじめのいっぽ）」として記述）に対する振り返り
- ・教育実地研究基礎から見えた自己課題の確認

- ・2年生に向けてのめあて（～つぎのいっぽ～）

この会は、一人一人が入学時の自分の問題意識や視点を振り返り、教育実地研究基礎やその他の現場体験から学んだことをじっくりと考え記述できるよう意図して設定した。そのため、記入項目についての説明を受けながら、時間内にその場で記述するという形で会を進行した。真剣に黙々と筆を走らせている学生たちの姿が印象的であ

った。

後半では2年次オリエンテーションをおこなった。主として、専門科目や教職関連科目が開始・増加する授業体制と、2年次に実施される現場体験（介護等体験、教育実習の事前実習等、教育実地研究における活動）について説明した。2年次のイメージを持たせることで科目履修にあたっての意識化や、各学年で実施されるそれぞれ

の現場体験活動の意味や位置づけについて確認することを意図した。

また、現時点で教員免許取得を希望していない学生（非教員養成課程在籍）対象にも別室で一年間の学びの振り返りを行った。

### 3. 3年次の学修支援

7月21日（水）

学部長と教育実習を語る会

4週間教育実習に行く学生を対象に開催した「学部長と教育実習を語る会」では、グループワークや学部長との意見交流をとおして教育実習の心得や目的意識の確認をおこなった。この会には、実習をともにおこなう仲間との同僚性を意識してほしいというねらいもあり、校種別（協力校、附属小、附属中、特別支援）の3~4人グループにわかれ、教育実習の心得として、「い・ろ・は」のそれぞれからはじまる言葉を考えるグループワークを行った。その際、同じ学校・クラスで実習をおこなう学生をお互いに知り、教育実習に向けての意欲や目的意識を確認するために、グループ・座席を指定する形をとった。（図2）

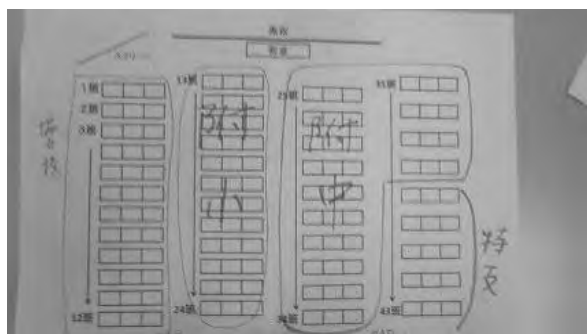


図2. 座席表

その後、学部長の講話・意見交流（学生の考えた「い・ろ・は」への講評、教育実習の心得、教育実習で身につけたい力について）をもって、教育実習生としての心構えや心意気を共有した。

さらに、『学びのあしあと』を記入するにあたって、具体的に4週間実習でどんな体験をするのかということイメージしてもらうために、4年生からのメッセージVTRを視聴した。このVTRは、協力校（小学校）での実習をした学生と、中学校を主免許とする学生に、それまでの現場体験（教育実地研究や教育ボランティアなど）と教育実習との違いという観点から、4週間教育実習で学んだことを話してもらったものである。自分たちに最も身近な存在である実習経験者の声に聞き入る姿が印象的であった。

先輩からのメッセージを踏まえて、4週間実習で具体的にどんなことをしたいかについて、『4週間実習事前・学びのあしあと』に記入した。項目は以下のとおりである。

- ・授業実践者としての課題
- ・4週間教育実習で身につけたい力（教材研究、授業技術に関すること／児童・生徒や教師との関係やコミュニケーションに関すること）

続いて協力校・連携校での実習についての説明の後、最後に、教育実習生としての団結と4週間教育実習をやり抜く意気込みとして、教育学部長のかけ声のもと全員で「エイエイオー」で締めく

くられた。

ここで記述された『4週間実習事前・学びのあしあと』は、実習指導の参考資料として9月に各コースの教員へ回覧した。実習参観や学生との話し合いの際の参考になったという声をいただいた。

### 10月8日(金) 連携校教育実習振り返りの会

連携校に教育実習に行った学生を対象とした振り返りの会を実施し、一身田中学校で4週間実習をおこなった10名の学生が参加した。5人グループで実習前の連携活動でおこなったことや実習中の体験、学んだことについて意見を交流した。現場の忙しさ、現場ならではの時間感覚などを実感し、事前にどんな情報を把握しておいたら授業がよりよくなるのか、学ぶことができたよう

である。また、外国人児童への取り組み等、学校全体の取り組みのなかでのクラスという視点も実習を終えた学生から聞くことができた。



### 10月22日(金) 4週間教育実習振り返りの会

「4週間教育実習振り返りの会」には、162名の実習を終えた学生が参加した。学生には、会に参加する前に、4週間教育実習事後の『学びのあしあと』を記入するよう求めた。4週間教育実習事後の『学びのあしあと』には、教育実習事前に記入した「身につけたい力」や教育実習中の体験などを振り返り、考えたこと・気付いたこと等を具体的な場面とともに記述させた。

この会では、記入した「学びのあしあと」をもとに教育実習を振り返り、実習校や担当学年をもとに編成されたグループワークをとおして、振り返りを共有することをねらいとした。グループワークは「教育実習を終えたいま、教師として大切にしたいこと」をテーマに図3のような流れで行われた。

事項	活動内容
①個人作業	各自が記入してきた「学びのあしあと」をもとに、「教育実習を終えたいま、あなたが教師として大切にしたいと思ったことはなんですか？」という問いに対し、各人2つ挙げ、それぞれポストイットに記入。
②グループ活動	各メンバーがポストイットに記入した内容を説明しながら提示し、グループメンバーで共通するもの同士を集めて分類し、そこに内容に合わせたタイトルを書き込む。
③発表・交流	全体に発表、意見交流。

図3. グループ活動概要

グループ活動は、一人ひとりが書いたポストイットから、共通項を見出したりお互いの言葉の意味するところを具体的な体験談を含めて聞き交わすということを想定しておこなった。たとえば児童理解というタイトルで分類された項目を見ても、「児童の視点に立って考える」「子どもを理解し受け入れること」「子どもを信じること」「子どもの意見を大切にすること」「子どもの気持ちを考える」「子どもに寄りそうこと」など少しずつニュアンスが異なっている。ポストイットを動かしながら自分の言葉の意味を説明したり、相手の意図するところを聞いたりという交流により、実習での体験を、距離をもって見つめ直し相対化する機会となったのではないかと感じている。

また、全体での交流では、学生は附属学校園、連携・協力・出身校、特別支援学校など、ちがう校種での学びを聞くことができ、様々な発達段階の子どもの学びを一度に知る時間となった。



以下に学生が記述した教育実習の事後の『学びのあしあと』の抜粋を示す。

#### <教材研究、授業技術に関すること>

- ・ 絵本や歌は、季節に合ったものはもちろんだが、そればかりを意識しなくても、「こういうところを楽しんでほしい。」というねらいを強く持って行うことが最も大事だと学んだ。また、教師が小さい声で話をしたり、静かに待っている子を認める声かけをしたりすることで、子どもたちの注意をひくことができるようになった。(北立誠幼稚園)
- ・ 12人という少人数のクラスだったが、単学級ならではの明るくのびのびとした子どもたちが多かった。一人一人の個性が強く、発言も活発だったため、授業中の子どもたちの反応をしっかり考えて準備することに力を入れた。(栗真小)
- ・ 実際に実習中はとても忙しく、教材研究不足、準備不足になることが多かったが、その中でも実物のキャベツを持っていったりなど自分なりに工夫することができたと思う。(一身田小)
- ・ 教具で子どもたちを引きつけようとしても、実際に子どもたちが手を動かしてやらないと、集中力がもたないことがわかった。逆に、クイズ形式やゲーム形式の数学問題は、とても楽しそうに作業していた。(一身田中)
- ・ 授業をするということの難しさを感じた。集合、準備、活動、片づけなど流れを作るために、生徒への指示、説明の大切さを感じた。目標はなるべく少なくし、生徒がそれに向かって集中できるようにした。(附属中)



### <児童・生徒や教師との関係やコミュニケーションに関すること>

- ・ 笑顔で子供たちと向き合うことは、いつも意識した。教師が笑顔で関わることで、子どもたちも楽しく園生活を送れるのだと実感した。また、子どもたちは、“自分のしたことを先生に見てほしい。”という気持ちを強く持っているので、教師はその気持ちをしっかり受け止めながら、じっくり一人ひとりと関わることの大切さを実習で実感した。(北立誠幼稚園)
- ・ 他の教生や教師の授業を参観しながら記録をとることを通して、子どもの声を聴こうとする姿勢を学んだ。授業以外の休み時間や給食の時間、掃除の時間には、クラスの子どもたち一人一人のことを知れるように、積極的に関わるようにした。掃除の時間には、何度

かいざこざが起こり困ることがあった。うまく対応できるようにしたい。(附属小)

- ・ 自分から近づいてきてくれる生徒とはかかわりやすく、仲良くなることができたが、おとなしい生徒とはなかなかかかわることができなかった。生徒の目を見て話すことができるようになった(一身田中)

『4週間教育実習事後・学びのあしあと』は、実習事後指導の参考資料として、各コースの教員へ回覧した。また、連携校や附属学校園へも各学年の実習生の『学びのあしあと』を回覧している。

## 4. 今後に向けて

以上のように、学修サポート室では、『学びのあしあと』の対面(手渡し)での配布、提出、会の実施などコースを越えた学生同士の交流機会を大切にした学修支援を行っている。そうすることで、顔と名前が一致したり、紙には書いていないが渡すときに一言二言、不安や気になっていることを漏らしてくれる、記録を読んでいる気になる学生にはこちらから声をかけてみる、などという一幕もある。ひとを介して丁寧に振り返りを重ねていくという点を大事にしたいと思っている。一方で、記述分析の指標や評価方法といった側面の精査・確立も進めていきたい。

さらに、『学びのあしあと』や振り返りの会等を介した隣接学校園との連携、交流も視野に入れ、学生の学び・育ちをともに支えていけるような連携に貢献できたらと考えている。

本年度、地域連携室が担当した主な業務は以下の通りです。

- ・ 大学教育推進プログラム、地域連携活動に伴う事務業務
- ・ 連携活動や教育現場に必要な備品の管理、貸出、機器使用の支援
- ・ 連携活動の記録および資料等の編集、作成
- ・ 電子黒板の使用法説明会の開催
- ・ 平成 23 年度からの小学校における英語活動実施にむけた準備講座の開講
- ・ 本取組の広報活動（ホームページの作成、平成 22 年度大学教育改革プログラム合同フォーラム出展補助業務等）

### 連携活動や教育現場に役立つ様々な機器の有効利用について

地域連携室では、隣接学校園の先生方や大学の教職員・学生が、授業や連携活動等で使用することができる高性能で便利な機器を、多数所有しております（※表 1 参照）。

中でも、電子黒板に関連する備品は充実しており、黒板にはりつけて使用するユニット型電子黒板「mimio Interactive」を始め、電子黒板の遠隔操作を可能にする「mimio Pad」、電子黒板と連動し、簡単に使用することができる書画カメラ「mimio View」等は、授業の ICT 化を実践するとともに、児童・生徒の興味を引く授業展開を可能にすることが期待されています。すでに連携校の一部の先生方に使用していただいておりますが、今後はさらに多くの学校園で利用していただけるよう、現場の先生方のご意見やご感想をお聞きし、子どもたちの学習に役立つ電子黒板の活用方法を考えていきたいと思っております。



地域連携室 教育学部専門 1 号館 2 階

連携担当事務補佐員 小河 久美

また、様々な活動の記録・保存とその利用は、学生の学びや大学での研究等において欠かせないものであり、ビデオカメラやデジタルカメラでの撮影、ビデオ編集、DVD 作成、データの出力等は、地域連携室の主な業務の一つとなっております（※表 2 参照）。これらの作業を円滑に行うため、録画・録音機器の他に、DVD ライターや複製機（一度に 100 枚程の複製が可能）、イメージスキャナー、大判プリンター（B0 サイズまで印刷が可能）、製本機等を設置しております。

地域連携室では、これらの機器を活用していただき、授業や連携活動がより一層の充実したものになることを期待し、備品の利用・貸出を受け付けております。そのためにも、今後は各種備品の使用方法や取扱い方法に精通し、多くの皆様に活用していただけるような体制を整えていきたいと思っております。



地域連携室の備品類①

## 1. 地域連携室備品一覧表

	種類	品名	使用可能台数 (H22年3月現在)	備考	貸出条件
1	ノート型パソコン	(1) タッチスマート	3	電子黒板関係	長期貸出可
2		(2) HP ミニ	9		
3	電子黒板	mimio interactive	12		
4	電子黒板用タブレット	mimio pad	12		
5	書画カメラ	(1) mimio view	17		
6		(2) CASIO MULTI PJ CAMERA	4		
7	マグネットスクリーン	IZUMI WOL-FXR	4		
8	プロジェクター	CASIO XJ-S68	3		
9	デジタルカメラ	Nikon COOLPIX S1100pj	6	プロジェクター機能つき	使用後、 地域連携室 に返却
10	デジタルビデオカメラ	SONY Handycam	8	メモリー内蔵型	
11	三脚	SONY Handycam	7		
12	ICレコーダー	SANYO DIPLY	5		
13	DVDライター	SONY DVDDirect	5		
14	色弱模擬メガネ	バリエントール	3		
15	カラープリンター	Canon PIXUS ip100	2	持ち運び可能	地域連携室 にて使用可
16	シール印字機	テプラ	1		
17	大判プリンター	TEPRA PRO	1	B0 サイズまで	
18	デュプリケーター	EPSON Disc producer	1	CD・DVD等の複製機	
19	イメージスキャナー	FUJITSU fi-6230	1	パソコンに画像を取り込むことができる	
20	製本機	POWIS PARKER fastback15XS	1	現在、厚さ1~25mmの製本が可能	
21	製本テープ印字機	POWIS PRINTER	1	背表紙用のプリンター	



地域連携室の備品類②



電子黒板関係の備品



地域連携室作成のDVD(※表2)

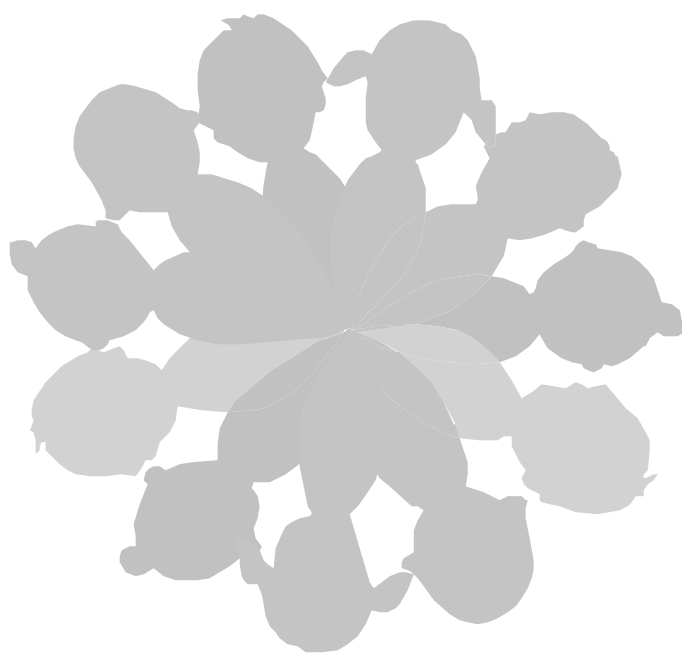
## 2. 地域連携室作成・複製 DVD 一覧表

撮影日・ 作成日	タイトル
5月6日	平成23年度からの小学校における英語活動の実施にむけて John先生のGoals for 小学校英語 ～ Making 小学校英語 Fun! ～
6月29日	栗真小学校 校内研修 授業検討会
7月21日	学部長と教育実習を語る会
9月16日	授業・中学理科 音の伝わり方 後藤研究室・M1 谷口瞬さん
9月21日	オーストラリアとの遠隔会議 社会科教育講座・永田成文先生 北立誠小学校1年生 Coogee Public School K1
9月27日他	一身田中学校 実習生のラートの授業
9月24日	4W教育実習 一身田中学校1年6組 単元:3章 方程式 数学教育コース・森下優さん
9月28日	今日からきみは◎◎だ! —学校の面白い風景を発見しよう— 西が丘小学校 6年一組
9月30日	4W教育実習 栗真小学校3年生 単元:国語「分類」ということ 日本語教育コース・坂本綾子さん
10月6日	未就園児保育「うさぎ組・クラブ」 幼児教育コース 南立誠幼稚園
10月12日	たのしく筆体験! 栗真小学校1・2年生
10月22日	60期生のみなさんへ 4週間教育実習振り返りの会 カリキュラム改革特別委員会 教育実習委員会 学習サポート室
10月26日	大学キャンパスを活用した自然観察 栗真小学校1・2年生
10月28日	隣接学校園との連携活動
10月28日	隣接学校園での4W教育実習
10月28日	～隣接学校園との連携を核とした教育モデル～ 連携活動と教育実習
11月5日	ニジマスの解剖&調理実習 一身田中学校
11月5日	大学キャンパスを活用した自然観察 白塚幼稚園&北立誠幼稚園
11月17日	栗真小学校 音楽集会
11月27・28日	第8回 青少年のための科学の祭典 2010 三重大学大会
11月27・28日	中部電力・三重大学共催 第4回 SCIENCE ON STAGE(サイエンスオンステージ)
12月1日	平成22年度教育フォーラム『隣接学校園との連携を核とした教育モデル』 vol.1～5/ダイジェスト版
1月25日	ラート指導のための安全マニュアル・基本編/周辺系編

連絡先： 三重大学教育学部 地域連携室（専門1号館2階）  
 TEL/FAX 059-231-9269（内線9269）  
 E-mail [ogawa@edu.mie-u.ac.jp](mailto:ogawa@edu.mie-u.ac.jp)  
 HP <http://chiiki.gp.edu.mie-u.ac.jp>



## V 成果報告会





文部科学省平成21年度「大学教育・学生交流推進事業（テーマA）大学教育連携プログラム」

# 隣接学校園との 連携を核とした 教育モデル

平成22年度 教育フォーラム

日時

平成22年12月1日 水

10:00～17:00

会場 三重大学三翠ホール

## プログラム

10:00-17:00

【ポスターセッション】

11:30-13:00

【愛媛大学・宇都宮大学・三重大学 学生交流】

13:00-17:00

【フォーラム】

13:00-13:20 開会

- (1) 開会の挨拶
- (2) 取組概要の報告

13:20-14:20 第Ⅰ部 地域連携に関する大学間交流

- (1) 教育実践的活動を取り入れたカリキュラムの現状と学生の学び
- (2) 愛媛大学・宇都宮大学から学ぶこと

14:30-17:00 第Ⅱ部 連携活動報告

- (1) 連携活動の成果と課題
- (2) 連携校における教育実習
- (3) 総合討論

閉会

主催：三重大学教育学部 共催：津市教育委員会 後援：三重県教育委員会  
連絡先：三重大学教育学部地域連携室 ☎059-231-9269 ✉ogawa-k@edu.mie-u.ac.jp



# 隣接学校園との連携を核とした教育モデル

## 平成 22 年度教育フォーラム

日時：平成 22 年 12 月 1 日（水）

場所：三重大学講堂（三翠ホール）

### プログラム

#### ポスターセッション(ホワイトエ)

	教育実地研究 教育実習関連 その他
--	-------------------------

#### 学生交流(小ホール)

11:30-13:00	ポスター発表者 宇都宮大学・愛媛大学・三重大学の学生・教員
-------------	----------------------------------

#### シンポジウム(大ホール)

	司会・進行	連携委員	磯部由香
13:00-13:05	開会挨拶	教育学部長	上垣 渉
13:05-13:15	取組報告	連携委員	後藤太一郎
13:15-14:20	I 部 地域連携に関する大学間交流		
(13:15-13:40)	教育実践的活動を取り入れたカリキュラムの現状と学生の学び	宇都宮大学	松本 敏、学生
(13:40-14:05)	教育実践的活動を取り入れたカリキュラムの現状と学生の学び	愛媛大学	山崎哲司、学生
(14:05-14:20)	宇都宮大学と愛媛大学の取組から学ぶこと	三重大学 三重大学 一身田中学校	岡野 昇 学生 中尾幸一郎
14:30-16:30	II 部 連携活動報告		
(14:30-15:30)	(1) 連携活動の成果と課題 DVDによる活動紹介 取り組み例1 1年次の授業 取り組み例2 2, 3年次の授業 連携校からの報告 連携校からの報告 学びの履歴	数学教育コース学生、 中西正治 幼児教育コース学生、 河崎道夫 栗真小学校 川辺健治 橋北中学校 高城あつ子 学修サポート室 守山沙弥加・高林朋世	
(15:30-16:30)	(2) 連携校における教育実習 DVDによる教育実習関係の紹介 学生からの報告(一身田中学校) 学生からの報告(一身田小学校) 連携校からの報告 連携校からの報告	保健体育コース学生 家政教育コース学生 一身田小学校 一身田中学校	永合本幸 酒徳 宏
16:30-17:00	総合討論	橋北中学校 南立誠小学校 宇都宮大学 愛媛大学 津市教育委員会 三重大学	中野 仁 東谷和久 松本 敏 山崎哲司 田邊正明 中西正治
17:00	閉会	教育学部長	上垣 渉

(敬称略)

## 開会の挨拶

三重大学 教育学部長 上垣 渉

皆さんこんにちは。教育学部長の上垣でございます。本日は「隣接学校園との連携を核とした教育モデル」をテーマとします教育フォーラムにご参加くださりまして、誠にありがとうございます。

三重大学教育学部は、大学の北側に隣接しております一身田中学校区、それから南側に隣接しております橋北中学校区、この両中学校区に属しております合計3つの幼稚園、6つの小学校、2つの中学校と連携をして、相互の教育活動を活性化する取組を推進してきております。そして、津市教育委員会様におきましては、この取組を温かく見守っていただき、力強くご支援を下さっております。誠にありがとうございます。こうした取組は文科省からも高く評価をされまして、3年間の事業として採択されているところでございます。本年度のこれまでの活動内容を見てもおわかりのように、国語教育から始まりまして、社会科、算数・数学科、理科、英語科、音楽、美術、技術、保健体育、家政科、幼児教育、学校教育、日本語教育、実践センターというところの教員および学生が関わっておりまして、これは教育学部の学生・教員組織全体の90%にも及んでおります。このように、個々の学校との連携ではなくて、中学校区全体との連携を進めるという幅広い取組は、全国的にも希有なものとして注目を集めているところでございます。

昨年度の取組、そして今年度の取組に関わってこられました隣接学校園のみならずからは、たとえば、学生が授業の中に入ってくることで、子どもにとっての良い意味での刺激になっているというようなご意見をいただいておりますし、学校園だけでは実現しにくい活動も、大学の先生が関わることで取組が可能となったり、あるいは新しい視点を学ぶことができた、というようなポジティブな評価をいただいているところでございます。また大学側から見ますと、学生の教育実践力の育成、それから様々な実験・実習・実技指導に関する学び、そしてトータルな学校および子どもの理解などで、大学のレクチャーだけでは学ぶことができない実践的な学びを学生に提供することができて、教育学部の教員養成力の向上に資することができてきているというふうに高い評価を得ております。

このように、隣接学校園と大学とが共に潤い、共に高まり合う、そういう取組になってきているということ、本当にうれしく思っております。なお、本日のフォーラムには、数年前から三重大学と交流をしてきております愛媛大学、ならびに宇都宮大学の教員、および学生さんにも参加をさせていただいております。ありがとうございます。両大学からは、後でその取組を紹介していただけることと思います。最後になりますが、本日のフォーラムが、これまでの成果と課題を共有し合い、今後の取組が一層充実したものとなるための糧を得るものとなりますよう、期待してご挨拶いたします。本日はありがとうございました。

## 取組概要の報告

### 三重大学教育学部 大学教育推進プログラム取組責任者 後藤 太一郎

連携委員の後藤と申します。取組の概要をご報告させていただきます。私たちの学部では、継続的で系統的な現場体験を通して、教育現場や地域の活性化に寄与しつつ、学生の実践的指導力の育成を核としたカリキュラム構造の策定を進めてきました。文科省の現代GPに3年間採択されて、一身田中学校区との連携を通して、学生が現場に関わる機会・体制を整備してきました。隣接校区との連携を広げることは、単に関わることができる教育現場を確保するという意味だけではありません。様々な発達段階の幼児・児童・生徒と触れ合うことができるだけでなく、現場の先生方や地域の方々、保護者などと関わりながら、地域における、あるいは社会における学校の役割を肌で感じることができます。そこでもう1つの隣接校区との連携をし、2つの学校区の学校園との間で連携協力体制をさらに拡大していく形で教育モデルを構築しようとしています。本日はこの取組の2年目の活動報告です。ここでは簡単にその概要を述べさせていただきます。

教育学部では、現場体験を保証するような4年間のカリキュラムとして現場体験を軸としたコア科目群を設けております。入學段階から、学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた「教育実地研究基礎」に参加し、徐々に授業や学校行事の補助、そして授業実践へと実践の参与形態を変化させるという順序性を重視したものとなっております。教育実習を含めてこれらを「実地研究Ⅰ～Ⅴ」としています。この過程で学生のみなさんには、幼稚園から中学校までの児童・生徒の幅広い発達段階と、先生や学校を取り巻く地域社会に触れて、学校教育の意義や地域社会における学校の役割を肌で感じて考えることができることをねらいとしています。(中略)

隣接学校園との間で連携協力体制をさらに広げ、これらの学校園における学校現場を核とした教育モデルを構築し、体系的で幅広い学びを通して課題研究能力を培い、多様な教育課題に対応できる教員を養成しようとしています。学生は大学で学んだことを現場で実践し現場から学ぶ、大学教員も学生に教えたことが現場でどのように伝わるのかを学生と現場から学ぶ、そして連携校の先生方も学生から新しい教材や方法論だけでなく、新鮮な感性や想像力に影響を受けてもらうような連携になることを念頭に、すべての人々が学び合うような関係づくりを目指しています。(中略) そのようなことを通じて、大学教員は教育現場の理解を深めるということ、そして連携校にとっては、新しい取組を他校に発信できることを期待しております。

ところで、教育実習に関してですが、現状では、4週間実習、2週間実習、それぞれ3年生と4年生の時に附属学校を中心として、協力校や出身校で行われております。(中略) 教員養成課程では、円滑な教育実習を実施するための整備することが課題となっている中で、連携校での教育実習を引き受けていただけることは、連携活動の中でも特に重要なことです。大学から近いことから、学生は、教育実習期間だけではなく、その事前準備を含めて現場に関わることができますし、大学教員は実習の様子を頻繁に見に行くことで指導に関わることもできます。理想的な教育実習の実施に向けて、隣接校区の先生方をはじめ、教育委員会の先生方には大変なお世話になっております。(中略)

この事業では、特に新しいことをするわけではなく、教員養成課程に必要な学生の現場体験を隣接学校園で行わせてもらうこと、そのための整備を進めようとするものです。このためには教育学部と隣接学校園とのゆるがないような信頼関係を築き、それを継続することが常に最も重要な課題であると考えております。このことを大学の先生方と学生のみなさんにご理解いただきたいと思います。以上です。

## 学生・教員による連携活動報告（ポスター発表を含む）

（本報告書の150～222 ページ）

No.	コース等	代表指導教員	活動名
1	家政教育 消費生活科学	磯部 由香	近隣小・中学校における食物分野での連携
2	美術教育	上山浩	2010年度一身田小学校図画工作科授業づくりをとおして の連携 — 第2学年「ヌルヌル ペタペタ 大きな絵」の 実践 —
3	技術教育	魚住明生	北立誠幼稚園での出前授業
4	保健体育	岡野 昇	“誰とでも” 楽しく運動できるかな 「体ほぐしの運動」授業デザイン@栗真小
5	スポーツ健康科学	岡野 昇	南立誠幼稚園 キャスター遊び 遊びの意味世界
6	保健体育	岡野 昇	遊びにおけるヒフ感覚について ～南立誠幼稚園における親子活動の実践から～
7	幼児教育	河崎 道夫	暗闇部屋の実践 — 幼児教育1年教育実地研究基礎—
8	幼児教育	河崎 道夫	生き物環境づくり
9	理科教育 家政教育 消費生活科学	後藤 太一郎	第5回目を迎えた「解剖&調理実習」
10	保健体育	後藤 洋子	Gボールを使った「体づくり運動」の授業実践
11	幼児教育	滝口 圭子	北立誠幼稚園での未就園児保育の運営 たんぼぼ会に参加して2010
12	幼児教育	滝口 圭子	白塚幼稚園での未就園児保育の運営 ぴよんちゃんクラブ：みんなで子育て2010
13	幼児教育	滝口 圭子	白塚幼稚園土曜参観での 親子のふれあい活動の企画・運営
14	幼児教育	滝口 圭子	南立誠幼稚園での未就園児保育の運営 うさぎ組・うさぎクラブ2010
15	保健体育	富樫 健二	小学校高学年児童の生活習慣と 骨密度及び体組成の関連
16	スポーツ健康科学	富樫 健二	中学生の生活習慣が骨密度・体組成に及ぼす影響
17	数学教育	中西 正治	教育実地研究基礎 一身田小学校において
18	数学教育	中西 正治	教育実地研究基礎 北立誠小学校において
19	数学教育	中西 正治	教育実地研究基礎 栗真小学校にて
20	数学教育	中西 正治	教育実地研究基礎 白塚小学校にて
21	数学教育	中西 正治	教育実地研究基礎 南立誠小学校において
22	数学教育	中西 正治	教育実地研究 一身田中学校
23	数学教育	中西 正治	教育実地研究 於：橋北中学校
24	教育心理学教室	中西 良文	わくわくコミュニケーションクラブによる 地域の小学生のコミュニケーション力育成の取り組み ～三重大学での実践～
25	社会科教育	永田 成文	津市立西が丘小学校との連携 大門商店街で働く人たちの苦労や工夫を考える
26	音楽教育	根津 知佳子	栗真小学校との連携における新しい学び
27	日本語教育	林 朝子	北立誠幼稚園毛筆体験活動 筆！墨！紙！で遊ぼう！
28	書道Ⅱ (平成22年度後期)	林 朝子	一身田小学校 世界を結ぼうクラブ
29	小学校専門国語 (平成22年度後期)	林 朝子	栗真小学校での毛筆体験活動 たのしく筆体験！
30	家政教育	林 未和子	白塚小学校・白塚幼稚園の連携活動
31	理科教育	平山 大輔	大学キャンパスを活用した自然観察
32	美術教育	山田 康彦	西が丘小学校での連携授業
33	愛媛大学 教育学部	山崎 哲司	実践力の向上を目指して ～地域連携実習の実践から学ぶ～
34	宇都宮大学 教育学部	松本 敏	宇都宮大学教育学部における 教育実践的活動を取り入れたカリキュラム現状と学生の学び

## 食物分野における小・中学校との連携

家政教育コース 59 期： 伊藤優果、大脇菜央、堀部望美、松浦加奈、山中章子、吉田和代  
消費生活科学コース 59 期： 上村千奈津、松崎明日香

私たちは、一身田・橋北地区の小・中学校と、食物分野においていくつかの連携活動をおこなっている。4年生は、選択授業の教育実地研究の受講生8名を中心に活動している。4年生は、単発の授業補助のほか、2名1組で担当授業を決め、授業案の提案・指導案の作成などを通して、授業実践に関わっている。その他、家政教育コース・消費生活科学コースの1～3年生も、おもに授業補助を通して活動に参加している。活動終了後には、シートに活動内容や気づきを記入し振り返りを行っている（一部をポスターで紹介）。具体的な活動は以下のとおりである。

### (1) 家庭科

- ・対象：栗真小学校 6年生
- ・活動内容：弁当作りについての指導案作成  
弁当の主菜作り（卵料理）の調理補助
  
- ・対象：西ヶ丘小学校 5年生
- ・活動内容：授業参観、調理実習（野菜炒め、ゆでたまご）の授業補助
  
- ・対象：一身田中学校 2年生
- ・活動内容：「ニジマスの解剖と調理」の調理実習補助
  
- ・対象：栗真小学校 5年生
- ・活動内容：弁当作りについての指導案作成  
弁当の副菜作りの調理補助

### (2) 国語

- ・対象：栗真小学校 3年生
- ・活動内容：授業参観、授業案作成（大豆が豆腐になるなど、ある材料が普段食べている食品に変化する過程を子どもたちに調理実習を通して知ってもらう）

### (3) 総合的な学習の時間における連携

- ・対象：西ヶ丘小学校 3年生
- ・活動内容：豆腐作り実習補助

# 近隣小・中学校における 食物分野での連携

学生：家政教育・消費生活科学コース  
担当教員：磯部由香、平島円

## 11月までにおこなった連携活動

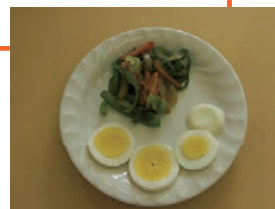
### 栗真小学校 6年生・家庭科

●活動内容：1時間分の指導案作成、調理補助  
弁当の主菜作り(卵料理：カニ玉、オムレツ、  
卵焼き、ピカタ)



### 西ヶ丘小学校 5年生・家庭科

●活動内容：授業参観、調理実習の授業補助  
(野菜炒め、ゆでたまご)



### 振り返り 栗真小学校

子どもたちは、とても楽しそうに取り組んでいた  
ので、卵料理の調理実習を機会に家でも、料理  
を作る機会が増えればいいと思う。

教師一人に対して、40人近くの子どもの調理の  
様子を見守ることはとても大変だと思った。  
このような連携活動を行うことによって、今の学  
校での授業内容や取り組みを知ることができる。

### 振り返り 西ヶ丘小学校

調理実習では、子どもたちの表情がいつもの授  
業に増して輝いており、やる気いっぱいに取り組む  
子どもたちの姿が見られた。

子どもたち同士にとっても、互いの良いところを見  
つけ合う良い機会と成りえたので、教師としては実  
習という機会を多く取り入れることで、子どもたち一  
人一人の輝ける場をつくっていきたい。

また、調理実習を行うときは、安全面への配慮だ  
けでなく、子どもたち全員が参加できるよう役割分  
担をさせたり、適切な声掛けを行うなど、全体を見  
て指導することが必要であることが分かった。

### 一身田中学校 2年生・家庭科

●活動内容：調理補助(ニジマスのムニエル)  
1時間目：ニジマスの解剖(理科)  
2時間目：ニジマスの調理(家庭) 計2時間

### 振り返り 一身田中学校

1時間目の理科で解剖をしたニジマスを、2時間目の家  
庭科で調理した。実際に生きていた状態も見ているので、  
命を頂いているという実感がわいているようであった。「魚  
は好きじゃない」と言う生徒も、「おいしい」と言って食べて  
いる姿もみられた。

自分でさばいた魚を自分で調理して食べることは、経験  
としてとても大切なことであると感じた。

## 現在おこなっている連携活動

### 西ヶ丘小学校 3年生・総合学習

●活動内容：豆腐作り

### 栗真小学校 5年生・家庭科

●活動内容：弁当作り

### 栗真小学校 3年生・国語科

「すがたをかえる大豆」

●活動内容：大豆が豆腐になるなど、あ  
る材料が普段食べている物に変化する  
過程を、調理実習を通して知ってもらう。

## 2010年度一身田小学校図画工作科授業づくりをとおしての連携 —第2学年「ヌルヌル ペタペタ 大きな絵」の実践—

三重大学教育学部美術教育講座 上山 浩

### 授業実施に至る経過

**5/18**：一身田小学校から、6月中旬から下旬に、第2学年図画工作科として、全4学級を対象にした「フィンガーペインティングを楽しむ」を内容とした授業支援のオファー頂いた。

**5/20**：上山から、一身田小学校ご担当の村田真理先生（2年3組担任）に「前向きに検討させて頂く」として、題材のイメージの詳細を打診するとともに上山の実践例をお知らせした。

**5/21**：村田先生から以下の旨の題材イメージをお示しいただき、上山の方で支援が可能だと判断し、打ち合わせに入ることにした。

- ・画材を、お決まりにではなく、いろいろ試したり、できれば身体を使って思いっきり楽しませたい。
- ・四つ切ではない、大きい紙にグループでの表現を取り入れたい。

**5/27**：一身田小学校にて、村田先生、河野先生（図工専科）、上山の3名にて以下の事項を中心に情報交換・調整・打ち合わせを行った。

- ・当該児童について、これまでの経験、表現に見られる様子、指導する上での留意点等。
- ・描画材の性質、紙のサイズ・使用法などの適切性等。
- ・造形表現に関わる題材観、題材事例、指導観、その他日程、使用教室等。

**6/4**：上記打ち合わせ事項などを元に、上山にて「実施要項」を作成し、一身田小に送信した。

**6/7**：上記実施要項を一身田小第2学年担当・図工担当の6名の先生にて検討、微調整を行った。

**6/8**：上記実施要項にて、後藤連携推進委員長に予算使用等を打診し了承を得る。具体的な準備を開始する。

**6/18**：上山にて学習指導案に準ずる「指導メモ」（クラス共通）を作成し、一身田小に送信。併せて、学生による授業実施（全体指導）の可否、直前の教室準備の要領などを打診した。

**6/20**：一身田小より指導メモの了承（「読んだだけでわくわくする」とのコメント）等を得る。

**6/22**：本活動参加学生（4年生3名、3年生1名いずれも美術教育コース）と事前のミーティングおよび、描画材等の事前準備を行った。

**6/29**（授業前日）：16:00頃より、物品の搬入等実施教室の準備を行う（作業台の移動は一身田小第2学年担当の先生方で事前に終了）と最終打ち合わせを行う。

### 授業実施概要

**6/29**（1日目）

**1-2限**（8:45-10:25）2年3組の授業

学級担任（図工科担当）の村田先生が全体指導を行った。上山がアシストを行った。学生は、4年生3名が記録撮影および、適宜補助を物品配布、部分清掃、個別サポートなどの補助を行った。

**3-4限**（10:45-12:25）2年1組の授業

美術教育コース4年の松原さんが全体指導を行った。図工科専科担当の河野先生、学級担任の先生、上山がアシストを行った。サポートを行った学生は2名。

7/2 (2日目)

1-2限 (8:45-10:25) 2年4組の授業(大学授業科目「美術教育演習Ⅲ」の一部として実施)

図工科専科の河野先生が全体指導を行った。上山がアシストを行った。サポート学生は4年生3年生共に1名。



3-4限 (10:45-12:25) 2年2組の授業

上山が全体指導を行った。図工科専科の杉田先生、学級担任の先生がアシストを行った。サポート学生は同上。

村田先生より学生向けに水分補給等の配慮を頂いた。

参加学生の直後のコメントとして全員に共通して「しんどかったが、むちゃくちゃ楽しかった」「このような活動が再度企画されれば是非参加したい」という声が聞かれた。

## 授業実施後

### 直後

7/2-3 : 村田先生と上山にて、事後の電子メールにて事後の振り返りの討議を行った。

7/6 : 上山より静止画約1000点を記録したDVDメディアを送付した。

7/6 : 村田先生より、当該授業の振り返り報告をまとめた学級通信(保護者向け)をお送り頂いた。その内容は、今回の連携にて村田先生の日頃思い描いていた授業が実現したこと、子ども達の当日の様子の詳細、直後に上山とやりとりした振り返りの一部、5名の子どもによる感想など。

### 後日

・8月に実施された図工・美術の先生方で企画運営している子どもの造形活動のワークショップに、この活動の参加学生に補助員としてのお誘いを頂き、一部の学生が参加した。

・10月に実施された県教研の美術教育分科会にて村田先生がこの連携活動について、特にご自身のご担当のクラスでの実践について報告された。それに先立ち9月には、報告書の内容について、電子メールにて上山と討議を重ねた。また、上山の研究室にて、その後の子ども達の経過の情報などを交えて事後検討を行った。

・翌年2月に実施予定の市教研にて、上山は講師として、本連携活動の報告を中心とした報告を要請されている。

本連携は、日常の業務に加えてそれに平行して行う諸準備など必ずしも伴う負担は少なくないが、附属学校での連携授業同様に、得るものも豊富な活動だとの実感があつた。



# 2010年度一身田小学校図画工作科授業づくりをとおしての連携 —第2学年「ヌルヌル ペタペタ 大きな絵」の実践—

三重大学教育学部美術教育講座 上山 浩

## 授業実施に至る経過

5/18：一身田小学校から、6月中旬から下旬に、第2学年図画工作科として、全4学級を対象にした「フィンガーペインティングを楽しむ」を内容とした授業支援のオファー頂いた。

5/20：上山から、一身田小学校ご担当の村田真理先生(2年3組担任)に「前向きに検討させて頂く」として、題材のイメージの詳細を打診するとともに上山の実践例をお知らせした。

5/21：村田先生から以下の旨の題材イメージをお示しいただき、上山の方で支援が可能だと判断し、打ち合わせに入ることとした。

・画材を、お決まりではなく、いろいろ試したり、できれば身体を使って思いっきり楽しませたい。

・四つ切ではない、大きい紙にグループでの表現を取り入れたい。

5/27：一身田小学校にて、村田先生、河野先生(図工専科)、上山の3名にて以下の事項を中心に情報交換・調整・打ち合わせを行った。

・当該児童について、これまでの経験、表現に見られる様子、指導する上での留意点等。

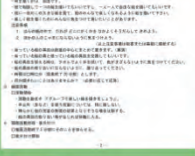
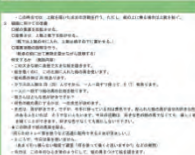
・描画材の性質、紙のサイズ・使用法等の適切性等。

・造形表現に関わる題材観、題材事例、指導観、その他日程、使用教室等。

6/4：上記打ち合わせ事項などを元に、上山にて「実施要項」を作成し、一身田小に送信した。

6/7：上記実施要項を一身田小第2学年担当・図工担当の6名の先生にて検討、微調整を行った。

6/8：上記実施要項にて、後藤連携推進委員長に予算使用等を打診し了承を得る。具体的な準備



## を開始する。

6/18：上山にて学習指導案に準ずる「指導メモ」(クラス共通)を作成し、一身田小に送信。併せて、学生による授業実施(全体指導)の可否、直前の教室準備の要領などを打診した。

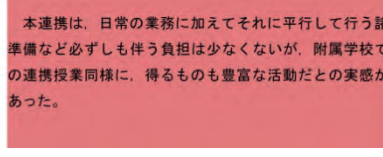
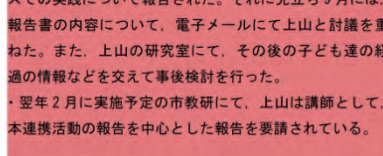
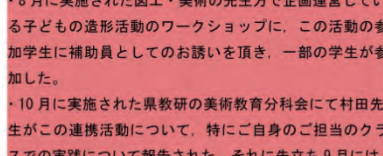
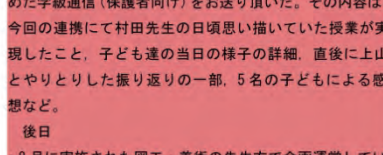
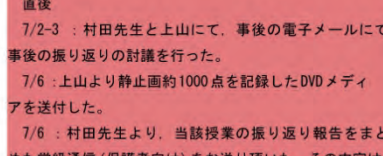
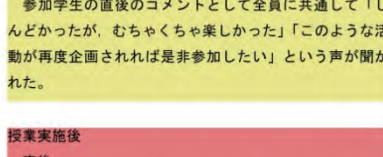
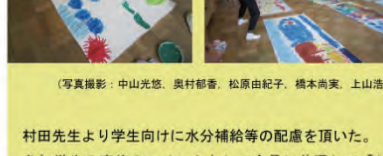
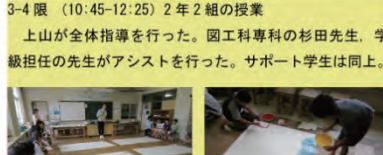
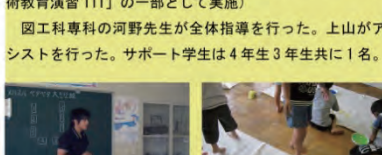
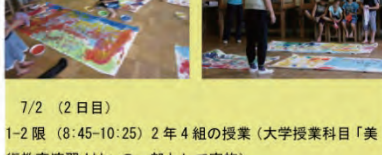
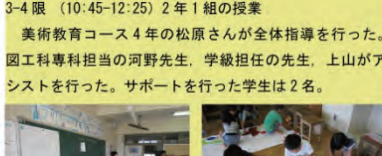
6/20：一身田小より指導メモの了承(「読んでいただくわくわくする」とのコメント)等を得る。

6/22：本活動参加学生(4年生3名、3年生1名)いずれも美術教育コースと事前のミーティングおよび、描画材等の事前準備を行った。

6/29(授業前日)：16:00頃より、物品の搬入等実施教室の準備を行う(作業台の移動は一身田小第2学年担当の先生方で事前に終了)と最終打ち合わせを行う。

## 授業実施概要

6/29(1日目)  
1-2限(8:45-10:25) 2年3組の授業  
学級担任(図工科担当)の村田先生が全体指導を行った。上山がアシストを行った。学生は、4年生3名が記録撮影および、適宜補助を物品配布、部分清掃、個別サポートなどの補助を行った。



3-4限(10:45-12:25) 2年2組の授業

上山が全体指導を行った。図工科専科の杉田先生、学級担任の先生がアシストを行った。サポート学生は同上。

(写真撮影：中山光悠、奥村郁香、松原由紀子、橋本尚実、上山浩)

村田先生より学生向けに水分補給等の配慮を頂いた。参加学生の直後のコメントとして全員に共通して「しんどかったが、むちゃくちゃ楽しかった」「このような活動が再度企画されれば是非参加したい」という声が聞かれた。

授業実施後  
直後  
7/2-3：村田先生と上山にて、事後の電子メールにて事後の振り返りの討議を行った。  
7/6：上山より静止画約1000点を記録したDVDメディアを送付した。  
7/6：村田先生より、当該授業の振り返り報告をまとめた学級通信(保護者向け)をお送り頂いた。その内容は、今回の連携にて村田先生の日頃思い描いていた授業が実現したこと、子ども達の当日の様子の詳細、直後に上山とやりとりした振り返りの一部、5名の子どもの感想など。

後日  
・8月に実施された図工・美術の先生方で企画運営している子どもの造形活動のワークショップに、この活動の参加学生に補助員としてのお誘いを頂き、一部の学生が参加した。

・10月に実施された県教研の美術教育分科会にて村田先生がこの連携活動について、特にご自身のご担当のクラスでの実践について報告された。それに先立ち9月には、報告書の内容について、電子メールにて上山と討議を重ねた。また、上山の研究室にて、その後の子ども達の経過の情報などを交えて事後検討を行った。

・翌年2月に実施予定の市教研にて、上山は講師として、本連携活動の報告を中心とした報告を要請されている。

本連携は、日常の業務に加えてそれに平行して行う諸準備など必ずしも伴う負担は少なくないが、附属学校での連携授業同様に、得るものも豊富な活動だとの実感があつた。

# 北立誠幼稚園ものづくり出前授業の報告

教育学部技術教育コース 技術科教育研究室

## 1. 出前授業の目的

現在、子どもたちのものづくり離れが進んでいると言われています。ものづくりへの興味・関心は幼い頃から培われるため、幼稚園時代のものづくり体験はとても重要です。そこで、この出前授業では、園児に作る楽しさを実感してもらうことを目的として、いろいろな工具や素材を使い、うさぎのサークル（飼育柵）を作ってもらいました。

## 2. 題材：「チョコちゃんのサークルを作ろう」について

今回の授業では、題材として幼稚園で飼育されているうさぎのチョコちゃんが遊べるサークルの製作を取り上げました。この題材は、子どもたちにとって身近なものを作ることにより、ものづくりの楽しさと自分たちで作ったもので実際に遊ぶ楽しさを体験してもらうことを目的としています。



図1 うさぎのサークル

## 3. 活動内容

(1) 対象：年長児18人，年少児9人

(2) 日程：打ち合わせ 5月26日（水）

指導案指導 6月2日（水）

顔合わせ 6月9日（水）

授業当日 6月16日（水）

(3) 具体的な当日の活動

最初に、園児・大学生全員が遊戯室に集まり、自己紹介をします。次に、大学生が製作したサークルを見せながら、本日の活動について説明します。具体的には、園児が絵を描いてくれた板にきりで下穴をあけ、玄翁（げんのう）で釘打ちを行います。釘打ちに関しては、事前に下穴をあけておいた練習用の木材で1人10本の釘打ちを練習します。その後、本番用の板材に下穴をあけ、木工用ボンドを塗り、サークルに釘打ちしていきます。すべての作業が終了したら、自分の回りや部屋を片付けます。その後、場所を園庭に移動し、完成したサークルを組み立てて、サークルにチョコちゃんを入れて一緒に遊びます。最後に、遊戯室に集まり、活動の振り返りとして頑張ったことや楽しかったこと、難しかったことなどを発表します。

表1 指導略案(90分)

時間	活動内容
0分	・園児・大学生相互に自己紹介をする。
5分	・今日の活動内容を聞く。
20分	・練習用木材で釘打ちの練習をする。 (作業)
35分	・本番用板材(園児が絵を描いたもの)をサークルに釘打ちする。 (作業)
55分	・サークルを組み立てて、うさぎと遊ぶ。
75分	・活動を振り返る。

#### 4. 成果

全体を通して、園児が楽しんで活動に参加できるような授業を進めることができました。また、その過程では先生方の園児への指導を間近で見ることができ、勉強になりました。作業の場面では、園児にきり・玄翁の使い方を見せ、実際に安全に工具を使用してもらうことができました。特に、釘打ちでは個人差がでるため、個々に対応して指導することで園児全員に正しく釘を打たせることができました。遊びの場面では、サークルの柵から手を伸ばしてチョコちゃんを触るなどして楽しく遊んでもらうと共に、他の園児が作った作品を見てそのよさを感じてもらうことができたようでした。

#### 5. 今後の課題

授業を振り返ると、園児に説明する際に上手く説明ができないことが何度かありました。園児にとって分かりやすい言葉を用いて説明することが重要で、事前に使う言葉を吟味するべきだったと思います。また、今回の作業(釘打ち)はほとんどの園児にとって、初めて経験する内容だったので、教材や工具についての専門的な知識を持っていないかならなりました。

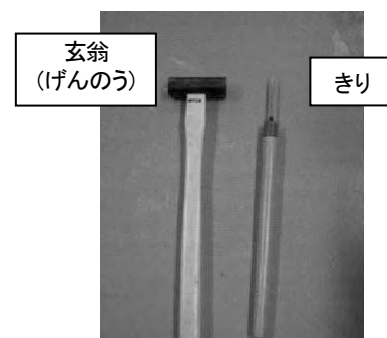


図2 園児が使用した工具



うさぎのチョコちゃんです



園児が釘打ちの練習をしている様子です



園児がサークルに釘打ちしている様子です



園児がサークルの中のうさぎと遊んでいる様子です

# 北立誠幼稚園での出前授業

## 技術科教育法研究室

私たちの研究室では、地域連携の一環として毎年北立誠幼稚園で出前授業を行っています。子どもたちにもものづくりの楽しさや達成感を感じてもらい、ものづくりに興味を持ってもらう事を目標としています。今年は、園長先生からうさぎ(以下、チョコちゃん)のサークル(飼育柵)を作ってほしいとの依頼があり、このことを題材とした授業を提案しました。実際には、幼稚園の先生方と何度も打ち合わせをし、『釘打ち』を取り上げ、授業を行いました。

### ★出前授業当日までの幼稚園との取り組み★

授業内容の打ち合わせ : 5月26日(水)  
 授業指導案の検討 : 6月2日(水)  
 園児との顔合わせ : 6月9日(水)  
 出前授業当日 : 6月16日(水)

### まずは釘打ちの練習をしましょう★



### 次に絵をサークルに打ちつけましょう★



### 最後にチョコちゃんとサークルで遊びましょう★



時間	活動内容
0分	・園児・大学生相互に自己紹介をする。
5分	・今日の活動内容を聞く。
20分	・練習用木材で釘打ちの練習をする。 (作業)
35分	・サークル本番用板(園児が絵を描いたもの)に釘打ちをする。 (作業)
55分	・サークルを組み立ててチョコちゃんと遊ぶ。
75分	・活動を振り返る。

### 『成果』

- ・安全に工具を使用してもらうことができました。
- ・釘打ちの楽しさ、難しさを感じてもらうことができました。
- ・サークルでチョコちゃんと楽しく遊んでもらうことができました。

### 『今後の課題』

- ・事前準備をしっかりとすること。
  - ・園児の力量を事前に把握しておくこと。
  - ・園児が理解できる言葉を吟味して、分かりやすく説明すること。
- 以上のことを今後の活動に生かしていきたいと思っております。

# 他者との関係をほぐすことで子どもの体が動き出す

保健体育コース 3年 小山大貴

KW：交流，関係ほぐし，自己の存在の保障，受け容れる，聴く

## 1. はじめに

三重県津市立栗真小学校(以下，栗真小)において，三重大学教育学部保健体育科の学生(以下，学生)によって「体ほぐしの運動」授業実践を行った。この授業実践をもとに，他者との関係をほぐすことで，子どもが活発にかかわり始めることの背景には何が起こっているのかを考察する。

## 2. 栗真小「体ほぐしの運動」授業実施概要

①実施日：平成22年10月19日(火)

②実施場所：栗真小体育館

③参加者：栗真小1・2年生 (32名)

栗真小教員 (2名)

三重大学准教授 (1名)

三重大学生 (6名)

今回の「体ほぐしの運動」授業実践は，現場での体ほぐしの運動に対する戸惑いの声から，学生が「交流」に重点を置いた体ほぐしの運動の授業デザインを提案し，実践を行った。授業の目標は，「1人では，生まれない運動をすることによって，いつも遊んでいる人と違う人がいても楽しく運動をすることができる」とした。活動内容は，「1. 自己紹介，2. 手たたきゲーム，3. 集合ゲーム，4. 風船トス，5. 子取り鬼，6. 新聞やぶりダンス，7. 新聞集め競争」を行った。活動中は，学生1名が全体の進行を行い，残りの5名が授業のアシスタントとして参加した。

授業中の子ども様子は，手たたきゲームや集合ゲームでは，授業とは別のところに関心が向いていたり，活動から離れていってしまう子の姿が見られた。しかし，活動が進行するにつれてそのような子どもも活発に仲間とかかわり合う姿が変わっていった。

## 3. 考察

今回の体ほぐしの運動の授業は，自己と他者の関係をシャッフルしたり関係を深く結んだり，運動を変えるごとに関係性を変えていくことで，子どものかかわり合いが変わることをねらいとした。その結果，子どもの体が動き出すという実体の背景には，「自己の存在が保障されること」と「他者を受け容れること」の2点があると見えてきた。

1点目の「自己の存在が保障されること」とは，仲間の一員としての自己を感じることができるということである。風船トスを通してチーム内の関係の結びつきを強くした後に子取り鬼を行い，チーム内の自分の役割を変化させるといった，関係性を意識した活動内容によって，自己が他者から仲間として受け容れられていたと考えられる。

2点目の「他者を受け容れる」とは，相手の体から発信されているメッセージを聴いているということである。新聞破りダンスでは，リズムに合わせて楽しそうに新聞を破る仲間の体が運動の楽しさを伝えていたと考えられる。

以上の2点から，自己の存在というものを実感し，他者の体から発信されるメッセージを聴くことで他者を受け容れた結果として体が動き出し，活発にかかわり合う子どもの姿が見られたと考えられた。

## 4. おわりに

子どもの体は，何かの働きかけによって動かされ，その結果が実体として目に見える形で現れる。結果となった実体を変えるためには，その実体が現れる前の体に対して何がその体に働きかけているのかを見ていくことが大切だと考えることができた。

# “誰でも”楽しく運動できるかな

「体ほぐしの運動」授業デザイン@栗真小

三重大学生による授業実践報告

他者との関係をほぐすことで子どもたちの体が動き出す

## 活動の経緯と概要

**体ほぐしの運動** (平成元年に導入)  
 何をしたらいいの？  
 レクとはどう違うの？

**現場の声**

気づき  
 調整  
 交流  
 私達は、今回特に交流に  
 重点を置いて授業を  
 デザインをした。

授業は、以下の概要で行われた。

実施日時：平成22年10月19日(火)

実施場所：栗真小体育館

参加者：栗真小1・2年生 (32名)

栗真小教員 (2名)

三重大学准教授 (1名)

三重大学生 (6名)

授業は大学生1名が全体の進行を行  
 い、5名がアシスタントとして参加した。

## 活動のねらいとテーマの設定

運動を通して、仲間(他者)  
 と触れ合う中で関係をほぐす

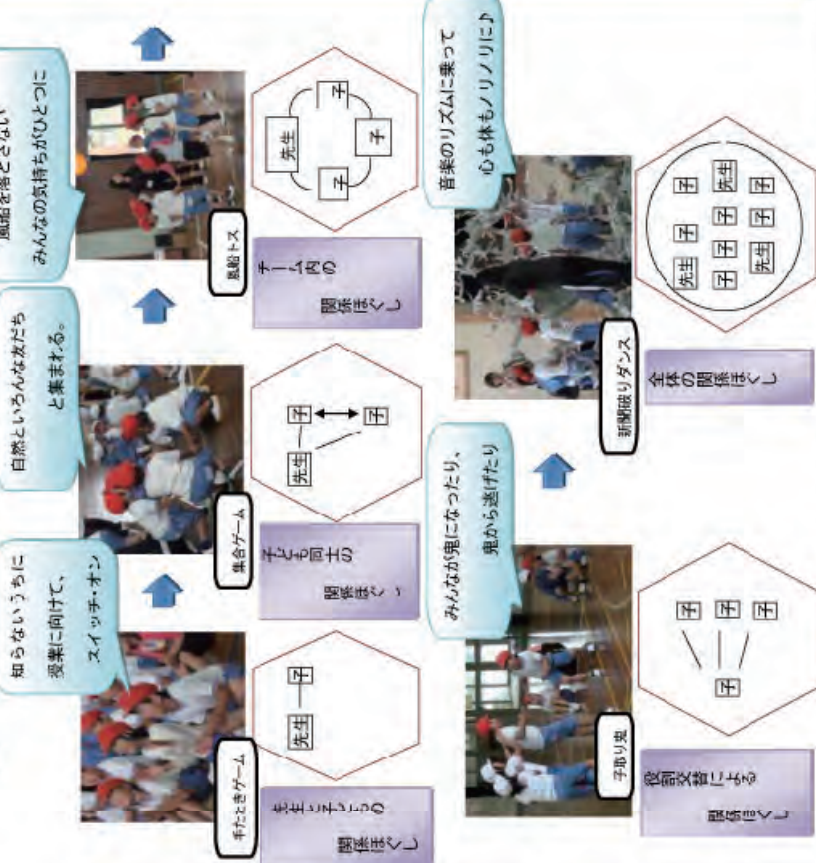
他者を受け容れ、受け返す姿  
 自分が仲間の一員として感じられる

1人1人の関係ほぐし

全体の関係ほぐし

テーマ  
 “誰でも”運動  
 できるかな

## 活動内容と意図した関係性



～振り返り～

今回の授業は、子どもとの関係性を考えながら行われた。子どもは、関係が  
 がつくられる中で仲間の一員であると感じられた。子どもは、関係  
 性がいい。そして仲間と運動をする中で、仲間の体から自分への非言語の呼び  
 かけを感じることができているのだと思えた。呼びかけに体が応えること  
 が結果として自然と体が動き出しているように見られると考えられた。

報告者 伊藤茂子 中西純徳

林 直哉 廣智恵里

岡田雄輔 山口優子

○小山大貴(三重大学3~4年)

指導教員 山本俊彦・岡野 昇

## 遊びの意味世界

スポーツ健康科学コース 3年 岡田雄輔

KW：イリンクス 意味世界

### 1. はじめに

私たちは、カイヨワの唱える遊びのカテゴリの一つであるイリンクスの研究の一環で、津市立南立誠幼稚園（以下、南立誠幼稚園）で6歳の子を対象にキャスター遊びを行った。この実践をもとにイリンクス遊びについて考察する。

### 2. 南立誠幼稚園実践概要

①実施日：平成22年9月2日

平成22年9月7日

②実施場所：南立誠幼稚園遊戯室

③参加者：南立誠幼稚園教員（1名）

南立誠幼稚園児（15名）

三重大学准教授（1名）

三重大学学生（7名）

#### ④キャスター遊び概要

カイヨワの唱える遊戯論の遊びの意味世界の一つであるイリンクスの研究の一環でキャスター遊びを行った。1日目は「キャスターに乗ってられるかな」と主題にし、基本的に大学生がキャスターの操作を行った。キャスターに乗っている最中の子どもたちは表情が硬く、終わってキャスターから降りると笑顔で「楽しかった」と言ったように感想を述べていた。

2日目は「キャスターに乗って進むことができるかな」が主題で子どもたちは自分自身でキャスターを操作する活動を行った。キャスター遊びをする中で条件をいくつかかえることで子どもたちは乗り方や進み方を考え、楽しんでいた。そして、自然と隣の友達と競争する子が出

てきたり、その場でコマのようにグルグル回り出す子どもも出てきた。

### 3. 考察

南立誠幼稚園での2日間の活動を通して、キャスター遊びがイリンクスのおもしろさがあるのかを考察していく。

子どもたちはキャスターで遊ぶ中でこちらが条件をいくつかかえることで子どもたちは乗り方や進み方などを考え、楽しんでいた。遊びの中で一番人気であったのがキャスターに乗り、コマのようにぐるぐる回る遊びだった。これは目が回り、クラクラするのを楽しんでいて、イリンクスの世界を楽しんでいたと言える。

しかし、自然と隣の友だちと競争したり、泳ぐようにキャスターを漕いだり、キャスターを2人で操作することでどこに行くかを楽しんだりする子どもが出てきた。

これらのことから、子どもたちはキャスター遊びを通して、イリンクスのおもしろさだけでなく、アゴンやミミクリ、アレアといった意味世界のおもしろさも感じて、楽しんでいたことが考察された。

### 4. おわりに

今回の南立誠幼稚園の2日間の活動で以下のことが考察された。今回のキャスター遊びを通じて子どもたちはイリンクスの世界だけでなく、アゴンやミミクリ、アレアの世界も楽しんでいた。

## 南立誠幼稚園 キャスタ―遊び

# 遊びの意味世界

### 1. 活動の経緯 ～イリンクス遊びとは～

私たちは、カイヨフの唱える遊戯論の遊びの意味世界の一つであるイリンクスの研究の一環で、2010年9月2日(木)と9月7日(火)に津市立南立誠幼稚園でも履修を対象にキャスト―遊びを作った。カイヨフは遊びをノゴン(競争)、アレア(運)、ミニクリ(隠匿)、イリンクス(攻撃)の4つに区分できると提唱した。イリンクスの遊びは攻撃を感じるジェットコースターやスキーなどである。現代、攻撃を感じるような遊びは学校に取り入れられることが少ない。そこで今回、キャスト―に乗って遊ぶことによってイリンクスのおもしろさを感じることができないのではないかと考え、活動を企画した。

### 2. 活動のねらい

私としては、1日目に「キャスト―に乗っていらねえかな」、2日目に「キャスト―に乗って遊ぶゲームができるかな」と主題を掲げる。子どもたちが不安定な感覚を感じ、イリンクスを楽しむことができるのかを見ようとした。子どもがキャスト―遊びで何を楽しんでいるのかをみるのが今回のねらいである。

### 4. 活動の考察

1日目の活動では、基本的に大学生がキャスト―の操作を行い、2日目の活動では子どもたちが自分自身でキャスト―を操作するという活動を行った。キャスト―遊びをする中で条件をいくつか変えることで子どもたちは乗り方や遊び方などを考え、楽しんでいった。一人一人であったのがキャスト―に乗り、ぐるぐる回るコマの遊びで、その活動はイリンクスの世界を体感していると書える。しかし、自然と隣の友だちと競争したり、泳ぐようにキャスト―を滑り降り、キャスト―を2人で操作することによっていくかを楽しんだりする子どもが出た。これはキリストカ 遊びでイリンクス以外のアゴコンやミニクリ、アレアのおもしろさを感じていくといえる。

報告者 ○岡田珠碧・山口慶子・小山大真

調査委員 伊藤成子・中西敬昭・林 直哉

指導教員 日本俊彦・岡野 泉

10人、2人で乗ろう(怖いけど楽しい)

2人スパーマンになるよ!《落ちないようにする》

ひとつながって乗ろう!(後ろが浮くきん揺られる)

お調子物立派ける!

《目指すはギリギリ》

お調子物に陣当たり!

《ダンボールの山をぶっ壊せ!》



## 遊びにおけるヒフ感覚について

保健体育コース3年 山口優子

KW：ヒフ感覚，触れ合い，相互主体

### 1. はじめに

平成22年6月20日，三重大大学の総合演習の授業の一環として，津市立南立誠幼稚園の園児とその保護者を対象とした親子活動を立案し，実践を行った。

活動中の様子と，活動後に聞いた南立誠幼稚園の子どもたちの「コアラが一番楽しかった」という感想から，触れ合いから安心感や心地よさ，楽しさを感じ取ることをヒフ感覚と捉え，相互主体の関係が成り立っている触れ合いについて考察する。

### 2. 南立誠幼稚園親子活動実施概要

①実施日時：2010年6月20日9：00～10：30

②実施場所：南立誠幼稚園遊戯室

③参加者：三重大学生9名

南立誠幼稚園の園児21名

保護者21名

教員5名

今回南立誠幼稚園で行った親子活動のテーマは，触れ合いを通して感じるヒフ感覚であり，子どもにとって一番近い他者である親との身体の触れ合いによる安心感や楽しさを感じることを目的とした。『うちの人と遊ぼう』のポスターの動きを，イメージしやすいように「動物園に行こう」という設定の下，動物のまねをすることによって行った。初めは「動物ごっこ」を行い，親子であらいぐま，かめ，うま，ペンギン，さる，白鳥，ぶたの親子になって遊んだ。次にオオカミに扮した大学生が子ぶたを食べに登場し，親ぶたは子ぶたがオオカミに見えないように守るという「オオカミがきたぞー！！」を行った。次にNHKの「おかあさんといっしょ」で過去に行われていた「ジャングルポケット」の曲に合わせて踊る「ジャングルポケット」を行った。最後にクールダウンとしてコアラの

親子になってしばらくぎゅーと抱きしめ合い，その後うつぶせになった園児を保護者が手のひらで優しく叩く「パタパタ」を行って親子活動は終了した。

### 3. 考察

私たちは最初，子どもたちは運動量の多い活動が楽しいと答えるだろうと予想していた。しかし実際子どもたちが一番楽しかったと答えたのは，運動量としては一番少ないクールダウンのコアラの活動であった。コアラの活動では，親にぎゅっとされる客体であると同時に，親をぎゅっとする主体でもある，相互主体の関係が成り立った触れ合いを感じることができた。だから子どもたちはヒフから安心感や心地よさを感じ，楽しかったという印象が強く残ったのだと考える。生活の中で十分に触れ合いの取れていると思われていた親子でさえも，子どもたちにとっては触れ合いが十分ではなかった。子どもたちは私たちが思っている以上に，相互主体の成り立った触れ合いを求めている。コアラの活動は，最も分かりやすく相互主体が成り立った触れ合いを感じることができた活動であり，本当の意味での触れ合いであったと言える。私たちが触れることに抵抗を感じてしまうのは，相互主体の関係が成り立っていない触れ合いをしているからではないだろうか。

### 4. おわりに

子どもたちは触れる，触れられるという触れ合いによって，ヒフから安心感や楽しさを感じ取る。

しかし安心感や心地よさを感じるためには，コアラの活動のように相互主体の関係が成り立った触れ合いが必要であることが考察された。

# 遊びにおけるトフ感覚について

## ～南立誠幼稚園における親子活動の実践から～

### 3. 活動内容

☆わくわく！どきどき！はらはら！のりのり！！おうちの人と動物ごっこ☆

仲良くお散歩♪  
どこまで行こうかな？



①パパ、ママ、もっと早く～！！<動物ごっこ>



動物のまねをして  
音楽に合わせて踊ったよ

コアラだね☆



大きなお布団  
気持ちいいな♪



④みんなでぎゅー<クールダウン>



②オオカミなんかに動けないぞ！  
くオオカミがきたぞー！>



③ライオンが牙をむく！<ジャングルポケット>

### 1. 活動概要

平成23年6月20日(日)、総合演習という大学の授業の一環で、津市立南立誠幼稚園の4・5歳児とその保護者を対象とした親子活動を立案、実施した。『おうちの人と理ほう』のポスターを基本とした親子の身体の触れ合いのある運動を、イメージしやすいよう、「動物園に行こう」という設定の下に行った。

### 2. テーマ設定の理由

私たちは日々の生活の中で、いつのまにか触れるということに列して抵抗を感じているように思える。子どもの水や泥に「触りたい」という欲求に対し、「汚いからやめなさい」という場面も少なくないのではないだろうか。しかし本来、触れるということは心地よく、安心感のあるものであるはずだと考えた。そこで今回はセフとヒフに焦点を当て、親に触れ、触れられることによって、安心感や心地よさ、楽しさを感じ取れることをヒフ感覚と捉え、左上のテーマを設定した。

### 4. ふりかえり

私たちは、子どもたちは運動量の多い活動(写真①②)を楽しむだろうと考えていた。しかし実際の子どもたちは、一番身体の触れ合いの多い活動であったクールダウンのコアラの活動(写真④)が一番楽しかったと答えた。コアラの活動では、親にぎゅつとされる客体であると同時に、親をぎゅつとする主体でもある。相互主体の関係が成り立っていた。だからこそ安心感があり心地よく、子どもたちに楽しかったという印象が強くなったと考える。私たちが触れることに抵抗を感じるのには、相互主体が成り立っていない触れ合いだからではないだろうか。

コアラの活動は、相互主体の成り立っていた触れ合いを最も分かりやすく感じた活動であり、本来のありべき触れ合いの姿であったと言える。

報告者：O山口優子・谷口耕輔・小山大貴・岡田雄輔

安田崇幸・水野彰人・菱川裕輝・中西毅徳

林 直哉・廣智恵里・伊藤茂子

指導教員：山本俊彦・岡野 昇

## 2010年教育実地研究基礎 「暗闇部屋」の実践

教育実地研究基礎

幼児教育1年11名

幼児教育講座 河崎道夫

幼稚園の夏祭りに「暗闇部屋コーナー」を通して参加し、幼児教育現場で子どもとふれあう活動を行った。

「暗闇部屋」とは「おぼけ屋敷」と違い、ただ光がない真っ暗闇を子どもに体験してもらうための部屋であり、これまでも保育実践がある。

4月のオリエンテーション後、計画と準備を数回行い、段ボール集め（300枚目標）を行った。学生は、実行委員4名が部屋作成の下準備で幼稚園を訪れた。また幼稚園と子どもたちに慣れるため全員が1回ずつ幼稚園を訪問し、子どもたちと遊ぶ機会をもった。

夏祭り（2010年7月3日・土曜日）当日、遊戯室に段ボールで囲い真っ暗の部屋を作った。遊戯室の窓や入り口を、光がっさい入らないように業務用の黒いポリ袋や段ボールを使って覆うことに最新の注意を払った。

夕方、夏祭りの開始とともに暗闇部屋のコーナーも開場、次々に子どもたちが挑戦していった。入り口の説明や案内、出口でのメダル渡し、部屋の中での待機と観察、出入り口でのビデオ撮影など分担して実施した。

大勢の子どもたちが挑戦し楽しんだ。一人では入れない子は友達、兄弟、お父さんなどと一緒に入った。入り口でピタッと止まり泣くだけで動くことができない子どももいた。出口から出てきた子はみなすてきな笑顔だった。2度、3度と挑戦する子もいた。幼稚園職員や父母も入って楽しんだ。

驚いたり怖がったり強がったりホッとしたりと、子どもたちの様々な姿を見ることができた。

大学生になって初めて自分達の手で、しかも実際の保育現場に関わることを企画・運営する、実施することができた。企画運営の難しさを経験するとともに、共同で一つのことを成し遂げる楽しさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさ、そして保育が保育者はもちろん、地域や保護者の協力共同で充実していくことに、改めて気付くことが出来た。

## 暗闇部屋の実践 一 幼児教育 1 年教育実地研究基礎一

日時：2010 年 7 月 3 日 土曜日 9 時 30 分～20 時（夏祭り 18 時～19 時）

場所：津市立白塚幼稚園 ゆうぎ室

参加者：三重大学 A 類幼児教育コース 62 期生 11 名（担当教員・河崎達夫）

白塚幼稚園の子どもたち、保護者の方々、先生方

### 「暗闇部屋を作ろう！！」

「暗闇部屋」と言っても子どもを怖がらせるのが目的のお化け屋敷ではありません。

私たちが暗闇部屋を行うに当たってのテーマは、

「暗闇の中の子どもの様子はどうか、を観察しよう！」ということでした。

暗闇を経験した子どもたちの様子はどうか、を観察しよう！ということでした。そこであえて私たちは暗闇の中に何の細工もせず、本当にただの暗闇を作ることに重点を置いて暗闇部屋作成に臨みました。

一筋の光も漏らさずに！が私たちが暗闇部屋を作成するにあたっての掛け声でした。

段ボール(300 枚！)・新聞紙・でんぷんのり・ガムテープ・  
を便つてまずは壁作り。

暑い中の作業はとて大変でした。  
でも楽しみにしてくれている子どもたちも私たちのことを考えると、わくわくしてきて作業も楽しかった～！



底の新聞から漏れる光には、新聞紙を丸めてはめ込みました。底自体は業務用の黒のポリ袋と新聞紙で覆い、光を完全シャットアウト！入りのトンネルも子どもたちがしがをしないように段ボールを敷きました。出入口・窓から漏れる光には特に念入りに確認をしながら作業を進めました。



## 暗闇部屋の始まり～

出入口に各 2 人を配置し、入口で説明を聞いてもらってから入ってもらいました。また 1 人がカメラを回し、2 人が出口で事前に用意しておいたメダルを渡しました。

暗闇部屋の中には、安全のために 4 人が待機し、中の子どもたちの様子を観察しました。

1 人ずつ入る体験者もいましたが！ほとんどの子が友達とクワンないし 3 人で入っていました。

そのころでは…



「こわいよ～」「く～ら～い～」  
「なんもみえん」「だれがおるんやろ～！」  
という子どもたちの声が聞こえてきました。



入口の前で「やっぱやりやめる…」と入るのをやめてしまった子もいました。でも私たちが「一緒に入ろ！」と言うと入ってくれる子もいて、出てきたときには楽しかった！と笑顔を見せてくれてとても嬉しかったです。

「もう一回！」と何度も入りに来てくれる子もいました。

2 人ともとってもいい笑顔！  
「楽しかった！」の一言に涙れが  
一気に吹き飛びました。



当日はあいにくのお天気で、昼前りが体育館で行われたこともあり、私たちはその間に片付けを始めました。作るのには体力も時間も必要だったのに、片付けはあっという間に「終わりの早いなあ」と全員満足気でした。片付ける際には先生方にも協力していただき、本当に早く終わりました。また、私たちは三重大付属幼稚園でも暗闇部屋を作らせていただき、その際の子どもたちの様子もとても面白いものでした。子どもたちはみんな、楽しんでくれていてその笑顔に本当に元気をもらいました！

自分たちで一から何かを作り上げるというのは大学生になって初めての経験で、とまどったりすることもあるかもしれませんが、私たちにとって教育現場での企画・運営が出来たことはとてもいい経験になりました。

今回の企画・運営をすすめるにあたってご協力頂いた先生方、保護者の皆様、そしてなにより楽しく遊んでくれた園児のみさん、本当にありがとうございました。

## 活動内容

津市立白塚幼稚園において年長児と共に、カイコの飼育を行い、カイコが成長していく様子を観察したり、カイコの餌となる桑の葉を取りに行ったりした。

### <具体的な活動内容>

- ・ 5月…カイコの卵（昨年飼育していたカイコが生んだ卵を冷凍保存してあった）を冷凍庫から出し、卵を観察する。この日から子どもたちは毎日カイコの様子を観察し、観察記録を残していった。
- ・ 6月…カイコが孵化する。子ども達と共に学生もカイコを観察し、子ども達がカイコと触れあう様子を観察する。カイコの餌となる桑の葉を学生と子ども達で取りに行った。
- ・ 7月…カイコが繭になる。カイコが糸をはいて繭になる姿を子ども達と一緒に観察した。
- ・ 10月…カイコが作った繭を利用して、コサージュ作りを保護者の方と共にする。

## 子どもたちの様子

カイコを初めて見る子もいて、興味津々だったようだった。子どもたちの最初の反応は、怖がることなく積極的にカイコに触る子もいれば、恐る恐る触る子もいたり、なかなか触れない子などさまざまであった。

しかし、エサである桑の葉をあげたり観察をしていくうちにカイコに慣れ始め、はじめは触れなかった子も触れるようになっていた。

日々成長していくカイコを見て、子どもたちの関心も高まり、大切に育てていた。

子どもたちは割とすぐにカイコに慣れていったが、私たち学生は慣れるまでに時間がかかり、子どもたちの純粋さを感じた。子どもたちは、カイコのちょっとした変化にも気づき、おもしろい表現をしていて、私たちに新たな発見を教えてくれた。

子どもたちがカイコと触れ合ったことで、さまざまな発見をしたり、いろんな思いを抱いたりしていて、カイコと共に子どもたち自身も、さらには私たちも成長することができた。

## 感想

初めて触れ合うカイコに私たちの方が戸惑っていたが、子どもたちの無邪気さに後押しされて興味・関心を持つことができた。子どもたちが今後生き物と関わるときに、今回のカイコで学んだことや感じたことを生かしてくれたらいいな、と思った。

# 生き物環境づくり

2010年度教育実地研究

三重大学教育学部幼児教育コース 4年

両国麻希・伊藤加奈・久野恵理・佐藤由基・森野野・吉村洋美

指導教員：河崎道夫

## 活動内容

津市立白塚幼稚園において、保育者と連携して年長児クラスのカイコ飼育の実践に協力した。子どもとともにカイコがふ化、成長していく様子を観察したり、カイコの餌となる桑の葉を探したり探ったりする活動に参加した。

### <具体的な活動内容>

5月…カイコの卵（昨年飼育していたカイコが生んだ卵を冷凍保存してあった）を冷凍庫から出し、卵を観察する。この日から子どもたちは毎日カイコの様子を観察し、観察記録を残していった。

6月…カイコが孵化する。子ども達と共に学生もカイコを観察し、子ども達がカイコと触れ合う様子を観察する。カイコの餌となる桑の葉を学生と子ども達で取りに行った。

7月…カイコが繭になる。カイコが糸をはいて繭になる姿を子ども達と一緒に観察した。

11月…カイコが作った繭を利用して、コサージュ作りを保護者の方と共にする。

## 子どもたちの様子

カイコを初めて見る子もいて、興味津々だったようでした。子どもたちの最初の反応は、怖がることなく積極的にかいこに触る子もいれば、恐る恐る触る子もいたり、なかなか触れない子などさまざまでした。

しかし、エサである桑の葉をあげたり観察をしていくうち



桑の葉採り

にカイコに慣れ始め、はじめは触れなかつた子ども触れるようになっていました。日々成長していくカイコを見て、子どもたちの関心も高まり、大切に育てていました。

## 感想・学んだこと

子どもたちは割とすぐにカイコに慣れていました。私が、私たち学生は慣れるまでに時間がかかり子どもたちの純粋さを感じました。子どもたちは、カイコのちよっとした変化にも気づき、おもしろい表現をされていて、私たちに新たな発見を教えてくださいました。子どもたちがカイコと触れ合ったことで、さまざまな発見をしたり、いろんな思いを抱いたいて、カイコと共に子どもたち自身も、さらには私たちも成長することができたと思います。



大きくなったカイコ

## まとめ

初めて触れ合うカイコに私たちの方が戸惑っていましたが、子どもたちの無邪気さの後押しされて興味・関心を持つことができました。子どもたちが今後生き物と関わるときに、今回のカイコで学んだことや感じたことを生かしてくれたらいいな、と思います。

最後に、今回の企画にあたってご協力いただいた先生方、保護者のみなさま、そして、カイコの触れ合いを楽しみ、大切に育ててくれた白塚幼稚園の園児のみなさん、本当にありがとうございました。



繭ができた

## ニジマスの解剖&調理実習

一身田中学校 米村清香・中村博子

理科教育 後藤太郎 家政科教育 磯部由香

### 背景

- 初等教育で正しい生命観を育成するためには、動物の飼育を通じて生への営みを知ることで生命尊重の態度を養うとともに、動物の体がどのように機能するか学習することによって、子どもが生物の姿を正しく理解することが重要である。
- 小学校における動物の体内構造に関する学習の中で、魚類などの実物を用いた解剖の取り扱いには1977年の学習指導要領からなくなり、解剖学習はほとんど実施されなくなっている。
- 食材となる身近な動物（魚類、甲殻類、貝類）を生きたまま用いた解剖実習と調理実習の融合プログラムを作成し、小中学生や教員を対象とした実践を行った。解剖した後で調理して食べることで、動物を無駄にしているという感情をもつ児童・生徒は少なかった。
- 平成18年より、一身田中学校2年生の授業で、「解剖&調理実習」として開始し、解剖については2年生理科担当教員が実施。
- 生きたニジマスの準備を大学が行い、解剖のサポートには主に理科教育コースの学生、調理のサポートには家政科および消費生活コースの学生があたっている。

### 参加学生と授業

- 解剖：授業科目「理科実験（生物学）」でニジマスの解剖経験のある2年生以上
- 調理：家政科教育コースおよび消費生活コース
- 1時間目解剖、2時間目調理の2時間
- 11月5日は参観授業（生物教育学会生命倫理委員会委員4名の視察）

実施日	時限	授業者	学生
11月1日(月)	1,2限	後藤、中村	消費3年3名、理科4年2名
	3,4限	向井、中村	家政4年5名
11月4日(木)	1,2限	米村、中村	家政3年2名、理科4年2名
	3,4限	米村、中村	家政4年1名、消費4年2名、理科4年2名
11月5日(金)	2,3限	米村、中村	家政3年2名、理科3年1名、技術3年1名

### 学生の学び

- 生徒が解剖に積極的に取り組んでいることをみて、実物に触れることの重要性を改めて実感。
- 教科を横断した学びがあることを再認識。
- 新たな体験により、新しい自分に出会う機会を作ってあげることの重要性。
- 子どもたちのために教材することの重要性。
- 他分野の授業であっても最低限の知識と技術の必要性。

### 教員や参観者の感想

#### 【授業者】

- 生徒は食材としてさわることができるため、教材として適していると感じた。
- 一人では不可能な実習
- 魚の調理は授業として扱うことになっており、生徒には抵抗がない。
- 食材を生きている段階から扱うことで感謝の気持ちをもって食べることができる。
- 卒業後も忘れない授業の一つだろう。

#### 【参観者】

- 2時間の授業の中で、解剖学習と調理を終えることができたことに驚いた。
- 全員ができる実習であり、生徒が前向きに動いている様子がみられた。
- 内容をほぼ全員が理解できているようであった。
- 調理した魚を残さないように言葉に出さなくても、きれいに食べていた。
- 解剖学習は授業者一人では難しく、支援は必要になるだろう。
- 解剖に対する批判や、技術の不安に耐えられる解剖実習であると感じた。

## 5回目を迎えた

# ニジマスの解剖 & 調理実習

一身田中学校 米村清香・中村博子  
理科教育 後藤太郎・家政科教育 磯部 由香

### ◆背景

- 初等教育で正しい生命観を育成するためには、動物の飼育を通じて生への営みを知ることで生命尊重の態度を養うとともに、動物の体がどのように機能するか学習することによって、**子どもが生物の姿を正しく理解する**ことが重要である。
- 小学校における動物の体内構造に関する学習の中で、魚類などの実物を用いた解剖の取り扱いは1977年の学習指導要領からなくなり、**解剖学習はほとんど実施されなくなっている**。
- 食材となる身近な動物(魚類、甲殻類、貝類)を生きたまま用いた**解剖実習と調理実習の融合プログラム**を作成し、小中学生や教員を対象とした実践を行った。解剖した後で調理して食べることで、動物を無駄にしているという感情をもつ児童・生徒は少なかった。
- 平成18年より、一身田中学校2年生の授業で、「解剖 & 調理実習」として開始し、解剖については**2年生理科担当教員が実施**。
- 生きたニジマスの準備を大学が行い、**解剖のサポート**には主に理科教育コースの学生、**調理のサポート**には家政科および消費生活コースの学生があたっている。

### ◆参加学生

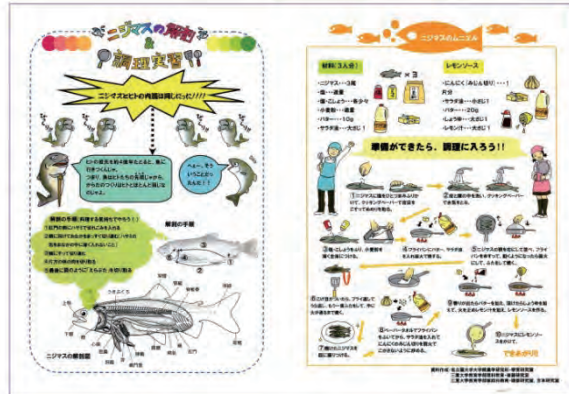
- 解剖: 授業科目「理科実験(生物学)」でニジマスの解剖経験のある2年生以上
- 調理: 家政科教育コースおよび消費生活コース

実施日	時限	授業者	学生
11月1日(月)	1,2限	後藤、中村	消費3年3名、理科4年2名
	3,4限	向井、中村	家政4年5名
11月4日(木)	1,2限	米村、中村	家政3年2名、理科4年2名
	3,4限	米村、中村	家政4年1名、消費4年2名、理科4年2名
11月5日(金)	2,3限	米村、中村	家政3年2名、理科3年1名、技術3年1名

### ◆授業

- 1時間目解剖、2時間目調理の2時間連続授業で、調理実習室で実施
- 11月5日は参観授業(生物教育学会生命倫理委員会委員4名の視察)

- 特色ある授業作り
- 大学教員による教育支援
- 教育現場の理解



### ◆解剖の指導概要

**ニジマスの解剖**

1 **こんな力を身につけたい(自ら)**

2 **授業の流れ**

3 **解剖実習開始**

4 **調理実習開始**

### ◆解剖手順と消化管の標本



### ◆実習の様子



### ◆生徒や学生の振り返りから

**ニジマスの解剖レポート**

心臓の拍動

#### 家政教育4年

- 授業について気づいたこと
- 子どもたちについて気づいたこと
- その他、感想・反省など

#### 家政教育3年

- 授業について気づいたこと
- 子どもたちについて気づいたこと
- その他、感想・反省など

- 実物に触れることの重要性を改めて実感。
- 教科を横断した学びがあることを再認識。
- 新たな体験をする機会の作ることの重要性。

- 子どもたちのために教材することの重要性。
- 他分野の授業であっても最低限の知識と技術の必要性。

### ◆参観授業

#### 【授業者・理科】

- 生徒は食材としてさわることができるため、教材として適していると感じた。
- すでに手羽先を用いた実験を行ったために、生の教材の扱いに慣れていたようだ。
- 一人では不可能な実習

#### 【授業者・家庭科】

- 魚の調理は授業として扱うことになり、生徒には抵抗がない。
- 食材を生きている段階から扱うことで感謝の気持ちをもって食べることができる。
- 卒業後も忘れない授業の一つだろう。

#### 【外部からの視察者】

- 2時間の授業の中で、解剖学習と調理を終えることができたことに驚いた。
- 全員ができる実習であり、生徒が前向きに動いている様子が見られた。
- 内容をほぼ全員が理解できているようであった。
- 調理した魚を残さないように言葉に出さなくても、きれいに食べていた。
- 解剖学習は授業者一人では難しく、支援は必要になるだろう。
- 解剖に対する批判や、技術の不安に耐えられる解剖実習であると感じた。
- 特に、女子生徒は繊細に解剖する様子が見られた。

- 子どもたちのために教材することの重要性
- 他分野の授業であっても最低限の知識と技術の必要性

## 実習の継続と参加学生の拡大



# G ボールを使った「体づくり運動」の授業実践

保健体育コース 4年 瀬川 剛史  
一身田中学校 杉崎 隆典 保健体育講座 後藤 洋子

## 1. 始めに

「体づくり運動」は多様な運動を通して体力を高めたり、体への気付き、調整、仲間との交流を図ったりする運動の領域である。G ボールは人が乗ったり弾んだりできる大きなボールで、バランス感覚の向上、姿勢づくりに効果的で、多様な運動を可能にする魅力的な用具であると言われており、近年、体育授業に導入する小、中学校が増えつつある。しかし教材として授業での活用が十分に普及しているとは言えず、多くの事例的研究が必要とされているのが現状である。そこでG ボールの特性を活かした「体づくり運動」の授業を実践し、生徒の様子などを観察して、授業改善の手掛かりとすることにした。

## 2. 活動の概要

### (1) G ボールを使った運動について

G ボールの特性を活かした運動として、以下の4要素を取り上げて18種類の運動例を提示するとともに、G ボールを使ってバランスを取りながらストレッチを行った。

- ・バランス系（ボールに乗ってバランスを取る）の運動：5種類
- ・バウンド系（ボールに乗って弾む）の運動：8種類
- ・ローリング系（ボールに乗って転がる）の運動：5種類

### (2) 授業実践について

一身田中学校1年生全6クラスについて、5～6単位時間実施した。指導計画は以下の通りである。

時間	テーマ	活動内容
1	姿勢を計る	G ボールの特性、注意点などを理解する。 G ボールに座った姿勢を側面から写真撮影し、姿勢に対する意識を高める。
2	課題に挑戦1	G ボールを使ったストレッチ。 バランス系、バウンド系、ローリング系の運動に挑戦する。
3	課題に挑戦2	G ボールを使ったストレッチ。 前回できなかった運動や新しい運動課題に挑戦する。
4	運動の組み合わせ	G ボールを使ったストレッチ。 数人のグループをつくり、挑戦した運動から6種類、自分たちで考えた運動1種類を組み合わせる。
5	練習と測定	組み合わせた運動を連続してできるように練習する。 2回目の写真撮影をし、良い姿勢について考える。
6	運動の発表	グループ毎に運動を発表し、お互いに評価する。

## 3. まとめ

「体づくり運動」では「できた」「できない」にあまりこだわらず、多様な運動を経験させることが重要である。生徒達の次々と運動課題を要求する姿が見受けられ、それに答えるとともに、生徒が自ら運動課題やG ボールの活用例を工夫できるような場を設定することが今後の課題となった。

# Gボールを使った「体づくり運動」の授業実践

保健体育コース4年 瀬川 剛史

保健体育講座 後藤 洋子 一身田中学校 杉崎 隆典

## 経緯

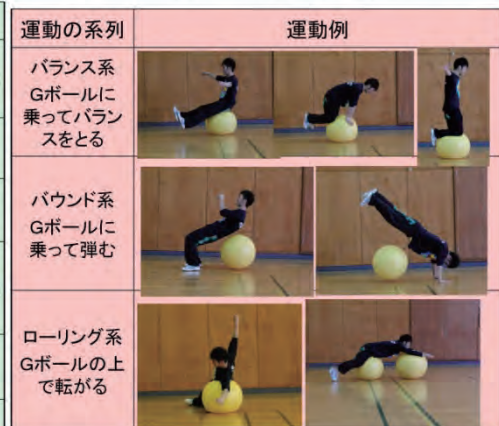
「体づくり運動」は多様な運動を通して体の調整、気付き、仲間との交流を図ったり、体力を高めたりする運動領域である。Gボールは運動を誘発する魅力的な用具であり、様々な効果が期待されている。そこで、Gボールを使った運動のプログラムを作成し、一身田中学校1年生の各クラスで6回の体育授業を実践した。

## 活動の概要

### 指導計画

時間	テーマ	活動内容
1時間目	姿勢を計る1	Gボールの特性、注意点などを理解する。Gボールに座った姿勢を側面から写真撮影し、姿勢に対する意識を高める。
2時間目	課題に挑戦1	Gボールを使ったストレッチ。バランス系、バウンド系、ローリング系の運動に挑戦する。
3時間目	課題に挑戦2	Gボールを使ったストレッチ。前回できなかった運動や新しい運動課題に挑戦する。
4時間目	運動の組み合わせ1	Gボールを使ったストレッチ。数人のグループをつくり、挑戦した運動から6種類、自分たちで考えた運動1種類を組み合わせる。
5時間目	運動の組み合わせ2 姿勢を計る2	組み合わせた運動を連続してできるように練習する。2回目の写真撮影をし、良い姿勢について考える。
6時間目	運動の発表	グループ毎に運動を発表し、お互いに評価する。

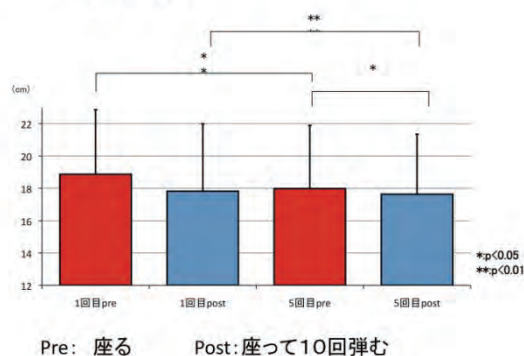
### Gボールの運動例



### 姿勢の測定



### 測定結果



## まとめ

「体づくりの運動」では多様な運動を経験することが重要な課題となる。授業の中で生徒達の次々と運動課題を要求する姿が見受けられた。課題を与えるだけでなく生徒が自ら運動課題やGボールの活用例を工夫できるような場を設定することが今後の課題となった。

## 北立誠幼稚園での未就園児保育の運営

### : たんぽぽ会に参加して 2010

三重大学教育学部幼児教育コース 4年

天野由貴・市川美帆・森陽子・吉村淳美

指導教員：三重大学教育学部 滝口圭子

「たんぽぽ会」とは、津市立北立誠幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。学生は、平成 20（2008）年度、平成 21（2009）年度と、後期のみ「たんぽぽ会」の運営に参加させていただいていたが、本年度からは、大学教育・学生支援推進事業：大学教育推進プログラム「隣接学校園との連携を核とした教育モデル：多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して」の実践の一環として、年度を通じて参加させていただき、且つ学生が主体となって活動を企画する機会もいただいている。「たんぽぽ会」の対象は、地域の保護者と子ども（0～4 歳）であり、例えば北立誠幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。原則として、毎週月曜日に実施しているが、参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、北立誠幼稚園園長小菅なぎさ先生、北立誠幼稚園保護者ボランティアや地域ボランティアの皆さん 8 名、幼児教育コース 4 年生の雨皿麻希、迫田里紗、山口麻衣であった。学生は、前期は平成 22（2010）年 5 月から 7 月まで、後期は平成 22（2010）年 10 月から平成 23（2011）年 2 月まで、原則として毎回参加する。園長の小菅先生にお願いし、毎回の活動後に、運営スタッフ全員での反省会を実施していただいた。また、未就園児保育に関する昨年度の反省から、①運営スタッフ全員での最初の打ち合わせに学生と滝口とで参加させていただき、②運営スタッフ間の連携を促すために、小菅先生及び学生に自己紹介シートの作成を依頼した。また、学生には、③昨年度の先輩の最終レポートを読み、現時点での「課題」と課題克服のための「具体的な方法」を協議しておくよう求めた。

本活動は、平成 22（2010）年度教育実地研究の授業として単位認定を行った。授業の目的は「公立幼稚園で毎週実施されている未就園児保育の運営に関わり、保育内容の一部を企画、創作、実演することを通して、それまで培ってきた実践力をより確かなものとすると同時に、公立幼稚園が担う地域の子育て支援の具体的内容を知り、その課題と具体的対策について考察する」ことであった。学生は、毎回の活動後に、具体的な活動内容や子どもや保護者の様子を実践記録ノート（たんぽぽノート）にまとめて提出した。実践記録ノートは、毎回滝口が目を通し、必要に応じてコメントを書き込み学生に返却した。また、前期終了時に中間レポートを、後期終了時に最終レポートの提出を求めた。中間レポート及び最終レポートの作成に当たっては、自らの実践記録ノートを見返しながら、反省点、約 3 か月（中間レポート）もしくは約 10 か月（最終レポート）を経ての自身の変容の有無、自身の変容の具体的内容や変容の契機等について記述するよう指示した。今後、中間レポートと最終レポートの比較を通して、学生の学びの変容を記述する予定である。

# 北立誠幼稚園での就園児保育の運営 たんぽぽ会に参加して2010



雨皿麻希・迫田里紗・山口麻衣  
三重大学教育学部幼児教育コース4年



指導教員: 滝口圭子

## たんぽぽ会について

お母さんと子どもが参加  
子どもの年齢: 0歳～3歳  
毎週月曜日

10:00am～11:00am 登園～自由遊び  
11:00am～11:30am 全体活動

運営メンバー

- ・津市立北立誠幼稚園園長 小菅なぎさ先生
- ・津市立北立誠幼稚園保護者など8名
- ・三重大学教育学部幼児教育コース4年生3名

## 自由遊びの様子



最初は、親子でのふれあいが中心となっていたが、徐々に友だちを意識するようになり、他の子どもと一緒に前へ出てきたり、学生とのふれあいを楽しんでいる様子が見られるようになった。

## 私たちにとってのたんぽぽ会

- 周りの大人が楽しんでいる姿を見せることで、子どもが遊びの楽しさに気付くきっかけになる。
- 普段の学生生活では接する機会の少ない保護者の方々とも、話をさせていただくことができる。
- 運営メンバーである北立誠幼稚園の先生方や、育児経験のあるお母さんボランティアの方々の姿勢や意見について、実地を踏まえて学ぶことができる。
- 学生の方から積極的に子どもと関わることもあるが、親子で触れ合う時間を大切にすることについても、考慮する必要がある。

## 当日の流れ

	登園
10:00	・あいさつをする ・出席ブックにシールを貼る
～	自由遊び
11:00	室内: おままごと・お絵かき・制作・粘土・ブロック等 園庭: 砂場やブランコや滑り台などの遊具で遊ぶ。 季節によって水遊びや落ち葉ボール等を用意する。
11:00	全体活動
～	手遊び・絵本の読み聞かせ
11:30	リズム体操・ふれあい遊び・歌 など
11:30	降園・掃除・反省
～	

## 全体活動の様子



## 気づいたこと

- 当初は親子で遊ぶ姿が多く見られたが、たんぽぽ会に慣れていく中で、子どもは親が側にいなくても、遊びに夢中になることができ、また親も安心してその姿を見守ることで、両者にとって新鮮な時間になる。
- 他の保護者や先生と会話をする時間を楽しみに来られている保護者もいらつやる。たんぽぽ会が、気分転換や悩み相談の場になっている。
- 来年度入園する子どもやその保護者にとっては、幼稚園の雰囲気に慣れ親しみ、他の保護者や先生との関係を深めるきっかけになっている。

## まとめ

- 未就園児保育は、親子だけで過ごすことが多い子どもにとっては、集団での活動を経験する機会となり、保護者にとっては、日頃の育児の不安や悩みを軽減する機能も持つ憩いの場となっている。
- 学生にとっては、現場の先生方や育児経験のあるお母さん方の話を聞かせていただける得難い機会である。また、普段、接することの少ない未就園の子どもたちとふれあい、手遊びや読み聞かせなどの実践も経験することができる貴重な場となっている。

## 白塚幼稚園での未就園児保育の運営 ：ぴょんちゃんクラブ・みんなで子育て2010

三重大学教育学部幼児教育コース4年

天野由貴・市川美帆・森陽子・吉村淳美

指導教員：三重大学教育学部 滝口圭子

「ぴょんちゃんクラブ」とは、津市立白塚幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。「ぴょんちゃんクラブ」の運営に、三重大学教育学部幼児教育コースの学生が参加させていただくようになってから、今年で4年目となる。「ぴょんちゃんクラブ」の対象は、地域の保護者と子ども（0～4歳）であり、例えば白塚幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。原則として、隔週火曜日に実施しているが、参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、白塚幼稚園園長岡田恵子先生、白塚幼稚園保護者ボランティアの皆さん10名、三重大学教育学部幼児教育コース4年生の天野由貴、市川美帆、森陽子、吉村淳美であった。学生は、前期は平成22（2010）年5月から7月まで、後期は平成22（2010）年10月から平成23（2011）年2月まで、原則として毎回参加する。園長の岡田先生にお願いし、毎回の活動後に、運営スタッフ全員での反省会を実施していただいた。また、未就園児保育に関する昨年度の反省から、①運営スタッフ全員での最初の打ち合わせに学生の参加をお許しいただき、②運営スタッフ間の連携を促すために、学生に自己紹介シートの作成を依頼した。また、学生には、③昨年度の先輩の最終レポートを読み、現時点での「課題」と課題克服のための「具体的な方法」を協議しておくよう求めた。

本活動は、平成22（2010）年度教育実地研究の授業として単位認定を行った。授業の目的は「公立幼稚園で毎週実施されている未就園児保育の運営に関わり、保育内容の一部を企画、創作、実演することを通して、それまで培ってきた実践力をより確かなものとすると同時に、公立幼稚園が担う地域の子育て支援の具体的内容を知り、その課題と具体的対策について考察する」ことであった。学生は、毎回の活動後に、具体的な活動内容や子どもや保護者の様子を実践記録ノート（ぴょんちゃんノート）にまとめて提出した。実践記録ノートは、毎回滝口が目を通し、必要に応じてコメントを書き込み学生に返却した。また、前期終了時に中間レポートを、後期終了時に最終レポートの提出を求めた。中間レポート及び最終レポートの作成に当たっては、自らの実践記録ノートを見返しながら、反省点、約3か月（中間レポート）もしくは約10か月（最終レポート）を経ての自身の変容の有無、自身の変容の具体的内容や変容の契機等について記述するよう指示した。本ポスター発表の時点で、学生は「活動後に行う反省会で、お母さん先生や園長先生と協議する中で、保護者の目線や現場の意見などを学ぶことができた。この貴重な経験を活かし、今後も、参加者が楽しめる場となるよう努力したい。また、将来現場に出た時も、子どもの保育のみならず、保護者の支援についても積極的に取り組みたい。」とまとめている。

# 白塚幼稚園での未就園児保育の運営

## ぴよんちゃんクラブ:みんなで子育て2010

天野由貴・市川美帆・森陽子・吉村淳美  
三重大学教育学部幼児教育コース4年



指導教員:滝口圭子


### ぴよんちゃんクラブとは

保護者と子どもが参加

子どもの年齢:0歳児～4歳児

隔週火曜日 9:30～10:30am 登園～自由遊び  
10:40～11:00am 設定遊び

運営グループメンバー

- ・津市立白塚幼稚園園長 岡田恵子先生 
- ・津市立白塚幼稚園保護者ボランティア  
お母さん先生10名
- ・三重大学教育学部幼児教育コース4年生4名

**イベント盛りだくさん!!**

…フルーツ演奏, しもちくん, 園探検など

### 一日の流れ

9:30～10:30	登園 ・あいさつをする ・出席ブックにシールを貼る 自由遊び 粘土遊び・お絵描き・ままごと ブロック・大型積み木 等
10:30～10:40	片付け
10:40～11:00	設定遊び 手遊び・歌・絵本・エプロンシアター リズム遊び 等
11:10～	降園 反省会

### 自由遊びから学生が学んだこと

- 子どもの気持ちに寄り添うことが大切。
- 学生が自ら遊びを楽しむことによって、参加者の緊張が和らぐ。
- 子どもの遊びを大人と一緒に楽しみ、大人が、遊びをより広げていくように関わることで、子どもの楽しみも広がる。
- 保護者同士の関わりも多くみられ、自由遊びが子育て支援の一つの機会になることに気づくことができた。

### 設定遊びから学生が学んだこと

- 参加する子どもたちの年齢層が幅広いので、それぞれの子どもたちに適した活動を考えることが大切である。
- 同じ年齢の子どもであっても、遊びに対する好き嫌いがあるため、配慮が必要である。
- 事前に、お母さん先生と役割分担を決めておくことや、当日の活動内容を全員で確認することで、円滑な運営につなげることができる。

### ぴよんちゃんクラブの目的

#### 【未就園児保育に参加することで…】

- 入園への抵抗感を和らげることができる。
- 同じ年代の子どもと出会うことができる。

#### 【地域密着型子育て支援】

- 保護者の方々が子育てに関する悩みを共有し、また共感し合うことで、参加者全員が安心できるような場を提供する。



### 自由遊びでの親子の様子



各コーナーに用意された遊びの中から、子ども自らが選んで遊ぶ。夏休み明け頃から友達と一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。保護者同士の関係も広がり、親子共に楽しんで参加されているようだ。

### 設定遊びでの親子の様子



当初は親子ともに緊張が感じられたが、回を重ねるごとに歌や絵本などを積極的に楽しむ姿が見られるようになった。毎行っている手遊びも動きを覚えて、大きな身振りで一緒に取り組めるようになってきた。

### まとめ

毎回、活動後に行う反省会で、お母さん先生や園長先生と協議する中で、保護者の目線や現場の意見などを学ぶことができた。この貴重な経験を活かし、今後のぴよんちゃんクラブも、参加者が楽しめる場となるよう努力したい。また、将来現場に出た時も、子どもの保育はもちろんのこと、保護者の支援についても積極的に取り組みたい。

## 白塚幼稚園土曜参観での親子のふれあい活動の企画・運営 2010

三重大学教育学部幼児教育コース3年

石原祐三郎・茨木睦子・衣笠章子・黒田千裕・竹村真菜

田下賢吾・濱口裕加・丸中麻友美・安井秀樹・山下裕史

指導教員：三重大学教育学部 滝口圭子

大学教育・学生支援推進事業：大学教育推進プログラムとして平成21年度に採択された「隣接学校園との連携を核とした教育モデル：多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して」（代表・後藤太一郎）は、三重大学に隣接する一身田校区（1中学校，3小学校，1幼稚園）及び橋北校区（1中学校，3小学校，2幼稚園）と教育学部との間に，現代GP（平成18年度～平成20年度）の支援を受けて培われた連携協力体制を更に拡大・強化し，当該学校園における学生の現場体験を核とした教育モデルを構築することを目的のひとつとするものである。本発表では，当該学校園と幼児教育コースとの協同の場のひとつである白塚幼稚園の土曜参観における活動を紹介する。

本活動は，平成20（2008）年度は教育学部1年生を対象とした「教育実地研究基礎」として開講したが，種々の課題が生じたこともあり，平成22（2010）年度は大学の授業とは関係なく実施した。本年度の運営スタッフは，幼児教育コース3年生10名，幼児教育コース1年生11名であった。平成20（2008）年度と同様に，白塚幼稚園での事前打ち合わせと事後反省会を実施した（表1）。当日の活動は，実施順に「アブラハムの子（準備運動）」「げんきにしずかに」「あくしゅをしながら」「ジェットコースター」「ゴールはどこ？」「手遊び“落ちた落ちた”“キャベツの中のおおむし”」「じゃんけん列車」「みんなごうのしゅっぱつ」であった。反省点として，見慣れない学生に保護者や子どもたちが戸惑ったこと，学生の声かけが不足していたこと，活動内容において“家庭間の交流”というねらいがあまり反映されていなかったことなどにより，そのねらいがあまり達成されなかったことが挙げられ，活動のねらいの自覚とねらいに沿った活動の案出が今後の課題とされた。

表1 平成22（2010）年度白塚幼稚園土曜参観親子活動支援スケジュール

日付	活動内容
4/20（火）	大学でのオリエンテーション
5/10（月） まで	3年生が中心となり，1年生の役割分担も考慮しながら活動内容を計画する。頭の中で考えるだけではなく，実際にやってみて実感を得ておくこと，事前打ち合わせで <b>白塚幼稚園の先生方からの質問に答えられるように，手順，子どもや保護者への説明，進行，列の作り方等を具体的に考えておくこと</b> を指示した。
5/10（月）	<b>3年生全員で白塚幼稚園に行き事前打ち合わせをする。</b> 学生が白塚幼稚園で活動内容を説明し，先生方から指導やアドバイスをいただく。
5月 第2～4週	アドバイスを参考にしながら活動内容を練り上げる。
6月第1週	アドバイスを参考にしながら活動内容を練り上げる。白塚小学校体育館に行き，実際の活動の場で距離，間隔等の確認をする。
6/12（土）	<b>白塚幼稚園土曜参観当日 親子活動時間 9:15～11:00am</b>
6/16（水）	大学で当日の録画ビデオを確認しながらの反省会
6/21（月）	<b>白塚幼稚園での反省会 各自感想レポートを持参し白塚幼稚園に提出する。</b>

# 白塚幼稚園土曜参観での 親子のふれあい活動の企画・運営

三重大学教育学部幼児教育コース3年  
石原祐三郎・茨木睦子・衣笠章子・黒田千裕・竹村真菜  
田下賢吾・濱口裕加・丸中麻友美・安井秀樹・山下裕史

指導教員:三重大学教育学部 滝口圭子

## 三重大学教育学部と地域との連携

●大学教育・学生支援推進事業:大学教育推進プログラム  
隣接学校園との連携を核とした教育モデル:多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して

…三重大学教育学部に隣接する一身田校区5校園及び橋北校区6校園と教育学部が連携、協力する取り組みである。

…本発表では、津市立白塚幼稚園の土曜参観における活動を紹介します。

## 親子のふれあい活動の企画・運営

●活動日:平成22(2010)年6月12日(土)

●場所:白塚小学校体育館

●主たる運営スタッフは、三重大学教育学部幼児教育コース3年生10名、1年生11名であった。企画・運営の主体となったのは3年生であった。

9:00 親子登園  
9:15 活動開始  
・自己紹介  
・アブラハムの子(準備運動)  
・げんきにしずかに  
・あくしゅをしながら  
・ジェットコースター  
・ゴールはどこ?  
・手遊び『落ちた落ちた』『キャベツの中のおむし』  
・じゃんけん列車  
・みんなごうのしゅっぱつ  
11:00 活動終了

## 親子のふれあい活動内容①(抜粋)

- げんきにしずかに  
歌詞に合わせて「げんきに」「しずかに」、手拍子や足踏みをする。
- あくしゅをしながら  
親子で握手をしながら、音楽に合わせて、手を振ったり、ジャンプをしたりする。
- ジェットコースター  
親子2組が、前後に並び、二本の棒をバトンにしてリレーをする。

## 親子のふれあい活動内容②(抜粋)

- ゴールはどこ?  
お面をかぶった保護者の手を引いて、子どもがゴールへ誘導する。
- じゃんけん列車  
親子で列車になって、じゃんけんをしながら、列車を繋げていく。
- みんなごうのしゅっぱつ  
「お母さん号」「先生号」など、呼ばれた人を先頭にして、列車を作る。最後は全員で繋がって、「みんな号」を作る。

## 学生が親子活動に参加する意義

- 子どもたちや保護者にとっては…  
大学生くらいの年齢の人と関わることはあまりないと思われるので、新鮮な気持ちを抱くことができる。
- 白塚幼稚園にとっては…  
学生の参加により、大人数での準備・運営が可能になるので、より大規模な活動ができる。
- 学生にとっては…  
地域の幼稚園を知ることができる。  
“子どもと保護者が愛情を感じあいながら楽しめる活動”の内容や運営について、身を以て学ぶことができる。

## 親子活動の振り返り

- 普段、家庭ではあまりできないような幅広い活動を取り入れることができたのではないかと。親子が、体を動かしながらふれあうことを楽しめたと思う。
- 家庭間の交流の場とすることを、今回の活動のねらいの一つとしていたが、見慣れない学生に保護者や子どもたちが戸惑ったこと、学生の声かけが不足していたこと、プログラムの構成において“家庭間の交流”というねらいがあまり反映されていなかったことなどにより、そのねらいはあまり達成されなかった。

## 反省点

- 遊びのねらいをしっかりと定め、ねらいに沿って計画を立てることができていなかった。
- 決められた役割をこなすことばかり重視してしまい、状況を見て声かけができなかった。
- ひとつひとつの活動に区切りをつけるような声かけをしてしまい、活動の流れを止めてしまった。
- 盛り上げることばかり考えてしまったが、活動内容に緩急をつけることも必要であった。

## よりよい活動にしていくために

- 学生が事前に子どもたちと交流し、お互いを知る機会を設けてはどうか。そして、学生は、実際の子どもたちの姿に適した活動内容を考えていくことが望ましい。
- 学生が、活動のねらいをしっかりと自覚しながら、積極的に参加することで、保護者や子どもたちにとっても、幼稚園にとっても、学生にとっても、有意義な活動になっていくのではないだろうか。



## 南立誠幼稚園での未就園児保育の運営

### : うさぎ組・うさぎクラブ 2010

三重大学教育学部幼児教育コース 4 年

伊藤加奈・藤岡真衣・森萌野

指導教員：三重大学教育学部 滝口圭子

「うさぎ組・うさぎクラブ」とは、津市立南立誠幼稚園が地域に公開している未就園児保育である。三重大学教育学部幼児教育コースの学生が、「うさぎ組・うさぎクラブ」の運営に参加させていただくのは、平成 22 (2010) 年度が初めてである。そのため、連携活動開始当初は、関係者全員が試行錯誤しながら運営に当たったようである。「うさぎ組・うさぎクラブ」の対象は、地域の子ども (0~4 歳) とその保護者であり、例えば南立誠幼稚園への入園予定はなくとも参加可能である。南立誠幼稚園の未就園児保育の特色として、「うさぎ組 (0~3 歳)」と「うさぎクラブ (3 歳以上)」という対象年齢が異なる 2 クラスを設定しているという点が挙げられよう。原則として、第 1 水曜日は「うさぎクラブ」を、第 2・第 3 水曜日は「うさぎ組」と「うさぎクラブ」を対象に開催している。参加者の固定を目指しているわけではないので、開催日によって参加者数に変動がある。運営グループメンバーは、南立誠幼稚園園長丹羽立子先生、主任児童委員伊藤紀子先生、南立誠幼稚園保護者ボランティアの皆さん 14 名、幼児教育コース 4 年生の伊藤加奈、藤岡真衣、森萌野であった。学生は、前期は平成 22 (2010) 年 5 月から 7 月まで、後期は平成 22 (2010) 年 9 月から平成 23 (2011) 年 3 月まで、原則として毎回参加する。園長の丹羽先生にお願いし、毎回の活動後に、運営スタッフ全員での反省会を実施していただいた。また、未就園児保育に関する昨年度の反省から、①運営スタッフ全員での最初の打ち合わせに学生と滝口とで参加させていただき、②運営スタッフ間の連携を促すために、丹羽先生及び学生に自己紹介シートの作成を依頼した。また、学生には、③昨年度の先輩の最終レポートを読み、現時点での「課題」と課題克服のための「具体的な方法」を協議しておくよう求めた。

本活動は、平成 22 (2010) 年度教育実地研究の授業として単位認定を行った。授業の目的は「公立幼稚園で毎週実施されている未就園児保育の運営に関わり、保育内容の一部を企画、創作、実演することを通して、それまで培ってきた実践力をより確かなものとすると同時に、公立幼稚園が担う地域の子育て支援の具体的内容を知り、その課題と具体的対策について考察する」ことであった。学生は、毎回の活動後に、具体的な活動内容や子どもや保護者の様子を実践記録ノート (うさぎノート) にまとめて提出した。実践記録ノートは、毎回滝口が目を通し、必要に応じてコメントを書き込み学生に返却した。また、前期終了時に中間レポートを、後期終了時に最終レポートの提出を求めた。中間レポート及び最終レポートの作成に当たっては、自らの実践記録ノートを見返しながら、反省点、約 3 か月 (中間レポート) もしくは約 10 か月 (最終レポート) を経ての自身の変容の有無、自身の変容の具体的内容や変容の契機等について記述するよう指示した。

# 南立誠幼稚園での未就園児保育の運営

うさぎ組・うさぎクラブ2010

伊藤加奈・藤岡真衣・森萌野

三重大学教育学部 幼児教育コース4年

指導教員：滝口圭子

## \* うさぎ組・うさぎクラブについて \*

地域の子どもと保護者が自由に参加できる

第1水曜日：うさぎクラブ(3歳以上)

第2・第3水曜日：うさぎ組(0~3歳)・うさぎクラブ


10:30am~11:00am 登園~自由遊び

11:00am~11:30am 全体活動

運営メンバー

- ・津市立南立誠幼稚園園長 丹羽立子先生
- ・主任児童委員 伊藤紀子先生
- ・津市立南立誠幼稚園保護者ボランティア14名
- ・三重大学教育学部幼児教育コース4年生3名

## \* 当日の流れ \*

登園	
10:30~11:00	
自由遊び	・あいさつをする ・名札やプリントを配る ままごと・制作・ブロック遊び・すべり台
11:00~11:30	全体活動 絵本・手遊び・歌・ふれあい遊び・リズム体操
11:30~	降園・掃除・反省会

## \* 自由遊びの感想・反省 \*

- 様々な年齢の子どもたちと毎週関わることができ、発達段階による子どもの違いや、発達に応じた言葉かけの大切さなどを体験的に知ることができた。
- 子どもたちが同じ空間で一緒に遊ぶことで、お互いに知らなくても子ども同士で関わりあえることが、未就園児保育のよいところではないか。
- 参加されているお母さんと、子どもの話や世間話など様々なお話をさせていただくことで、育児や保育の難しさや面白さを知ることができ、普段の生活では得られない貴重な経験となっている。



アンパンマンの手遊び

エプロンシアター



最後は「バイバイバイ」を歌ってお別れします☆

## \* 自由遊び



ブロックや積み木、粘土、おままごとなど子どもたちが好きなおもちゃで自由にあそびます。この日は作品展に向けてうさぎの絵も描きました。

幼い妹や弟を連れて来られているお母さんには、積極的に声をかけて下のお子さんお預かりし、上のお子さんと十分に関わることができるように配慮しています。

## \* 設定遊び

設定遊びでは、体操や手遊び、絵本、季節の歌などの活動を行います。



子どもたちも大好き!! アンパンマン体操★

親子のふれあい遊び

## \* 設定遊びの感想・反省 \*

- 園長先生や伊藤先生から手遊びや親子遊びをたくさん教えていただき、非常に勉強になった。
- アンパンマンの手遊びやアンパンマン体操を、毎回最初に取り入れた。毎回、繰り返すうちに、子どもたちも覚えて楽しんで取り組むことができたのではないだろうか。繰り返しの大切さを実感した。
- 当初は、年齢に合った遊びを取り入れることができず、子どもたちの反応があまりよくないこともあったが、園長先生や伊藤先生、お母さんボランティアの方々からいただいたアドバイスやアイデアを参考にさせていただくことで、年齢に応じた活動を展開することができるようになってきた。

# 小学校高学年児童の生活習慣と骨密度及び体組成の関連

～健康教育への活用を目指して～

保健体育コース 59期 207100番 遠島 萌

指導教官 富樫 健二

## 1. 緒言

小学校時代は成長期にあり、生活習慣の確立や体づくりにおいて重要な時期にある。この時期の習慣が今後生涯にわたった健康に関わっているといても過言ではない。しかし、近年における情報化や食等に関する身の回りの環境が、子どもの生活習慣や身体の大きさ、心身の健康に様々な変化や影響を及ぼしていることが先行研究により報告されている。また、体格は向上している一方で、身体能力の低下、肥満、痩せ志向、骨の脆弱化が問題となっている。特に骨密度は、成長期の骨形成の良否が成人の骨密度を決定するとされており、成長期に十分骨量を増加させ、最大骨量（ピークボーンマス）を高めることが将来の骨粗鬆症予防の上で有効であることがわかっている。しかし、これまでの研究は中学生以上の骨密度を評価対象としたものが多く、小学生を対象としたものは少ない。さらに、それらの結果を健康教育へ行かした取り組みはみられない。

そこで本連携では、小学校高学年の児童男女を対象として、生活習慣（食習慣・栄養面）、身体活動（学校での休み時間や帰宅後の身体活動時間）と骨密度、体組成との関連性を明らかにすることを目的とした。そしてそれらの結果を、今後教員を目指すに当たり、小学校期における生活習慣を見直し、運動習慣を身につけさせることの重要性や、自分の体について興味・関心を持たせるような健康教育に活用することを目指したい。

## 2. 対象者及び方法

1) 対象：M県内の小学校3校の小学5・6年生246名（男子119名、女子127名）を対象とした。

2) 方法：事前に自記式質問紙を用いて食習慣・栄養面について、からだや心についての14項目と、生活時間・運動・遊びについての活動時間の調査をした。記入は保護者の方と一緒に行うようにした。測定は各小学校の4月の健康診断の時期に、マルチ周波数体組成計（TANITA社製MC-190EM）を用いて体組成（体重、体脂肪率、筋肉量）を、超音波踵骨測定装置（GE Healthcare社製A-1000 Insight）を用いて右足踵骨の骨密度（スティフネス値）を測定した。

測定した骨密度等の結果と質問紙の回答より得られた結果を用い、PASW Statistics 18を使用して $\chi^2$ 検定や、対応のないt検定等の統計処理を行った。さらにそれらの結果を用いて、自分の測定値について知り普段の生活を振り返り見直すことができるような、健康教育の授業を1時間行った。

## 3. 結果及び考察

### 1) 食・栄養面や生活習慣と骨密度の関連

骨には牛乳等の乳製品がいいと言われているが、牛乳を飲んでいる人と飲んでいない人とでは、骨密度の値は飲んでいる人のほうが高かったが有意な差はみられなかった。その他の栄養の面でも、有意な差がみられなかった。今回の質問紙では、項目が少なかったことや給食等で栄養バランスの良い食事を摂っていることによると思われる。また、睡眠時に成長するため睡眠時間が長い人ほど骨密度は高いのではないかと思われたが、関連はみられなかった。

### 2) 運動習慣と骨密度の関連

男子では運動が好きな者ほど、運動習慣があり身体活動時間も長く、運動クラブに入っている者や業間以外で遊ぶなど運動習慣のある者ほど骨密度も有意に高かった。一方女子では運動の好き嫌いや運動習慣には関連がみられず、骨密度への影響もみられなかった。しかし初潮を迎えた者ほど骨密度は高く(86.8→96.9 p<0.001)、ホルモンや成長による影響が大きい。

### 3) 体型認識・肥満度と骨密度

体型認識と骨密度では女子で、少しだけ太りたいと答えていた人は今のままでよいと答えていた人よりも骨密度の値が有意に低い値(79.0→89.3 p<0.05)を示していた。肥満度判定と骨密度では男子で、痩せている人は標準の人よりも有意に低い値(85.0→90.2 p<0.05)を示した。

## 4. まとめ

今回の調査で、栄養面との関連があまりみられなかったため、今後今回よりも詳しい質問紙による栄養面への調査が必要になってくると考えられる。

男子は運動クラブに加入している児童や業間遊びをする児童の骨密度が高かったことより、身体活動と骨密度には関連がある。女子は、初潮との関連が強いことが確認され、運動との関連は見られなかったことより、成長期のピークであるこの時期は身長や体重など全てにおいて目覚ましい成長がみられるため、運動の影響が現れなかったのではないかとと思われる。今後さらに身体活動と骨密度の検討が必要である。

健康教育を行う際、自分の実際の測定結果を見ながら話を聞くことにより、自分の健康や生活についてより興味、関心をもって話を聞くことができたようで授業後のアンケートでは、87%の児童が自分の体について知り考えるきっかけとなったと答えており、60%が運動を積極的に行おうと思ったと答えていた。よって自分の実際の測定結果を数値という目に見える形にして、教育を行っていくことの必要性を感じた。

## 5. 今回の連携を通じて

今回の研究を通じて、実際に自分が小学校に赴き、子どもたちと直接触れ合いながら測定し、データという数値的な面から測定結果を解析していくことで、問題について身近なものに感じ、現状を把握することができ、今後の健康教育の重要性を痛感した。また、個人の結果の返却と共に小学校で子どもたちの前で健康教育の授業をさせていただくことにより、教員になるにあたって子どもたちの前で指導する力を身につけるうえで、勉強になり貴重な体験となった。

今回は一時的な連携であったが、今後は今回測定した小学生を対象に、継続的な連携を行い今後の生活習慣との関連を調査することにより、より詳しい情報が得られると考えられる。教員志望であるため、今後子どもたちにこの結果を生かした教育活動を行っていきたいと思う。

# 小学校高学年児童の生活習慣と骨密度及び体組成の関連

保健体育コース 59期 207100番 遠島 萌

指導教員 富樫 健二

### <背景①>

骨と比べて現代の子どもの周囲の環境は大きく変わり、そのことによって生活習慣の乱れが生じ、健康問題へとつながっている。

### <背景②>

- 健康問題の中でも、骨密度は成長期の骨形成の良否が成人の骨密度を決定するとされている。成長期に最大骨量を高めることは、骨形成において重要であると考えられる。
- 最大骨量を高めると骨折を防いだり、将来の骨粗鬆症を防ぎ健康な体を保つために有効である。
- 男子は16~17歳、女子は12~13歳で最大骨量を得ることがわかっており、その前段階である小学校高学年は最大骨量を高める重要な時期であると考えられる。

### <これまでの取り組み>

- 昨年は中学生を対象とした体組成、骨密度調査が橘北校区で行われた。その結果、運動系部活動に加入している者や、身体活動量の多い者の骨密度や体力値が高かったことより、運動や身体活動量を高めることは、将来における健全な体組成や骨密度、体力値の獲得に有用であることがわかった。
- また、先行研究からも運動をすることや、カルシウムをとることで骨密度を高めるためによいということが分かっている。しかし、小学生を対象とした調査は行われていない。また、測定結果をもとにした健康教育も行われていない。
- そこで本研究は、小学生高学年を対象とし生活習慣や身体活動と骨密度、体組成の関連を明らかにし、健康教育に活かすことを目的とした。

### <方法>

- M県内の公立小学校3校に在籍する小学5年生(135名)、6年生(111名)(男児119名、女児127名)
- H22年4月の身体測定時に調査を実施
- 10月に測定結果をもとにした健康教育を実施

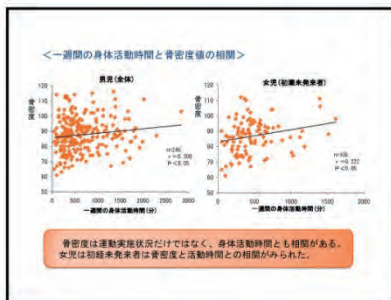
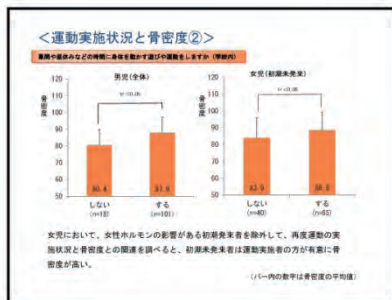
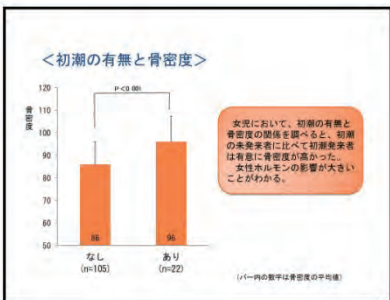
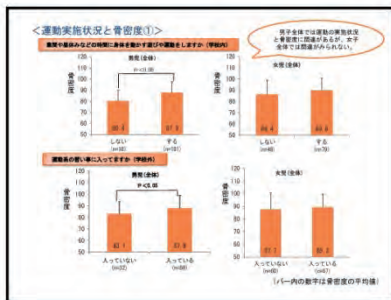
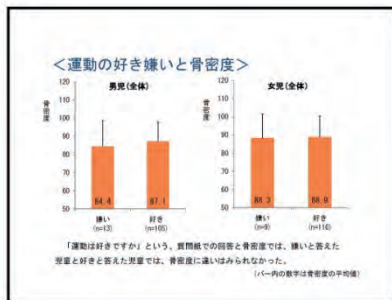
### <調査内容>

- 体組成測定-体重・体脂肪率・除脂肪量・筋肉量等 マルチ周波数体組成計 (TANITA社製 MC-109E)
- 骨密度測定-右足踵骨骨密度 超音波骨密度測定装置 (SEI Healthcare社製 A-1000 (no)ght)
- 質問紙調査 食習慣・栄養面・初潮・体型意識等についての14項目、運動意識・生活時間・運動・遊びについての活動時間
- 健康教育 測定結果を返却し、個々の結果を見ながら家庭生活に基づいた健康教育を行った

### <対象児の身体的特性>

年齢(歳)	身長(m)	体重(kg)	体脂肪率(%)	除脂肪量(kg)	骨密度
5年 (n=47)	10.5±0.3*	138.4±6.6*	34.3±5.7	15.8±5.9*	28.5±3.5*
6年 (n=52)	11.5±0.3	146.7±7.3	36.8±7.2	13.9±6.6*	31.3±4.3
全体 (n=119)	11.0±0.6	141.8±7.4	35.4±7.0	29.8±6.1	26.7±1.1
5年 (n=48)	10.5±0.3*	140.4±6.7*	34.3±7.1*	18.4±6.2*	27.8±3.1*
6年 (n=63)	11.5±0.3	145.8±7.0	38.3±7.9	21.5±6.8	30.4±4.2
全体 (n=117)	11.0±0.6	142.8±7.3	36.8±7.9	19.8±6.8	28.6±4.2

\*: 性別内・年齢差 P: 両群間で有意差 骨密度は全てP<0.05



### <健康教育を行って>

「骨の大切さや、骨について興味をもつことができたと言った児童が半数以上おり、測定した数値をフィードバックしながら、より興味をひく健康教育を実施できた。」

### <健康教育を行って>

「教科書にある内容だけでなく、実生活に基づいた授業をすることの重要性を感じた。」

### <まとめ>

- 骨密度は、女児は初潮の有無といった性ホルモンの影響を強く受けていたが、男女ともに身体活動が骨密度を高めるためによい影響を与えていることが分かった。
- 先行研究では、牛乳等のカルシウムを摂っている者や睡眠時間の長い者の骨密度は高値を示しているが、今回は食習慣・生活習慣と骨密度の関連はみられなかったため、より細かな質問紙での調査が必要であると考えられる。
- 健康教育を行なった際、児童は実際の測定結果を見ながら話を聞くことで、興味をもって授業を受けることができていたため、教科書の内容だけでなく、実際の測定結果を数値という目に見える形にして、健康教育を行っていくことの必要性を感じた。

### <今回の実践を通して>

- 実際に小学校に赴き、子どもたちと直接触れ合いながら測定し、データという数値的な面から測定結果を解析していくことで、現状を身近なものに感じ、把握することができた。今後学校現場での、運動を取り入れた健康教育の実践ができればよいと思う。
- 小学校で健康教育の授業をさせていただき、教員になるにあたって子どもたちの前で指導する力を身につけるための勉強となり、貴重な体験となった。この結果をいかした教育活動を行ってきたい。

# 中学生の生活習慣が骨密度・体組成に及ぼす影響

スポーツ健康科学コース 59期 207510番 高橋 由樹

指導教員 富樫 健二

## 1. 目的

昨年のK校区における「中学生男女の運動習慣と体組成・骨密度・体力値の関連について」といった連携から中学生期(特に女子)の運動習慣と骨密度に強い関連があることが明らかされている。しかし、昨年の連携では、運動習慣と骨密度の関連を横断的に明らかにしたものであり、実際に行った運動量の多寡との骨密度の変化量との関わりをみたものではない。また、このような発育期における骨形成に影響を及ぼす要因について縦断的に検討した報告も少ない。そこで本年度の連携は昨年9月に津市K中学校で測定された骨密度・体組成の情報をベースとし、その1年後の骨密度の変化量に影響を及ぼす生活習慣要因(主に運動・栄養面)について縦断的に検討することを目的とした。

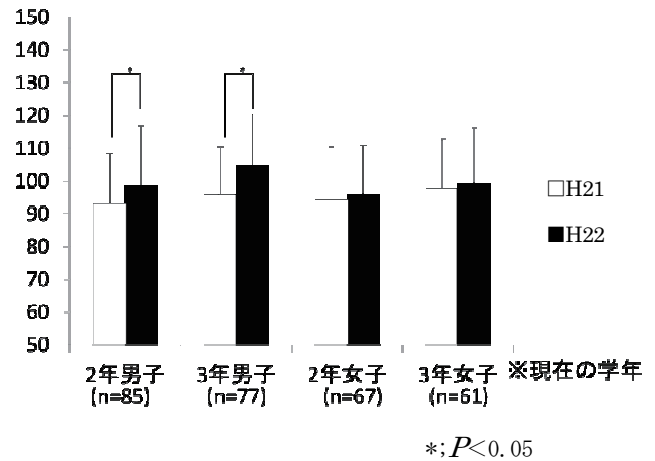
## 2. 方法

昨年9月の測定で対象とした生徒のうち新2、3年生311名(男子171名、女子140名)を対象とした。対象生徒に対し、マルチ周波数体組成計を用いて体重、体脂肪率、除脂肪量を、超音波骨密度測定装置を用いて右足踵骨の骨密度(スティフネス値)を測定し、自記式質問紙を用いて生活習慣、食習慣、体型、運動習慣について調査した。また、体力値は今年度の新体力テストの結果を用いた。これらの結果から1年間を通しての骨密度・体組成及び体力値の変化率に影響を与えた要因について、特に運動習慣・食習慣との関連を明らかにした。統計処理は、PASW Statistics 18を使用した。

## 3. 結果及び考察

昨年と今年の骨密度(スティフネス値)の平均値を比較したところ、男子は有意に増加したが、女子に有意な変化は認められなかった。(図1)この原因として男子の身長増加率 $3.92\% \pm 1.80$ に比べ、女子は $1.25\% \pm 1.07$ と低く、発育スパートを終えている生徒が多いということが推測される。

図1 昨年と今年の骨密度平均値の比較



小学校時と中学校時に「運動部またはスポーツの習い事をしてきた」を選んだ生徒を運動実施群、そうでない生徒を運動非実施群に分け、骨密度の変化をみたところ、男子では小中運動非実施群以外は骨密度が有意に増加し、女子は小中運動実施群だけに有意な増加が認められた。(表1)このことから、中学校期における継続的な運動習慣は骨密度を高めることが推測される。しかし、男子の運動非実施群で骨密度が有意に増加している点と女子の運動実施群で骨密度に変化がみられない点はさらに検討する必要がある。

表1 運動歴別にみた骨密度平均値の変化

		小学校時の運動歴	
		非実施	実施
運動歴	中学校時の男子	非実施	89.3→95.3
		実施	83.6→90.1*
	中学校時の女子	非実施	95.5→102.7*
		実施	95.9→103.2**
	非実施	91.4→94.2	86.3→88.1
	実施	95.6→95.4	91.4→94.3*

\*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$

## 4. 今回の連携を通じて

骨密度・体組成及び体力値に影響を与える要因について多くの視点から考えることができた。この連携を将来現場についた時の健康教育に生かしていきたい。

# 中学生の生活習慣が骨密度・体組成に及ぼす影響

スポーツ健康科学コース 59期 207510番 高橋 由樹

指導教員 富樫 健二

### 研究の目的

昨年9月に津市K中学校で測定された骨密度・体組成及び体力値の情報をベースとし、その後1年間の変化に影響を及ぼす要因について縦断的に明らかにする。

### 方法

- 三重県津市内K中学校の男子171名、女子140名の計311名を対象に骨密度・体組成及び体力値を測定し1年間の変化をみた。(平成21年9月時に1,2年生だった生徒を平成22年9月に再び測定した。)
- アンケートで運動系の部活動や習い事への加入状況と一週間の運動時間を、BDHQでエネルギー摂取量を調査した。
- 各変化率は平成21年の測定値を基準として、昨年のデーター今年のデータで算出した。  
昨年のデータ

### 調査内容

左: 体組成の測定風景  
右: 骨密度の測定風景

### 質問紙調査

**アンケート**

- 生活習慣について
- 運動習慣について
- 食習慣について

**栄養調査**

簡易型自記式食事歴法質問票 (BDHQ)

数近1か月の食品摂取状況から、1日の平均栄養摂取量を求める。

### 対象者の身体的特性

年齢(歳)	身長(m)	体重(kg)	体脂肪率(%)	除脂肪量(kg)	スリープス値	
男子 2年生 (n=85)	13.8±0.3	151.8±8.1	44.3±9.0	14.9±7.5	27.2±5.3	92.2±15.3
男子 3年生 (n=76)	14.9±0.3	180.0±8.4	50.6±9.0	15.2±6.6	42.4±5.7	95.7±14.5
女子 2年生 (n=67)	13.9±0.2	152.8±5.1	43.6±6.2	19.3±4.8	34.4±3.3	84.6±10.9
女子 3年生 (n=61)	14.9±0.3	154.2±5.0	45.6±7.3	22.0±6.1	35.2±3.3	97.8±14.7

※H21年に測定

### 対象者の身体的特性の各変化率

	身長変化率 (%)	体重変化率 (%)	体脂肪率変化率 (%)	除脂肪量変化率 (%)	骨密度変化率 (%)
男子 2年生 (n=85)	4.6±1.4	10.9±5.9	-6.0±17.3	12.4±4.3	5.9±12.3
男子 3年生 (n=77)	3.2±1.9	9.3±6.5	-2.0±27.1	10.4±4.2	10.1±12.4
女子 2年生 (n=67)	1.5±1.1	7.1±5.2	7.9±15.1	5.4±3.8	2.3±10.0
女子 3年生 (n=61)	1.0±0.9	4.3±4.7	6.6±10.8	2.6±2.9	2.4±15.8

男子が発育スパート期にあり、身長、体重、除脂肪量、骨密度が1年間で大きく増加していることが分かる。

### 昨年と今年の体力テスト合計得点平均値の比較

男子 n=129, 女子 n=115  
男女とも1年間で体力値が有意に増加している。

### 体力値と体組成・運動時間・エネルギー摂取量の相関

	体力値	身長	体重	体脂肪率	除脂肪量	骨密度	一週間の運動時間	エネルギー摂取量
男子 体力値変化率	1.317*	0.072	-0.194	2.074	0.070	-0.086	0.086	0.086
身長変化率	1.000	-	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
体重変化率	1.000	1.000	-	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
体脂肪率変化率	1.000	1.000	1.000	-	0.000	0.000	0.000	0.000
除脂肪量変化率	1.000	1.000	1.000	1.000	-	0.000	0.000	0.000
骨密度変化率	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	-	0.000	0.000
一週間の運動時間	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	-	0.000
エネルギー摂取量	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	-

男子では体力値と身長・除脂肪量の変化率に有意な相関がみられた。  
女子では体力値と一週間の運動時間に有意な相関がみられた。

### 昨年と今年の骨密度平均値の比較

男子 n=162, 女子 n=128

### 運動系の部活動や習い事への加入状況と各測定値

女子で運動系の部活動や習い事に加入している生徒は未加入の生徒に比べて体力値変化率が有意に高い。

### まとめ

- 中学生期の運動系の部活動や習い事に加入している女子は体力値が大きく増加する。
- 男子は発育スパートを迎える時期なので多くの生徒が体組成・骨密度・体力値に大きな変化がみられたが、運動習慣が骨密度に与える影響を明らかにすることはできなかった。これにより、成長期においては運動習慣より発育の影響が大きいと推測される。

### 今回の実践を通して

- 生活習慣や体組成・骨密度など普段知ることのできない中学生の現状をみることができ、非常に貴重な経験となった。
- 1年間という短い期間であり、骨密度に対する運動の影響を明らかにすることができなかったため来年もう一度測定を行い、2年間に渡って調査をしたい。
- 今後はこの研究で得たことを健康教育に生かし、発育期における運動の重要性を伝えていきたいと思っている。

# 教育実地研究基礎

指導教員 中西正治

## 【一身田小学校において】 尾関・工藤・堀内・中森・上浦

ある晴れた日に、七夕祭りの準備をしました。これはPTAの方が行っている企画のようで、子どもたちはとても楽しみにしていました。先生になったら、PTAの方との連携も大切なのだなと思いました。そして、子どもたちを積極的に行事・企画に参加させるのも、先生のすべき仕事であることがわかりました。

また、違う日には「たんぼぼ」という詩の視写をしました。早く書き終えた子は、詩を読んで思い浮かんだものを絵で描くように先生が指示をしました。私たち大学生がこの課題を出されたら「どうしよう！」となってしまうそうですが、子どもたちはみんな想像力豊かで、すぐに描き始めました。たんぼぼそのものを描いている子もいれば、自分で思い浮かんだ情景を描いている子もいて、ひとりひとりの豊かな個性が感じられました。小学校では、日々の生活の中でも、子どもたちがもついろいろな才能や、大人にはない素敵な感性と接することができるのだな、と思いました。

## 【北立誠小学校において】 森口昌英

今回私は、北立誠小学校に実地研究に行くことで、初めて教える立場で授業に参加しました。後ろから見ていると先生が生徒に授業に対して関心を持たせる方法がよくわかりました。私は人見知りするタイプなので最初は生徒に言葉をかけるのが難しかったです。だから、問題を教えるときにしどろもどろになって生徒にちゃんと伝わっているのかが不安でした。自分が教えたことが理解してもらえた時はとてもうれしかったです。生徒が成長していくことは、先生にとって喜びであり、やりがいだと思いました。丸つけをしていると、子どもたちはだいたい似たような間違いをしていることに気付きました。例えば、0の数が足りないことや、単位の書き間違いなどがありました。このようなちょっとしたミスは後に癖として残ってしまうと思うので、見直す癖をつければいいのかと思いました。宿題やテストを定期的に行うことによって、子どもたちがどこでつまづいているのか、子どもたちにはどこが理解しづらいのかといったようなことがよくわかり、そしてそれに素早く対処することによって、その後の授業につなげているのだなあと実感しました。

## 【栗真小学校において】 岸川哲也 松野燐大

生徒一人ひとり違った個性があり、その子によって最も相応しい触れ合い方を理解するにはとても時間がかかりました。積極的な子や引っ込み思案な子などの色々な性格を持った生徒とたくさんコミュニケーションを取る事によって様々な事を学び、貴重な経験ができました。また、授業中のアドバイスも最初の頃は上手にはできなかったけれども、毎回の授業を通じて少しずつ上達できたと思いました。そして、生徒達ともだんだんと仲良くなっていき、とても充実した教育実地研究基礎になったと思います。

この教育実地研究基礎は、1年生の私たちにとって初めて生徒たちと間近で触れ合い、また初めて生徒としてではなく授業に参加するという事だったので、とても不安で毎回緊張しました。でも、それ以上に楽しかった事がいっぱいあったので、このようなことを経験することができたことはとても大きかったです。この経験をこれからの人生に生かせるようにこれからも努力していこうと思います。



### 【白塚小学校において】 河合 優輝

先生の話をお聴くように言葉がけをした時もなかなか聞いてくれなかったり、その時の言葉遣いも考えさせられたりと、子ども達に話を聞いてもらうということだけでも難しいことだと思いました。

また、授業中にアドバイスするとき何と言えよのか迷ったこともしばしばあり、ヒントの出し方一つにしても工夫が大切なのだと思います。

朝の会などでの先生のお話を聞いていると、細かな点まで注意しておられることなどを見かける。子ども達の日常に目を向けると授業を受ける以前の部分があり、授業をどのように行ったらよいかというよりも、授業に臨む姿勢の指導の方がより大切なのかもしれないと思いました。

この教育実地研究は、1年生の私たちにとって学校現場がどういったものなのか分からなかったり、不安や心配があったりと毎回緊張したこともあり、気づかされたことも多かったように思います。そのような活動の中で、教える側の立場で見た学校現場は、今までとは全く違ったものに見えました。

### 【南立誠小学校において】 大野知紘

私は、教育実地研究基礎において毎週1時間、南立誠小学校の授業の補助に行き、その中で大学の授業では体験できないような現場ならではの問題に触れることができました。

新聞紙の棒を使ったある体育の授業では子供たちは棒に興味をもって振り回したりしていたところ、私は並ばせることばかり考えていましたが担任の先生はすぐに「棒を振り回すと危ない！」と叱っていました。その時、先生として子供の安全を第一にするという大切さを学びました。

また算数の授業で子供たちは九九の暗記に苦戦しながらも、ひたむきに覚えようとする姿がとても素敵で私はこれから先生になるにあたり、子供たちに今やっている勉強などはやらなければいけないからやるというだけでなく、将来自分がなりたい姿になるための one step なのだという事を伝えながら、たくさんのお話を聞きたいと思いました。

最後に教育実地研究基礎として授業の補助をさせていただいた先生方ありがとうございました。

# 教育実地研究基礎

一身田小学校において

指導教員 中西正治

上浦唯 尾関謙 工藤大知 中森真貴 堀内創太(数学教育コース 62期)



# 教育実地研究基礎

北立誠小学校において

指導教員 中西正治

竹内健太 森口昌英(数学教育コース 62 期)



子供たちの回答をみると似たような間違いをすることがあり、どこでつまづくのかがわかった。全問正解の子がいるとうれしかった。

問題で困っている子に教えるとき、直接答えを言わずに自分で気付かせるように伝えることは難しかった。



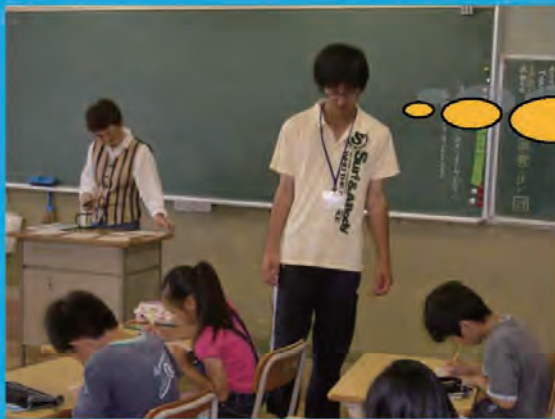
教える現場にいき、教わる側でなく教える側に立って授業の風景は、先生の教え方や子供たちの反応がよく見えた。この体験を今後の先生になるのに活かしていきたい。

# 教育実地研究基礎

栗真小学校にて

担当教員：中西正治

岸川哲也 松野葵大(数学教育コース1年)



ちゃんとできているかな？  
頑張ってやろう！

先生の話をおきいているかな？  
皆元気に発言していました。



この実地研究を通して、大変多くの事を学びました。実際に生徒と触れ合い教育の難しさを知ると共に教育の楽しさも学ぶことができました。この経験を今後に活かしていきたいです。

# 教育実地研究基礎

白塚小学校にて

担当教員：中西正治

浦野 航・河合 優輝・中川 実咲・宮本 宜美（数学教育コース1年）



今日は、この問題  
をしてみよう。  
できるかな？

児童にふれあっていると、今までに気づかなかった新しい発見があります。

どうやったらできる  
か、一緒に考えてみ  
ようか？

ちょっとしたヒントを出すことで、児童は問題に取り組む意欲が変わってきます。



**実地研究として、実際の教育の現場に行けたことは大変有意義な時間になりました。**

**また大変多くの経験をすることができました。**

# 教育実地研究基礎

南立誠小学校において

指導教員：中西正治

井阪仁美・石岡勇司・大野知紘・工藤彩（数学教育コース 62 期）



ここはこうやって  
やるんだよ？

児童の無邪気な笑顔を見ていると、教える意欲がわいてきます。

なるほど！もっと  
話を聞かせてよ！

授業の時間だけでなく、  
休み時間での  
コミュニケーションや  
ふれあいも大切です。



・実際に教育現場へと行き、この 1 年間で多くの経験をしました。この素晴らしい経験をもとに、今後も教師を目指していきたいと思えます。

・今回の活動を通して、授業の創意工夫の仕方や生徒との接し方の難しさなども考えることができ、とても貴重な経験となりました。

# 教育実地研究

指導教員：中西正治

## 【一身田中学校において】加山哲也・山口知也

私が授業支援を行って特に感じたのは次の二点である。第一に、柔軟な対応力の必要性があるということ。第二に、授業レベルの適合の困難さがあるということである。生徒が40人いるという状況で、例えば演習問題を一つ生徒に教えるにしても、この生徒には基礎的なことを確認しながら教える、この生徒には実例を用いて教えるというように多種多様な理解力の生徒に合わせる柔軟な対応力が要求されることを学んだ。また授業のレベルについてであるが、数学の得意な生徒に合わせると苦手な生徒がついていけず、苦手な生徒に合わせると得意な生徒が退屈するという背反的な困難さが常に授業には存在するように感じた。どの生徒にとっても分かりやすい授業を創ることは容易な事ではない。だからこそ、全ての生徒に支援をすることが必要なのであり、支援により生徒が理解しやすくなるのであると私は考える。(加山)

実際の現場を見学することで、現場の先生の授業の進め方、生徒とのやり取りや間の取り方など大学の授業では学ぶことができない現場のことを学ぶことができました。授業の進め方は先生方それぞれで、いろんな先生方の授業を見させていただくことで、学ぶこともたくさんありました。

授業に入ってTTとしてサポートに入ると、今の中学生がどういった所で疑問を抱いているのか、わからなくなっているかなど実際に知ることができました。中学生のサポートをする際は、どのように言葉をかければいいのかを考え、どこまで簡単かつ具体的に言えばいいのかを身をもって知ることができました。少し簡単にいえばすぐにわかる子もいれば、どんどんと具体的に話していかないと気付きにくい子もいるので、授業を行う先生だけでは、対応しにくいだろうなと思いました。

授業が終わってから、話しかけてくれる生徒もいたので、最近の中学生がどんな様子なのかを知ることができました。(山口)

## 【橋北中学校において】西村美穂

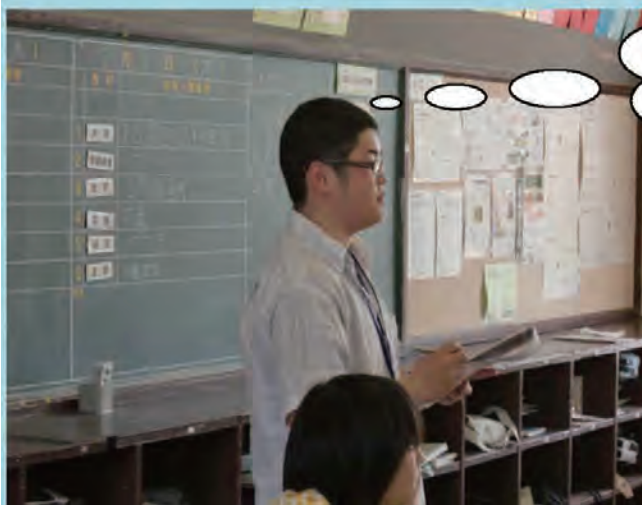
私は6月半ばから橋北中学校に教育実地研究に行っています。私は、9月に教育実習に行ったのですが、それを境に教育実地研究に対する気持ちが変わりました。実習が終わってからは、器具を使って実験をする時は、使い終わったらすぐに回収し考察に集中して取り組むといった、授業のメリハリをつける工夫や一人の生徒の発言を全体にフィードバックし、そのクラス全員が理解を深めることができる工夫がされていることに気付くことができました。教育実地研究を通して学んだことを、私が、教壇に立ったら授業に取り入れたいと思います。また、生徒が授業に熱心に取り組む姿を見て、教員になって自分が教える生徒にもこんな風に熱心に取り組ませることができるよう授業作りをしていきたいと思いました。残りの教育実地研究で、教育実習の授業で自分が苦手としていた部分を現場の先生がどのように行っているかを見て、自分の授業力を上げたいと思います。

# 教育実地研究

一身田中学校

指導教員：中西正治

ポスター作製：今村優希 菅野友裕 種橋将（情報教育課程3年）



なるほど！ここはこうやって教えたほうがわかりやすそうだなあ。

生徒の様子を見ていると、二次方程式は苦手意識が持ち始める分野だと感じた。どのように指導すれば理解しやすい授業になるのかを参考することができた。

ここはこうやってやるんだよ！わかったかな？じゃあこの問題を解いてみようか。わからなかったらまた質問してね！！

比例の導入として、浴槽に水を入れていくという身近な例を扱うことによって、比例が身近な生活と関わっているということを生徒が感じることができる授業であった。



この教育実地研究を通して、生徒たちに教えるということの難しさを知ることができ、また、生徒たちがどのようなところでつまづいているのかを気づくことができました。そして、1人でも多くの生徒に数学の問題を解く楽しさを伝えることができました。



# 教育実地研究

於：橋北中学校

指導教員：中西正治

ポスター作製：河俣剛史、曾根竜哉（数学教育コース3年）

あっ、  
わかったかも！！



この問題はね、さっき先生が  
言っていた考え方を使うと…。

生徒たちは少しの助言で、課題を解決  
できるチカラを持っていることに気付いた。

連立方程式の解き方は  
色々あるけど、この問題はど  
の方法がいいと思う？

公式をただ暗記するのではなく、単  
元の本質を理解する事で、数学的  
な考え方を理解することができる。



教育実地研究を通して、生徒に物事を理解してもらうことの難しさを知りました。それと同時に授業の工夫の仕方などを理解することができ、大変貴重な経験になりました。

わくわくコミュニケーションクラブによる  
地域の小学生のコミュニケーション力育成の取り組み  
～三重大学での実践～

三重大学教育学研究科修了 廣岡雅子

三重大学教育学研究科 篠塚和賢

三重大学教育学部特別支援教育特別専攻科 河井晴美

三重大学教育学部 近藤亜裕美・土口佳純・松谷健二・石井僚・加藤侑・西村まりな

國廣明来・坂本千晶・野田静香・早野和美・西川佳那

三重大学教育学部教育心理学教室の大学院生・大学生を中心とするボランティアグループは、子どものコミュニケーション能力の育成をねらいとした「わくわくコミュニケーションクラブ」と称する活動を行っている。活動内容は、心理学をベースとした小学生のコミュニケーション能力の育成のためのプログラム開発、実践および評価である。プログラムにはソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウターの要素を取り入れており、子どもが楽しみながら好ましいコミュニケーションについて考えたり、ソーシャルスキルを身につけられることを大切にしている。活動で扱うスキルとしては、あいさつのスキル、聞き方・話し方のスキル、頼み方・断り方のスキルなどがある。活動は月2回程度、土曜日の10時～12時に行っており、1回の活動につき1つのスキルをターゲットとしている。

わくわくコミュニケーションクラブ(当初、土曜わくわくクラブ)は、2004年度から津市立南が丘小学校区内の4～6年生の児童を対象として開始し、2007年度からは北立誠小学校区内の3～5年生の児童を対象として実践してきた。また2009年度秋からは、対象児童を津市内から広く募り、三重大学を会場として実践を継続している。三重大学での実践では、複数の学校から子どもたちが参加しているため、もともとは顔見知りでない子ども同士の関わりが生まれている。違う地域、違う学年の子ども同士が新しく人間関係を築いていけるという点も、この活動の特徴の一つであると考えている。

わくわくコミュニケーションクラブは大学院生を中心に立ち上げられ、教育学部学生・大学院生および大学教員、修了生などで構成されてきた。常時10人前後の中心的なスタッフが在籍しており、年度毎に入れ替わっている。教育心理学を学ぶ学生に活動内容を紹介し、興味を持った学生に活動を見学してもらうなどして、随時新しいスタッフを募っている。そして、スタッフミーティングにも参加するなど、見学者の学生の中から次第に継続的に参加する者が現れ、そういった学生らが中心的なスタッフになっていく。

スタッフは、各活動の準備・実施・ウェブ上での実践検討を行う。2～3人のスタッフが活動1回の企画・立案を担当し、当日は活動の進行役となる。また、5～6人の子どもでグループ活動を行うため、各グループにグループスタッフを2名ずつを置き、グループ内での進行役や援助などを行う。その他のスタッフは、全体の把握や子どもとの個別的な関わり、授業者やグループスタッフの補助、写真やビデオで活動の記録などを行う。スタッフミーティングは毎週行い、スタッフ全員で検討・改

良をした上で各回の活動内容を決定する。活動後はスタッフ全員が活動内容全体を振り返り、考えたことや疑問に思ったことなどをウェブ上に報告し、スタッフ間で共有できるようにしている。さらに、活動後のミーティングにおいても、気になった部分（子どもの様子や活動内容等）を話し合い、次の活動内容や子どもへの対応に活かしている。

各回の活動は、「ウォーミングアップ（短時間で楽しめる体ほぐし等）→トライ（自宅等で振り返るためのワーク）の確認→メインの活動（デモンストレーションとエクササイズ）→シェアリング（メイン活動で感じたことの共有）とまとめ→活動内容や学習の振り返り」から成る。ウォーミングアップでは、ゲーム性のある活動を行うことで子どもたちの気持ちや体をほぐし、メインの活動に入りやすい雰囲気作りを心がけている。メインの活動では、子どもたちが日常生活でよく体験しているであろう場面を設定して、スタッフによるスキルのデモンストレーションを行う。このデモンストレーションを通して、子どもたちがスキルを使うことに興味を持ち、スキルを身近に感じられるように工夫している。そして、エクササイズで子どもたちが実際にスキルを使う体験をし、スキルについて学んでいる。シェアリングとまとめでは、メインの活動で感じたことや考えたことをグループや全体で共有し、深めている。シェアリングでは、話し合いをする力をつけることもねらいの一つとしている。

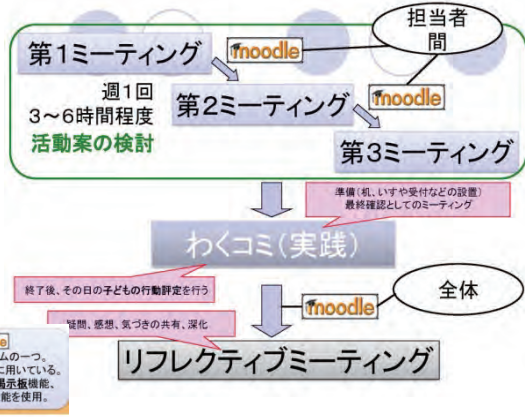
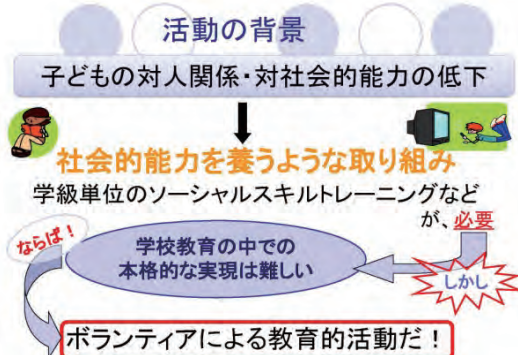
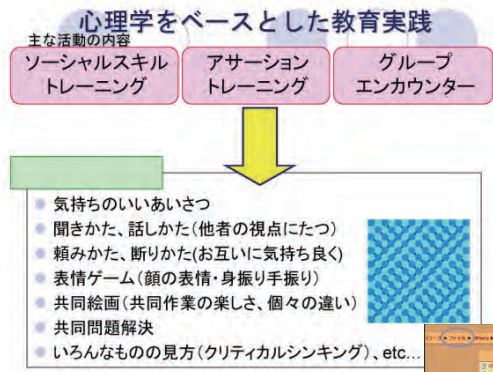
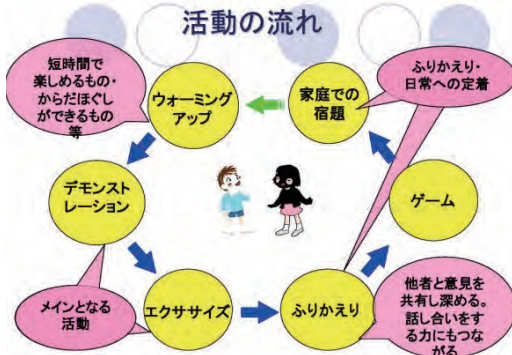
活動に参加した子どもたちからは、「土曜日のわくコミに行くのがいつも楽しみだった。」「学年、クラスのちがう子と一緒に活動できてよかった。」「あいさつのコツや聞き方のコツがあることがわかった。」「話し合いがうまくいかなかったけどうまくできるようになった。」といった感想がよせられている。スタッフから見た子どもたちの変化としても、活動への参加や発言に積極性が出てきたということや、下級生の見本となる行動を示したり、活動の中でリーダーシップを発揮するようになったということなどがある。こういったことをはじめとして、継続して活動していく中で、子どもたちが変化している実感が得られている。保護者の方からも、「相手のことを考えることができるようになった。」「学校でも自分の気持ちをクラスメートに伝えられるようになってきた。」という感想をいただいている。

ビデオ記録を用いて子どものコミュニケーション評定や分析をし、それらを基に論文や文献の執筆も行っている。

わくわくコミュニケーションクラブによる  
地域の小学生のコミュニケーション  
育成の取り組み  
～三重大学での実践～



三重大学教育学研究科修了 廣岡雅子  
三重大学教育学研究科 徳塚和賢  
三重大学教育学部特別支援教育特別専攻科 河井廣美  
三重大学教育学部 近藤亜裕美・土口佳純・松谷健二・石井優・加藤祐・西村まりな  
國廣明美・坂本千晶・野田静香・早野和美・西川佳那



- 子どもたちの様子・変化**
- 活動への参加や発言に積極性が出てきた。
  - 話し合いができるようになった。
  - 下級生の見本になる行動を示したり、活動をまとめるなど、お兄さんお姉さんらしくなった。
  - 学校生活の中での実践。  
「授業で自信を持って発表できるようになった」

- 子どもたちの感想より**
- とても楽しかった。
  - 土曜日にわくコミに行くのがいつも楽しかった。
  - 学年、クラスがちがう子と一緒に活動できてよかった。
  - スタッフがおもしろかった。
  - あいさつのコツや聞きかたのコツがあることがわかった。
  - 頼み方・断り方のコツがわかった。
  - とても勉強になった。
  - 話し合いがうまくいかなかったけどうまくできるようになった。
  - ゲームがおもしろかった。
  - また、次のクラスも参加したい。

- <保護者アンケートより>**
- 人見知りがおなくなった。
  - 相手のことを考えることができるようになってきた。
  - 親に対しても自分の意見を言えるようになった。
  - 親に対して何かを頼むときにも、理由などをきちんとつけて説明できるようになった。
  - 学校でも自分の気持ちをクラスメートに伝えられるようになってきた。
  - いつも元気に、満足げに帰ってきた。  
→土曜日の子どもの居場所になっている。

西が丘小学校から小学校3年生に“店で物を売る人の工夫”を教えてほしいという依頼があった。永田成文先生のもと、教育実習の大門商店街の指導案を西が丘小学校でのスーパーマーケットの学習の参考となるように改善した。具体的には、大門商店街に見学に行けないので、写真をもとに大門商店街の人たちの物を売る工夫に気づかせ考えさせるようにした。

本時「大門商店街のお客さんをお呼びするための工夫について」

1. 目標 大門商店街では多くのお客さんをお呼びするために、雨除けのためのアーケードやイベントをしたりするなどの工夫をしているが、それでもお客さんが少ないことを知り、他にどのような工夫ができるのかを考えることによって大門商店街の人たちの苦勞や工夫に気付くようになる。

2. 学習過程 (45分)

学習活動	指導者の働きかけと予想される子どもの反応等	資料等
<p><b>1. 大門商店街の現状をつかむ。</b></p> <p>1-1 大門商店街を意識する</p> <p>1-2 大門商店街の様子</p> <p>1-3 お客さんが来る時</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大門商店街の写真を黒板に貼り、「ここはどこか分かりますか。」と問う。何人かの意見を聞いた後写真に写っているのが大門商店街だと伝え、「大門商店街に行ったことがある人はいますか。」と聞く。この時、行ったことがあると答えた子に「どんなところだったか。いつ行ったか。」という問いを返すようにする。その後、「皆はこれからお店についてスーパーマーケットを勉強するけれど、その前に今日はお店が集まっている商店街というところを私と一緒に勉強します。」と言う。</li> <li>・もう一度最初に提示した大門商店街の写真を指しながら「この写真の大門商店街はどんな様子かな。」と問う。</li> <li>・次に、「この写真は何時頃の大門商店街だと思いますか。」と問う。子どもたちの意見を聞いた後に、大門商店街のお店は午前9時から午後6時くらいまで開いていることを説明し、この写真の大門商店街は12時30分に撮影したものだけであることを伝える。「お店がたくさん開いている時間なのにお客さんが少ないですね。」と言う。</li> </ul>	<p>写真①を黒板に貼る。</p> <p>写真①を見る。</p> <p>写真①を見る。</p>
<p><b>2. 大門商店街の人たちがしている工夫を知り、その他にはどのような工夫ができるかを考え、話し合う。</b></p> <p>2-1 大門商店街の工夫</p> <p>2-2 なぜ人が少ないのかを考える</p> <p>2-3 大門商店街の人はどんな工夫ができるか考える</p> <p>2-4 まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・7枚の写真を貼る。「大門商店街の人たちはお客さんをお呼びするために様々な工夫をしています。いくつかの工夫を写真に撮ってきたのだけれど、この写真の中からどのような工夫が分かりますか。」と問う。この時、何のために屋根を付けているのかというように理由も確認していく。</li> <li>・「大門商店街ではこれだけ多くの工夫をしているのに人が集まっていないのはどうしてだと思いますか。」と問う。だいたい意見が出たら、子どもたちの意見に付け加えて大門商店街に来るお客さんが少ないのには、大門商店街の周りに大型のショッピングセンターができたことや、交通の便が悪いなどの理由もあることを伝える。</li> <li>・「では、さっき出てきていた工夫の他にお客さんをお呼びするために大門商店街の人たちはどのような工夫ができると思いますか。」と問う。大門商店街の地図と意見を書く用紙を配布し、まず個人で考える。その後、隣同士で意見を交換した後に、「自分の意見を発表してみましょう。」と問う。</li> <li>・だいたい意見が出たら、大門商店街の人たちはどうしたらお客さんが来るようになるのかを考えながら努力を続けていること、また、人と人との関わりを大切にするという気持ちで商売をしているということを伝えて授業を終える。</li> </ul>	<p>写真②～⑧を黒板に貼る。</p> <p>大門商店街の地図と意見を書く用紙を配布する。</p>

## 津市立西が丘小学校との連携

### 大門商店街で働く人たちの苦労や工夫を考える

三重大学教育学部社会科教育コース 4年 大久保磨美

○授業で使用した写真



① 大門商店街の様子



② 駐車場 1時間無料



③ アーケード



④ ベンチ



⑤ 金魚



⑥ 五十市



⑦ 七夕祭り



⑧ からくり時計

○授業の内容

- ・①の写真から大門商店街の様子や現状を知る。  
→お客さんが少ない
- ・大門商店街で実際に行われている工夫を写した②～⑧の写真からどのような工夫がされているのかを考える。  
→雨除けのためのアーケード  
買い物をするお客さんが休憩するためのベンチ等
- ・大門商店街では多くの工夫をしているのにお客さんが少ない理由を考える。  
→お客さんはショッピングセンターへ買い物に行くから等
- ・自分たちで大門商店街の人たちができる工夫を考える。



大門商店街の人たちの苦労  
や工夫に気付く

○授業で工夫した点

- ・子どもたちが興味を持てるように写真を多く使用した。
- ・4クラス授業をした中で、2クラスごとに②～⑧の写真の提示の仕方を変えた。  
→1枚ずつ提示…写真ごとの細かい工夫を見つけることができる。  
→一度にすべて提示…自分たちで工夫を考える時間をじっくり設けることができる。

○津市立西が丘小学校との連携を終えて

- ・授業をする側と連携校との意思疎通をきちんとすることの難しさ
- ・現場で子どもたちの様子を知ることができる貴重な場

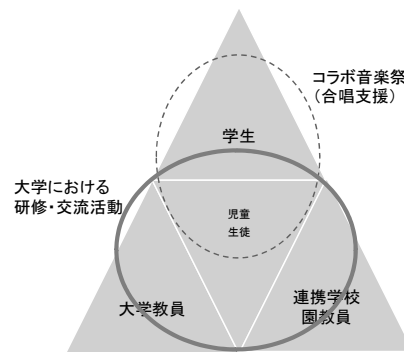
## 栗真小学校との連携における新しい学び

日下美和子（音楽教育コース4年）・根津知佳子（音楽教育講座）

音楽教育講座では、コラボ音楽祭の合唱支援を中心に隣接学校園との連携を深めてきたが、連携学校園の先生方のご指導のもとで、学生が児童・生徒と直接かかわることに対して、大学教員がコメントをするという形態が多かった（下図点線）。また、日頃大学で学んでいる実技や知識を児童・生徒の指導にいかす、ということ活動を活動の意義としていた。

今年度は、栗真小学校の先生と大学教員が学びあう場に学生が参加するという機会を持った（下図実線）。前期には、特別支援学級の研究会を参観した後、大学教員のコメントについて調べる、などの教員養成型PBLの授業が行われた（『言語表現と非言語表現（水1コマ）』）。

後期の『音楽療法概説（水1・2コマ）』では、①学生が考えたプログラムを②実際に大学の施設で③子ども達を対象として実践する、というPBLに取り組んだ。また、この活動は、現場の先生方の研修の場ともなった。『音楽療法概説』は、音楽教育コースの2年生の必修授業であるが、医学部看護学科、大学院生、人間発達科学コース、英語教育コース、特別支援教育コースなど、専門領域も学年も異なる学生が受講している。様々な専門領域の理論を基盤に相互討論ができるのが、この授業の特徴である。



11月24日に開催された特別支援学級の子ども達34名を対象とした音楽活動（教員研修）では、例えば、特別支援教育コースの4年生のグループが企画・実践した“リラクゼーションプログラム（洗濯・花になる・木になる）”について、専門領域の違いによって異なる振り返りが見られた。

- \* 実際に始めてみると、一緒に歌ったり、積極的に参加してくれたのでとても安心した。私たちと子どもたち、また、子どもたち同士も初対面だった中、音楽を通じたことでリラックスした気持ちで臨むことができたように思う。（音楽教育コース2年）
- \* 音楽という言葉以外のコミュニケーションツールによって交流でき、とても貴重で素晴らしい体験ができてよかった。（英語教育コース4年）
- \* 規律と自由（子どもたちの子どもらしさが制御されない状態の意味で）の境界線の引き方の難しさ（人間発達科学コース3年）
- \* 子どもたちも楽しく安心して参加できるように、自分自身が楽しんで支援できました。このことから、子ども、大人という区別もなく、同じ“人”として音を楽しむことができると考えました。（看護学科4年）
- \* 楽器を使ううちに笑顔になり、子ども同士の関わりあいも見られるようになったので、楽器や布などの道具を介しての出会いもあるのだと感じました。（特別支援教育コース4年）

現場の先生と大学教員が子ども達と接しているのを学生が直接観ることによって、「実践が現場で創られていくことを体験する」という新しい学びの場となった。

音楽教育講座では、コラボ音楽祭の合唱支援を中心に隣接学校園との連携を深めてきたが、連携学校園の先生方のご指導のもとで、学生が児童・生徒と直接かわることに對して、大学教員がコメントをするという形態が多かった(右図点線)。また、日頃大学で学んでいる実技や知識を児童・生徒の指導にいかす、ということを活活動の意義としていた。

今年度は、栗真小学校の先生と大学教員が学びあう場に学生が参加するという機会を持った(右図実線)。前期には、特別支援学級の研究会を参観した後、大学教員のコメントについて調べるなどの教員養成型PBLの授業が行われた(『言語表現と非言語表現(水1コマ)』)。

後期の『音楽療法概説(水1・2コマ)』では、①学生が考えたプログラムを②実際に大学の施設で③子ども達を対象として実践する、というPBLに取り組んだ。また、この活動は、現場の先生方の研修の場ともなった。『音楽療法概説』は、音楽教育コースの2年生の必修授業であるが、医学部看護学科、大学院生、人間発達科学コース、英語教育コース、特別支援教育コースなど、専門領域も学年も異なる学生が受講している。様々な専門領域の理論を基盤に相互討論ができるのが、この授業の特徴である。

11月24日に開催された特別支援学級の子ども達34名を対象とした音楽活動(教員研修)では、例えば、特別支援教育コースの4年生のグループが企画・実践した“リラクゼーションプログラム(洗濯・花になる・木になる)”について、専門領域の違いによって異なる振り返りが見られた。

\* 実際に始めてみると、一緒に歌ったり、積極的に参加してくれたのでとても安心した。私たちと子どもたち、また、子どもたち同士も初対面だった中、音楽を通じたことでリラックスした気持ちで臨むことができたように思う。

(音楽教育コース2年)

\* 音楽という言葉以外のコミュニケーションツールによって交流でき、とても素晴らしい体験ができてよかった。

(英語教育コース4年)

\* 規律と自由(子どもたちの子どもらしさが制御されない状態の意味で)の境界線の引き方の難しさ

(人間発達科学コース3年)

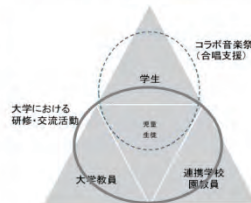
\* 子どもたちも楽しく安心して参加できるように、自分自身が楽しんで支援できました。このことから、子ども、大人という区別もなく、同じ“人”として音を楽しむことができると考えました。

(看護学科4年)

\* 楽器を使ううちに笑顔になり、子ども同士の関わりあいも見られるようになったので、楽器や布などの道具を介しての出会いもあるのだと感じました。

(特別支援教育コース4年)

現場の先生と大学教員が子ども達と接しているのを学生が直接観ることによって、「実践が現場で創られていくことを体験する」という新しい学びの場となった。



日下美和子(音楽教育4年)

福井聡  
(大学院教育学研究科2年)

他  
『音楽療法概説』  
(水1コマ)20名  
『音楽療法概説』  
(水2コマ)9名

根津知佳子(音楽教育講座)

栗真小学校との  
連携における  
新しい学び



『音楽療法概説(水2コマ)』は、音楽教育コース1年生の9名が受講している。今回は、11月20日に志摩市の小学校の文化祭において『教育実地研究基礎』として構成したプログラムの一部を、音楽棟で再演した。ステージ上で感じたことと、実際に目の前で子ども達と相互に反応しあいながら演奏する体験の相違について考える場となった。



特別支援教育コースオリジナルプログラム  
“じゃぶじゃぶ体操” “おはな体操” “ぐんぐん体操”



栗真・一身田・白塚小学校など津市内の6つの小学校の子どもたちと先生方、学生、大学教員が“音楽の中で出会うとき”



## 書道Ⅱ（国語教育講座）の取り組み「筆！墨！紙！で遊ぼう！」

報告者：教育学部 林朝子

実施日時：平成22年11月18日（木）・12月2日（木）12：30～14：30

実施場所：北立誠幼稚園

参加園児：34名（年少15名・年長19名）

※小菅園長先生、大森先生（年少）、岡山先生（年長）

参加学生：書道Ⅱ（平成22年度後期）履修生45名

活動目的：園児）筆と墨を使う初めての体験を通して、筆のおもしろさを発見し、筆で表現することへの関心を高める

学生）子どもたちの「筆で書く」という初めての体験の場への参加を通して、

1）子どもたちの発見する力・感じる力・表現する力を感じ、

2）子どもたちにとって「筆で書く」ことの意義を考え、

子どもを対象とした有効的な毛筆活動を考えるきっかけとする

活動の流れ：

【1回目：11月18日】テーマ：筆に慣れよう（※年少は初めて）

12：30～12：40 幼稚園集合

12：40～13：00 準備

13：00～13：55 活動

15分 全体活動：用具などについて説明（林）

30分 個別活動：ペア（園児1名：学生1～2名）で自己紹介

紙（条幅1/3、条幅70cm×135cm）に線・図形・絵をかいて、筆に慣れる ※一人4枚

10分 グループ活動：グループ（園児2名）で条幅に絵をかく

※指示があったら、学生が前に取りにくる

13：55～14：05 発表会

14：05～14：20 後片付け（園児・学生）

【2回目：12月1日】テーマ：年少）筆で楽しむ、年長）来年の干支「う」を書く

12：30～12：40 幼稚園集合

12：40～13：00 準備

13：00～14：20 活動と後片付け

10分 全体活動：用具などについて復習（林）

**年少**

30分 個人活動：紙（条幅1/3）に図形や絵をかく ※一人4枚

20分 グループ活動：2～3人で条幅に絵をかく

※指示があったら、学生が前に取りにくる

10～15分 後片付け

**年長**

15分 色紙サイズの紙に「う」を練習

5～10分 色紙に清書

10分 葉書サイズの紙に「う」を練習

5～10分 葉書に清書

10～15分 紙（条幅1/3、条幅）に好きな絵や文字をかく

10～15分 後片付け

振り返り：各活動後には活動目的を中心に各自が感じたこと、考えたことをまとめ、レポート提出を課す。その後さらに授業内でも学生の考え等を全員で共有できる場を設ける。

活動の様子（第一回）：



成果：（報告書作成の時点でレポートは未提出だったため、学生のコメントは口頭によるもの）

今回の活動には昨年に引き続き2回目の参加となる学生が1/3程度おり、1年間の子どもたちの成長を見る機会にもなった。参加が初めての学生には「幼稚園の子どもに筆や墨を使って大丈夫？」という心配もあったようであるが、子どもたちの好奇心の強さや集中力に驚いていたようである。

活動の最初に、教員から筆や墨などについて少し話をしたが、子どもたちは筆と墨で書いた「あ」について「太いところと細いところがある！」「色が濃かったり、薄かったりする」「かすれとる」など筆と墨ならではの表現のポイントを的確に感じ取っていた。実際に筆で線や絵をかき始めると、子ども一人一人の自由な表現に圧倒されていたようである。子どもたちが筆を使って表現した線や絵には子どもたちの様々な気持ちが込められており、子どもたちの表現力の深さや大きさに気付いていた。また、何かを筆で表現している時の子どもたちの発言も大切に、子どもたちのことばに表れる気持ちにも注意を向けていた。

子どもたちとのコミュニケーションの面では、幼稚園の子どもたちとの触れ合いに慣れていない学生も多く、不安があった者もいたが、それぞれに声かけなど工夫をし、子どもたちとの関係作りにしっかり取り組んでいた。

今回の1回目の活動で各学生が自分なりの課題や目標を見つけているはずである。2回目の活動の際には、その課題や目標に向けて、学生自身の工夫が子どもたちとの触れ合いの中に反映されると期待している。

# 北立誠幼稚園 毛筆体験活動 筆！墨！紙！で遊ぼう！

参加学生：書道Ⅱ（平成22年度後期）履修生45名

指導教員：林朝子

実施日時：平成22年11月18日（木）・12月2日（木）12：30～14：30

実施場所：北立誠幼稚園

参加園児：34名（年少15名・年長19名）

※小菅園長先生、大森先生（年少）、岡山先生（年長）

活動目的：園児）筆と墨を使う初めての体験を通して、筆のおもしろさを発見し、筆で表現することへの関心を高める

学生）子どもたちの「筆で書く」という初めての体験の場への参加を通して、

- 1) 子どもたちの発見する力・感じる力・表現する力を感じ、
- 2) 子どもたちにとって「筆で書く」ことの意義を考え、子どもを対象とした有効的な毛筆活動を考えるきっかけとする

大きな真っ白い紙に  
何を書こうかな？



子どもたちの  
表現力がすごいなあ。



ぐにゃぐにゃ曲がる線をかいたり、ハートをかいたり・・・！

みんなでかいた作品！  
何が表現されてるかな？



## 日本語教育コースの取り組み「学校現場における多文化共生を考える」

報告者：教育学部 林朝子

### 【概要】

活動場所：津市立一身田小学校「世界を結ぼうクラブ」

※平成20年度からスタート。月1回で年間8回実施。

担当教員：富田幸代・藤ノ原デボラ（一身田小学校）

林朝子・別府直苗・蓑川恵理子（三重大学教育学部）

参加児童：5年生3名、4年生17名、計20名

参加学生：第1～3回 日本語教育コース3年3名、4年2名

第4～8回 日本語教育コース1年11名、天津師範大学留学生7名

事前打ち合わせ：4月13日、10月6日、毎クラブ終了後

クラブ目標：他国の文化や習慣を知り、尊重する。

自国の文化や習慣に誇りを持つ。

他国の文化や自国の文化を外に発信する。

}多文化共生意識を育てる

学生の目標：小学校のクラブ活動の観察や参加を通して、学校現場における多文化共生について考える。

活動内容：

回/月日	活動内容	支援参加
①6/7	<b>【ブラジルってどんな所？】</b> ・ポルトガル語で挨拶をする ・写真を使って、ブラジルの地理や風土、学校文化について知る <b>【DVD作成準備（1）】</b> ・5グループに分かれ、日本の学校を伝える映像を作り、ブラジルのめぐみ学園に送ることが決定 ・グループメンバー、グループ名、取り上げるテーマについて話し合う テーマ：学校紹介（下駄箱など）/掃除/給食/プールと保健室/音楽室と家庭科室 ・各グループで写真撮影を行う（～7月12日まで）	林 学生4名
②6/21	<b>【DVD作成準備（2）】</b> ・シナリオ作成、ナレーションの練習を行う	林 学生4名
③7/12	<b>【DVD作成準備（3）】</b> ・写真データのPC取り込み ・音声を録音	林 学生4名
8月中	<b>【DVD作成】</b> movie makerのソフトを使って、編集。	林 4年生2名
④10/18	<b>【ブラジル国旗の秘密発見】</b> ・DVD上映会 ・ブラジル国旗が表す秘密をデボラ先生のヒントを聞いて、皆で考えながら学習	林・別府・蓑川 学生18名
⑤11/15	<b>【ブラジルの遊びを体験しよう】</b> ・Rouba Bandeira（ホウバ・バンデイラ/旗取り）というブラジルの遊びを運動場で皆で行う	林・別府・蓑川 学生18名
⑥12/6 予定	<b>【ブラジルのクリスマス体験】</b> ・ブラジルのクリスマスデザートを作って食べる ・デザートを通して、北半球と南半球の違いを体験する	林・別府・蓑川 学生18名

⑦1/24 予定	【中国の文化紹介】 中国からの留学生が中心になって、中国語や中国文化を紹介	林・別府・蓑川 学生 18 名
⑧2/14 予定	【世界の文化紹介】 日本の学生が中心になって、世界の様々な文化を紹介	林・別府・蓑川 学生 18 名

### 【成果】

クラブ活動を通し、以下の2点について子どもたちの様子に変化が見られた。このような子どもたち自身が気付く場に学生が参加できたことで、学生自身も多くのことを学べている。まず、活動を通しての子どもたちの様子である。

#### 1) 日本文化（自分化）の気付きから積極的な発信へ

ブラジルめぐみ学園に送る映像作りに際して、日本とブラジルの学校文化の違いを知ることから始めた。その上で、子どもたちがブラジルの友だちに知らせたい自分たちの学校文化について話し合い、伝える内容を決めた。毎日下駄箱で下履きと上履きを履き替えていることや、学校で給食を食べたり、掃除をしたりという当たり前の学校生活が実は日本の学校文化特有のことであったりという気付きが大きかった。そして、それを何とかブラジルの友だちに伝えたいという気持ちが生まれ、活動全体に積極的に参加する姿勢が見られた。

#### 2) “違い”の発見から受入れへ

担当のデボラ先生にブラジルを中心とした言葉や文化を楽しく知る活動を行っていただき、子どもたちが身体を動かしてブラジルの遊びを体験したり、ブラジルの写真を見ながらブラジル国旗の意味について考えたりと自然にブラジルのことを知る機会となっている。子どもたちから活動の中で「日本と違う」というコメントが聞こえることも多いが、“違い”をマイナス評価するのではなく、そのまま受入れることができているように感じる。

学生にとっては、子どもたちがクラブ内で様々な気付きや発見をしている場面に共に参加し、子どもたちの反応や感じ方を直に体験できるという大変貴重な機会となっている。大人の視点からではなく、子どもたちの視点を通して多文化共生について考えていける時間である。クラブ参加の翌週には振り返りの時間を設け、レポート提出も行っており、各学生が多文化共生についてそれぞれの視点から少しずつ意識が向けられているようである。

#### 【学生のレポートから】

- ・小さいころから国際交流や異文化理解の学習をしていくことで子どもたちの興味や関心が深まり、異文化を身近に感じるようになると思う。
- ・外国の子どもだけではなく、同じ日本人でも、例えば他県や他の地域からの転校生と同じ教室で過ごすことは、一種の多文化共生になるのではないだろうか。
- ・三重県内にはブラジル国籍の方が多いと授業で学んだけれど、実際ブラジルについて自分から調べようともしませんでした。国旗には、その国の目標や理想などの意味が込められているので、国旗について知ることはその国を知る一歩につながると思った。
- ・ブラジルのことを先生自身がよく理解して知識を集めていないと母国について自信を持って紹介できないと思いました。わたし自身、日本人なのに日本について知らないことがまだまだあると思います。外国に視野を広げつつ、日本を意識しながら勉強に取り組みたいと思いました。

今後もクラブ活動への参加を継続し、後半では学生自らが子どもたちに対する多文化共生活動を企画実施する予定である。普段の生活の中で気付いた多文化共生を子どもたちに伝える機会としてほしい。

# 一身田小学校 世界を結ぼうクラブ

支援参加学生：第1回～3回 日本語教育コース3年3名、4年2名

第4回～8回 日本語教育コース1年11名、天津師範大学留学生7名

指導教員：林朝子・別府直苗・藁川恵理子

外国につながる子どもたちが多く在籍する一身田小学校において、平成20年4月からスタートした4年生以上が対象のクラブ活動。担当は富田先生とデボラ先生。

クラブの目的：

- ①世界には様々な国や文化があることを知ること
- ②母国の文化や習慣を知り、アイデンティティの確立の一助となること
- ③わかったことや知ったことを皆に発信すること

学生の参加目的は、学校現場における多文化共生について考えるきっかけとすることです。多文化が進む日本において、学校現場にも日本語や日本文化に戸惑う外国につながる子どもたちが多く在籍しています。「多文化」を意識せずに全ての子どもたちが共に学び合える学校空間を築く礎になる取組になるはずです。

## 第1～3回： 学校紹介DVD作成！

ブラジルの日本人学校「めぐみ学園」に送るDVD作成。日本とブラジルの学校を比べて、ブラジルの友だちが驚くような日本の学校文化を紹介します！

【第1回（6月7日）】

- ・クラブの予定
- ・ポルトガル語で挨拶

Meu nome é ～皆元気づく自己紹介できるようになりました

- ・ブラジルと日本の学校について
- ・DVD作成のための話し合い（グループメンバー、グループ名、取り上げるテーマ）

【第2回（6月21日）】

- ・DVD作成のための話し合い（撮影対象、説明スクリプト）

【第3回（7月12日）】

- ・写真データのPC取り込み  
子ども目線の写真がいっぱい！

- ・音声データの録音  
音声録音は皆緊張しました！

【8月中】

- ・4年生2名がmovie makerソフトを使用し、編集



## 第4回（10月18日）： ブラジル国旗の秘密！？

1学期に作成したDVD上映会。皆自分の声に恥ずかしもう！めぐみ学園の皆の感想を早く聞きたいね。

ブラジル国旗は色と形で様々なメッセージが込められています。国旗にはブラジルそのものが表現されていて驚きました。皆わかるかな？？



## 第5回（11月15日）： ブラジルの遊び体験！

Rouba Bandeira（ホウバ・バンデイラ/旗取り）という遊びを皆で運動場に行きました。日本の「氷鬼」などと共通する部分もあり、遊びは世界共通なのかなと思いました。

今後は、ブラジルのクリスマスのお菓子作り、中国人留学生による中国文化紹介、日本人学生による世界の文化紹介などを行う予定です！！



## 小学校専門国語・書写分野（国語教育講座）の取り組み 「たのしく筆体験！」

報告者：教育学部 林朝子

### ◎概要

実施日時：平成22年10月12日（火）3・4限目（10：20～12：25）

実施場所：栗真小学校体育館

参加児童：34名（1年生14名・2年生20名）

※1年生担任 紀平先生、2年生担任 岡山先生、特別支援の先生 釜田先生

参加学生：小学校専門国語（平成22年度後期前半・書写分野）履修学生27名

活動目的：（児童）3年書写で毛筆を習う前の段階で、筆と墨で描く/書くことの楽しさ通し、筆と墨への関心を高める

（学生）①子どもが筆と出会う場面に参加することで、子どもの発見力や表現力を感じとる

②筆や墨の楽しさを伝える方法を考えるきっかけとする

支援方法：子ども1名に対し、学生1～2名が支援を行う

活動内容：10：00～10：20 準備（学生）

10：20～10：25 子どもたちが移動

10：25～10：40 挨拶（全員）・用具などについて説明（林）

10：40～10：45 個別活動のためのペア作り・自己紹介

10：45～11：10 紙（条幅1/3、条幅70cm×135cm）に線・図・絵などをかいて、筆に慣れる

11：10～11：50 書き初め紙に自分の名前をひらがなでかく ※漢字使用も可  
時間に余裕があれば、自由に文字や絵をかく

11：50～12：00 発表会

12：00～12：20 後片付け（学生）

活動後：授業での振り返りを行うとともに、各自が活動を通じて感じたことや考えたことについてレポート提出を行った

### ◎支援の様子



### ◎活動後の学生のレポート（抜粋）

- ・子どもたちはまだ授業時間になっていないのに体育館の様子を見に来たり、自分の場所を確かめたりと、待ちきれない様子だった。授業が始まってその好奇心に満ちた目は変わらず、とてもワクワクしていることがこちらに伝わってきた。
- ・子どもたちが普段使用している鉛筆とは違い、筆と墨を用いて文字や線を書くということでは違ったことができるのでとても興味を示していた。
- ・一生懸命練習をしてあっという間に真っ直ぐな線が書けるようになっていた。上手くなったねと褒めると、少し照れたように笑いながら熱心に練習していた。
- ・まだ2年生で実習にも行ってないので、子どもたちにどういう風に関わってあげばいいのか分からず不安があった。しかし、実際に小学校に行ってみて、様子を見てみると、子どもたちはみんな真剣に説明を聞き、線もしっかり書いていて、とてもびっくりした。小学生は私が思っているほど子どもじゃないんだということに気づき、最初に不安を抱いていたことに申し訳ない気持ちになった。
- ・(昨年度、幼稚園での毛筆体験活動に参加していたので) 小学1、2年生の子を幼稚園と「1～3歳しか変わらない」と思って見てしまっていたが、この年代の子どもたちにとって「1～3歳」の開きがとても大きいものであることを感じさせられた。
- ・子どもたちが初めて筆を持つということで、子どもたちは筆で書くということについてどのような反応をするのだろうかかと疑問に思っていた。そして、私は、子どもたちは筆で書くということに興味を持ってくれるのだろうかと思っていた。しかし、子どもたちの毛筆体験に対する意欲はとて高く、普段使っている鉛筆との感覚の違いに戸惑いを感じている子どももいたが、皆楽しそうに書いていた。
- ・活動を通して、子どもたちは「筆は字を書くもの」という認識をしっかりと持っているということがわかった。
- ・鉛筆で書く文字や線というのはほとんど同じような色の濃さや太さをしているのに対して、筆で文字や線を書くとき墨が少なくなり、文字や線がかすれることや、筆への力の加え方を変えると文字が太くなったり、細くなったりすることに気付いていた。このような文字や線の形を変化させることでいろいろな表現ができるということを感じ、それが筆を使って文字を書くことの楽しさにつながっていると思うので、その点を子どもたちに伝えることができたのではないかと思う。
- ・最後に1年生と2年生で作品を見せ合った後、先生に提出することになった。しかし、先生に提出したら、自分で一番いい作品を持って帰ることができないと思ったようで、先生に提出する前にこっそり違う作品と取り換えている子が何人かいた。子の様子をずっと見ていて、子どもたちが「一番うまい作品を自分で持って帰りたい」と思えたということは、とても意味のあることではないかと感じた。これは、子どもたちにとって今回の活動が有意義な活動であった証拠なのではないかと感じ、とてもうれしく思った。
- ・似顔絵を描いてプレゼントしてくれて、とっても嬉しかったです。
- ・今回の楽しい体験を3年からの書写の授業にどうつなげられるかを考えていきたい。

### ◎まとめ

本活動は大学の後期が始まって2回目の授業時に行ったため、子どもの支援に対する事前指導が不十分なまま、しかも、学生自身が授業で毛筆に触れていない段階での支援ということで、学生自身も不安な気持ちのまま当日の支援に参加していたと思う。教育実習の経験のない2年生も多くいたので、子どもたちへの声かけをどうすればいいのかという悩みもあったようである。しかし、1対1で子どもたちを向き合う中で、子どもたちとのコミュニケーションをとるために一人一人が工夫をし、子どもたちとよい関係を作れていたように思う。そして、子どもたちが筆という初めてのものに会う場面と一緒に体験することで、子どもの発見力・表現力が十分に感じ取れ、子どもの力に改めて驚いたようである。

今回の活動は小学3年生書写で毛筆が導入される前段階で「筆で楽しむ」ことを目的としたものである。学生自身のコメントにもあるように、「書写の時間でどう毛筆を扱い、硬筆へ結びつけるか」を考えていくことが教員となった場合の大きな課題である。今後の授業の中でも本活動の経験を生かし、書写の指導方法について考えていく時間を設けていきたい。



# 栗真小学校での毛筆体験活動 たのしく筆体験！

参加学生：小学校専門国語（平成22年度後期前半・書写分野）  
履修学生27名

指導教員：林朝子

実施日時：平成22年10月12日（火）3・4限目（10：40～12：25）

実施場所：栗真小学校体育館

参加児童：34名（1年生14名・2年生20名）

※1年生担任 紀平先生、2年生担任 岡山先生、特別支援の先生 釜田先生

活動目的：（児童）3年書写で毛筆を習う前の段階で、筆と墨で描く/書くことの楽しさ通し、筆と墨への関心を高める

（学生）①子どもが筆と出会う場面に参加することで、子どもの発見力や表現力を感じとる

②筆や墨の楽しさを伝える方法を考えるきっかけとする



## 【学生の振り返りレポート（一部抜粋）】

### ◎子どもへの支援

- ・マンツーマンで支援する際には、子どもたちが興味あるものを描いていけるように声のかけ方に気を付けた

### ◎子どもの様子

- ・筆や硯など触れたことがない道具に興味深々
- ・筆を振り回したりと不安だったが、みんなしっかり筆で書くことに取り組んでいた
- ・子どもたちが思い思いの線を書くことを楽しんでた
- ・「墨が紙の裏にしみる」という大発見に驚いていた
- ・筆と墨を用いて線や文字を書くことで、いつもと違う感覚を持てたよう

### ◎書写へのつながり

- ・鉛筆とは違い、筆で文字や線を書くと墨が少なくなり、文字や線がかすれることや、筆への力の加え方を変えると文字の太さに変化が出せることに気付いていた
- ・書き初め紙に名前を書いたときには、自分で文字のバランスを考えたりして工夫をしていた
- ・子どもたちの字を書くことが楽しいと感じるきっかけになる
- ・毛筆を身近に感じられる活動
- ・今回の楽しい体験を3年からの書写の授業にどうつなげられるかを考えていきたい

## 【まとめ】

今回はほぼ1対1で子どもたちの支援ができるという貴重な機会であった。子どもたちが筆と墨で表現する際の一つ一つの言動を傍

で感じ取り、学生たちは様々なことを学ぶ機会となった。書写の時間だけの毛筆ではなく、楽しく筆や墨を使える書写指導方法を考えるきっかけにつなげていきたい。

## 白塚小学校・白塚幼稚園の連携活動

学生：家政教育コース 大脇菜央

担当教員：林未和子

### 1. 目的

昨今、社会でもよく言われている、授業中に座ってられない、教師の話を聞かないなどの「小1プロブレム」という問題に対応するために、幼稚園と小学校の連携が必要となってきている。しかし、幼稚園と小学校にはそれぞれ独自のカリキュラムがあり、なかなか連携する時間を取ることができない。そこで、幼・小連携活動の意味と在り方について考えたい。

### 2. 活動内容

- やぶねり（お祭り）の紹介〔7月8日〕…小学生が小学校近隣の大人の方から聞いたお祭りの歴史について、幼稚園児に紹介。また、やぶねりという18mの笹を持って、一緒に走った。
- 運動会〔9月18日〕…主に小学5年生と来年度小学生になる幼稚園児と一緒に競争した。この他にも、綱引きを一緒に行っていた。
- 遊びの紹介〔10月12日、11月16日〕…小学5年生が幼稚園児に昔の遊びを紹介し、一緒に遊んでいた。

表 1 10月12日の活動

時間	幼稚園の子どもたち	小学5年生
10:00~10:05	歌を歌う（「焼き芋じゃんけん」・「パレード」）。	ガムテープに名前を書いて名札作り。
10:05~10:15	洗濯物の順（「洗って」「すすいで」「しぼって」「ほして」）を確認して、小学生と幼稚園の子どもたちがペアになって踊る。	
10:15~10:20	5歳児…花一匁 4歳児…ロンド橋	
10:20~10:30	質問タイム	

- さつまいも〔11月8日〕…小学2年生と幼稚園児と一緒にさつまいもを収穫した。その後（11月25日）、収穫したさつまいもを2年生が調理し、幼稚園児にあげた。

### 3. 振り返り

幼稚園児と小学生の子どもたちの連携活動はとても楽しそうであった。このように、お互いが何を感じ考えているのか、言葉かけ、体の大きさなど、相手を理解することができる活動は子どもたちにとって、人との関わりについての学びになると思う。

### 4. 連携活動の成果と課題

- ◇ 連携活動をすることで、小学生は幼稚園児を思いやり、助けようという気持ちが生まれる。また幼稚園児は小学校が身近に感じられ、年齢の近い小学生と関わることによって自身の将来像を想像できるようになると考える。
- ◇ 少人数の園児に対して、小学生は1年生から6年生までと人数が多く、連携する日程や活動を合わせるのが大変である。幼稚園と小学校双方にとって意義のある連携の在り方が求められる。
- ◇ 小学校と幼稚園が共同で研修会・研究会を行ったり、交流活動や合同授業を一緒に計画することが今後の課題になってくると考える。

# 白塚小学校・白塚幼稚園の連携活動

学生：家政教育コース 大脇菜央  
担当教員：林未和子

## 1. 目的

昨今、社会でもよく言われている、授業中に座ってられない、教師の話を聞かないなどの「小1プロブレム」という問題に対応するために、幼稚園と小学校の連携が必要となってきている。しかし、幼稚園と小学校にはそれぞれ独自のカリキュラムがあり、なかなか連携する時間を取ることができない。そこで、幼・小連携活動の意味と在り方について考えたい。

## 2. 活動内容

### やぶねり(お祭り)の紹介(7月8日)

小学生が小学校近隣の大人の方から聞いたお祭りの歴史について、幼稚園児に紹介。

また、やぶねりという18mの笹を持って、一緒に走った。

### 運動会(9月18日)

主に小学5年生と来年度小学生になる幼稚園児と一緒に競争。

この他にも、綱引きを一緒に行っていた。



### 遊びの紹介(10月12日、11月16日)

小学5年生が幼稚園児に昔の遊びを紹介し、一緒に遊んでいた。



### さつまいも(11月8日)

小学2年生と幼稚園児と一緒にさつまいもを収穫した。

今後、収穫したさつまいもを2年生が調理し、幼稚園児にあげた。



## 3. 振り返り

幼稚園児と小学生の子どもたちの連携活動はとても楽しそうであった。このように、お互いが何を感じ考えているのか、言葉かけ、体の大きさなど、相手を理解することができる活動は子どもたちにとって、人との関わりについての学びになると思う。

## 4. 連携活動の成果と課題

- ・連携活動をすることで、小学生は幼稚園児を思いやり、助けようという気持ちが生まれる。また幼稚園児は小学校が身近に感じられ、年齢の近い小学生と関わることによって自身の将来像を想像できるようになると考える。
- ・少人数の園児に対して、小学生は1年生から6年生までと人数が多く、連携する日程や活動を合わせるのが大変である。幼稚園と小学校双方にとって意義のある連携の在り方が求められる。

## 大学キャンパスを活用した自然観察

— 2年目の取り組み —

平山大輔（理科教育講座・生物学）

### 背景と目的

自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験学習の重要性は益々大きくなっています。今回の活動では昨年度に引き続き、自然豊かな三重大学キャンパスを活用した観察授業に取り組みました。これは、隣接学校園の子どもを対象とし、キャンパス内での木の実拾いや植物観察を通して、身近な自然の多様性に触れることを目的とするものです。2年目の今年は、活動の輪を広げ、より多くの学校園および教育学部の学生の参加を得られるように取り組みました。

### 活動概要

初回は、10月26日に栗真小学校1,2年生を対象として実施しました。次に、11月5日に白塚幼稚園と北立誠幼稚園の園児を対象として実施しました。当初は南立誠幼稚園も含めた三園合同で10月28日に行う予定でしたが、雨天延期にともない、二園での実施となりました。三重大学教育学部からは幼児教育講座の河崎道夫先生(11/5)と滝口圭子先生(10/26, 11/5)にご協力頂きました。また、理科教育コースおよび幼児教育コースの学生を中心に参加を呼びかけました。

栗真小学校の活動では、午前9時半に教育学部前に集合し、事前に選定しておいた場所で、説明を交えながら木の実拾いと観察を行いました。11時半頃から講堂前の芝生で昼食をとり、午後1時半頃まで採集を行い、活動を終わりました。白塚、北立誠幼稚園の活動では、午前10時に集合して木の実拾いを行い、11時半から教育学部横の芝生で昼食をとった後解散しました。

### 成果とまとめ

両日ともに、多種の木の実を観察・採集することができ、子どもたちが楽しく取り組む様子が見られました。また、昨年度は4名だった参加学生数が、25名に増えました。内訳をみると、所属コースは理科教育が10名、幼児教育が14名、学校教育が1名であり、学年は、大学院生3名、4年生11名、3年生7名、2年生3名、1年生1名でした。参加学校園数および参加学生数ともに昨年度より増えたことは、隣接学校園との連携を核とした教員養成の観点からみて非常に有意義でした。また、参加学生の感想をみると、多くの学生がこうした自然観察の意義を感じていることが分かりました。

教師・保育士を志望する学生が、自然の面白さを体験によって伝える能力を養う場として、また、近隣の学校園の身近な自然観察の場として、大学キャンパスの積極的な活用が進むよう来年以降も積極的に取り組んでいきたいと思っております。



## 西が丘小学校での連携授業

教員 山田康彦 M1 竹下香織  
4年 小林由実 鈴木奈都世 中手拓哉  
中野ひかり 中山光悠 松原由紀子

### 連携授業『今日からキミは〇〇だ!』の内容

本授業では生徒一人ひとりが〇〇になりきり、〇〇の視点から見える西が丘小学校校庭の風景や事物を絵に描くという活動を行なった。〇〇とは生徒のなりたい虫、鳥などの小動物である。今回の連携授業では生徒に人間とは別の視点で、普段注視することのない風景の面白さに気づかせたいという思いや、普段とは別の角度からモチーフにアプローチし、表現を工夫する楽しさも知ってもらいたいという意図をもって取り組んだ。児童生徒は第1回授業にスケッチを、第2回では主に着彩を行なった。

### 実施日程

第1回：風景の発見と下書き		第2回：着彩	
9月28日(火)	3・4限目(10:40～12:15)6年3組 5・6限目(13:40～15:15)6年1組	10月12日(火)	3・4限目(10:40～12:15)6年1,4組 5・6限目(13:40～15:15)6年1組
10月1日(金)	3・4限目(10:40～12:15)6年3組 5・6限目(13:40～15:15)6年1組	10月14日(木)	1・2限目(8:45～10:20)6年2,4組 3・4限目(10:40～12:15)6年3組

### 学習計画

- 第1回 1. 導入1(題材についての説明) / スケッチ・・・1時間  
2. スケッチをもとに下書き・・・1時間
- 第2回 3. 導入2(色彩についてのアドバイス) / 着彩・・・2時間

### 授業のねらい

1. 動物の視点にたって、学校内の面白い風景を発見できる
2. 本題材を通して画面構成を工夫して作品を制作することができる。
3. 絵の具の使い方の幅を広める

### 個別指導の内容

- 第1回 1. 生徒が面白い風景を発見するのを必要に応じてアドバイスする。  
2. 面白い風景としてメモしたものから一つ選ぶ時にアドバイスする。2時間目に下描きに入る前に、生徒にお互いのスケッチを見せ合う。次に生徒にどのスケッチを下描きにするか自分で決めるようにする。自分で決めることができないで迷っている生徒がいたら、下描きに入る前に学生スタッフが相談に乗る(授業者が指示する)。  
注) 1時間目にスケッチができなかった生徒に対しては、スタッフがサポートして、2時間目にスケッチをし、終わったら早速下描きに入る。  
3. 下描きを描いているときに必要に応じてのアドバイスをする。
- 第2回 1. 着彩の導入の内容に沿って、必要に応じてアドバイスをする。  
2. 特に着彩を簡単に終わってしまうような描き方をしている生徒には、こちらからアドバイスをする。

# 西が丘小学校での連携授業

## ～連携授業『今日からキミは〇〇だ！』の内容～

本校案では生徒一人ひとりが〇〇になりきり、〇〇の視点から見える西が丘小学校校庭の風景や事物を絵に描くという活動を行った。〇〇とは生徒のなりたい虫、鳥などの小動物である。

今回の連携授業では生徒に人間とは別の視点で、普段注視することのない風景の面白さに気づかせたいという思いや、普段とは別の角度からモチーフにアプローチし、表現を工夫する楽しさも知ってもらいたいという意図をもって取り組んだ。

児童生徒は第1回授業にスケッチを、第2回では主に着彩を行った。

スタッフ 教員 山田康彦  
M1 竹下香織  
4年 小林由実 鈴木奈都世 中手拓哉  
中野ひかり 中山光悠 松原由紀子

実施日時  
第1回：風景の発見と下書き  
9月28日(火) 3・4限目(10:40～12:15)6年3組  
5・6限目(13:40～15:15)6年1組  
10月1日(金) 3・4限目(10:40～12:15)6年3組  
5・6限目(13:40～15:15)6年1組  
第2回：着彩  
10月12日(火) 3・4限目(10:40～12:15)6年1,4組  
5・6限目(13:40～15:15)6年1組  
10月14日(木) 1・2限目(8:45～10:20)6年2,4組  
3・4限目(10:40～12:15)6年3組

## ～授業計画～



授業の導入部で、色々な小動物から見た風景の写真を提示し、生徒に気づいたことを発表させる。次に「アリから見た遊具」の参考作品を提示し、生徒の活動内容を説明する。



導入後、小動物の視点から見える風景を発見するために、校庭でスケッチ用紙にスケッチをする。スケッチが終わった生徒から下書きをする。



生徒が下書きを終えた後、着彩について説明した。主に塗り残し防止、均一に描き進め易くするための下塗り方法や重ね塗りをする際の水の量の調節方法を説明した。



## ～授業風景～



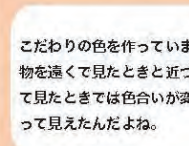
アリが滑り台を見上げているシーンを描いていたよね！アリの気持ちになりきって絵を描けていました。



細かく細かく、木の枝と枝の間を縫うように空の色を一生懸命頑張って塗っていました。真剣なまなざしがとってもすごいです！



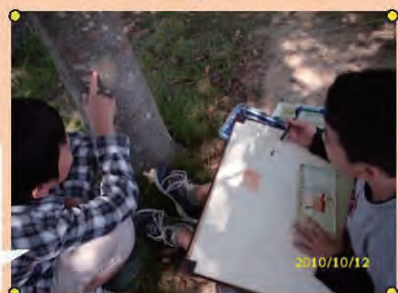
石の上にいる小鳥が次に飛び移る木を選んでるんだよね！手前の葉っぱがたくさんついている細い木か、それとも奥にある太い木が悩むな～。



こだわりの色を作っています。物を遠くで見たときと近づいて見たときでは色合いが変わって見えたんだよね。



友達と同じ生き物の気持ちになりきって意見交換をしています。木を近くでよく観察してみると、木の色が茶色一色ではなかったことに気づけたんだよね。



コケを1本1本丁寧に描いています。ダンゴムシにととのコケは、きっと私たちの世界にある原っぱのように見えるのかもしれないよね。



無心になるほど、集中して絵を描いている子もいました。

児童のみなさん、よく頑張りました！  
西が丘小学校の先生方、暖かいご支援ありがとうございました。

実践力の向上を目指して  
～地域連携実習の実践から学ぶ～

愛媛大学教育学部学生	片桐修司
愛媛大学教育学部学生	空野剛
愛媛大学教育学部学生	三木アカネ

はじめに

私たちは、教員としての資質向上を図るために、学校現場での様々な活動に参加させていただいている。活動後はふりかえりを行い、現場の活動と大学の学びを結び付け、以後の活動に生かすという、実践と理論の往還を目指している。この実践活動とふりかえりを通じて、子どもの理解、対人関係力、教科の指導力など、教員に求められる資質能力を向上させてきた。

今回は私たちの取り組んできたさまざまな実践の中で、得意(専門)とする分野の活動を取り上げ、これまでの実践と理論の往還の過程と今後の課題について報告する。

＜事業1＞小学校「外国語活動」の学習支援【片桐修司】

小学校5年生4クラスを対象に、今年度4月から、週1回、外国語活動の支援を行っている。活動では、①活動前に活動の目標を立てる、②授業前は指導案を確認し、自分の役割を把握する、③授業中は子どもと英語で挨拶、学級担任やALTとデモンストレーション、④授業後は、1. 目標に基づき5段階で自己評価、2. 活動ごとに児童の様子をまとめる、3. 児童の様子から学びや疑問点を書き出す、4. 学びや疑問点を理論と結び付ける、といった一連の作業を行うことを通じて自らの活動に対する省察を行っている。

＜学び＞

この活動から大きく二つのことを学んだ。第一に、小学校外国語活動によって子どもたちが得る成果を自分なりの実感をもって把握できたこと。具体的には、「児童の外国や自国の文化に対する理解」、「英語の表現への慣れ」、「他者に気持ちを伝えようとする態度の育成」などにおいて確かな変化を見せた。省察を繰り返しながら活動に取り組み、確かな自信を得ることができた。

第二に、授業づくりにおいて自己関連性を高めさせることの大切さに気付いたこと。事例を挙げると、あるリスニング活動の際、児童はCDを聞いて、英語ノート上の人物について答える問題があった。その際、自分と関係の薄いノート上の人物について、児童は、耳を傾ける姿勢が見られなかった。

＜課題＞

- ・児童にとって自己関連性の高い活動の考案

＜事業2＞Skypeによる遠隔学習支援(ICTツールを活用した学習支援)【空野剛】

フリーソフト「Skype」を活用し、愛媛大学教育学部(松山市)と角野公民館(新居浜市)を結んだ学習支援に取り組んだ。授業対象は小学校5、6年生10名で2009年10月～11月に、1回60分の講座を週1回、計6回実施した。コミュニケーション能力の向上を目指した本活動では、テレビ電話を活用したゲームやSkypeとGoogle Earthを組み合わせた地元紹介などを行った。



### <学び>

本活動では、大きく2つの学びを得ることができた。第一は、コミュニケーションについて考えることができた点である。テレビ電話や文字チャットなどを用い、視覚情報や聴覚情報を意図的に制約したコミュニケーションを経験する過程で、直接的コミュニケーションと間接的コミュニケーションの長所短所を考えることができた。

第二は、情報教育に関する認識を深めることができた点である。本活動を計画する過程において、ICTを活用する学習手段と子どもの情報活用能力を伸ばす学習内容を、有機的に関連させることがいかに重要であるか、改めて認識することができた。

### <課題>

- ・各教科・各科目等(高等学校地理歴史科及び公民科)における情報教育のあり方について

### **＜事業3＞小学校体育授業の補助・小学校スポーツ指導者派遣事業【三木アカネ】**

小学校体育授業補助では、小学校体育科における子どもの学びを保障するために、T2として「もっと楽しい体育授業」を目指した授業に参画している。具体的には、運動に苦手意識をもった子どもの恐怖心や不安感を取り除くための支援を中心に、活動を行っている。

また、小学校スポーツ指導者派遣事業では、学生がゲストティーチャーとしてスポーツ指導を行っている。ここでは、学生が主体的に教材研究を行い、授業実践に取り組むとともに、現場の教員に教材を紹介することも目指している。

### <学び>

両活動において、個に応じた指導法の必要性を強く認識し、教材研究に取り組むようになった。経験を積み重ねるごとに、幅広い視野で子どものつまづきを把握できるようになり、教材を適用するタイミングや条件のレパートリーを増やすことができるようになった。また、学習集団のあり方にも着目し、肯定的な学習集団を目指して、子どもたちが学習しやすい環境づくりを行っている。

その結果、現場での学びを通じて生じた課題を解決するため、大学の授業や文献、大学教員の助言を手がかりに、関連事項を繰り返し学びなおすという、学びのスタイルが確立した。

### <課題>

- ・体育授業外での子どもの実態をふまえた、子どもとのかかわり
- ・自分自身が苦手と感じる領域における実技力の向上

### **おわりに**

「地域連携実習」は、大学での学びを生かす場としての役割を担っている。しかしながら、ふりかえりにおいて、実践を理論化させる過程に課題がある。このような課題に対応するためのリフレクションの授業も開講されているが、個々の実践まで十分対応できているとは言い難い。また、一定のカリキュラムという制約の中ですべてを解決することは、現実的ではない。

この課題を私たち自身で解決するために、大学主導のリフレクションのみに頼らない、より高度な理論と実践の往還を目指していきたいと考えている。そのためにも、リフレクションの意義を踏まえながら、私たち自身で、実践を理論化させる機会をつくり、自己成長を図っていくことが重要であろう。この重要性を認識しながら、これからの学習に取り組んでいきたい。

# 実践力の向上を目指して ～地域連携実習の実践から学ぶ～

愛媛大学教育学部学生

片桐修司  
空野剛  
三木アカネ



## はじめに

私たちは、教員としての資質向上を図るために、「地域連携実習」に参加し、学校現場で様々な実践的活動に取り組んでいる。活動後は、必ずコンピュータシステム上で活動をふりかえり、経験を大学の学びや文献等の知識と結び付ける作業を行う。そして、このふりかえりを基に、以後の活動や他の活動に生かすという、実践と理論の往還を目指している。この繰り返しにより、私たちは、教員としての実践力を向上させている。本報告では、私たちが経験した「地域連携実習」の中からいくつかの実践を取り上げ、実践と理論の往還の過程と今後の課題について提示する。

## 地域連携実習とは

「地域連携実習」とは、愛媛大学の近隣を中心とした学校・教育機関の協力の下、学生の主体的な参加による教育体験活動である。

現在、大学1年生から大学院生までの多くの学生が参加している。

<主な地域連携実習事業>

- ・ 幼稚園から高等学校各学校種での多様な授業・保育アシスタント
- ・ 特別に支援が必要な児童・生徒への補助
- ・ 運動会や学園祭の補助
- ・ 部活動や補習など課外活動への支援
- ・ 学生企画型の休日学習活動

## 小学校「外国語活動」の学習支援

<活動事項>

- ①活動の目標を立てる。
- ②授業前に指導案を確認し、役割把握。
- ③授業中は、学級担任やALTとチームティーチング
- ④活動後は振り返り・・・

1. 自己評価
2. 児童の様子をまとめる
3. 学びや疑問点の把握
4. 学びや疑問点と理論との結び付け

対象： 小学5年生・4クラス  
期間： 2010年4月～  
頻度： 週1回



<学び>

●小学校外国語活動によって子どもたちが得る成果を把握できた。具体的には、「児童の外国や自国の文化に対する理解」、「英語の表現への慣れ」、「他者に気持ちを伝えようとする態度の育成」などにおいて確かな変化を見せた。

●授業づくりにおいて自己関連性を高めさせることの大切さ。リスニング活動の際、児童と関係の薄いノート上の人物について耳を傾ける姿勢が見られなかった場面より



<これからに向けて>

- ・児童にとって自己関連性の高い活動の考案

## 小学校体育授業の補助・小学校スポーツ指導者派遣事業

◎小学校体育授業の補助

- ・T2として体育の授業の補助
- ・教材提案や授業改善を担当教諭と連携を図りながら実施



◎小学校スポーツ指導者派遣

- ・ゲストティーチャーとして小学校体育授業や特別活動、部活動の指導を単発で実施。
- ・現職教員への教材紹介を兼ねることを意図した授業を実践

<学び>

両事業では、個に応じた指導法の必要性を強く認識し、教材研究に取り組むようになった。そして次第に、幅広い視野で子どものつまづきを把握できるようになり、教材を適用するタイミングや条件のレポートを増やすことができるようになった。また、学習集団のあり方にも着目し、肯定的な学習集団を目指して、子どもたちが学習しやすい環境づくりを行っている。

●学びのスタイルの確立

現場での学びを通じて生じた課題を解決するため、大学の授業や文献、大学教員の助言を手がかりに、関連事項を繰り返し学びなおすという、学びのスタイルが確立した。



<これからに向けて>

- ・体育授業外での子どもの実態をふまえた、子どもとのかかわり方
- ・自分自身が苦手と感じる領域における実技力の向上

## Skypeによる遠隔学習支援(ICTツールを活用した学習支援)

フリーソフト「Skype」を活用し、愛媛大学(松山市)と角野公民館(新居浜市)を結んだ学習支援。本活動は、児童のコミュニケーション能力の向上を目指した。

対象： 小学校5, 6年生10名  
期間： 2009年10月～11月  
頻度： 1回60分の講座を週に1回計6回



<具体的な活動紹介>

『無声(口パクや瞬き)で自己紹介ゲーム』

テレビ電話で映像を共有し、自己紹介を行う。その際、口の動きや瞬きで表現させ視覚情報のみでコミュニケーションを図るゲーム。

『Google Earthと組み合わせた地元紹介』

Google Earthを互いが起動させ、文字チャットのみで互いの地元紹介を行う。Google Earthの画面をあえて共有しないことで、バイアスが生じることを体感させることができる。

<学び>

●コミュニケーションについて考えることができた。コミュニケーションの視覚情報や聴覚情報を意図的に制限することで生じる影響を把握することができた。例えば、映像から得られる子どもの情報が制限される間接的なコミュニケーションでは、個に応じた指導を展開することが困難であることがわかった。

●情報教育に関する認識を深めることができた

情報教育では、ICTを活用する学習手段(ハード面ではPC、ソフト面ではSkypeなど)と情報活用能力を伸ばす学習内容(コミュニケーション)を有機的に関連させることの重要性が改めてわかった。

<これからに向けて>

このような情報教育を各学校種の各教科・各科目等のなかでどう展開していくかという問題意識が生まれた。地理歴史科及び公民科における情報教育の展開について研究を行っている。

## まとめ



「地域連携実習」は、大学での学びを生かす場としての役割を担っている。

しかしながら、ふりかえりにおいて、

実践を理論化させる過程に課題がある。このような課題に対応するためのリフレクションの授業も開講されているが、個々の実践まで十分対応できているとは言い難い。また、一定のカリキュラムという制約の中で、すべてを解決することは現実的ではない。

この課題を私たち自身で解決するために、大学主導のリフレクションのみに頼らない、より高度な理論と実践の往還を目指していきたいと考えている。そのためにも、リフレクションの意義を踏まえながら、私たち自身で、実践を理論化させる機会をつくり、自己成長を図っていくことが重要であろう。この重要性を認識しながら、これからの学習に取り組んでいきたい。

この部分に課題!

## 宇都宮大学教育学部 教育実践的活動における学生の学び

### 1. 自然体験学習施設における活動

私は、高校のときにリーダーズクラブに在籍し、キャンプやレクリエーションを行っていました。その経験から子どもの体験活動に興味を持ち、青少年教育施設にボランティアとして参加するようになりました。

<鹿沼市自然体験交流センター>

大学2・3・4年の3年間、かぬまっ子わくわくキャンプに参加しました。今年は5泊6日の日程で行い、43名の子どもたちと川下りや魚つかみをしたり、ナイトハイクで暗い道を2時間近く歩いたり、泥んこ遊びでは私たちボランティアが企画・運営を行いました。楽しい経験ばかりでなく、怖い経験や辛い経験を子どもたちと同じようにし、閉校式では子ども・ボランティア関係なく涙を流していました。たった6日間とはいえ子どもたちの成長には感動を覚えました。近い距離で子どもたちと接することで、子どもの無限の可能性と想像力に驚き、笑顔にパワーをもらい、関わり方を学べるとても有意義な時間となりました。また、他大学の学生とも交流ができ、いい刺激になっています。

<宇都宮市冒険活動センター>

大学3年のときに、インターンシップで7日間お世話になりました。小学校・中学校の宿泊学習で登山やイニシアティブゲームなどの指導補助を行い、最終回には企画書を提出してマウンテンバイクの指導を行いました。このつながりをきっかけとし、同施設の主催事業にボランティアとして参加するようになり、カヌーやネイチャークラフトの補助をしました。たくさん子どもたちとの関わったことはもちろんですが、施設で働く多くの方々とのつながりができたことで、私自身の将来を考えるきっかけにもなりました。

4年 粕谷 亜紀

### 2. 小中学校における学習支援

私は教育実習を通してもっと児童とかかわりたいと思い、宇都宮市立横川東小学校の特別支援学級にボランティアとして授業に参加させてもらいました。そこでは特別な支援が必要な児童がいたのですが、教員の方は個に応じた対応をしており一人一人が生き生きと学校生活を送っていました。

私が特に印象に残っている場面を紹介します。それは小学校2年生のかけ算九九の授業でした。皆さんも小学校2年生の頃は必死になってかけ算九九を学習したと思います。このような言い方をしたら失礼になるかもしれませんが、健常者の児童でも苦勞していたかけ算九九を特別支援の児童にできるのかと疑問に思っていました。私がイメージしていたかけ算九九の学習は一生懸命呪文のように唱えるものだと思っていました。しかし、そこでの授業は私の想像していたものと180度違っていました。児童が歌や踊りに合わせて体と口を動かしながら自然と身につけていく目から鱗の授業でした。児童はその歌が気に入ったらしく休み時間などでも歌っていました。

私はスクールボランティアを体験するまでは将来教員になったときに障害を持っている子ども達にどのように対応していけばいいのか不安でした。しかし、ボランティアを通して少し自信を持つことができました。私は特別支援についての知識はほとんどありませんでし

た。たぶん、皆さんもやる気だけあればそれだけで飛び込んでいって大丈夫です。現場の方がいろいろやさしく教えてくれます。皆さんも教育実習だけでは体験できない学校現場の様子をボランティア活動で体験できると思います。まずはやってみればいいんじゃないでしょうか。私の体験からはそう思います。

4年 長嶺 成泰

私はスクールサポートセンターを通し、小学校で学習支援のボランティアを行ってきました。主に、昼休みの活動、清掃、授業の補助を中心に参加し、全学年の児童と学んでいます。

現職の先生たちの中で活動することを通して、座学では得ることのできない気づきがいくつもありました。一つ目に昼休みの活動を通して学んだ「約束を守る」についてです。昼休みの時間は校庭で様々な学年、グループの児童と遊ぶのですが、どうしても全員と遊ぶことはできません。ある時に「来週に来たときに一緒に遊ぼう。今日は別の学年の子と遊ぶ約束なんだ。」と約束をして、1週間後にその約束を忘れてしまったことがありました。「うそつき。一緒に遊ぶっていったよね」と翌週に児童から言われてしまい、ひどく傷つけてしまったと同時に、約束をすることに対して軽くみていた自分に気がつきました。二つ目に「子供ではなく一人の人として話をしっかり聞くこと」の大切さを学びました。児童は自分の考えていること、感じていることを常に誰かに聞いてほしい気持ちでいます。こちらが子供の話だとせず耳を傾けてしっかり聞いてあげると、信頼関係が生まれ、こちらの話もしっかりと静かに聞いてくれるようになります。「自分が話を聞いてほしいのであれば、それ以上に話を聞いてあげることが大切である」ということを身にしみて感じています。

3年 金子 匠

### 3. 土曜・長期休業中などの学習支援

那須烏山市でサタデースクールという小中学生を対象とした学習支援ボランティアがあります。このボランティアでは実際に大学生2人によるティームティーチング形式で授業を進めることができ、実際に自分主導で授業することができます。教育実習と違って先生が授業に入っていないという初めての状況の中で多くのことを学んでいます。チョークで板書すること、指名すること、全体の様子を見ながら進めていくこと、どれもこれも手探りで一つずつ様々な方法を試しながら、授業を行っています。その中で、うまくいった時、失敗してしまった時の差は何なのか。何がいけなかったのか、改善点は何なのかと、常に自問自答しながら学んでいます。

3年 金子 匠

(スクールサポートセンターと支援の仕組み)

学校や教育委員会からの要請に応じた教員派遣と学生派遣の窓口として、また教職員サマーセミナー開講や教委との連携協議会など地域教育界との連携の窓口として、平成17年度に開設しました。現在は教育実践総合センターの一部門(地域連携部門)に位置づけられています。

学部との兼任教員2名、コーディネーター2名(元校長、うち1名は客員教授を兼ねる)、事務補佐員1名、ほかに学部の協力教員が10名ほどで構成されています。

## スクールサポート 地域教育のニーズ に応える



地域教育界への社会貢献を進めながら、

成果を教員養成機能の充実に生かす

教育学部附属スクールサポートセンター

スクールサポートセンターは、教育学部の学生や教員を教育現場に派遣し、学校教育をサポート、地域教育界への社会的貢献を進めながら、その成果を教員養成機能の充実に生かしている。昨年度は、学生125人、教員391人（いずれも延べ人数）を県内各地の学校、教育委員会に派遣している。

大学キャンパスに近い宇都宮市立石井小学校。同小で授業をサポートするボランティアをしている教育学部4年の菊池麻実さんと五味渕幸さんは、それぞれ「分からないことがあつて表情を曇らせていた子が、ちよつとした手助けをしてあげると、嬉しうで理解し笑顔になるのを見ると嬉しい」、「教員になりたいというモチベーションが上がると、いろいろな先生の授業を見ることができると勉強になる」と話す。2人は、10月に発表された栃木県の教員採用試験に合格した。



五味渕幸さん「大学で習う知識だけではなく、もっと経験をしておきたい」

生は気持ちよく楽しく見てくれる」という。

石井小の学生ボランティア受け入れ担当、阿部恵美子教諭は「学生が来て大人の手が増えることで、子どもたちはより多くの大人に接することができる。特に勉強に躓いている子などには非常にいいことです。年齢が近いこともあって、お姉さん、お兄さん気分です先生に言えないことを気軽に言えるようです。子どもは正直ですから」と話す。

阿部教諭は、ある男子学生のことから印象に残っているという。「1年間来てくれました。昼休みから来て子どもたちと汗びっしょりになって遊び、



菊池麻実さん「学校では先生として扱われるので、しっかりしないとけない」

慕われていた。不登校気味の女の子がいたのですが、一緒にブランコに乗りながら彼女の話を聞いていた。教員だけでは手が回らない部分をフォローしてもらって、非常に助かりました。女の子も彼には話しやすかったようで、心を開ききつかけになったと思います。」

センター長の松本敏教授は「教員の平均年齢が高齢化している現状の中、若い学生が行くだけでも学校はすごく元気になる。初々しさを注入できて、子どもも先生もフレッシュな感じを持ってもらえる」と話す。

また、学校の先生が抱える問題が複雑、多様化し、一つひとつが重い問題になっていく現状をサポートを求め背景になっていることを指摘。「例えば、軽度発達障害の子どもが増え、教育現場は限られた時間でもいいから、傍でついで見てくれる人が欲しいという思いを持っています。また現場の教師は、第三者的な立場で大学教員から助言・指導を受けることが新鮮で新たな発見があるようです」と話している。

## 連携校による連携活動報告

### 総合討論

#### 橋北中学校 校長 中野 仁

来年度引き受ける教育実習について思っていることを少しお話したいと思います。橋北中学校は来年度 15 名の教育実習生を受け入れます。今まで大体多い時で 5～6 名という受け入れでしたので、15 名というのはかなり大人数ということになります。教員が大体 30 名程ですので、45 名となりますと学校の雰囲気は少し変わってくるのではないかと考えております。教育実習については、色々な考え方があるのですが、その心構えのようなものを少し述べさせていただきたいと思います。(中略)

先日、全日本の中学校校長会の全国大会が高知県で行われまして、高知県出身の山本一力という作家の講演を聞いたのですが、「月 2 回ほど高知に飛行機で帰ってくるが、空港へ着くとシートベルトのランプが消えるまで動かないでくださいという指示が添乗員から出る。しかし、その放送があるのに、何を急いでいるのか、我先にと出口の方へ向かっていく人がいる。ところが、今日は東京から来た時に、誰も立って行かない、驚いた、初めての経験をした。そこで、よくそのメンバーを見てみると、実は今から私が講演する中学校の校長先生方であった。その飛行機での姿を見ると、こういう方々に子どもを預けられるということはいいことだと、素晴らしいことだと思った。」と、褒めていただきました。彼が一番言いたかったことは、「自分はいつも見つめられている」ということを意識してほしいということです。私もそう思います。例えば教育実習では誰に見られているかという、一つは子ども、それからもう一つは教員、またもう一つは保護者、それとお天道様、神様に見られています。そういうふうに、「自分はいつも見られている」という意識を持って、服装や言葉遣いといったものを自分なりに考えて臨んでほしい。子どもたちは、教育実習生のところへは、年が近いから喜んで寄ってきます。しかし、子どもたちと同じような言葉遣いでしゃべっていると、いつかは叱責、あるいは強い指導をしなければならないときが来ます。そのときなかなかそういうことができません。そういったことを考えながら、「自分は色んな人に見られている」という意識を持って、臨んでいただくとありがたいと思います。以上です。

#### 南立誠小学校 校長 東谷 和久

昨年度からこの連携の仲間に入れていただいたのですが、昨年度より加わったこととして、今年初めて、大学一年生の教育実地研究で数学科の 4 人の学生さんに来ていただきました。毎週金曜日、前期・後期とも同じ方々に来ていただいています。連携の中で本校が得するように、うまく大学の色々な教育力を小学校の方に活かしていこうと思っております。

ただ、今日の色々な発表を聞いておきますと、これから我々の現場である学校でも、大学生を育てる支援をするということが、かなり強く迫ってきているのではと思います。橋北中学校での教育実習が大幅に増えるということで、小学校でもやはり教育実習を受け入れるときが来るのではないかと思います。はっきり申しまして、教育実習に来ていただくと、やはり現場としてはその分仕事が増えることは確かです。ただ、そうばかりも言っていない部分もあるので、やはり若い教師を育て、次に教育を継続していくという意味では、これは我々現場の教員の責務でもあると思っております。教育実地を受けた学生さんは、本当に熱心

にやってくれまして、週に1時間ですが、それぞれの学級にはりついて、子どもと接し、子どもを指導する教師の姿を見て学んでくれたと思います。こういう機会がどんどん増えるといいと思います。それからもう一つは、教育実習にかける大学の思い、上垣先生の事前・事後の授業があったことです。我々の30数年前の教育実習は何にもなく、ただ行って帰ってきて終わりというだけでした。だから今は本当に恵まれていると思いますので、そういう環境で現役の学生さんはますます力を発揮して、意欲を持って取り組んでいただけたらと思います。宜しくお願いします。

#### 宇都宮大学 教育学部 教授 松本 敏

発表を聞かせていただき、本当に三重大の学生さんは一生懸命やっという感じがして、感心して見させてもらいました。特に活動そのものだけではなく、活動が終わった後に丁寧な振り返りをし、今日のような発表の場でそれをもう一度振り返るといことが、成長につながるのではないかと思います。私からは質問のようなものが増えると思いますので、後で答えていただけたらと思います。

まず最初に、宇都宮大学としては、平成17～18年度の2年間、教員養成GPでお金をいただき、色々な事を進めた経緯があります。その2年間は予算も出て体制も整っており、各教室も協力してくれますが、こういうものがなくなってルーティンに落ち着きますと、やはり大学という大きい組織は、教員の温度差がはつきりしてきます。そこを三重大ではどのようにうまくやっというのかと思いました。例えば実習に大学が関わるということで、先程の例のように指導教員が学生と何回も教育実習の指導案検討をするということは、おそらく全員の先生が同じようにはできないと思います。そういうときに出てくる温度差は、誰がどうカバーするのかという問題が、現実には出てくるだろうと思います。

それから学生の方も、多分今どの大学もそうだと思いますが、(中略)空き時間が非常に少なく、まとまてないので、結局近くの歩いて行ける学校にしかボランティアに行けないという現状があります。そこで、一つは必修にしてうまく回っているのかということ。もちろん全員にこういう体験をさせるのは良いことですが、その時間をどうやって編み出しているのか、少し不思議な気がします。それから学校の方も、うちは附属小・中学校が少し遠く、行って帰ってくるのに半日かかるので、ボランティアも附属よりも隣接の小・中学校が多くなります。ボランティアではお互いのメリット・デメリットがあり、うまく行きますが、これが一歩進み、例えば院生の研究に協力してほしいとか、あるいは教育実習関係の実践科目絡みで連携をお願いするということになりますと、学校が負担を心配し始めます。そして、宇都宮市教育委員会とも連携協議会を持っており、たびたび「附属が少し遠いので、色々な意味でこちらとしてもメリットを還元するので、例えば研究協力校のような学校を、宇都宮市教委として近くに作ることはできないか」というお話を何回か持ちかけたことがあります。非常に難色を示されており進んでおりません。その理由は色々ありますが、まず附属でもない普通の学校にそういうことが要求できるのかということが一つ、もう一つは教育委員会としても他校との公平性を当然心配し、例えば学生がたくさん来るとか、院生が研究絡みで訪れるということが日常化する学校ということになれば、当然人事も絡んできます。そういうことを教育委員会としてもなかなかできないということで、今のところ進んでいません。そこで三重大はこの隣接学校園との連携ということで、教育委員会側から見たときに、あるいは、教育委員会と話を進めるときに、その辺のすり合わせというのはどうされているのかというのが質問です。

それから「学びの足跡」ですが、うちも1年生からポートフォリオを書かせることに動き出しているの

すが、すでに3年生も4年生も「足跡」というものを書いていらっしやるようなので、これはもう数年前から行われていたのか、それとも学年進行ではなく、一斉に書き始めてここまでできたのかということもお聞きしたいと思いました。以上です。

#### **愛媛大学 教育学部 教授 山崎 哲司**

私は学校現場に大学として送り出している立場から、送り出すときに色々考えていることを少しだけ紹介したいと思います。地域連携実習という、学校現場からこういう活動をという形で依頼される活動があり、PICというコンピューターシステムに登録している学生が毎年350~400、今年は450超という数になっております。学生を送り出すときに事前指導・ガイダンスで、服装とか態度について一番強く指導している状況ですが、それでもやはり先方に行ったときに、きちんと連絡ができてなかった、あるいは遅刻があったということがゼロではありません。すごく学生のことを思って受け入れてくれている先生方の色々な声を聞くのですが、「こんなことがあったんですよ」というふうにやんわりと返ってきたときには、私たちもすごく申し訳なく思います。ただ一方で、教員になる学生を送り出す立場から言うと、やはりできるだけそういう機会を利用してほしいという思いがあります。本当は、言わなくても大丈夫な学生たちがもっと参加するという形でいいのですが、そうでない、少し迷っている学生も後押しして送り出さなければいけないと思っています。教員になりたい、あるいは教員になろうかなと思っている学生たちを私たちは育てないといけないわけですから、やや迷っている学生も送りださざるをえない。そういう中で全員が服装・態度をきちんとできるとは限らない。行かせたいけれども、一部ご迷惑をかけることもあります。大学がもっと、例えばレポートが遅れたり、授業に遅刻してくる学生がいても大学があまりにも目をつむりすぎている、というところをなくさないといけないと思います。大学はある意味自由なところあることも重要だけれども、やはり日頃の生活の中で、きちんとしていかなければいけない部分というのをしっかりとし、その中で育てた学生を外に出していく。そこを迷いながらですが連携をうまくとり、そういう中で学生と一緒に育てるということを、大学も頑張っていていきたいと思っています。学校現場の先生方には色々ご迷惑をかけるときもあると思いますが、お互いの連携体制をどう作っていくかをできるだけこういう場も含めて考えさせてもらえればと思います。以上です。

#### **津市教育委員会 理事 田邊 正明**

先程の(宇都宮大学・松本教授)質問に答えたいと思います。来年教育実習の数が2つの中学校で多いのは、津市教育委員会が認めたことをごさいます、何事においてもやはりやってみなければという気持ちがこめられています。先程、教育の均等化ということが言われましたけれども、その問題は教育委員会としましても、そこに在職している教師等が一生その小・中学校から動かないということであれば別でございしますが、当然人事異動で、数年で動くわけでごさいます。長い目で見れば津市の教育のために、色々な形で絶対に均等化が図れますし、またその力が活かせるということで、短いスパンで見ると均等化がそのときには図れないかもしれませんが、大きな意味や効果は必ずあるというふうに、長いスパンで考えていこうと思っています。

大学との連携につきまして、メリット・デメリットについては色々話し合いはあったと思いますし、双方にメリットが大きいから行っていると考えています。ですから、デメリットについてどう少なくしていくかという課題については、それぞれがお互いに考えなくてはならない部分、直さなくてはならない部分というのはあるかもしれませんが、大学との連携というのは、本当にお互いにメリットが大きいから始めているも



のであり、大学も教育委員会も学校も、考えてみれば未来の子どもをつくっていくわけですので、その子どもたちのために良かれと思うことについては、積極的にしていくべきではないかという考えのもとで実施しているのをごさいます。

教育実習においては、「学生さんたちが…」というお話がありましたが、学生さんたちが卒業したとき、昔は新任の先生には、地域の人たちとか保護者の方とか、すごく優しい部分がありました。先生たちを育ててくれるような風土というのがありました。今はもう即戦力です。したがって、初めて勤めた学校で即戦力ですので、例えば能力的なこと、あるいは対応的なことでうまくいかない部分があった場合は、即、親・地域・学校から簡単に戦力外通告に近いようなことになってしまうほどの厳しい現実が突きつけられる現状です。もう少し長い目で見て育てあげようという気持ちはほとんどごさいません。ですから、大学の方も、教育現場とは一体どのようなところなのか、教育の現状というのはどうなのかということをお早いうちから知って、そして自分たちの中に落とし込むという必要があり、それでも教員をやろうと目指す学生たちには、それが教育の現場であるということをお早にわかっていただき目指してほしい。教育委員会でも説明をするとき、『二十四の瞳』の世界のような良い部分もありますが、今はそれよりも、もっともっと厳しい現実が来ていますので、力も授業技術も全ての面において、即戦力として卒業してください」と私どもはお願いしています。その意味においても、大学連携というのは、きちんとした力をつけ、現状を知った人たちが、三重県の教育の中に出ていく、私どもの仲間になっていただくためのものと思っております。それでもその方々の何割かが教育の現実にあきらめ、1年もかからずして辞めていかれます。これが現状です。そこから考えると、せつかく能力や希望や夢、あるいは力をお持ちの方が、そういう形で辞めていく場面に出遭うことは、本当に忍びない気持ちがあります。ですので、この大学連携を上手に利用され、力をつけていただき、力強く卒業されて、力強く教育の現場に来ていただけることをお願いしたいと思います。

### 三重大学 教育学部 教授 中西 正治

まず先生方に感謝を申し上げたいと思います。学生は確実に様々な場面で色々な事を感じ、学んでいます。将来教師を目指す学生にとって、十分な動機づけになっている取組です。私どもの数学教育コースだけでも、過去2年間のべ1035人以上が関わっており、これはすごいことだと思います。彼らが年間を通して意識をだんだん深めていったという現状があります。教育実地研究基礎のノートを見てみると、去年の何人かの学生は、最後のクラスで涙を流したと書いています。単に一時的に子どもと接するのではなく、前期・後期を通じ、子ども・担任の先生と人間関係ができ、最後に涙を流すといういわゆる教育の原点のようなところを感じてきたわけです。一方、3年生は数学科教育法で1年間、今年は一身田中学校に15名と橋北中学校に13名、行かせていただいています。驚かされることに、教育実習が終わった後の彼らのバックシートや教育実地研究ノートには、生徒の分からない内容と、それに対する自分の働きかけはもちろんのことですが、子どもがわからないことに対しての教師の発問・板書・質問の仕方等について、具体的な自分の考えをノートに書いてくるようになってきているということです。これには、連携活動を通じた学生の成長を感じざるを得ません、教育とは何か、教師とは何かなど、根本的な責任と義務の課題を自分に投げかけ、それを真剣に自分の意識としていくことが、私が学生たちに望んでいることです。今後も連携を通じて学生たちの成長を見守りながら、関わりたいと思っております。以上です。

### 三重大学 教育学部長 上垣 渉

この取組は平成18～20年度まで3年間、現代GPで総額約4千万弱、21～23年度までも合計約4千万いた  
だいて行っています。私は、この取組は教育学部の非常に重要な学生教育の部分の占めていると理解してお  
りまして、23年度までの3年間が終わった後、学部として独自の予算を組む必要があると、20年度も申し上  
げました。私は来年3月に定年退職しますが、次期体制には是非引き継いでいただいて、たとえ文科省の方  
からの支援がないという状況の中でも、できるかぎり教育学部の財政的な支援を続けていきたいと私自身は  
思っておりますし、多分引き継いでいただけるものと思っております。

### 三重大学 教育学部 教授 根津 知佳子

カリキュラム改革特別委員長の根津と申します。学生の空き時間が少ない中で現場に行くのは難しいとい  
うご指摘は、本当にその通りです。現在のところ改善を進めていますが、ある意味で矛盾点も出てきてい  
るところです。実際には、1年生は一週間に25コマのうち、20コマ以上の授業を入れていきます。2年生にな  
ると15～20コマ、3年生になると10～15コマ、4年生になると5コマくらいになり、空き時間が増えていき  
ます。ですので、現場に出てじっくり実地研究を行うのは、むしろ高学年になってからの方がいいのではと  
いうこともあるのですが、実は数年前、実地研究基礎というものを必修化して導入するときに、きっかけに  
なったことは、教育実習に突然行き、子どもたちの前で緊張して話せなくなり、失敗体験をしたというこ  
とで、教職に就きたくないという学生や、「自分は人と付き合うのが苦手」と、教える以前の問題としてコミュ  
ニケーションが苦手な学生がいることです。そういう学生が現場に突然行き、得意な教科であったのにでき  
なかったという声がありました。事前に教育現場や子どもたちの様子を知ることで、より良い状態で教育実  
習をすることになり、現場の先生方にもご迷惑をかけないのではないかという発想も一つあったかと思いま  
す。しかしこれが実現するためには数年かかっており、実際には今の3年生から必修となっておりますが、そ  
れによって、単位を前期取ってしまえば、もう現場は行かなくていいというような学生も出てきております。  
逆に、単位を取ってもずっと後輩の指導にあたっている学生もたくさんいますので、教育学部の中には、学  
年を越えて伝え合っていくような文化もできつつあります。現場というものをその場しのぎで考えてしま  
うようなところは学修サポート室等で指導しており、これから改善しなければいけないことだと思います。

教育実地研究基礎の導入は、教職教科に関する先生だけではなく、教科専門の先生方にも参加していただ  
くことになっていきますので、授業の合間に先生方や学生が行き帰りするには、やはり近いところが必要であ  
り、この取組の意義がそこにあるかと思えます。「足跡」については今年度から各学年に一斉に行っておりま  
すが、学年によって使い方は違います。始めたのは昨年度で、今の「足跡」の試行を行いました。教育学部  
の中では、各先生方がそれぞれの振り返りシートや、webを使ったり、手書きだったりしますが、先生方の  
長年のやり方を参考にさせていただいて今の形があります。できるだけ多くの先生に学生の成長、あるいは  
現場の子どもたち、児童・生徒の成長を感じてもらうために、今は手回しをしているという状態です。

### 宇都宮大学 教育学部 教授 松本 敏

ありがとうございました。先程の学部長先生のリーダーシップや、メリット・デメリットについて大勢の  
先生方が話し合った様子が聞けてとても良かったです。ありがとうございました。そこが一番大事だと思  
います。みんなそれぞれの大学が同じ問題を抱えています。リーダーシップ、それからなるべく多くの先生  
方が話し合っていることは、多分うまくいっている大学とそうでない大学のかなり重要な境目だと私は思  
っております。それがお聞きできて大変うれしく思います。ありがとうございました。

## 閉会の挨拶

三重大学 教育学部長 上垣 渉

皆様、長時間の教育フォーラムへのご参加ありがとうございました。事務局から聞きますと、参加者は大学関係者が約 50 名、連携校からは 75 名、学生が 254 名、合計約 380 名、400 名弱のご参加でございました。

今年は昨年以上に充実したフォーラムだったように思います。とりわけ宇都宮大学と愛媛大学からの活動報告をいただいたことによりまして、本日のフォーラムが一層充実したものになったと思っております。色々な報告がございましたが、例えば学生側から、宇都宮・愛媛・三重、いずれにも共通した事柄だったと思いますが、実践とか体験活動というものを理論化することに課題があるということが問題となっております。そうした問題意識を持つこと自体も非常に重要なことだと思えます。しかも実践というのは、個別的な事象でございます。体験活動というのはそれぞれ違う体験をするわけで、それぞれが個別的な事象というふうに考えなければなりません。いわゆる自然現象ではなくて社会的な事象です。そういうものを扱う取組というのは、非常に難しい面があると思えます。その意味でそういった問題意識を持つこと自体が、まず第一歩として重要だと思えます。その個別的な事象というのは、様々な要因に影響を受けているわけです。例えば自然科学ですと、こういう条件、こういうデータでいけば、こういう結果が出るという、いわゆる自然科学的な法則がございますが、社会現象につきましては、そういう法則はないと思えます。しかしながら、色々な体験や実践をしながらも、その中に共通した法則、もちろん蓋然的な法則だと思えますが、こうすれば大体がこうなっていくものだといった法則的な認識というものを、どのように学生さん自身、あるいは我々教員自身がとらえていくか、これは永遠の課題と言えらると思えますが、それぞれの置かれた状況の中で、それを考える必要があると私は思います。そういう観点から今後も取組を進めていきたいと思えます。

第Ⅱ部では連携活動報告がございました。ここでは学生のみなさんが、隣接学校園での学び、それを通じた学校と子どもの理解、教材研究の重要性、教材を深めることの意義等の重要性を感じてくれているということを痛感し、大変うれしく思っております。また、隣接学校園の先生方におかれましては、大変熱心に学生をご指導いただいておりますことを、改めまして心より御礼を申し上げたいと思えます。学校での教育活動というのは非常に多様でございます。しかし、それらは全体として一つの構造を持っていると私は思います。したがって、実地研究等で活動しましても、その活動が学校教育活動全体の中でどのように位置づいているのかということ、学生自身も考えていただきたいと思えます。

最後の総合討論では、大学と連携学校園、それを取りまく諸般の状況が色々出されました。例えば、大学の中での実地研究の位置づけ、あるいは学生指導のあり方、それから学校園側から見ると、受け入れる体制、先生方の気持ち等のあり方の問題、あるいはそれを取りまく教育委員会としての配慮、この問題に対する方針等、様々なことが複雑に絡み合っているということが理解されたと思えます。私たちの三重大学と隣接学校園の取組は、そうした色々絡み合った複雑な状況ではありますが、相互が努力してバランスをうまく保っているため、現在の形ができていると私は理解しております。このバランスのどこかが崩れるとガタガタと崩れる可能性もある、その微妙な緊張感の上でこの連携活動が成り立っていると理解していただきたい。そして、今後もそうした緊張感をお互いに持ち、バランスを崩さないように相互の努力を払いながら、この問題を追究していただきたいと思います。今後ともこのバランスを保ちつつ、連携が着実に進みますことを祈念いたしまして、閉会の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。



<b>参加者</b>	<b>401名</b>
学生	254名
連携校・教育委員会	75名
教育学部教員	56名
その他	16名

<b>アンケート回答数</b>	<b>78名</b>
学生	56名
連携校	11名
大学関係者	4名
その他（匿名）	7名

### フォーラムに関するアンケート

	回答者	1. このシンポジウムで一番印象に残ったことは何ですか。	2. 学生の発表や内容で一番感じたことは何ですか。	3. 連携校の発表を聞いて一番お考えになったことは何ですか。	4. 今後の連携活動に対するご意見・ご要望をお聞かせください。
1	連携関係者 (幼稚園)	II部で学生さんの生の声、ありのままの気持ちを聞いたこと。	初めは不安が大きい学生さんが、さまざまな実施研究や実習を通して、大きく、成長していく姿。	互いのメリットのみを考え、緊張感の中で継続すること。	まずは継続することに意義がある。
2	連携関係者 (小学校)	三重大学の自然についての話(河崎)	教育に対する熱意(愛媛)	自分はいつも見られているということ。	今後も続けていくべきだと思う。
3	連携関係者 (小学校)	三重大学以外に、地域連携に取り組んでいる他大学の様子がわかったこと。	教員になるという意志が強く感じられた。	学校現場も、児童生徒も、大学も、「共に元気になる」ということに、この取り組みが繋がっていきと考えることができる。	以前よりも、大学へ打ち合わせや指導を受けるために足を運ぶ機会が多くなった。大学が広い意味で教育現場の要望や思いに可能な限りこたえていこうとする姿勢がすばらしい。
4	連携関係者 (小学校)	学生さんたちが教育実習を成功することができるように、大学の先生たちがサポートしていること。	どの学生も情報機器(パワーポイント)を使って、堂々と発表していること。学生さんたちが教育に対して真剣にまっすぐに向き合っていること。		今後も引き続きよろしく願います。
5	連携関係者 (小学校)	学生さんの意欲的で熱心な姿。	実習前から訪問、指導案検討をし、反省もしっかりとできていて、積極的に意欲的に取り組んでいたことがわかった。	学生さんの若い力を生かして、有意義な活動がいろいろできると感じた。	実習や教育実地研究、それ以外にも連携するのは意義があるが負担もある。意欲ある学生さんに来てもらおうと負担があっても子どもたちのためによかったと思える。連携できる場をもっと考えていきたい。
6	連携関係者 (小学校)		これだけしっかりやっていたいので、新採で来てもらった方はとても授業が上手です。(感想ですが)	連携できると、助かることがたくさんあるが、学生さん達と時間をかけて話をつめることができないのがもったいないですが、でも、若い力には本当に助けてもらえてありがたいです。	
7	連携関係者 (小学校)	このフォーラムのねらいは、何ですか。現場の教員に他校の取組や学生の様子を知らせ、密にしてい、ということでしょうか。	学生さんの実習体験報告は、すごくよかったと思います。毎日教壇に立っていると、初心を忘れます。今日は10年前の自分を思い出し、よい刺激になりました。	確かに、現場はいっぱい、いっぱい。教材研究以外にする、こなさなくてはならない作業がたくさんあります。そんな中で、実習生を受け入れ、共にやっっていこうとする姿勢、熱意をこちらが持ち続けられるか、自分への不安があります。いつのまにか忙しさに忙殺されないか、、、	教育実習前に学生に考えさせる(何を学びたいのか)ことはいいなあと思います。学生のモチベーションをアップさせる取組をしてみえる大学の先生方に拍手です。連携校赴任1年目なので、これから勉強していきたいと思います。
8	連携関係者 (中学校)	学生さんの発表 連携校の実践	プレゼンテーションがとても上手だった。	連携校の現状も考えなくてはいけない。	
9	連携関係者 (中学校)	他大学の論点や考察がよかった。	学生の教育への強い意気込みを感じた。	なし	
10	連携関係者 (中学校)	学生たちの取り組みの発表 講師の方のお話	学生たちなりに教育の現場を学ぼうと努力しているなあと思いました。		
11	連携関係者 (中学校)		意欲的に活動している様子がわかった。	受け入れ時の問題点	連携のメリット・デメリットの中で、できる限りデメリットを取り除く活動をしていければと思います。
12	1年生	どの大学も発表が素晴らしかった。	あと1年、2年したら現場に出られる方達の発表だったので、どのような発表をされるかなと興味を持ち、素晴らしいと感じた。	話し方がしっかりしていて内容がわかりやすかった。生徒に興味を持たせることの難しさについて考えさせられた。	教育学部の1年生は、何かの授業で必修すべきである。
13	1年生	隣接校と、それ以外の市内の学校との間で教育格差が出るのではないかと。	教育実習に際して、どれだけ準備していても、思わぬ事態が発生するのだなと感じた。	学校側もメリットが大きくないと、あまり協力できないのかなと思った。	もっと幅を広げて、隣接校だけでなく、津市内全体、更には、県内との連携を深めていくべきだと思う。

14	1年生	教育実習報告	教育の難しさ		
15	1年生	教育実習は学生のみならず連携校のためにもなる。	座学と現場との差が大きい。	過去の記録をきちんと残してほしい。	
16	1年生	3、4年生の教育実習の報告	自分自身が実際に教える、指導する立場になるまでに、備えておくべき技術、話術などを考えさせられました。	連携校の先生方は忙しい中でも大学生を受け入れて下さり、ありがたいことだと改めて考えた。	
17	1年生	宇都宮大学・愛媛大学の方々の話も大変新鮮でしたが、やはり3年生の先輩方の教育実習の話が今、最も身近な話題であったので、印象的でした。	教育実習に行くために、大変準備がいり、またそのためには自分のやりたいことを具体的に考える必要があるのだなあ、ということ。	やはり教育実習を受け入れる学校側は、実習を負担と感ずることがわかったので、せめて自分にできる精一杯のことをしていかなければいけないということ。	三重大学が行っている学生ボランティアについて、もっと幅広く募集してほしい。
18	1年生	学生による教育実習の報告	1年生の早いうちから、もっと専門知識を学んで、そのことについて自分で考えるということをしていきたいと思えます。	学校側の教育実習生への要望を聞いて、いい機会になりました。一人の先生としていくわけであるから、一つ一つの行動に責任をもちたいと思いました。	
19	1年生	他大学の生徒の発表	他大学の人の方がしっかりしていた。	教育実習に全力を注ぎたいと思った。	
20	1年生	先生方、先輩方がとても大きく見えて、自分がとても小さく、幼いもののように思えた。	きびしさ、心がまえ、熱意の大切さ。	自分がいかに教員から遠いかということ。	授業やアフターケアを“特活”のようなものにするのではなく、私たちがどのように考え、行動していけばよいかアドバイスするようにしてほしい。
21	1年生	教育の大切さ	課題を見つけ理想の教師に近づくこと。	受け入れてくれることに対しての感謝と責任を持って行動しなければならぬこと。	今後も続いていてもらえるとありがたい。
22	1年生	II部の初めのVTR	熱意がすごかった。	いろいろな学校へ行けるのは良かったと思う。	
23	1年生	他大学の学生による発表	子ども一人のひとと考えるということ。		大変ためになったので、他の大学の話も聞きたいと思った。
24	1年生	実習の例	教員の大変さ	他校の教育	ボランティアに参加したい。
25	1年生	他大学の同じ学生の発表が一番印象に残りました。高い完成度から大きな驚きがありました。	自分との差を強く感じました。数年後、同じようなことを自分が出来るか不安になりました。	実践を行う場として学生と生徒(子ども達)の成果を客観的な視点から述べられていて、ふりかえりにとても効果のあるものと思いました。	
26	1年生	教育システム	不安が大きいことがとても伝わってきた。	授業の構成と教育実習の前後の大変さ	もっと連携活動で他の学校に行く機会がほしい。
27	1年生	現場の人の話を直接聞いてよかった。	教育実習することで次につながるということ。	実習生は成長するということ。	自分も参加して、いろんな経験をしたい。
28	1年生	動機付けの内発性、外発性。自己関連性の高い活動の考察。	自分もボランティア活動において子ども達とキャンプに行ったりしているので、身近な話だと思いつつ聞いた。「約束の大切さ」は自分も考えていきたい。実践の重要性を感じた。	三重大学の教育教員養成に対するとらえ方や実践力の先進度に驚くとともに、素晴らしいものだと感じた。観察実習は少し欲しいなと感じた。	「理論と実践の往還」についてもっと伺いたい。
29	1年生	他大学生の発表	自主的な活動から自分で課題を見つけている		
30	1年生	交流会	三重大学は学校外授業に励んでいる。		
31	1年生	他大学の先輩が実際に行っていることを聞いて、自分も、もっとがんばらなければと思うことができた。	サタデースクールみたいなものを三重大学にも取り入れて欲しい。		実習をもっと増やして欲しい。
32	1年生	他大学の教育カリキュラム	発表がとても聞きやすかった。話し方が上手いと思った。		母校実習ができるようにしたい。連携活動を増やしたい。
33	1年生	他の大学の活動	自分もボランティアをやってみたいと思った。	学生で授業が出来るというのは良いと思った。	情報をもっと公開して欲しい。
34	1年生	宇都宮・愛媛大学の話。	主体的学習を多く行っている。	様々な取り組みを行っている。	連携活動は積極的に進めていくべき。

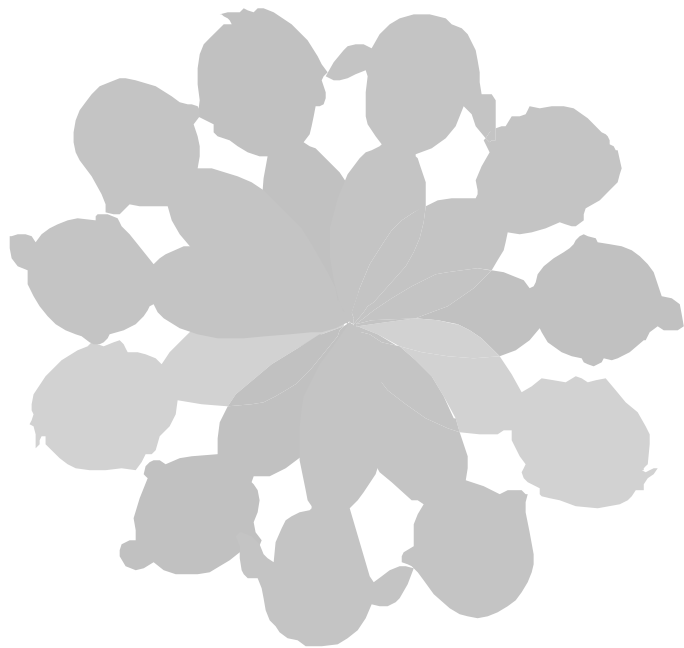
35	1年生	同じ年代の学生が主体となって、子どもたちとのふれあい活動を行っていること。	「知らないところでみんな頑張っているな…。」「私ももっと積極的になろう!」と思った。		機会があれば、ではなく、自分で機会を作って参加したいと思った。
36	1年生	愛媛大の学生さん	片桐さんの学習支援の内容が素晴らしいかったです。		自分はまだ、より実践的なものがまだなので楽しみです。
37	2年生	より現場で実践できるような取り組みをしていると感じた。	理論と実践の往還をするということが一番大事なのではないかと感じた。新たな教材を取り入れていくことも大切だと感じた。	単元ごとで、自分がどんな授業をしたいのかを考えさせられた。	
38	2年生	各大学の取り組み	教えるということに対する責任	教育の難しさ	
39	2年生	他大学・他コースにおいてどのような実践を行っているのかというのを聞いたことが印象に残りました。	特に先輩方の報告で感じたことですが、指導案作りの難しさや学生のニーズと教師の想いのかねあいなどがとても難しく感じました。	教育実習において学生は迷惑をかけるだけだと思いました。ただ迷惑をかけるだけでなく、教師にいろいろと影響を与えているということを聞いて、自分の考えを教育にいかせるようにしていければと思いました。	実際の現場に行くことは学生側として本当にありがたい、いい経験なので、今後も続けてほしいです。
40	2年生	他大学の研究活動や課題を聞いたこと。	発表の仕方がとてもしっかりしていて、意見が分かりやすく伝わってきたので、そのスキルを自分も身に付けたいと思いました。	学校(大学)との連携することの意義について	活動の場をもう少し増やしていただけたらなと思いました。
41	2年生	三重大学以外の大学での活動内容が、どれも興味のわく内容で、印象深かった。	大学と現場との連携が大切ではあるが、単につながついているだけでなく、具体的に授業方法などに踏み込んだ関係性が大切だと感じた。		授業に参加するだけの連携でなく、その授業の準備や教材等も学生と現場との互換性が必要だと感じた。
42	2年生	経験を積み上げて実践が大切だと感じた。	動機づけにおいて内発的に行わせるためには、教員がどのような教材を用いて授業を行うかによると感じた。		
43	2年生	学生発表	発表の仕方が上手	各学校の挑戦に関心した。	
44	2年生	ボランティアに積極的に関わることの重要性	はきはきとした話し方や、発表のまとめ方がすごいと思った。	自分も目標などを持って活動したいと思った。	
45	2年生	積極的にボランティアを行うことの重要性	目的をもって行っていること。受け身ではない。		
46	2年生	宇都宮大学・愛媛大学の学生の方々の実践報告	実践をして子どもたちの様子を知っていくことがよりよい教育のためには必要である。		
47	2年生	愛媛大学生の「Skypeによる遠隔学習支援」について	他大学の連携活動における積極的な姿勢	連携活動の重要性	
48	2年生	他大学の連携活動報告	実践を行った後の振り返りがいかに大切であるかということ		
49	3年生	保体科のラートの発表。とても新鮮でした。	「教師は役者である」まさにその通りだと思いました。演じないといけない。	自分は附属だったので、連携校のことが聞けて興味深かったです。大変そうだなと思いました。	連携してほしいと思います。投げっぱなしでなく。
50	3年生	連携校との活動が活発にされていること。そんなにあるとは知らなかった。	現場に行くことで、大学では学べないことを学ぶことができる。	学校の先生方は忙しくて時間があまりないこと、連携の調整に時間がかかる問題。	学生に連携を周知させてほしい。
51	3年生	連携校からの報告	連携校の現場に入ることで考えたことが、教師としての一歩につながる。	学生が携わることでの児童・生徒の意欲の変化	連携活動の機会を増やす。
52	3年生	学生たちの実習の報告について	教育実習で学んだことが今、自分につながっているのか考えた。		
53	3年生	連携校からの報告	実習に行って終わりではなく、今回の発表のようにきちんと成果や課題をまとめることの大切さ。	「仕事が増える」という負担を背負って実習生をうけ入れ、その中で先生たち何かを学んでいること。	

54	3年生	連携校でのメリット、デメリットがよくわかった。	現場での実習がとても有意義だったというのがすごく伝わってきた。	雑務が多い中、学生が行くことになって、何か先生方の力になれるんだということがよくわかった。	
55	3年生	連携校における教育実習 — 学生からの報告—	連携していることによって教育実習前に生徒の様子が把握することが出来る。		この連携活動が教育学部全体で行うことが出来れば良い。(一部は活動しているけど…という状況だと思う。)
56	3年生	学生による連携校での教育実習の報告	現場で学ぶことは多く、附属とはちがうメリット・デメリットがある。	実習生の増加による負担が多くなることに対する不満が多いのではないかな。	実習前・後の連携校での教育ボランティア等が必要。
57	3年生	連携校で実習をした学生の生の声を広く報告することで、同じ立場として、整理することができた。	わたしたちは、本当にみんなでのりきったんだ、得たものは多かったということ。	自分たちだけでは気づかなかつた点に気づき、もっと努力するべきだということ。	よりよい実習にするために、連携校と大学がもっと綿密にかかわっていくべき。
58	3年生	小・中学校、大学、教育委員会が連携するということがものすごく大変そうだなあと感じました。	やはり、現場にたくさん足を運ぶことが大事だと思ひ、その点、教員の教育実地はすごいと思ひました。		
59	3年生		主体的に実習を行ったことがわかった。		
60	4年以上	交流会でお話ししたこと。	連携することで学生にとっても現場の学校にとってもメリットがあるのでいいなと思ひました。	地域連携をもっと広めるために学生にたくさんのボランティアの機会をふやしてほしい。	
61	4年以上	連携活動の多さ、自分が知る以外のものも多くあり受け身な自分に気がついた。	現場に触れることは発見が多くあり、思っみていなかったことが得られている場合が多いと感じた。連携から実際の現場と関わることは実践力をつけられていると感じた。	お互いにメリットがあり、大変な部分やデメリットもあるが、より発展できるとよいと思ひます。	
62	4年以上	交流会でお話ししたこと。	現場に何度も行ったり、授業の提案をしたり、自分でできることを実践してとても刺激を受けました。	近隣の幼・小・中と大学が連携することで、幼・小・中にとっても学生(大学側)にとっても深くで実践的な学びがあると思ひました。	
63	4年以上	他大学の実践活動に関する話をきくことができたこと。連携校の教員の活動に対する話をきくことができたこと。	何を思っ活動するのか、また、その活動から何を得て今後どう生かしていくかがとても大切だと感じた。	学生はただ負担をふやしているだけではなく、ちゃんと役に立っていたことが分かり、うれしく思ひました。	学生は現場の教員よりも時間があるし、子どもともしっかり関わりたいと思ひているので、現場の方はどんどん学生をつかってほしい。
64	4年以上			色々考えをねった取組は、子どもたちにも魅力的。	
65	4年以上	自分が参加した活動を言語化、ポスター掲示することで、より学びが深まった。	さまざまな専門性を生かして地域に貢献している様子がよくわかった。		
66	4年以上				連携によってお互い多くのメリットがあるように感じる。
67	4年以上	連携をとることで実際の子どもの姿を感じていること。教師としての視点がまだ自身に足りていないこと。	子ども達へのアプローチのしかたには、様々あること。	子ども達の興味のもち方、どうもたせるか。	ぜひこのような活動報告の機会を増やしてほしい。
68	大学教職員	たくさんの連携活動が行われていることが実感された。	宇都宮大学と愛媛大学の大学生の発表はたいへんしっかりしていた。三重大学の学生も多くのことを学んでいるが、それがまだ十分には表現されていなかったように思ひます。	それぞれの連携校の表現された報告であった。現場の各先生方の声を大切にすため、アンケートをとってみたいだろうか。	もっと多くの大学の教員が参加してもよいのではないかな。また他方で、算数・幼児・音楽・理科など小数の先生に負担が多くなっているため、多くの先生が担うようになるとよいと思ひました。
69	大学教職員	学生さんの熱心さと大学のフォローの手厚さ		多忙な中でこの活動の意義を理解されていることに感銘。	
70	大学教職員	3大学の学生発表	自ら進んで参加する大切さ。	学生が自分で参加したいと思ひえるようにすること。連携校の子どもたちに継続的な効果が残っているのかどうか。	



71	大学教職員	愛媛、宇都宮大の学生さんの発表が、上手だったこと。主旨に合った内容で、有意義に感じられた。	上手に発表していて、自身が感じられたこと。良い経験をしたんだなーと感じました。	これからの実践活動として、何をやっていくべきか、考える機会になった。	このスタンスをさらに広げて続けていきたいです。教員養成校としての取組の1つのモデルになると思います。
72	匿名	他大学の連携活動の取り組みを知ることができた。	活動を振り返って理論づけるなど、質の高さを感じた。	さまざまな教科で連携することができ、それによって学生だけでなく子どもたちや先生方にも大きなメリットがあると思った。	
73	匿名	初めて参加しました。大学も閉ざされているのではなく開かれた大学になっているんだと思いました。		受け入れる実習生が多い学校も大変です。なんとか分けていただく方法を考えて下さい。	
74	匿名	会場がうまるぐらいけくさんの学校、園に広まることを期待する。	将来に向けて、とても意義のある取り組みとなっている。	いろいろな連携があつていいのだと感じた。それぞれのできることで。	全国的に広まり、力ある学生が現場に入れる仕組みをつくるべき。
75	匿名	各大学の実践報告	体育科の学生の発表	教育実習のあり方について	両者にとってwin-winである活動をしていきたい。
76	匿名	他大学から来てくださった教員や学生の発表で、特に学生の方がしっかりしていて、内容もまとまっており、すばらしい発表でした。	他大学のしゃべりは上手だったが、三重大の人は下手だった。	将来自分がやるとなると、不安になる。	
77	匿名	学生の発表が上手かったこと。	愛媛大の方の最後、長期・短期目標をたてていて役だった。		
78	匿名	学生が、とても意欲的である点。	自分なりの課題を持って活動に参加し、活動の振り返りが重要であること。		

## VI 資料





## 平成22年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書

本調書は、平成22年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）の交付（内定）を行うにあたり参考とするために提出していただくものであり、プログラムの申請書等における記載事項との整合性にも留意して記入して下さい。

1. 大学等名／設置者名	三重大学 / 国立大学法人三重大学
2. プログラム名	大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
3. 取組名称	隣接学校園との連携を核とした教育モデル
4. 選定年度	平成21年度
5. 事業推進代表者／ 事業推進責任者	事業推進代表者 学 長 内田 淳正 事業推進責任者 教育学部・教授 後藤 太一郎
6. 事務担当者	主担当 学務部教務チーム係長 柘植 智司 TEL 059-231-9056 FAX 059-231-9058 E-mail kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp
※ 内容等の問い合わせに 適切に対応できる事務 担当の方で、主担当、 副担当を必ず2名記載 して下さい。	副担当 学務部教務チーム副課長 小田 裕久 TEL 059-231-9054 FAX 059-231-9058 E-mail kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp
7. 選定取組の概要（400字以内）	<p>教育学部では、実践的指導力を涵養する場として三重大学と隣接する一身田中学校区の学校園との連携を進めてきた。本取組は、この実績を基盤として、隣接するもう一つの学校区である橋北中学校区の学校園を含め連携を拡大し、2つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力体制を深化させ、実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築しようとするものである。このプログラムでは、多様な教育課題への支援に参与しながら、教員としての資質形成に結びつく体系的で幅広い学びを保証することによって、質の高い教員を養成することを目的としている。具体的には、学生が隣接学校現場の多様な活動に参加し、その体験と大学での省察との往還を通して、教育現場の課題を発見・解決する力量を形成し、実践的指導力を育成させるものである。</p>
8. 補助事業の目的・必要性（学生教育の観点から記入するようにして下さい。）	<p>(1) 全体</p> <p>本補助事業の全体の目的は、教員養成における総合的な実践的指導力を育成するための実地研究の改善を図るものである。特に、本学部の教育目的である「教育に関する学識と専門的素養を身につけるための幅広いカリキュラムを通じ、深い専門性と豊かな人間性を備えた教員養成」に資するため、全学齢期の発達理解と教科の専門性を視野に入れた「小・中二校種の免許取得」という卒業要件のさらなる質的充実を展望している。</p> <p>本学部では、初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた実地研究基礎に参加し、徐々に授業や様々な学年・学校行事の補助、そして授業実践へと実践への参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な教育課程となっているが、教育実践力としての「教職実践演習」の授業内容および方法の整備、大学と協力の綿密な指導体制に基づいた「教育実習」の実施、および多様な教育問題に対応できる力量を育成することが急務となっている。本学部が教育現場と一層強固な連携を築き、協働することにより、これらの現実的・現代的な課題を解決することが可能である。</p> <p>継続的な実地研究の実施や学修時間の確保、また安全面の確保を考慮すると、教育現場に行くためには、大学の近くに協力連携校があることが欠かせない。本取組みの連携先となる各学校園までの距離は、大学から5kmほど（自転車で20分）の範囲にあることから、大学教員や現場の教職員にとっても移動が容易であるため、設定している教育実践関連科目の実施を円滑に行うことができる。つまり、本取組の最大の特徴は、教科教育・教科専門・教職担当のすべての教員が関わることができる理想的なフィールドで教育モデルを構築することである。これらの取組についての評価体制として、学生によるポスターセッションや教員と学生が語る会など対話型のFD活動を通して双方向の対話による評価の同時性を重視しつつ質的向上を図る。</p>

(2) 本年度

本補助事業の本年度の目的は、上記の目的を達成するために隣接校区の学校園との各種連携活動の量的拡大・質的深化を図り、それを基盤として連携校での教育実習実施のシステムを構築することである。このために、まず、初年度に引き続き、学生が連携学校園で活動する時間を増加させる体制を整備し、大学での省察を充実させるために地域連携室の支援体制を整え、チューター（スクールサポーター）を配置する。大学教員による新しい教具・教材を導入した授業づくりの提案・指導をさらに推進し、他領域の教員・学生による協働を図る。これらによって、学生に質の高い授業や実践を提供できるだけではなく、学生だけではなく、連携学校園の教員が協働することで、連携学校園にとって現代的な特色のある授業を内外に発信し、授業開発の意識を高める。これらの実践的な活動と連続性を保つことは、連携校での教育実習を行うための受け入れ側の態勢・整備に貢献できる。特に 24 年度から教育実習を附属学校と連携学校のみで実施するために、特に連携校のニーズを理解した上での連携活動に関わる学生支援を強化する。そのために、本事業のコーディネート・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務の他に、連携校での活動支援に関わるスクールサポーターを配置する。このことにより、連携先に依存していた実地研究の省察を大学が責任を持つことができることになる。連携校教員による連携活動を具体的に事例として取り上げる実地研究入門科目を開講し、学生が教育現場に関わるための指導の質的な向上を図る。また、活動のポートフォリオ作成の整備とともに定期的に省察のための活動報告会を開催し、実践の省察と実践的指導力に関する自己課題の意識化を教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。

9. 本年度の補助事業実施計画（選定された取組を実施するためのスケジュールを箇条書きで記入して下さい。なお、記入に当たっては、備品の購入等、経費の支出計画ではなく、学生教育に関する取組の計画を記入して下さい。）

本年度の補助事業の目的を達成するため、以下の取組を行う。

- ① 4～2 月 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験の実施
- ② 4～2 月 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施
- ③ 4～2 月 教員を対象とした教科力アップ研究会の開催
- ④ 4～2 月 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援
- ⑤ 4～2 月 大学を活用した連携学校園の活動の実施
- ⑥ 4～6 月 地域連携室の整備
- ⑦ 4～2 月 評価体制の整備
- ⑧ 8 月 22 年度の取組の中間報告会と、他大学の教員養成の学生との関する意見交流会の開催
- ⑨ 9 月 連携学校における教育実習の実施
- ⑩ 9～2 月 学会等における学生の活動成果発表
- ⑪ 4～2 月 地域連携を主とした他大学の教員養成における活動の調査
- ⑫ 7, 1 月 取組に対する自己評価および連携に関わった学生と教員の自己評価に関するアンケート調査の実施・検討
- ⑬ 2 月 22 年度の取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」の開催
- ⑭ 3 月 22 年度の取組報告書の作成

10. 補助事業の内容（選定された取組の内容を上記 9 の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記入して下さい。なお、記入にあたっては、学生教育として行う大学の取組について具体的に記載して下さい。）

本補助事業は、選定された大学教育推進プログラムにおける体系的な教育課題、幅広い学びの保証、および課題探求能力について、教員をめざす学生の実践的指導力を育成するための一層の充実・発展を目指す補助事業であり、内容は以下の通りである。

- ① 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験について、中学校における全ての教科、小学校における総合学習や生活科、および幼稚園における指導に学生が関わる。
- ② 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わる。
- ③ 教員を対象とした教科力アップ研究会を創設し、定期的に研究会を開催し、学生もこれに関わる。
- ④ 大学教員による学校園の公開授業・公開研究会への支援を大学教員が行い、そのプロセスに学生が参観する。
- ⑤ 大学を活用した学校園の活動の実施として、連携中学校の合唱コンクールの指導を学生が行い、大学の講堂で発表会を行う。また、大学を活用して連携学校園の児童生徒を対象に授業や各種活動を行う。
- ⑥ 地域連携室において学生の連携活動に関する資料作成や相談に適切に対応できるように設備・体制を整備する。
- ⑦ 量的手法（GPA など）と質的手法（ポートフォリオ）を融合した評価システムを確立し、学生の評価体制を整備する。
- ⑧ 22 年度の取組の中間報告会とともに、内外の大学における教育実地活動の事例報告を含めた教育実地フォーラムを開催し、学生同士の対話を通して、自己省察を図れるような場を創出する。
- ⑨ 連携校における教育実習の受け入れに関する連携校との共同研究・協働を通して、連携活動を基盤とした教育実習の実施を図る。
- ⑩ 連携活動による学生の学びについて、学部におけるポスターセッションをはじめとし、日本教育大学協会、各教科の研究会などにおいて学生が発表を行う。
- ⑪ 地域連携を軸としたカリキュラム編成をしている他大学の教員養成に関する取組を調査し（2 大学）、学生の教育現場体験活動を把握し、本取組の改善に反映させる。
- ⑫ 取組に対する自己評価について、連携に関わった学生と教員に対するアンケート調査により行う。教員には、ティーチングポートフォリオの開発を進め、学生にはパフォーマンスアセスメントを導入する。
- ⑬ 22 年度の取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」を開催し、本取組を公表して参加者および学内外からの意見を求める。
- ⑭ 22 年度の取組報告書を作成し、関係者に配布する他、HP 上にも掲載して取組を広く公開する。

これらを通じて、選定取組の更なる充実・発展させ、本学部の教育目的である、地域と密接な連携を取りながら専門的学識とともに様々な問題に対する解決能力をもつ人材養成機能の強化を図ることが、本補助事業の内容である。

11. 補助事業から得られる具体的な成果（学生に対する教育効果を中心に、選定された取組から得られる成果を上記 10 の補助事業の内容と対応させ、箇条書きで記入して下さい。）

上記の本年度の補助事業実施計画を実施することにより、本補助事業から得られる具体的な成果は、以下の通りである。

- ① 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験について、中学校における全ての教科、小学校における総合学習や生活科、および幼稚園における指導に学生が関わることにより、多様な教育活動と複数の校種の学校現場での活動を経験し、子どもの発達段階を教育現場で知ること、学生に幅広く高い教育意識をもつことのできる教員養成を行うことを目指す。
- ② 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わることで、PTA 活動の進め方と保護者理解の力を育成することを目指す。
- ③ 教員を対象とした教科力アップ研究会の設置し、現場教員が不得手とする内容について研修を進める。ここに学生が関わることで、学校現場で必要な教科力や課題解決の方法を知る機会とすることができる。
- ④ 学校園の公開授業・公開研究会への支援を大学教員が行い、そのプロセスに学生が参観する。大学教員が現職教員の授業づくりに支援を行うとともに、4年次の教育実地研究の受講生も参加することで、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とすることができる。
- ⑤ 大学を活用した学校園の活動を実施し、これに学生が関わることで、学校園における課外活動における教員の指導のあり方を学生が学ぶことができる。
- ⑥ 地域連携室を整備し、本事業のコーディネーター・ファシリテーターの役割を担う非常勤事務員、および、大学での省察を充実させるための学生サポーターとなる業務員（スクールサポーター）を配置することで、学生の活動履歴の保管と閲覧および学生支援の充実を図り、学生の本活動に対する学習環境を保証することができる。このことは、教職に関するアイデンティティを形成する場の質的保証となる。
- ⑦ 既存の GPA やポートフォリオなどに基づく学生の評価体制を整備することによって、学生自身の省察の質を保証し、教職への意欲を高めることができる。
- ⑧ 22 年度の取組の中間報告会とともに、他大学の教員養成の学生による教育実地活動の事例報告を含めた教育実地フォーラムを開催し、実践の省察と実践的指導力に関する自己課題の意識化を教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。
- ⑨ 連携校における教育実習の受け入れにより、連携活動を基盤とした教育実習の実施が可能となり、連携校のニーズにもあった実習を行うことができる。
- ⑩ 連携活動による学生の学びについて、学部におけるポスターセッションをはじめとして日本教育大学協会や各教科の研究会などにおいて学生が発表を行うことで、教育実地活動からの学びを学生自身から発信することができる。
- ⑪ 地域連携を主とした他大学の教員養成に関する取組を 2 大学において調査し、学生の教育現場体験活動状況を把握することで、本取組の改善につながる。
- ⑫ 取組に対する大学教員の自己評価や、連携に関わった学生と教員に対するアンケート調査や聞き取り調査の実施により、本取組の問題点を整理することで、大学教員の学生指導の実態について成果と問題点を検証し、取組の改善につなげることができる。
- ⑬ 22 年度の取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」を開催し、本取組を公表して参加者からの意見を求めることで、対話形式のプロジェクト型 FD が推進され、本取組の改善および質的向上につなげることができる。
- ⑭ 22 年度の取組報告書を作成することで、本補助事業の公表・普及につなげる。

## 12. 参考資料

23 年度の補助事業実施計画（事業を実施するにあたってのスケジュールについて、記入例 9. と同様に記載）を記入して下さい。

（23 年度）

- ① 4～2 月 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験の実施
- ② 4～2 月 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施
- ③ 4～2 月 教員を対象とした教科力アップ研究会の開催
- ④ 6～2 月 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援および協働
- ⑤ 4～2 月 大学を活用した連携学校園の活動の実施
- ⑥ 9～10 月 連携校における教育実習の実施
- ⑦ 9～2 月 日本教育大学協会、各教科の学会・研究会における学生の成果発表
- ⑧ 1 月 大学フォーラムにおける報告
- ⑨ 2 月 本取組に対する自己評価連携に関わった学生と教員の自己評価に関するアンケート調査
- ⑩ 2 月 本取組を総括する「フォーラム in 一身田&橋北」の開催
- ⑪ 3 月 本取組の報告書の作成

「地域」  
「大学」  
「広報」

NO.31

今、「大学」という「地域資源」を生かしたまちづくりが注目されています。一方、大学では、「地域貢献」を掲げ、地域に根ざした大学のあり方を模索する動きが高まっています。「地域」と「大学」による「官学連携」について、現場ルポ・シリーズで紹介しています。

# 地域の教育力を高めるために 多様な教育課題に対応できる教員養成をめざす

## ■三重大教育学部&津市教育委員会——隣接学校園との連携を核とした教育モデル

「地域社会の発展への貢献」を理念の一つに掲げる三重大。教育学部は、隣接の幼稚園・小学校・中学校と連携し、「教職志望の大学生の教育実践力強化」に取り組んでいる。全国的にも例を見ない地域連携教育プロジェクトであり、平成21年度には文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」に選定されている。大学にとつては、卒業後に即戦力を要求される学生が1年次から教育現場を体験できるメリットが、地域にとつては、大学の力を借りて地域の教育力を高めるメリットがある。この取り組みには、三重大に隣接する二つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）が参画している。学校現場への学生の受け入れだけでなく、児童生徒が大学の活動に参加する双方向の連携であることも注目される。

（取材：広報コンサルタント・萩原誠）

### 現代GPの成果を 踏まえて

三重大教育学部による地域連携の取り組みには、二つの基盤があ

る。一つは、平成16年に教育学部と津市教育委員会が結んだ連携・協力協定に基づく活動実績、もう一つは、「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」をテーマに文部科学省の

「現代GP」に選定された平成18年から3年間の活動実績である。この現代GPのプログラムには、三重大に隣接する一身田中学校区（一身田中学校、一身田小学校、白塚小学校、栗真小学校、白塚幼稚園）が参画した。ちなみに、現代GPとは、文部科学省が審査・選定し重点的に財政支援する大学教育の質向上のための教育改革の取り組み（Good Practice）の一つ。21年度からは「大学教育・学生支援推進事業」という新規事業が開始された。三重大教育学部の地域連携教育活動は継続して選定されている。

この大学教育・学生支援推進事業、

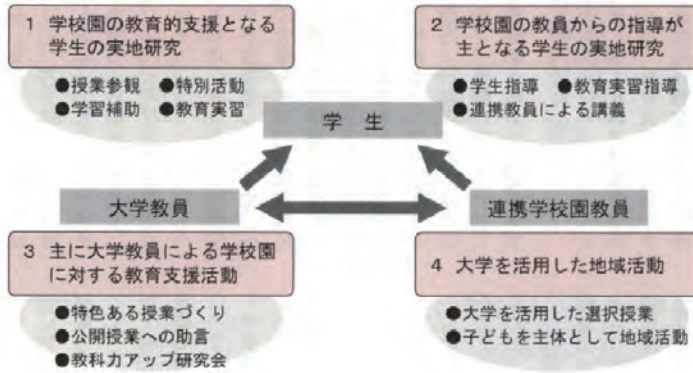


三重県津市にある三重大教育学部の校舎

大学教育推進プログラムの取り組み責任者である、教育学部の後藤太一

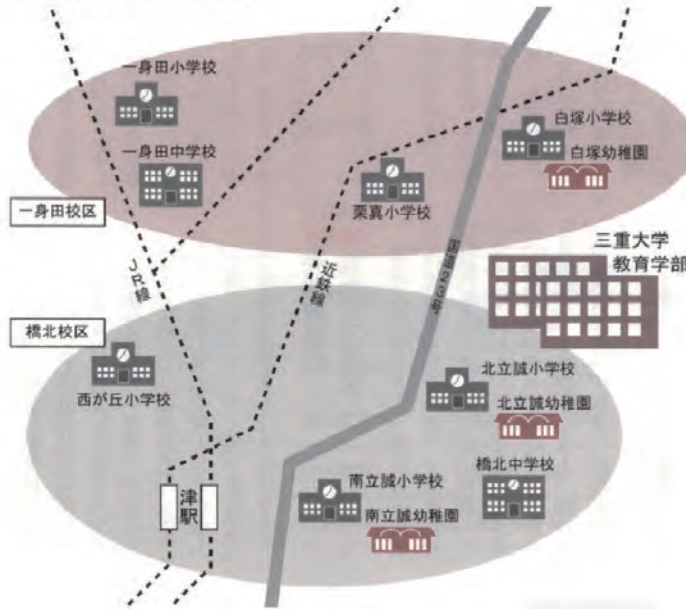
■ 三重大学教育学部「隣接学校園との連携を核とした教育モデル」概要

【具体的内容】

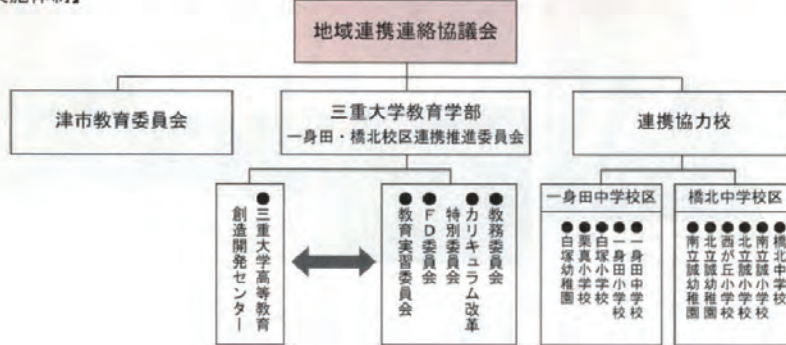


三重大学教育学部・後藤太一郎教授（左）と根津知佳子教授

【大学と隣接する連携中学校区】



【実施体制】



部長補佐の根津知佳子教授に聞いた。  
——まず、この取り組みの目的をお聞かせください。  
後藤「学校現場とのかかわりは、教員養成を担う教育学部にとって欠かせないものです。私たちが平成18年から始めたこの取り組みは、学生が

入学段階から卒業までの間に、多様な学校現場を参観し、実践的な活動を隣接校で企画・実践することができるという意味で、全国どのこの大学にもないものです」  
——この取り組みが実現した理由は何でしょうか？  
後藤「なんといっても、津市教育委員会の理解と協力があつたことで

す。また、学生を受け入れてくれる多くの連携校の教職員の理解と協力があつたからこそ実現しました。もちろん、教育学部の教職員や三重大学の他学部の教員の理解と協力が年々深まっていることも重要な要素です」  
——具体的にはどのような活動を？  
根津「大きく分けると四つに分けら



れます。一つは、学生が教育支援を行う実地研究、二つ目は、学校園からの指導が主となる学生の実地研究、三つ目が、大学教員による学校園に対する教育支援活動、四つ目が、大学を活用した地域活動です」——なぜ、これらの校区と連携されたのですか？

後藤「このプロジェクトには教育学部の教員が多数参加しています。通常の授業の合間をぬって学校現場に行くことも多いので、連携校が大学の近くにあることが条件になりました。昨年からは連携を始めた橋北中学校区の各中学校も、大学から5キロメートル圏内（自転車で約20分）にありますので、移動が容易です」

——運営体制はどのようなになっていますか？

根津「教育学部の中に設置されている「一身田・橋北校区連携推進委員会」を中心に、教育実習委員会やカリキュラム改革特別委員会と意見調整しています。さらに、津市教育委員会と連携協力校の担当者を加えた「地域連携連絡協議会」で、協議・決定された方針に沿って具体的な連携教育活動を実施します」

### 教育委員会のバックアップが鍵

三重大学教育学部のこの取り組みは、津市教育委員会の全面的なバックアップの下に推進されている。これは、平成16年に締結された両者の連携・協力協定に基づく。津市教育

委員会の田邊正明理事に聞いた。——どういった経緯で連携協定を結ばれたのですか？

「昔と違って、現在の教育現場は即戦力の人材を要求するような状況です。したがって、教育学部の学生が1年次から小学校や中学校の教育現場で経験を積むことが非常に有益なのです。また、津市の小・中学校の教員には三重大学教育学部の出身者が数多くいますので、現場の理解を得やすいことも、大きな理由かもしれません」

——どのような連携をされているのですか？

「教育学部の学生が小中学校に入る『学生アシスタント事業』、大学教授による子どもたちへの出前授業と学校教職員研修講師、指導主事、現場の教師と学生の学びの場である『つ教師塾』、三重大学図書館・津市図書館・学校図書館との連携、市立の幼稚園・小学校・中学校への教育実習の受け入れなどが主な内容です。

学生アシスタント事業では、現在、市内の77校のうち35校に派遣しています。大学教授による出前授業



津市教育委員会・田邊正明理事

は現在20校でしか実施されていないので、もっと増やしたいと考えています」

——津市教育委員会「津市教育振興ビジョン」の基本目標には、「国際社会に生きる自立した元気な人づくり」が掲げられています。

「そのために、三重大学や、津市、東京、京都に拠点を置くNPO法人と連携して、インターネットを活用した国際交流事業を行っています」

### 先輩教員の協力も不可欠

現代GPのスタート時から連携教育の実践現場となった一身田中学校の校門を入った広場には、校訓「さどく、やさしく、たくましく」が刻まれた石碑が建っている。一身田中学は現在、生徒数529人、教員31人、職員10人。中尾幸一郎校長に聞いた。

——まず、一身田中学の教育方針をお聞かせください。

「一つには、「地域に根ざした人づくりをめざし、郷土を愛する心を育てる」です。そのために、地域の方々に呼びかけて「サポーターいっちゅう」制度（一身田中学校支援地域本部）を設けています。地域の皆さんにサポーターとして登録していただき、学校や、子どもたちを支えていただくという活動です。事務局長は地域の方で、参加メンバー1000人を目標に、地域全体で生徒たちの教育に取り組んでいます」



中尾幸一郎・津市立一身田中学校長と、一身田中学校

——三重大学との連携の位置づけは？

「大学の持っている教育力や教育資源を活用して、教育方針の一つである『基礎的・基本的な学力の定着と向上』につなげたいと思っています」

——学生が頻繁に教育現場に来るわずらわしさはありませんか？

「当初はそういう声の一部にはあ

りましたが、年々理解が高まっています。学生を指導することで、教師としての自分を見直すこともできるのです」

「学生との交流で、子どもたちは変わりますか？」

「大学の先生や学生に中学校の現場に入ってもらった結果、学校の雰囲気が変わった面が大きいです。一般的なカリキュラムでは得られない諸活動によって、生徒たちに、緊張感と意欲を持って取り組む姿勢が涵養されます。それがクラスとしても、全校的にも一体感の醸成につながっています」

**学生が参加する**

**多彩な連携教育活動**

この大学教育・学生支援推進事業には、年間120以上の教育活動に学生が参加している。学生一人当たりになると5回以上、平均6・5時間、連携校に行っていることになる。

「これらの教育現場を1年次から体験することで、子どもたちがどんな存在か、子どもたちがどんな振る舞いをするのか、学校現場の先生たちがどのように子どもたちと接しているのかを学生たちは肌で感じます。その結果、自分が将来、教員になるためにどのような力をつけなければならぬのかを感じ取るのです。それが一番の成果です」と、後藤教授は語る。

数多い教育活動の中から、いくつ

**■ 平成21年度に実施された連携教育活動の一例**

講座	主な活動 ※(幼)は幼稚園、(小)は小学校、(中)は中学校
国語教育	教職員研修会(小)、世界を知ろうクラブ(小)、墨と筆で書いてみよう(幼)
数学教育	授業アシスタント(小、中)
理科教育	授業アシスタント(小、中)、教職員研修(小)、解剖・調理(中)、理科体験授業(小)、科学の祭典への出展(中)、大学キャンパスを活用した自然観察(幼、小)
音楽教育	コラボ音楽祭(中)、ウサギのうーちゃんのうたづくり(幼)、楽器演奏・支援(小)
保健体育	ラート運動実技研修会(中)、教育実践発表会(中)、養護教諭の研究活動に関する支援(小)、合同園内研修会(幼)、児童の喘息・アレルギー・身体活動量調査(小)
家政教育	さつまいもの蒸しパン作り(小)、豆腐作り(小)調理実習(小、中)
英語教育	英語活動(小)
幼児教育	畑作り(幼)、メダカ捕り(幼)、タンポポ会の企画運営(幼)
社会科教育	起業家教育(中)

かの事例についてうかがった。

「根津先生が担当される音楽教育ではどのようなことを？」

「コラボ音楽祭、合唱支援、合奏支援、授業研究、出前授業が主な内容ですが、もっとも印象的なものは、三重大学の三翠ホールで開催するコラボ音楽祭です」

「どのような内容ですか？」

「二身田中学校と橋北中学校の学年別の合唱コンクールにジョイントしています。21年度は10月16日と11月13日に、それぞれ開催しました。学年別の合唱コンクール、吹奏楽部の演奏、教育学部音楽科の演奏、その後合唱コンクールの審査結果を

発表します。このときの音楽祭のキャッチフレーズは、一身田中学校が「真一中魂、響け友情の旋律」、橋北中学校は「団結と絆を胸に限界突破」でした」

「すごく盛り上がりそうな内容ですね。」

「中学生にとって、大学の大ホールで演奏できる機会はめったにないものですから、非常に感激するようです」

「後藤先生の理科と家庭科のクロスカリキュラムはユニークです。」

「二ジマス」を題材にした、理科と家庭科のクロスカリキュラムです。私たちが独自に開発したもので、子どもたちが「命をいただく」貴重な体験活動として、年ごとに評価が高くなっています。生きた生物を解剖することで、ニジマスにも人間と同じように消化系、呼吸系、神経系があることを学びます。解剖で使ったニジマスは、その後ムニエルに調理します。それを生徒たちが食べることで、「命をいただいている」という食育の基本を学びます」

「そのほかで評価の高い活動は？」

「20年度から実施している、器械運動具ラートを導入した体育教育の取り組みが高く評価されています。中学校でのこのような実施は日本初のもので、学校教員の研修から始め、公開授業まで実施しています」

「ラート」とはドイツ発祥のスポーツで、2本の鉄の輪を平行につないで器具でさまざまな体操を行う競技

**【関連サイト】**

●三重大学教育学部

<http://www.edu.mie-u.ac.jp/>

●津市教育委員会

<http://www.info.city.tsu.mie.jp/modules/kyoikusomuka/>

●一身田中学校支援地域本部「サポーターいっちょう」制度

<http://heart.pro.tok2.com/sp-ijh/>

のことである。  
——どのような特色があるのですか？

「サートは、個人個人のスキルの上達以外に、生徒同士の助け合いや仲間づくりといった内面的な成長に大きな効果があります。特に、達成感を味わえること、グループ活動で高めあうことを実感できるので、生徒たちの関心も非常に高いです」

**すべては子どもたちのために……**

「教育は地域ぐるみで……」「子どもたちに将来の生きる力を……」。このプロジェクトのめざす方向である。全国的にも注目されているこの幼小中大連携教育活動モデルは、今年2年目に入って新たな課題も出てきた。例えば、

- 地域や対外的な広報活動を強化し、理解を広げる
- 教育現場の横の連携（ネットワーク）を充実させて、相乗効果を高める

後藤教授の話から、学校は子どもへの教育を、大学は学生の教育を念頭においた上で、教育を「互恵」の観点から止揚できる度量が双方に求められているという理念を感じた。

一方、地域社会がこのプロジェクトをどれだけ理解し主体的に参加・支援するかも大きな課題である。そ



年間120以上ある連携教育活動から。  
 (上) ニジマス実習では、ニジマスを解剖して観察した後、ムニエルに調理して食べることで、食育などの基本を学ぶ  
 (中) 一身田中学校の学年別の合唱コンクールにジョイントする「コラボ音楽祭」  
 (下) 2本の鉄の輪を平行につないだ器具ラートで、さまざまな体操を行いながら、助け合いや仲間づくりといった内面的な成長を促す

の意味で、一身田中学校の学校支援地域本部が進める「サポーターいっちゅう」1000人構想には期待が持てる。

平成22年2月19日に開催された初年度の連携活動報告会で、連携校の南立誠小学校の東谷和久校長はこう発言している。

「できるかぎり学校が得をする、

大学の学生さんも得をする、みんなが得をして、子どもたちが一番得をする連携活動になることを期待している」

三重大学教育学部と津市教育委員会が進めるこの取り組みは、「地域の教育力」を高めるための、大学と地域のWIN-WINの関係をめざしている。

はぎわら・まこと / 1945年鹿児島県生まれ。67年帝人株式会社入社。マーケティング部長、広報部長、調査役などを歴任。2003年退社。広報部長時代に培った企業広報ノウハウを活用して、企業のほか、自治体、大学などに関する広報アドバイザーとして活躍する。日本広報学会会員、日本経営倫理学会会員。著書に「広報力が会社を救う」(毎日新聞社)。



10月上旬、教育学部の玄関に掲示された2枚のポスターが目にとまりました。

「響け友情の旋律」「団結と絆を胸に限界突破」とともに文化祭における「音楽祭」のメインテーマのようです。興味を惹かれ詳しく見てみると、三重大学近隣の一身田中学校と橋北中学校の音楽祭の開催案内です。会場は三重大学の三翠ホール、そして教育学部音楽科とのコラボ音楽祭とうたわれています。



これまで大学と公立の幼・小・中学校との関わりは教育実習が中心だったように思います。しかし、現在は大学と隣接する2つの学校区(一身田・橋北校区)の全学校園との教育活動全般における連携を目指す取り組みがなされています。

そこで、この企画・プログラムを中心となって推進しておられる、後藤太郎先生と根津知佳子先生を訪ねました。

**Q1** 早速ですが、教育学部の玄関のポスターを見て、これまでの教育学部のイメージの違いを感じましたが、この企画・プログラムについてお聞かせください。

**A1** 合唱コンクールはどの中学校でも児童・生徒

が意欲的に取り組む学校行事ですが、大学と隣接する学校園との連携を重ねるうちに、大学生が授業や放課後に合唱指導の支援を行って、本番を三重大学の講堂で開催するようになっています。本番では、教育学部音楽科の学生も演奏します。ステージでの大学生の表現を見聞することにより表現することに対する目標が具体的になり、レベルが高くなったのではないのでしょうか。それが、このポスターに現れていると思います。

**Q2** 「多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して」とのことですが、この取組の経緯に至った背景についてお聞かせください。

**A2** 近年の学校現場では、学校規模の格差、学力問題、異文化理解などの現代的な教育課題に対応できる教員養成が求められています。それに対応するためには、学生ができるだけ多様な学校現場を知り、問題意識をもつことが重要ではないでしょうか。また、このような隣接する11学校園との連携を進めることは、学校教育の課題が、授業だけではなく、学級・学校経営や地域や家庭との連携にもあることを考える機会を学生に与えるものと考えます。

**Q3** 教育学部の使命である教職課程の質的水準の向上には、学生の継続的な現場体験を保障する4年間のカリキュラムが必要になるわけですが、そのための新しい視点や工夫についてお聞かせください。

**A3** 初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた実地研究基礎に参加し、徐々に授業や様々な学年・学校教育行事の補助、そして授業実践へと実践への参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な教育課程となっています。学生は、幼稚園から中学校までの幅広い発達段階の子どもたちと出会うだけではなく先生方や、学校を取り巻く地域社会に触れ、学校教育の意義や地域における学校の役割を感じ、様々なことを考えることができます。



**Q4** 教科専門と実践が4年間の見通しの中で体系的に組み立てられているようですが、大学・学生・連携学校園のそれぞれの具体的な取り組み・役割についてお聞かせください。

**A4** 基本的には、学生は大学と現場から学ぶ、大学教員も学生と現場から学ぶ、現場の先生にも学生から新鮮な感性を受けてもらうような連携になることを念頭に、すべての人が学び合う関係作りを目指しています。具体的には、学生が大学の授業の中で学んだことを連携校で実践し、現場の先生方も含めて省察を行うという往還を重視しています。先輩でもある連携校の先生方からのご指導は、大学での学びへのさらなる動機づけになっているようです。

**Q5** 一身田校区では、この事業がすでに4年目を迎えるとのことですが、その成果や、小学校・幼稚園等との連携活動についてご紹介いただけますか。

**A5** 連携活動には、学生の授業支援や学校行事のみならず、大学教員による出前授業や教員研修もあり、その数は連携を開始した18年度は10件でしたが、20年度は42件、21年度はすでに100件程です。すべてを紹介することはできませんが、連携校での活動に関わった学生数や活動時間、連携に関わった大学教員数が3年間で飛躍的に増加しただけではなく、年々学校現場や教育委員会から内容や連携自体についても信頼を得つつあり、この連携活動は内外に誇れる教育モデルとなりつつあります。

**Q6** なるほど、ポスターの「音楽祭」は、大学と学校園との連携の成果のひとつといえるのですね。また、企画から運営まで、学生と生徒の協働作業のようですが、具体的にどんな取り組みがなされたのですか。

**A6** 一例ですが、大学院生や経験を積んでいるチューターが、連携校の実態やニーズに合わせて学生の支援体制を組み立てたり、活動の企画を立てるなど下級生の指導をしています。生徒の意見や現場の先生からの助言や申し送りなどを記録として取りまとめ、他の学生にも伝わるなど調整をしています。どの学生が行っても指導できる体制作りや、学生同士の

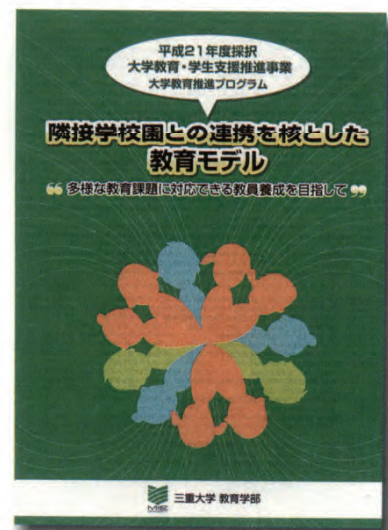
連絡システムを整備しています。

**Q7** また、11月には実施された一身田中学校の教育実践発表会のテーマ「地域立の学校」を目指しては、「開かれた学校」をイメージしますが、地域や保護者にはどんな反応や声がありますか。

**A7** 大学が関わることで、教育内容に幅ができ、他の連携ではみられないような取組が行われていることから、大学への信頼が深まっているようです。また、いろいろな人が学校に来ることによりコミュニケーションの幅が広がっており、現場の先生からは、子どもたちの表情が豊かになっているというご感想をうかがっています。

**Q8** この事業のさらなる深まりを期待していますが、今後の課題についてお聞かせください。

**A8** この事業では、特に新しいことをするのではなく、教員養成課程で必要な学生の現場体験を隣接学校園で行わせてもらうことと、そのための整備を進めるものです。このためには、教育学部と隣接学校園とのゆらがないような信頼関係を継続することが、常に最も重要な課題であると考えています。



## あとがき

本事業の1年目の平成22年度は、教員養成に必要とされる実践的な体験の基盤を拡げることを中心取り組んできましたが、2年目の今年度は、実践と省察の往還を核とした、学生の学びの質の向上を重視しました。しかし、連携する学校園の数やフィールドが量的に増え、参加学生が増えるからこそ、この取組自体が組織的なもので、教員間の指導方針の確認が必要であることを、報告会にご参加いただいた愛媛大学の山崎哲司教授よりご指摘を受けました。量的な拡大とともに、質的な深化が重要であるというご指摘を真摯に受け止め、最終年度に向けての課題と向き合いたいと考えております。

教育学部教員の3分の1から半数の教員がこの取組に関わる一方で、一部の教員に過剰な負担を強いているという声もあります。しかし、教員養成のあり方や質保証が問われている中で、初等・中等教育に携わろうとする学生が4年間で確実な実践的指導力を獲得し、教職に就くために、この取組はまさにコアとなるものだと考えています。最終年度となる平成23年度には、学部全体だけではなく、連携校や教育委員会などこの取組に関わってくださっているすべての方々の合意を形成することが責任者としての任務と考えております。

この取組を通して、学生は多くのことを学んでいることが分かります。報告会に参加した学生のアンケートには、教育現場に関わることの重要性や、教育実習について認識を新たにしている回答が多くみられました。例えば、「教育実習を受け入れる学校には多大な負担をかけることがわかったので、せめて自分にできる精一杯のことをしていかなければならないと感じた(1年生)」というように初年次から課題意識を持っている学生もいます。連携校で教育実習を受けた学生(3年生)は、実習後も授業補助で関わる等、教育現場との深い関わりに、教師を目指す意識が飛躍的に高まっています。

来年度は、2つの中学校で37名と、一般校での実習としては考えられない人数の学生が教育実習でお世話になる予定です。これは、連携校の先生方をはじめ、津市教育委員会の皆さまの深いご理解とご支援によるものです。連携校の先生方には多大なご負担をおかけすることになりますが、大学と共に学生を育ててくださる意識をもっていただけたことに心より感謝しております。また、円滑な教育実習実施のために、事前・事後指導の改善にご尽力くださいました教育実習委員会やカリキュラム特別委員会の委員の皆さまにお礼申し上げます。

最後になりましたが、本報告書をまとめるにあたり、カリキュラム特別委員会委員長の根津知佳子学部長補佐、一身田・橋北校区連携推進委員会の委員の皆さま、本事業支援により22年度に設置した学修サポート室の高林朋世さんと守山紗弥加さんには、日々献身的に学生支援にご協力をいただいておりますことを深く感謝いたします。また、地域連携室に勤務してくださった平山円さん、および平山さんの業務を引き継ぎ、多様な連携活動を支えてくださり、本報告書の取りまとめをいただいた小河久美さんに深く感謝申し上げます。

後藤太一郎

平成22年度 大学教育・学生支援推進事業  
大学教育推進プログラム  
隣接校区との連携を核とした教育モデル  
—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

報告書

平成23年3月 発行

編集 三重大学教育学部 一身田・橋北校区連携推進委員会  
発行 国立大学法人三重大学教育学部 地域連携室  
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577  
Tel/Fax 059-231-9269  
e-mail ogawa@edu.mie-u.ac.jp  
<http://chiki.gp.edu.mie-u.ac.jp>

印刷 伊藤印刷株式会社  
〒514-0027 津市大門 32-13  
TEL 059-226-2545(代) FAX 059-223-2862

表紙イラスト カゲムシャ

